
麻帆良の皇家の樹

ペリ犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良の皇家の樹

【NZコード】

N1385S

【作者名】

ペリ犬

【あらすじ】

麻帆良の世界樹が天地無用の世界の皇家の樹だったら?と云う同様のコンセプトのSSから刺激を受け自分なりのアプローチをしてみました。

麻帆良学園の世界樹を調査に潜入した主人公が2・Aのクラスメイトにお節介を焼くうちに魔法と云う名の泥沼に足を突っ込みます。ネギま!の一部不可解な行動について自分なりの解釈をしています。主人公はオリキャラですが外見はキャラメルBOX 処女はお姉さま(ボク)に恋してる 2人のエルダー から外見は栢木優雨 中

身は妃宮千早 をモーテルにしています。おとボクはクロスではなく
キャラだけを借ります。

0-1話 指令（前書き）

あらすじでネギまーの一部不可解な行動について自分なりの解釈をしていふと書いてますがネギが来るまでそれはありません。

01話 指令

皇家の船 水鏡

「私、正木吹雪樹雷が神木瀬戸樹雷に呼び出されたのは私の船、佐久夜で海賊討伐の遊撃任務の最中でした。海賊の出そうな空域にインヴィジブルモードで潜んで獲物を探している最中に任務の解除命令と出頭を命じられました。ランデヴーポイントに到着したときには珍しく艦隊旗艦を務める皇家の船 水鏡のみがその空域に停泊していました。

「（）無沙汰しております。瀬戸さま、兼光さま、水穂さま」

「よく来てくれたわね吹雪けやん。お菓子食べる？」

「いりません」

品の良さやうな40代半ばに見える女性。しかしてその実態は宇宙一やつかいな女性、神木瀬戸樹雷さまです。隣には艦隊司令の平田兼光さま、情報部副官の柘木水穂さまが控えています。

「早速だけどこの画像をみてちょうどいい。それとジュース飲む？」

「飲みません」

映し出されたのは大木の写真。地球のピーロッパ風の家々の後ろの堂々とそびえ立つ常緑樹。

次に映し出されるのは発光する大樹の姿。

「皇家の樹？」

皇家の樹。それは樹雷の最重要機密。

樹でありながら現宇宙最大規模のエネルギー・ジェネレーターと演算ユニット双方の機能を併せ持つ皇家の船のコア。

「今回の任務はこの樹が皇家の樹かどうかの調査。そして皇家の樹であることが確認できた場合の回収。もしくは……」

「……はー」

破壊……でしょうか。あの子達の破壊など考えたくないんですけど。

「で、所在地は地球」

「え？」

まさか、地球？ てっきりヨーロッパに似た別惑星だと思ったのですが、地球ですか。大先史文明のシード計画とやらで地球と似た文明はいくつもありますから、本当に地球とは思いませんでした。そんな思いを多分知りつつも瀬戸口までは言葉を続けます。

「日本の埼玉県麻帆良市つとじいみよ」

「は？ 埼玉？」

私が生まれた岡山県から直線距離で500km程度のところに皇家の樹が？ 宇宙的に見れば本当に田と鼻の先にそんなものがあつたとは。そしてそれに気づくことなく700年もそこで暮らしていましたのですか、我が一族は！ 恥ずかしくて顔を上げることができま

せん。

「いいのよ。だいたい遙照ちゃんすら気づいていないんだもの。吹雪ちゃんが気に病むことはないのよ。飴ちゃんあげるから機嫌なおして。一応地球にはGPからも監視員は派遣されているけれどそちらからも報告はあがつていなーいわ」

「最初から説明しますと美星さんが発端です」

水穂さまが説明を引き継ぎます。

「美星さんが天地さんのお宅にいく途中偶然皇家の樹に似た樹木を発見し、その後その話を聞いた玲亜さんがこの写真をネットから検索して発見しました。そのあとお父様から瀬戸さまに調査依頼が出され、こちから調査員を送り込みましたが失敗しています。」

「失敗ですか。珍しい」

瀬戸の盾と異名を持つ水穂さま率いる情報部は樹雷本星の正規の情報部にさえ勝てる能力をもつてているのですが。

「長距離からの映像では樹は確認できますが、至近距離では撮影ができません。麻帆良市に入つた調査員によれば樹を見たはずなのに記憶に残つてなく、樹に近づこうとしたが気がつくと樹を素通りして別の場所に行こうとしていた、と云っています。何らかの認識障害を受けていると判断したが原因不明にため調査を中断したと云つことですか」

「精神攻撃の類でしょうか」

「はい、やうと考へています。またその樹がある麻帆良市では麻帆良学園という複合私立学校がほぼ市の全域を占めています。この麻帆良学園は行政、司法さえも介入できないほどの権力を学園内にはもつてゐるらしいです。例の樹は世界樹とよばれ学園のシンボルとなつてゐるやうです」

「つむぐかい話ですね。つまりその麻帆良学園が世界樹とやらをなんらかの方法で隠そつとしていると？」

「はい、仮定ですが、その世界樹が皇家の樹ならばいろいろと説明できます。皇家の樹がまだ力を持ち、何者かがそれを制御できるならばといつ仮定が出た段階で調査は中止します」

「皇家の樹に対抗する何らかの手段が必要になつたわけですね」

私が呼び出された理由が解りました。日本出身かつ皇家の船の所有者で動ける人間など私ぐらいでしょ。

「君は一時 海賊討伐から離れ、水穂のしたで麻帆良の調査をおこなつてくれ」

兼光さまがそう仰有ります。もつともよくあることなので問題はありません。皇家の船は攻撃力は強大過ぎるが故、艦隊を組むことよりも単艦で運用されることが多く、皇家の樹のサポートを受けられるマスターは優秀な潜入者にもなるので任務ごとに所属を変えるのです。

「では、これを」

水穂さまがなにやら赤い布の束をもつてきました。服でしょうか？

手に取つてみると膣膚色のブレザー、ベスト、膣膚と赤のチェックのスカート…

「これは？」

「吹雪ちゅんには学生に扮して潜入してもいいわ」

瀬戸さまがうれしそうに仰有ります。

「なんで、学生なんですか？ 教師で好いじゃないですか？」

「教師では十分な自由時間なんてとれないわよ。学生なら長期休暇もあるでしょ。それに…ふつ」

瀬戸さまが吹き出しました。そつ、本当の理由は私が子供にしか見えないことです。

私の本当の年齢は64歳。ですが見た目は12歳ぐらいです。

「とりあえず、その制服の寸法が合つているか着てみてちょうだい」

いきなり数人の瀬戸さまの従者があらわれ、私はなすすべ無く別室で着替えをさせられました。私のパーソナルデータなら瀬戸さまも持つていらっしゃるので寸法あわせなんて不要でしょうがあえてするのが瀬戸さまです。

「ほんと、似合つわ、吹雪ちゅん。おまんじゅう食べぐる？」

着替えの終わった私を見て瀬戸さまが仰有ります。本当に瀬戸さまは私を子供扱いしたがりますね。水穂さまも口には出していません

が熱いまなざしを送つてきています。

私の見た田はかなりの美少女です。多少の自惚れがあれど、小さな頭に大きい田、小さい鼻と口、子供のころから美人になるともてはやされてきましたが12・3のころから成長はしなくなりました。樹雷で検査したら遺伝子障害みたいなものらしいのですが治療法はないのです。歳をとる」と鏡を見ることが苦痛になつて、この姿はいまではわたしのコンプレックスです。いえ、わかっているのです、瀬戸さまのお気遣いも。深刻ぶつても何も生み出しません、肯定して笑い飛ばすのが一番だと云つとも。

逆らつても無駄なのでお披露田を最短ですませ、私は水鏡から逃げるよつに地球へ出発しました。

01話 指令（後書き）

ぶつちやけ瀬戸さまが に報告を上げたらこの話は成り立ちません。瀬戸さまは皇家の樹の破壊もありつるので自分のところで話を止めていると云う設定です。

主人公は第一世代の皇家の樹を持ちます。

1938年4月4日誕生

1956年4月 樹雷へ 18歳

同年 佐久夜と契約

1958年 樹雷騎士 20歳

同年神木瀬戸樹雷 麾下 神木艦隊へ編入

2002年10月現在64歳

今の喋り方は神戸の女学校時代に身についた。

身長135cm B75 W50 H65

2011/04/05 前書き一部削除

2011/04/02 前書き追加

02話 桀木神社にて

岡山県 桀木神社

「（）無沙汰しております。勝仁さま」

「吹雪殿、壯健そうで。今回の件では苦労をかけるがよろしく頼む
勝仁さまは本名を桟木遙照樹雷と仰有い、現 樹雷皇の皇子にあたりますが現在 出奔中で700年ほど前から地球に隠れ住んでいます。地球に来た際、地球人の妻を娶り子をなしました。その末裔が私はです。この桟木神社のある村はそう云つた者たちで構成されます。

「とつあえず、かの学園には転入手続きをだして受理されておる。あとは試験を受けて合格すれば手続き完了」じや

「ありがとうございます」

「麻帆良学園中等部2年じゃ」

「…………せめて3年にはなりませんでしたか？」

「（ひむ、3年は受験とかがあるじゃ）」

「パンフレットにはエスカレータとありましたが」

「？ 都会の学校にならエスカレータがついていてもおかしくはないのですが？」

ああ、勝仁さまは村の中学校レベルで考えているのですね。村には高校がないので付近の高校を受験しなくてはなりません。まあ、今更実は3年ですとも云えないですし我慢しましょ。

「保護者には玲亜になつてもらつた」

桝木玲亜さんと勝仁さまは嫁と舅の関係になります。本当は玲亜さんは私よりずっと年下ですが。

「例の樹については勝仁さま、本当に存知ないのですか？」

「つむ、それなのが、本当に心当たりはないな。それと、今回の任務にあたつていくつかのことを伝えねばならん」

そう、前置きして勝仁さまは語り始めました。

700年前樹雷を襲つた魑呼（ひづけ）と魑皇鬼（ひづけおうき）の封印が解け、共に天地さまの家に同居していること。

勝仁（あえか）を追つてきた阿重靈（あえみ）さまと砂沙美（ささみ）さまも同居していること。砂沙美さまが皇家の樹の始祖 津名魅（つなみ）さまと同化していること。伝説の哲學士 白眉鷲羽（わじゅう）さまが魑呼の産みの親で、やつぱり天地まと同居していること。

神木ノイケ樹雷さんが天地の婚約者として天地さまと同居していること。

そして天地さまが単身で光鷹翼を作り出せる」と。

「…………つまり、始まりの船 津名魅さま、阿重靈さまの龍皇、ノイケさんの鏡子、そして第一世代の皇家の船を超えるといわれたあの魑皇鬼がここに集つているのですか？」

何か嫌な汗が出てきそうです。

はつきり云つて樹雷、いや銀河全域とともに殴り合える戦力がここにあります。第一世代とは私たち第一世代からみても半端ではない存在ですが、それを超える魑皇鬼なら樹雷皇 亜主沙さまの霧封さえ討ち取れるかも。そして自身で光鷹翼を作り出す天地さまの力とはいかほどでしょう？ ある意味津名魅さまと同格なのでしょうか？津名魅さまに至つて神様ですし…

「つまり、麻帆良にあるかもしれない皇家の樹よりもここに存在が宇宙に知られるのが拙いというわけですね」

「正面きつてむかつてくるバカならかまわんが、絡めて手を使われるのは勘弁じやからな。重大ではあるが、緊急度はそれほどでもないのであせらず調査してくれ。あと、玲亜が見つけてくれたあの写真もすぐにネットから消えてしまつたそりじや」

「承知いたしました」

「それと試験勉強もな」

「うー」

確かに私が学生だった頃とはカリキュラムがちがっていますね。長期休暇の度に地球には戻つて来ているので世間の流れは把握していますが中学の授業の内容など知る由もありません。脳に直接データを転送すれば済むのですが、全教科満点というのも不自然と思い、私は一ヶ月かけて中学の勉強や世間の常識を学びなおしました。

すでに家を引き払つていたので勝仁さまのご好意に甘え桟木神社に

『厄介になつたのが間違いでした。毎日、魑呼さんと阿重靈さまの喧嘩のとばっちりを受けたり、砂沙美さま＝津名魅さまの手料理を振舞われたり、マツドの実験材料にされかけたり…

私にでやねん」とほんの中で『へそばせあ』と呟くことだけでした。

02話 桟木神社にて（後書き）

基本的に主人公は津名魅＝神様と認識しているため直接お願いをする気はありません。どうしても自分たちの手に余るときのみ樹雷皇など上層部を介して上奏するべきと考えています。

03話 引越

2002年9月29日 日曜日 午前10時 麻帆良学園

麻帆良市には電車で移動しました。佐久夜は相模湾沖で待機です。

私が麻帆良学園 本校女子中等学校に転入することにあたって、残念なことに一人暮らしは許可されず女子寮へ住むこととなりました。今日は引越の日です。すでに手荷物だけもち女子寮へ到着しております。

ちなみに相部屋ですので任務に影響することは必至です。何らかの対策をねる必要がありますね。

ルームメイトとなる方の名は相坂さよさん、長谷川千雨さんです。呼び鈴（実際は電子チャイムでしたが）を鳴らすとすぐドアを開けてもらいました。

出てきたのは茶色の髪で眼鏡をかけた女の子でした。しかし、最近の子供は発達がいいのですね。60年以上生きて胸も背も負けるといつは何なのでしょうか。

「初めてまして、正木吹雪と申します」

「ああ、長谷川千雨だ。じゅりゅうじく」

やや憮然とした表情した千雨さんの後を追つて中にはいました。千雨さんに案内されて部屋の中を見て回りました、けど……

「Jの部屋一人部屋ですよね？他に相坂さんとおつかがいらっしゃると伺っているのですが」

そうです。部屋には備え付けの机やベッドがあるので持ち込みしなくて良いと聞いていたのですが一人分しかありません。ソフトがありますか私はそこに棲めとでも?

「ああ、相坂なんだが入学以来ずっと休んでいる」

「えつ、入学以来ですか?2年の始めからでなくて?」

「入学以来だ。一度も出席はおろか、ここにも顔をだしていない」

「でも、それじゃ2年になれないのです」

「いや、それでも2年には進級している」

普通、一度も出席せずに進級できるものなのでしょうつか?

「それは、変ですね」

私がそういつた千鶴わんぱく振りした顔をしました。

「変だと呟つか?」

「変…でしょ」

「やうだよな。変だら、変」

「変ですね…」

「やうか、やつぱつ変なんだ」

突然、千雨さんの口調が砕けたものとなり、笑い始めました。いつたい今の会話のどこに千雨さん的心の琴線にふれるものがあつたのでしょうか？

ほどなく宅配業者がやつてきたと連絡が入り千雨さんに手伝つてもらい届いた布団や衣類を収納していきます。それほど荷物はないのですぐに終わりました。その後はノートパソコンの設定でした。見た目は普通のノートパソコンですが中身は佐久夜の端末です。もちろん銀河連盟のネットにもつながります。一応カモフラージュとして地球のインターネットにもつながるようにもなっています。

「へえ、正木もパソコンやるのか」

「はい、結構好きですよ、ネットサーフィン。それとできれば吹雪と呼んでもらえますか？私の育った村では住人のほとんどが正木だつたので名字で呼ばれなれていないのでですよ」

「… そう。なら吹雪と呼ぶよ」

「ありがとうござります。千雨さん」

ちなみに千雨さんの机の周りはさながら電子の要塞と云つた感じです。ノートや教科書を広げるスペースが無いので多分今まで私は使う机で勉強をしていましたのしよう。

そのあと二人で今後の取り決めをしました。今まで千雨さんひとりだったので共同の場の用品、つまりトイレットペーパーやシャンプー、洗剤をどう購入するかと云つた話です。最初にきちんと決めないとトラブルになります。私の調査がどれくらいかかるかわかりませんがベースに火種をつくりたくはありません。シャンプー類とボディソープ、生理用品は個人の趣味趣向があるので個々に購入し

緊急時には事前、もしくは事後に承諾を得ることで貸し借りをする
とし、トイレットペーパー や洗剤は購入代金を折半するということ
になりました。また掃除などの仕事の分担も決めましたが、そこで
解つたことは千雨さんが炊事をしないと云うことでした。部屋には
キッチンがあるので薬罐しかありません。食器も「一ヒーカツ
ブぐらいですね。寮生食堂中心なのでしょうか、千雨さんは。

「そろそろお昼ですがどこか好い食べ物屋さんはありますか？千
雨さん」

「いや、私はあまり外では食べないから」

「寮生食堂ですか？」

「…………これ」

千雨さんは机の引き出しからなにかを取り出しました。ああ、携帯
口糧ですか、闘士の訓練時代にはお世話になりました。最終的には
生の蛇（みたいなもの）や虫（みたいなもの）まで食べられる様に
なりましたが。いえ違います、問題はそこではありません。成長期
にそんな物ばかりでは体に良くありません。私が云つても説得力が
無いのが悲しいところですね。

「とりあえず外にでましょ。何がどうせんせんください」

「いや、それは悪い。むしろ歓迎するのはこっちだし」

「いえ、私に任せさせてください。その代わり、後で街の案内やお買
い物に付き合つてください。それと季節外れの大掃除のお詫びもか
ねて」

「口うと笑い小首をかしげてみせる千雨さんはちゅうと照れた様子で仕方がないと云つてくれました。しかし瀬戸さまから教えられたこの仕草は効きますね。自分でもあざといと思いますが。

適当に選んだレストランで食事をしたあと千雨さんと一緒に麻帆良市内を歩いています。そして例の世界樹です。世界樹のまわりは広場になっていますね。

「しかし、本当に大きいですね。ギネスとかに載っているんですか？」

「いや、聞いたことねえ」

千雨さんの口調はもつまつきり砕けきつてますが、まあ良いでしょう。

「270m? ありえないでしょう」

「そうだよなー 変だらう!」

先ほどと同じく千雨さんのテンションがあがっています。何でしょう、千雨さんは『変』なものマニアなのでしょうか。

千雨さんをいなしながら世界樹を観察しますが、大きさ以外は普通の樹木ですね。皇家の樹はそれぞれが個別の進化をするので決まつた種類は無いですし大地に根付いた樹ならまったく自然の樹木といつしょですでのいまは特定はできません。

本格的な調査は年度が替わって新入生が増えてから行う様にと瀬戸

さまからもなわれていますし今日は眺めるだけにしましょうか。

「今日から自炊です。千雨さんにも食べて頂きます」

いきなり宣言しました。

「これは私の趣味ですから千雨さんからお代は頂きません。食器洗いも台所の掃除も私が行います」

きつぱり云い放つとしぶしぶ千雨さんも納得してくれました。実際、一人分も二人分も手間は変わりませんし、量を作らないと味がでない料理もあります。ただ、千雨さんは食費のみ月5千円だすと云つてくれました。一応生活費も支給されているのでそこから出すつもりでしたが断るのも不自然ですのでありがたく頂戴しその分質の良い物を購入することにしました。

寮に付属した麻帆良COOPでひとつおりの物を買い込んで帰りました。

「いかがでしたか」

食後千雨さんに尋ねてみました。

「いや、すぐ當かつた。料理つまいな、吹雪は」

褒められるとうれしいですね。別に料理好きではなかつたのですがこの姿でするので嫁のもらい手が少ないだろうと予測して、すこしでも付加価値を得るために家事全般は修行して参りました。もつと

もどんなに好物件でも嫁に行けない人がすぐそばにいるのでも若干あきらめてはいるのですが…

食事を終え、食器も洗つてからお茶を飲んでいます。

「紅茶つてこんな味だっけ」

ああ、それは樹雷のお茶だからですね。いくつかの嗜好品はあちらからの物です。云われなければただの上質なお茶ですから大丈夫でしょ!」

そのあと、一人で大浴場へ向かいいます。部屋の浴場はシャワーしかなく湯船に浸かりたければ大浴場にいくしかないと千鶴さんに云われました。千鶴さんは今日はシャワーで済ますと云うのを頼み込んで一緒に来てもらいました。

「本当に大きいですね」

「フロアの半分以上使つていてるからな、さうに施設の充実度が半端じゃねえ」

「エリも変ですね」

「変だわ」

なんとなぐれしそうに千鶴さんが答えてくれます。やはり『変なものマニアなのですね』

「吹雪はどんなシャンプー使つていてるんだ」

「ちゅうと変わった外国の小さなメーカーなんですが

「すうじくいこ香りだな」

本当はこれもメイドイン樹雷です。相性とかあるのであえて持つてきました。他には下着とかもですね。あきらかにオーバーテクノロジーと分かるものは私物では持ち込んでいません。

「やうだ、千兩さんにはあらかじめ断つておきます。実は私が転入するきっかけは父が一世一代の勝負と云つて外国で事業を始めることを思い立つたのが原因です。母はすでに他界しているので知り合いに預けられるところでしたが、都会の学校に通つてみたかったのでもがままでここに転入しました。一応高校卒業まではここにいるつもりですが父の仕事次第では地元に帰るか外国へ移住するかもしれません」

「やうか、親父さんなにやつてるんだ?」

「まあ、山師みたいなものと云つておきましょ」

「山師つて」

父親が山師みたいなのは本当ですよ。いまだに哲学士をめざしてい るんですから。

部屋に戻つてから千兩さんはパソコンの前に座り電源を入れようと 固まりました。

「吹雪、ちゅうと手伝ってくれ

千鶴さんは隣合っていた机を動かし向かい合わせにしました。ああ、モニターを見られたくないのですね。

「悪いがちょっとモニターを見られたくないんだ、なんて云つか
ちよと恥ずかしい」

「はい、わかりました。もし偶然見てしまつても誰にも云いません」

「ありがと、助かる」

私自身、その方が助かりますし。明日にでも衝立を買いましょう。

千鶴さんがパソコンに向かっている正面で私もノートパソコンを起動します。

03話 引越（後書き）

長谷川千雨は一人部屋か？と云う問題について
相坂さよ自身は知りませんが住所不定や元々住んでいた場所を書類
に記載するといろいろ問題がでそうなので学園長が裏工作

寮の二人部屋は原作の明日菜たちの部屋に準拠
バスタブが無いのは独自設定 大浴場があるので個別に風呂を沸か
すのは水・エネルギーの無駄、掃除が面倒、1巻で明日菜がネギを
わざわざ大浴場につれていったことからそう判断しました。

04話 転入

2002年9月30日 月曜日 午前7時半

転入する私は早めに寮を出ることになりました。千雨さんも私につきあつてくれています。女子校エリアは敷地の奥にあるらしく、寮から電車で15分更に歩いて15分かかるらしいです。

「わざわざつきあつてくれてありがとうございます、千雨さん」

「いや、別にかまわねえよ」

ちゅうと顔をそらす千雨さん、かわいいです。

「担任は句と仰有る方ですか」

「担任？ ああ、それなら好いが。高畠・ト・タカミチ、高い畠、アルファベットのt、タカミチはカタカナ。
29歳だけどもつと老けて見えるな。ベビースモーカー」

ちなみにクラスのことは見て驚けと云つて教えてくれませんでした。

「あと、デスマガネと云つ異名を持つてゐる

「デスマガネ？」

「高畠先生は広域指導員という麻帆良学園全体の風紀を取り締まる仕事もしてゐる。喧嘩の仲裁なんかではハンパなく強いらしい」

「これだけ学校が集まつていれば自分の学校以外も面倒見なければならぬのですね、皆 麻帆良学園の生徒ですから」

「でも高畑先生いるかな？ よく出張でいなくなるから」

「研修とかですか？」

「いや、そこまでは知らないな」

早めに学校に到着したのでホームルームの20分前まで千鶴さんの案内で校舎内を回りました。そのあと職員室の前で千鶴さんと別れました。

「おはようございます。2・Aに転入する正木と申します。高畑先生はじめておられますか」

「高畑君？ ついでついで」

「あつがとうござります」

入り口付近の先生に頼んで高畑先生の所へ案内してもらいました。

「高畑君、君へのお客だ。転入生」

「あ、」苦勞様です」

「ありがとうございました。高畑先生、おはようござります」

「おはよう、正木吹雪くん」

挨拶の後、ちょっとした自己紹介をお互いに行い、何枚かプリントを渡されます。その後高畠先生に連れられて2・Aへ向かいました。

高畠先生の後を追つて教室に向かう途中、高畠先生を観察して不思議に思います。教師と云つよりも闘士の様な身のこなしです。広域指導員として武道も嗜んでいるのでしょうか？

先に高畠先生が教室に入りホームルームを始めました。すぐに私が呼ばれましたのでドアを開けて入ります。

「転入生の正木吹雪くんだ」

「」のたび転入して参りました正木吹雪と申します。今まで岡山の田舎の中学校に通つておりましたが、父が仕事で海外を転々とすることとなり、私自身はこの麻帆良学園にお世話になることを決めました。私の育つた所では住人のほとんどが正木という名字の為今までずっと名前で呼ばれてきましたので、皆様にも吹雪とお呼び頂ければ幸いです。寮では長谷川千雨さんと同室になりました。以後よろしくお願い致します

深く礼をすると何人の生徒が矢継ぎ早に質問をしてきました。高畠先生も苦笑い気味で暴走を放置してますね。困惑しつつ当たり障りの無い返事をしておきます。

「ホームルームを続けるよ。吹雪くんは廊下側最後列、エヴァンジエリン…金髪の子のとなりに」

「はい」

云われた席には金髪の少女がいます。これは間違えようがないですね。そして私が座る席の斜め前には千雨さんがいました。

「正木吹雪です、よろしくお願ひ致します」

「つむ」

エバンジエリンさん？の隣に座つて挨拶をすると鷹揚な返事が返つてきました。そこから視線を黒板へ戻そうとしたときそれ、いやその人が目に映りました。緑色の髪、耳の辺りから伸びるアンテナ？、半袖の服から伸びる腕の部分の球体関節……アンドロイド？

いや、いやいやいやまだ地球では自律制御のAIは完成していない筈。しかし、わざわざ制服を着てここにいると面白いとはこの方も生徒なのでしょうか。千雨さんを見ると満足そうに頷いています。ええ、そうですね、『変』ですね。先ほど高畠先生からもらったプリントに名簿がありましたが、4人ほど外国の方の名が見受けられます。ちょっと多すぎですね。バランスとか考えているのでしょうか。

一時限目が終了するとまたもや質問攻めでした。はつきり云つてこの世代のパワーには勝てません。

二時限目の終了と同時に逃げる様に千雨さんとお手洗いにいきました。

「本当に変なクラスだろ」

「ええ、まつたく」

授業中観察しましたが本当に中学生? といふ方が数名います。そして…

「あの、私の斜め前の方は?」

「ああ、茶々丸。絡繆茶々丸。どう見てもロボットだろ」

「ええ、変ですよね」

「やつやつ」

うれしかつて千雨さんがつなづきます。

「でも、クラスでは誰も変だなんて云わないんだ」

ちゅつと悲しそうに千雨さんがつぶやきます。そこで私は閃きました。前の調査員の報告で世界樹とやらの認識を阻害する結界みたいなものが麻帆良市全域にあるのではないかと云ひ話でしたが、その認識阻害の対象が世界樹だけとは限りませんね。むしろ対象を曖昧にしておいた方が便利かもしません。何を見ても普通だ、変じゃないと意識誘導させておいた方が融通が利きます。ただ千雨さんはそれが効いていないのですね。しかしそれは…つらいですね。千雨さんが周りのみんなに「これ変じゃない?す」「よね!」と力説してもずっと「普通」とか云われてきたのでしょうか。

「千雨さん、私はこゝが『変』だと知りました。そしてあなたのそばにいますよ」

「…ありがとうございます、吹雪」

「はい、何か『変』なもの見かけたら教えてください、一緒に『変』を共有しましょう」

ここに入る間だけでも千雨さんの力になりたいですね。でも、ごめんなさい千雨さん、ずっとといっしょにはいられません。でも、卒業までは……

04話 転入（後書き）

千葉さん 変なもののマニアに認定

05話 視線（前書き）

桜咲刹那さんはシリーズ中かなりひどい仕打ちをされるのでファンの方注意

05話 視線

2002年10月1日 火曜日 夜

今日の夕食は雪広あやかさん、那波千鶴さん、村上夏美さんの部屋にお呼ばれしています。あやかさんはクラス委員長と云う立場から私の歓迎会を兼ねてと云うことです。むろん千鶴さんもいつしょです。あやかさん達の部屋は同じ寮とは思えない広さでしたがこれはあやかさんの「両親がリフォームされたと云うことでこれは『変』ではないですね。『変』大好き少女の千鶴さんにとつては肩すかしでしょうか。でも『変』と云うのも語呂がわるいですね。『不思議』の方が好いですね。不思議大好き少女千鶴ちゃん。素敵です。料理は千鶴さんが作られたそうですがレベルが高いですね。ハンバーグに春雨サラダ、オニオンスープ。どれも素材の味が引き立てられています。

「本当においしいですね」

「ありがとうございます。でもあやかの家から送ってくれる材料が好い物だからよ」

あやかさんの実家は有数な富豪らしいです。そのせいでしょうか、中学生離したプロポーションです。千鶴さんはそれにもましてすごいです。ある意味茶々丸さんより変、いえ不思議です。夏美さんを見るとなぜか癒されます。

「あれ、なんかへこむなあ」

突然、涙目になつた夏美さんです。もしかして私からなにか漏れた

のでしょうか。

食後、ジュースを飲みながら歓談をしています。ちなみにこのジュースは私からのおみやげです。

「あら、このジュースは見たことがないメーカーですね」

あやかさんが不思議そうに眺めています。

「それはうちで作っているジュースです。なかでも特に品質が好い物だけを選んで作っているので流通にはのせていないんです。数がだせないから」

実は佐久夜の内部で作っているジュースです。皇家の樹の有り余るパワーを使い、船の中の亜空間内の惑星で栽培しています。個人で消費できる量ではないので無人プラントでジュースやら缶詰に加工して樹雷やGPの流通部門に卸しています。

「そうですか。でもこれは何のジュースでしょうか？」

「え？ 桃のはずでは」

私があやかさんの持つているジュースのラベルを覗き込みます。

「…」

まずいです。間違えます。これは皇桃です。皇桃は船穂さまから直々の頂戴した桃の改良種で地球の桃とはすでに別物。自然栽培が難しく皇家の樹の力が無いと育たないので。とは云え今更間違いとも云えず…

「おいしいですわ」

「濃厚ないい香り」

「はあ、甘くて、酸っぱくて、ほんと濃い」

まあ、云わなければ、ばれないでしょう。ただ、これが他の持ち込み品と違つのは…

「あれ、なんか気持ち良くなってきたよ」

夏美さんが類を染めて云います。「この皇桃、アルコール分はまったく無いのに酩酊するのです。もちろん、麻薬の様な成分もあります。云つてみれば脳内麻薬の分泌を促進するらしいのですが実態は不明です。副作用はまったくなく、ある程度以上には酔いがまわりません。たた、軽い興奮状態になるので一般のジュースといつしょにするわけにもいけないので樹雷では一応酒類として販売しています。

「なあ、おい、これって」

さすが千雨さん、不思議大好き少女ですね。すかさず、私に聞いかけてきた千雨さんに小声で返答します。

「すいません、一応桃なんですが興奮剤みたいな成分があるみたいですね。ただ、法律にふれたり、体に悪いと云つことはありません」

ここはちょっと嘘を吐きます。しかし、ジューースのおかげで皆さん更に陽気になつたのでここはよしとしましょう。千雨さんもだいぶ

おしゃべりに参加するよつになりましたし。ついでですから委員長のあやかさんに訊いておくことがあります。

「あやかさん。私の部屋にはもう一人ルームメイトがいて相坂さんと仰有るのですが、千雨さんの話では入学以来ずっと欠席していらっしゃるそうですが、委員長としてなにか伺っていますか?」

すると真顔になつてあやかさんが云いました。

「ええ、前に訊いた話では、相坂さんは体が弱く治療を受けながら、現在通信教育を受けていられるそうです。一度お見舞いに行こうと思つて高畠先生に尋ねましたが麻帆良から離れた場所と云つことでした。住所もそう云えば教えてもらひませんでしたわ」

何か云いたいそつな千雨さんこちよつと田で牽制をかけます。

「そつですか。ありがとうござります。高畠先生に訊いてみます」

その後はまた、他愛もない話で盛り上がりました。そのあと、いつしょに大浴場でお風呂に入つています。しかし、なんと申しまじょうか。千鶴さんは…

夏美さんもまたもや涙田です。でも夏美さん、あなたにはまだ未来があるのですよ。

下らないこと考へてゐるとなにやら視線を感じます。昨日も一応感じていたのですが転入生が珍しいからかと思いましたが、それにしつは鋭い視線ですね。

「ねえ、千雨さん、あの洗い場の方 多分クラスメイトのはずですが、名前は何と仰有るのでしき」

「うん… あれば桜咲刹那だな、髪下ろしていいからわからないか」

「桜咲… ああサイドポニーの方でしたね」

髪を下ろすとだいぶ幼く見えますね。そして…ふふ、今日は2勝3敗ですか。

しかし桜咲さんはチラチラとこちら観察してきます。もしや世界樹の関連する組織？ の調査員と云う線もあります。単なる転入生の身元確認なら好いのですが…もづばれたわけではないですね？

「吹雪、髪洗つてくれ」

千雨さんは最初にお風呂を一緒したとき髪の洗い方が結構雑だったで強引に洗つてあげたら以後せがんでくるようになりました。まあ、甘えられると弱いですね、本来、孫ぐらいの年齢なんですから。精神も姿に引っ張られるのでときどき幼いところもありますけどね。

「なあ、なんか見られてないか？」

「…見られますね」

千雨さんでも解るくらい刹那さんの視線が痛いです。最初、洗いつこしているのが気になるのかと思いましたが隣の洗い場ではあやかさん達も真似て洗いつこしているのですが刹那さんはどうもそちらには興味が無い様子です。千雨さんにもバレバレでは調査員失格ですよ。

「なんで」ちばつか見るんだよ」

「こつも、ああのですか？」

水泳の授業のときはもっとひどかったそうです。

「近衛木乃香さん？ 千鶴さんの前の席ですよね。確かに黒い髪で長髪の……」

なんかキャラがかぶつてますね。

「あこつもあんまり社交的ではないが、龍宮とは良くなねえでこのよな」

「龍宮さん？　髪が長かつたですね…」

もしや、黒髪長髪フロチつてい」とな無いですよね？　単に自分の好みだから眺めてこるとか、千歎をことじけにさせたりしてこらから睨んでいるわけではないですよね？

「こんどは私が洗つてやるよ」

そう云つて千雨さんが刹那さんからの視線を遮る位置に移動して私の髪を洗い始めました。いえ、別に同性ですから見られても構わないんですが。

05話 視線（後書き）

雨さん 変なものマニアから不思議大好き少女へランクアップ
刹那さん 残念な人認定

設定 第一世代以上の皇家の樹には惑星を「えらっています。金銭面での優遇措置です。

惑星は無人の星系とか放浪中のものからてきとーに拾つてきて最低限のテラフォーミングだけしています。

佐久夜内部の惑星は地球規模で陸地の表面積もほぼ地球と同じですがオーストラリア大陸分しか手を加えていません。あとはサバンナ程度のまま。

〇六話 猛獣のサムライ（前書き）

読み返してみるとネギが来ないと話がはじまつていなー。
ネギ（ボケ）が居ないといっしょにならへんのだ。ひとつあるネギ登場
まで連投します。

06話 学問のすゝめ

2002年10月9日 水曜日

中間試験を一週間後に控えた午後の5時限目 2・Aは……だらけきつてますね。この時期に出張とは高畠先生はいつたいどの様な用事なのでしょうか?

「いや、去年からずっとこんな感じだぞ」

この不思議は千雨さんにとってはお気を呑さないのか乗りしない様子ですね。一応、自習となっていますが半分以上は勝手なことをし始めています。私も千雨さんの後ろの席に移動しています。

「まあ、今回もつむかが最下位なんだろうな」

「なんのことですか?」

千雨さんの説明によると試験のたびにクラスの平均点を出しており1位のクラスは表彰されるそうです。そして2・Aは2年間ずっとビリを独走中らしいのです。これは不思議と云つよりも高畠先生の怠慢と呼ぶべきでどうか?

「個人では1位2位が、超と葉加瀬の指定席なんだが、とんでもないのがいるからな」

「ええ、別名バカレンジャーと呼ばれる5人組の各人の総合点はクラスの平均点にさえ届かないおばかっぷりです」

千鶴さんの隣の席の夕映さんが本を読みながら話に参加しました。

「人」みたいに云うな。バカブラック」

「え？ 夕映さんもその… 一員なんですか？」

さすがに面と向かってバカとは云えません。

「はい、私は授業中でも他の本を読んでるので成績は悪いです」

きつぱり云われても困るのですが。

「でも、夕映さんは本が好きなのでから国語は得意ではないのですか？」

「他の教科よりはましですがあまり変わりはないです」

国語も同じですか。少しばかり考えて… やはり云うべきですね。

「夕映さん、差し出がましいと思しますが云わせてもらいます。国語の点数が悪いこと云うことは長文読解が出来ていないと解釈してころじでしようか？」

「はい、かまないです」

「それでは敢えて云わせて貰います。長文読解がきちんとできていな」と云うことはすなわち作者の意図が掴めていないと云うことです。それでは本を読んでも… 読書をしているつもり、でしかありませんよ」

「そんなことは…ないですよ」

小声で呟きました。

「そうですか。出過ぎたことを申しました。気分を害されたら「めんなさい」

少し云い過ぎたでしょうか。でもこれ以上はタ映さん自身で答えるだしてもいいしかありません。でもわざわざこんなことを云うのが老婆心と云うものでしょうか？老婆心…なにかへこみます。少し考えて、一人に断りを入れてから席を離れました。行き先はあやかさんの所です。

「あやかさん、ちょっと相談が」

「こまは自體中です、と云いたいところですがこんな状態ですね。吹雪さんなら訳がありそうですね。私で良ければ相談に乗りますわ」「ありがとうございます。来週から中間試験ですが、千両さんからこのクラスの試験の成績が悪いことと その原因である、5人について聞いたのですが」

「ええ、バ…、はい、それで」

「本来なら高畠先生あたりが音頭取りをなされてその方々の成績向上を図るべきと思うのですが、僕多忙らしく授業さえ満足に出来ていません」

ちなみに私はまだ2回しか高畠先生の授業を受けていませんよ。

「Hスカレータで進学出来るとはいえこのままでは高等部でも落ちこぼれることは必至です。いまのうちに何らかの手を打つべきと思うのです。そこで提案ですが、今週末は3連休です。休みを利用して勉強会をするのはいかがでしょう」「う

「それは良い考え方だ。3日間みっちり勉強すれば成績もあがりますわ」

「いえ、むりやり勉強させても一時的に成績があがるだけで身につきません。最初の日のみ強制で出てもらい残りの日は任意で参加してもらいましょう。やる気の無い人がそばにいると周りの人のモチベーションまでさがります。最初の日にカウンセリングみたいな形で勉強する意志の乏しい方には勉強する意義を確認してもらい、勉強法に問題があるならば改善しましょう」

「なるほど、それでは私は何をしたら宜しいのでしょうか」

「あやかさんには勉強会のリーダーになつて、参加者を選定してください。とりあえず件の5人を生徒とし、先生役をしてもらえる人を数人選んで参加してもらえるように説得してください。それと寮のセミナー室かなにかを会場として使用できるように申請してください。あと、先生役が開始前にあつまつてミーティングができるよう段取りしてくください」

「良いでしょう。吹雪さんも先生役をお願いできますか?」

「もちろん出しつべですから。雑用でもなんでもしますよ」

「わかりました、それでは早速先生を勧誘いたしましょう」

さすがあやかさんと云うべきか、私の提案を聞くなり即決で勉強会を開くことを決めてしまいました。

例の5人組への説得も、本人達も思うところもあるらしく全員が参加です。先生役も近衛木乃香さん、超鈴音さん、那波千鶴さん、宮崎のどかさんが了承してもらいました。

夜、ノートパソコンで勉強会のテキストを作成しています。ちなみに私たちの机の周りには衝立で囲まれています。私の実際の学力は学士レベルです、アカデミーの。英語だけは知識がありませんでしが何とか勉強しましたので問題ないでしょう。逆に数学では微分を使いそそうになりましたので要注意ですね。

「なあ、なんで勉強会なんて始める気になつたんだ」

衝立の向こうから千雨さんの声が聞こえます。

「いえ、別にこれと云つてはないですよ。多分基本的にあせつかいなんでしょう。社会にでも勉強しなくてはならないことはたくさんありますよ。今のうちに勉強することを身につけていいないとあとで大変ですよ」

「そんなものかなあ

「ええ、そこで千雨さんも参加してくださいね」

「なんで、私が…」

「はい、はい、一応試験勉強はしますよね？ 周りに人がいればだれませんし、疑問点も訊けますよ。3日間全部出るとは云いません。好きな時間に参加してください」

「…都えとく」

参加決定ですね。

2002年10月12日 土曜日 午前9時

女子寮付属のセミナー室を借りて2-Aの勉強会です。出席者は、綾瀬夕映さん、神楽坂明日菜さん、古菲さん、近衛木乃香さん、佐々木まき絵さん、長瀬楓さん、超鈴音さん、那波千鶴さん、千鶴さん、富崎のどかさん、村上夏美さん、雪広あやかさん、そして私の13人です。

夕映さんはのどかさん、明日菜さんは木乃香さん、古菲さんは鈴音さん、まき絵さんはあやかさん、楓さんは千鶴さんが先生役としてつきます。私は夏美さんと千鶴さんの担当です。カウンセリングは難しいんじゃないかな? と云つ意見がありましたのでそれは無しとしました。

「皆様、おはようございます。本日は私の提案した勉強会に参加いただきありがとうございます。始めに少しばかり私の話をお聞きください。

学校で勉強することは社会にて役に立たないと云つ意見も聞きましたが私の意見ではそうではありません。

国語とは「リリコーケーション」の勉強です。相手が何を云っているか

を理解する、自分が思っているのかをどう正確に伝えられるか、それは簡単のようで非常に難しいことです。自分の気持ちを過不足なく言葉に置き換える人など私は存在しえないと私はいます。

次に数学ですが、単に計算するだけなら算数の知識と計算機があれば日常生活は事足ります。数学の本質は論理的に考えるということではないかと思います。理性的に物事を学ぶことを学んでほしいです。

理科と社会は中学の内容なら一般教養として必要なことです。徳川家康が何を為した人物か、遺伝の法則とか、社会に出てごく普通に知つていないと恥をかきますよ。

英語ですが中学英語の単語と文法、そして勇気があれば英語圏でなら意志の疎通はできます。海外旅行中迷子になつてもホテルに帰り着けます。

話の後は散らばってマンツーマンの勉強会の始まりです。

千雨さん、夏美さんの一人に今回の試験範囲の内容をまとめたプリントを渡します。これはあやかさんのノートをお借りして私が作成し全員で修正をかけたものです。出席者全員のテキストとなります。

「これつて吹雪が作ったのか？ なんだかやけに詳しいんだが」

「ほんと、カラーだし、解説もキチンと書いてるし」

いえ、学園のネットから過去問を検索して類似問題を作成して問題の主旨を解説しただけです。見た目が素っ気なかつたので重要文やグラフに色をつけたりしましたが。先ほどは理想を語つたりしまし

たが、試験の点数が良くなつたほうがひとつ早く勉強に対しても意欲ができるでしょ。」

しばらく何事もなく時間が過ぎてこきました。11時半になつたとき木乃香さんと千鶴さんがお昼の準備でいつたん自分の部屋へ戻ります。そのあいだは楓さんはあやかさん、明日菜さんを私がサポートします。

しばらく明日菜さんの勉強を見てみますが…さすが例の5人組のリーダーと云つたところでしょうか。

「ん? いや、なんかさあ、覚えてもすぐ忘れちゃうんだよね」

ちゅつと窓田でいちを見上げてます。

「子供の頃のこともあるまい、つづり、全然おぼえていないの。なんのかなー、多分つら ciòことがあって一生懸命忘れようとしたから物覚えが悪くなつたのかなって」

あやかさんが心配そうな顔でこちらをつかがつていますね。
記憶喪失ですか。子供と云うことなら外傷性、心因性を考えられますね。薬物性も考えたくないですがありますね。

「その、原因には心当たりがあるんですか」

「私は孤児なんだけど、子供の頃高畠先生の保護された以前の記憶つてないの」

「私は孤児なんだけど、子供の頃高畠先生の保護された以前の記憶つてないの」

「話が痛い方向に進んでいます。私が振った話ですから今更流せません。」

「孤児ひで云うよりも身元不明らしくて高畠先生が保証人になつて
くれて麻帆良の初等部に転入したあたりが覚えてる一番古い記憶」

身元不明、記憶喪失、明日菜さんなら昔もきっと可愛らしかったで
しょ? …何か犯罪の香りがただよつてきました。どうしましょう。

「思い出したい…ですか?」

「え」

「昔のことを思い出したいですか? もしかしたらつらい記憶しか
ないかもしませんよ。思い出したくないから忘れてしまったのか
もかもしれません。いまさら忘れてしまった過去なんて不要と考えるな
らそれも正しい選択のひとつでしょう。ですが、もしかしたら、中
途半端に過去を思い出したい、やっぱり怖いと云う感情が記憶にな
にか作用しているかもしれません」

「うん、ときどき怖いよ。思い出しちゃいけないような気がするし。
でも、やつぱり本当は知りたい。自分の本当の名前、両親のこと」

「それならば、決心しましょう。つらくて忘れたかった記憶でも今
の明日菜さんならきっと受け止められますよ。大丈夫です。たとえ
つらくてもそれを支えてくれる友人なら沢山いますよ」

そう云つてあやかさんの方を見ます。そんなに真っ赤な顔をしたら
心配していたのがまるわかりですよ。明日菜さんもそれに気づいて
やはり顔を赤くしてうつむいてしまいました。なにか二人してお見
合いでもしているかの様です。

「その、ありがとね、吹雪わん。私、頑張つてみるよ」

「はー、明日菜さんが頑張り屋なのは皆わん」存じですか「ほんぢま
べに」

12時を少しづかいでから木乃香さんと千鶴さんがお昼の用意を持つ
てもじつときました。13人分ともなると結構な量です。

「明日はもうと用事があるんで午前中は出れないんだけど」

千鶴さんがお昼を食べながら云いました。

「はー、自由参加ですから構いませんよ。お出かけですか?」

「いや、一応部屋にはいるんだが……」

言葉を濁す千鶴さんです。まあ、一日中勉強しないとは云こませんし、
問題ないですか。

勉強会も一日田ですが順調にすすんでいます。

2002年10月13日 曰曜日 昼

今日は私と千鶴さんが食事当番です。私の担当はサンデイッシュで、
朝のうちに用意は完了しています。具をパンで挟んだあと、なじませるために重しをのせて状態で置いておきました。あとはパンの耳
を切り落とし食べやすい大きさにカットするだけです。

鈴音さんが古華さん等、血称机に向かうと眠くなるタイプの方々を引き連れて身体をうごかしながらする勉強を実践されているので足りるかどうか心配です。

「ただいま戻りました」

部屋のドアを開けて部屋に入ると千雨さんの声で『ちよ、まー』と聞こえます。ちよっと待て？ シャワーでも浴びていたのでしょうか？

どうせ、女同士ですし、お互に風呂で裸だって見ていますからそれほど気にする必要もないでしょ。と思つたら大間違いでした。

部屋の中にバーちゃんが居ます……

千雨さん？

普段、ほとんど挙むこと出来ない素顔の千雨さんが居ますよ。

普段、ほとんど挙むこと出来ないバーガールの千雨さんが居ますよ。

えーと、どうしましょ。スルーすべきでしょうか？ それともびっくりした表情を見せるべきでしょうか？ さて、どうが千雨さんにとって喜ばれるでしょうか？

「あのー千雨さん？」

（氣にしてこません、と呟くのは氣にしてこますと同義でしょうから、

「セウジア、い、趣味でしたか

ダメでした。

すかつり鬱な感じ千鶴さんを残してお風呂に行きました。

総勢十箇所は午後五時までございました。

「ただいま帰りました」

一田田の勉強会終了後、部屋でもじると千鶴さんがパソコンに向かっています。しきりで囲まれてはこますが隙間から千鶴さんがいるのはわかつます。

「千鶴さん、

返事があつません。まあ、軽い天の川状態でしょうか。といえず、お茶の準備をして、機嫌をとろうかと思こます。

千鶴さんの電子の城からマウスを動かす音とパソコン動作音が聞こえできます。

「吹雪」

呼ぶ前にアマテラス様が現れましたよ？

「お前が私の趣味について黙ってくれるのはわかるんだが、ちょっとだけやっぱり不安なんだ。そこで共犯になれば大丈夫じゃないかって考えたんだ」

とプリントアカウトされたものを私の前にさしあします。
え？ 私？

ゴシッククロリータやらメイド服やら来た私がいます、これってアイコラと云つものでしょうか？

いつ作ったと云う以前にいつ写真を撮りました？ いつしょに撮った記憶はありませんよ？

共犯云々と云つよりも恥ずかしい写真で口封じではないでしょうか？

「前々から吹雪は私服が地味だからこの云つ服を着せたいとおもつていたんだ」

いや、還暦越えていますし、精神年齢も肉体に引っ張られるといつてもそれなりなので、いまさらその手の服はきついのですよ。

「私に任せてくれれば悪い様にしないから……」

その言葉を云われてうまくいったためにはありません。いや、服を脱がそつとするのは、ちょっと。

結局、千鶴さんの泣き落としでメイド服を着て撮影となりました。これが一番おとなしめだったからです。

期末テストの結果はまあまあでした。最下位脱出も果たせましたし、例の5人組も何とか500番台へとランクアップされました。中でも明日菜さんは420番と大躍進でした。最もそれ以上に皆さんが勉強するコツを得られたのが大きいと思います。

〇六話 学園のすゝめ（後書き）

夕映はバカレンジャーには成りえないと思つて書きました。 続きは図書館島編になります。途中、吹雪が語つていいことは作者の妄言なので脳内でなんか好いこと云つたに変換してください

〇 7 話 絡縄茶々丸（前書き）

今日は短いです。といふよりは、何回かよつて書かねばならないのです。

07話 絡縁茶々丸

2002年10月31日 金曜日

放課後、私は夕食の材料の買い出しに街へと出掛けました。いつもは学生寮内の麻帆良マートで買い物をしていますがもともと寮生向けのお店ですのでオーソドックスな品揃になっています。街中の専門店の方がバラエティーにとんでいるのです。特になにを作るとも決めていないので時折気になった商品を買い求めながらぶらぶらとショッピングを楽しんでいました。

彼女に気づいたのは八百屋でした。緑色の髪、耳の部分から伸びるアンテナ、そしてメイド服：絆縁茶々丸さんです。神妙な顔つきで大根を両の手に持つて見比べている彼女は運命の審判を下す女神にも見えますね。

「（）さげんよう、茶々丸さん。夕食のお買いだしでしょうか？」

「…」（）んこちわ、吹雪さん。質問に対しても答えはYESです

「茶々丸さんは料理をなさるんですか？」

「はい、私には美味しいという感覚は判りませんが、味覚センサーで成分分析を行うことで飲食可能かどうか判定できます。出来上がったものの感想をマスターから頂いて次回にフィードバックさせる」と品質の向上を行えます

まあ、レシピ通りに作ればふつうに美味しいものは出来ますからね。

「茶々丸さんのマスターとはH・A・N・J・H・C・O・Nを元で宜しこのですか？」

「はい、私はミス・エヴァンジエリン・A・K・マクダウルにお仕えしております」

初めて話しましたがなかなか興味深い方ですね。単に教育型AIとは思えません。

「よりしければお買い物に同行させて頂いても宜しいですか？」

「…ええ、かまいません」

微妙な間がありました。「解は得られました。
しばらく、茶々丸さんのお買い物に付き合いましたがネットの情報を常時検索できるのでもの選びも適切です。むしろ醤油をいくつか教えてもらいました。

「H・A・N・J・H・C・O・Nさんて食べ物では何がお好きなのでしょうか？」

「特に好物といったものはありませんが、和食は好まれています。
ただし、にんにく、葱類を嫌つておいでです」

「香りが強いもののがお嫌なのでしょうか？　薬味としての葱はともかく玉葱ならば細かく刻んで飴色になるまで炒めればシチュー等のコクだしになります。試しに一般的のレシピの半分程度の分量で作ってみてはいかがでしょうか？」

「考えてみます」

しかし、お買い物に付き合わせて頂きましたが独特な品といつもの
が感じられます。

「吹雪さんは私と一緒に買い物されて楽しいですか？」

「はい、楽しいですが。それが？」

「私はロボットです。私はプログラム通りに受け答えしているだけ
に過ぎません」

「先ほどエヴァンジエリンさんの好物を尋ねたとき、茶々丸さんは
続けてエヴァンジエリンさんの嫌いなものも挙げました。それは普
ログラムには無い動作だと思いますが？」

「いえ、それもプログラムの範疇です」

「本当にそうでしょうか？ 先ほどの問い合わせが和食が好きで中華
が嫌い、お魚が好きで野菜が嫌いならばあつていていますが和食が好き
で、葱が嫌いは本当は整合性がとれていません。^{ひととなり} 茶々丸さんが和食
が好きのあとでエヴァンジエリンさんの為人を表すには葱が嫌いと
云う言葉が好いと判断したのではないですか？」

「いえ、わかりません」

「茶々丸さんは人間には魂があると確信されているみたいですが何
故でしょう？ 魂の有無は人間にとっても最大のテーマの一つで、
有るとも無いとも結論は出ていません。在るのは信じるか信じない
かだけです。つまり、茶々丸さんは人間には魂が有り、ロボットに
無いと信じている。そうでしょうか？」

「…はい、そうなります」

「人間に有るならば猿に有るのでしょうか？ 犬や猫には？ 鳥や昆虫は？ どこで線引きすれば宜しいのでしょうか？ 人間だけに有るならば猿から進化した人類はいつから魂をもつたのか？ ちょっと視点を変えましょうか。今まででは理屈で魂が有るか無いかでしたが私自身に、私の魂とは何かと問うならば……記憶と思考でしょうか。云い換えれば想いですね」

「想い…」

「多分それはすべての生物が持っていると思います。ただ人間ほど濃くない。薄い。それはコンピュータにも云えるかも知れません。コンピュータにはコンピュータの魂があつてそれは人間と違つだけかもしません。

まあ、取り留めない話を続けましたが結論を云つなら、茶々丸さんに魂があつても好いんです」

「私に魂があつても好い？」

「ええ、そう。好いんです。それだけなんです」

しばらく茶々丸さんは黙つて立っていました。そして、

「やはり私に魂が有るかわかりません。ですが吹雪さんの言葉はもつと考えてみたいです」

そつ仰有つて去つていきました。

これほどのAIがあるのとは… 麻帆良以外の技術レベルと比較してもあきらかにレベルが違います。宇宙からの不法侵入? いえ、アカデミーに茶々丸さんを連れて行けば制作者は哲学科への道もひらくでしょう。これも要注意物件ですね。

しかし、思い切り人間くさいですね。今時の人間以上です。まあ、あまり深く考えすぎてしまわなければ宜しいのですが…

07話 絡縁茶々丸（後書き）

茶々丸は以後、説明や返答のあとに余計一言を付け加える様になる。
前回同様 吹雪の言動に特に意味はないです…深く突つ込まないで
ください

次回ネギ登場。今気がついたが楓の話とか冬コドモの話があつたはず
だが書かれていません。

プロットはあるのだが作品にまでならなかつたか？ ネタがでれば
追加できるかな？

2011/04/02 「指摘から矛盾点修正」

08話 ネギ・スプリングフィールド（前書き）

原作に入ります。今回から主人公以外の視点がはいります。

08話 ネギ・スプリングフィールド

2003年2月3日（月） 朝9時

「吹雪」

「来ねえな」

「来ませんね」

ホームルームの時間になつても先生がいらっしゃいません。今日から高畠先生に代わつて新しい先生が赴任されるらしいのですが、その先生がまだ来ません。しかし、なぜ今頃の赴任なのでしょうか。高畠先生の出張が多く授業が滞りがちなのは今に始ましたことではありませんからもつと早くに対策をとつてもらいたかったです。

「時間にルーズな方は遠慮したいのですが

先生の代わりに明日菜さんと木乃香さんが飛び込んできました。新任の先生を迎えに行つて遅れているといったメールが来ましたが遅刻するとは遅れすぎです。

「新任の先生でどんな人？」

「すぐ来はるよ、席につかなー怒られるえ」

とりあえず、木乃香さんの一言で皆 着席し静かになりました。

すぐに教室のドアが開き、なぜか少年が入ってきました。いえ、正確には数々のトラップに引っかかり転がり込んで来ました。一瞬、なにこれ、と云う雰囲気になりましたがいっしょに來ていた源しづな先生が新任の先生だと紹介するといつせいにクラスのなかでも好奇心旺盛な娘達が少年に殺到しました。質問を矢継ぎ早にされ少年が目を白黒させていました。

「10歳つてマジかよ」

不思議大好き少女千雨さんもまじめな顔でネギ先生を見つめています。わかりますよ。久々にビッグな不思議ですからね、千雨さん。しかし、これでは授業になりませんね。

「あやかさん、質問は自己紹介のときに一人ひとつづつにしましょう」

「吹雪さん？ そ、そうですね。そうしましょ。皆さん…」

いつもは冷静なあやかさんですがなぜか今日はテンションが高めですね。すでに授業時間も残り半分になってしまっているので今日の授業はできませんね。出席番号順に自己紹介と先生への質問をしていきます。毎度のことですが、出席番号一番の相坂さんはお休みなので出だしでつまづきます。途中、明日菜さんが妙な質問をしていましたが何なのでしょうか。一番最後が私です。

「正木吹雪さん」

「はい、正木吹雪です。私は9月の終わりに岡山から転入して参りました。部活動には所属しておりません。特に得意な教科はありませんが個人的には歴史について興味をもっています。英語がやや不

得意ですのネギ先生の授業には期待しております。私の質問ですが、先生はどこの大学で日本の教員の資格をとられたのでしょうか?」

「オックスフォード大学ででしょう?」

あやかさんが云いましたがそれはありえませんよ。

「英國の大学で日本の教員資格をとるための科目を組むことはないでしょう。文科省の管轄に無いんですから。日本で教員免状を得るには日本の特定の大学、もしくは通信課程で教育実習を含めた必要な科目の単位を取ることが条件ですよ」

「あ、教育実習なら今がそうですよ」

いま、何て仰有いました?

「そやな、3月まで教育実習だとおじいちゃんも云つてたなあ」

木乃香さんもいまのネギ先生の発言を肯定しました。

ネギ先生はきょとんとした顔をして云いますが、しづな先生の方はあきらかに顔色が悪いですね。

「ネギ先生は教育実習生なのでですか? しづな先生、いつたいどう云つことなんでしょう? 教員免状なしの実習生の授業では私たちは単位を取れなくなるのではないのでしょうか?」

実際に高畠先生の授業は自習が多いので気にしているのです。しづな先生の説明では能力に問題はなく特例として学園長がみとめ毎回しづな先生が監督するので問題はないらしいのですが…

「それって、しづな先生が担当すれば好いのでは？」

何か釈然としません。むりやりネギ先生に教鞭をとらせるのが目的かのようです。そしてうやむやのうちのその日の授業が終了しました。

〔近衛近右衛門〕

正直、儂は困惑していた。源しづな先生からの報告でわずか一時限も保たずにネギ・スプリングフィールドの教員免状詐称疑惑が持ち上がったからである。いや、実際に詐称なのだが。

「認識阻害に頼りすぎたかの？」

麻帆良学園一帯を覆う認識阻害の結界内では意識していないかぎりどんな現象でも当たり前と判断する様になつておる。また特定の物に対しても意識が向かない様にもな。

しかし今回は本人もあまり深く考えていなかつたせいで自ら実習生であることを暴露してしまつたし、なにより儂自身も孫娘の前でそう発言していたため複数の人間が同時に疑問を呈したため認識阻害がぐずれてしまつたらしい。幸いしづな先生が取り繕つてくれたが、しづな先生にも負担をかける結果になつてしまつた。

そして、原因になつた女生徒、正木吹雪。儂が昔所属していた関西呪術協会で云われていたことを思い出す。

『正木には手を出すな』

正木は柾木の分家と聞く。岡山のある地方に住むとてつもない力を

持つた一族。かつて鬼を封印し、不老長寿の秘密を奪つた一族。その力を求めて何人の呪術者が彼の地に入つたが誰一人として戻つてこないと云う。彼女の出身地はまさしくその村で保護者は柾木姓。転入にあたつては監視をつけており、今まで目立つた行動はなかつたが……

とりあえず、大学部でネギの単位を拾える様、根回しの電話をかけることにした。

〔吹雪〕

放課後、ネギ先生の歓迎会を開くことになつたのですが肝心のネギ先生が捕まらず手分けして探している最中 高畠先生に遭遇しました。そう云えば高畠先生もお呼びする予定でしたね。

「こんにちは高畠先生、少々お話をしたいのですが」

「実はネギ先生について……!？」

何か強い力を感じました。と、思いきや高畠先生が今感じた強い力の方向に向かつていきなり走り出しました。人の話も聞けないのでしょうか、この元担任は？

高畠先生を追つて林に入った私が見たものはネギ先生と……裸にブレザーを着ただけの明日菜さんです。羞恥のためしゃがみ込んだ明日菜さんをかばう様にネギ先生と高畠先生の間に私の体を割り込みます。そして体を隠してもらうためブレザーを脱いで明日菜さんへ渡しました。

「高畠先生は至急、明日菜さんの着替えを用意してください」

「いや、僕よりも君の方が」

「裸の明日菜さんを男性にお委せするわけには参りません。とりあえずジャージでも買つてきてください。それとネギ先生は職員室でお待ちください。納得いく理由を聞かせてもらいます」

有無を云わざず一人に命令をします。

高畠先生が戻るまでの間に事情を明日菜さんから訊き出せました。

のどかさんが階段から落ちたとき、ネギ先生が何かしたら のどかさんの体が不自然に空中で止まつたこと。

ネギ先生に問いただしたら魔法であることを告白したこと。
ネギ先生が記憶を消去すると宣言したあと、強い風が吹き服がちぎれ飛んだこと。

さらに朝ネギ先生を迎えに行つたときのくしゃみで同じく服がちぎれ飛んだこと。

諸々を聞いてこらつちに高畠先生がジャージを持つてきましたが本当にジャージしか買つていません。本当に使えない人ですね。購買でもTシャツやショーツぐらい売つているでしょ。ノーパンノーブラで先生方に会わせるわけにもいかないので購買でショーツとTシャツを買いました。幸いスカートとシャツも有つたのでそれも購入してトイレで着替えてもらいました。

その間にあやかさんにネギ先生が会議中で捕まえられず、会議が終わるまで近くで待機している皿のメールを打ちます。

「近右衛門」

結局一日保たなかつた。

儂は高畠先生からの電話を受け職員室にいたネギ先生としづな先生を呼び出し、二人に状況の説明をしてもらい、ため息を吐いた。しばらくして明日菜くんと吹雪くんが高畠先生と共にやつてきた。

「正木吹雪です。」んこちは近衛学園長

明日菜くんに比べると体つきは同年齢とは思えないほど幼いが目に強い力が宿っている。

「うむ、話はネギ君から聞いておる。当事者だけで話し合いたいんだが吹雪くんには席を外してもらえんじやろか？」

「もし、それが学園長の本心なら私は明日菜さんをつれて警察に向かい婦女暴行未遂事件として保護してもらいます」

「ちょ、ちょっと待つてくれ。なんじゃその婦女暴行未遂とは」

「私が現場に着いたときには、ほぼ全裸に近い明日菜さんとネギ先生が対峙していました。客観的に見て明日菜さんがネギ先生に性的暴行を受けている様に見えましたが？」

「ネギ君はまだ10歳じゃぞい」

「はい10歳で大学を卒業されるほどですから性的に早熟でもおかしくはないかと」

吹雪くんの言葉には説得力があり状況証拠もそろつてこる。英雄ナギ・スプリングフィールドの息子が婦女暴行未遂で逮捕とは…

「むりん、明日菜さんが私の同席や警察への保護を拒否するならば明日菜さんの意志を尊重します」

「吹雪ちゃん、ありがとつ。私は吹雪ちゃんにしてほしい」

「わかつた。同席を認めよう。ただしこのことは他言無用じや」

「犯罪に関わることなら承伏いたしかねます」

「む、とつあえず話を聞いてもらひひひ」

なんともやつこへいだ。

〔吹雪〕

学園長からの話は驚愕！…………といつわけでもなかつたですね。

要点は、

麻帆良学園は魔法使いの拠点である。

学園長を始め学園には魔法使いが先生として多数在籍しており、生徒にも魔法使いがいる。

魔法使いは魔法の存在を隠匿する義務があること。

魔法使いであることを知られた魔法使いは、相手の記憶を消去、改竄すること。

ネギ・スプリングフィールドは魔法使いの試験のため日本で先生をすることになったこと。

ネギ・スプリングフィールドが明日菜に行つたセクハラは魔法の暴走？ が原因である」と。 等々

なるほど自称魔法使いさんたちがこの麻帆良の影の支配者でしたか。 私としては棚ぼた的に情報を得ることが出来ました。 ところで魔法と超能力とは違うのでしょうか？

「さて、 どこから突っ込むべきでしょうか。 魔法の実演がなければ精神科が、 教育委員会か、 警察か、 どこに相談すべきか悩むところでした。 まずはなぜ魔法を隠すかですが」

「うむ、 魔法の便利である反面、 危険な面も併せ持つ。 これは何にでも云えることじやが。 歴史的に宗教がらみの迫害を受け、 地に潜つて以来 表だっては活動してはおらん。 しかし、 我らは影で人のために魔法を役立てようとな日夜頑張つておる」

「はい、 僕たち魔法使いは日夜、 立派な魔法使いを目指しているんです」

ネギ先生が元気よく云いますが、 学園長の怪しきもあつて新興宗教の教祖と洗脳された信者にしか見えません。 マギステル・マギ？ マスター・メイジ？ 魔法使いの上級職でしょうか？

「そのマギステル・マギとは女生徒の記憶を消しても、 あるいは失敗して服を消しても宜しいのでしょうか？」

いきなりネギ先生の元気がなくなります。

「その、魔法使いである」とがばれると僕おじじもやめちゃうの
で」

「おじじよ？ 先生方を見ると一応 うなづいていますが本当なので
しょうか？」

「つまり、一部始終を聞いた私たちも記憶を消されるのですか？」

「いつづと明日菜さんが私の手を握つてきました。明日菜さんは先
ほど記憶を消されかけましたからねえ…それとも逃げるときに私を
引っ張つてくれるといふことなのでしょうか？」

「いや、一人が他言しないと云ひながら記憶の消去はやめよう」

「…世間に広める様なことはいたしません」

瀬戸たまには報告いたしますけどね。恩着せがましい云い方ですが
そこは流しておきましょう。多分話が進まなくなります。

「私も他言しません。けど、このか は知ってるの？」

「いや、このか には教えておらん」

またもや要約しますと

麻帆良学園の母体は関東魔法協会と云つて西洋発祥の魔法使いが主
な構成メンバーである。

近衛木乃香の父は日本土着の魔法集団、関西呪術協会の長である。
木乃香の父は武道の実力者でもあり有名人である。

木乃香は日本でも有数な魔力の保持者であり、後継者争い等に巻き

込まれない様に麻帆良学園に入學し魔法と縁のない生活をしていた。

「それじゃ、このか とネギ先生を同居させねつてますいんじやな
いの」

「ちょっとと聞き流せない単語がありました。

「なんですか、その同居とこうのは」

「実はネギ君の住むところが決まってなくての、このか とアスナ
ちゃんの部屋に同居してもうりつになつたんじや」

「それはまずいでしょう。男性教員と女生徒の同居などスキャンダ
ルです」

「でも、そうしないと僕、今日泊まるところがないんです」

ネギ先生が悲しそうに訴えています。子供を泣かすのは趣味ではあ
りません。

「ちょっとと失礼します」

携帯電話を取り出します。

「…あやかさん、吹雪です。こちらはもう少しかかりそうです。そ
ちらは…はい、わかりました。それでちょっとお願ひが、はい、
ネギ先生ですが学園の手違いで今日泊まるところがないそうなので
すがあやかさんのご実家関係で近場にビジネスホテル等は…いえ、
まあ、そう仰有るなら構いません。しかし、料金はちゃんと預いて
もらわないと後で面倒なことに…はい、ネギ先生にお伝えします。

はい、後ほど」

電話を切つて学園長に向かつて立っています。

「雪広あやかさんの方で、『実家が経営するホテルを一室、予約してくださることになりました。後で迎えをよこされるそうです。これなら問題ないですね。学園長、ネギ先生』

スイートルームとかリムジンでの送迎とかは聞いてませんよ。空耳です。

学園長も苦虫を噛みしめた様な顔で了承してくれました。請求される料金を見れば大急ぎで住居を探していくさるでしょう。ちなみに一泊20万のところを5万で好いそうです。

「木乃香さんとネギ先生を同席させるのは、ネギ先生が木乃香さんに魔法ばらしてしまつ」とを期待しての措置ではないですか?」

「しかしじゃな、あれの魔力ではいつ魔法に田覓めるかわからんしこのまま何も教えず放つておくのも危険じゃし」

間接的に肯定しましたね。

「それならば、木乃香さんのお父様に直接談判するか、あるいは木乃香さんに直接云えば良かつたのです。いえ、木乃香さんに魔法のことを打ち明けるなら麻帆良学園に通うことの意味はなくなりますね。なるほどネギ先生が魔法をばらして、それを知らんぷりしておけば木乃香さんをお膝元に置いておけると?」

「そんなことはない」

「やうですか。では、やつ云つことなのでしょうね。さて、次の質問に移る前に高畠先生にお訊きしたいことがあります。今ここにいる先生の立ち位置は魔法先生ですか？それとも明日菜さんの保護者ですか？」

「それは一緒じゃいけないのかい」

「いけなくはないと思いますが、魔法使いの方は蝙蝠さんが多いみたいですからね。率直に訊きますが明日菜さんには高畠先生と出会う以前の記憶がありませんが、それと魔法は関係してしまですか？」

私の言葉に高畠先生はあきらかに反応しましたね。明日菜さんもやや果然として高畠先生を見つめています。

「（返事確かに承りました。高畠先生も学園長と同じ穴の貉ですね。明日菜さんから記憶を奪つてまで魔法から遠ざけたのなら、今更ネギ先生には会わせるべきではありませんでしたのに）

まるで鏡に映したかのような状況です。

「ところでネギ先生の処分はどうなりますか。魔法バレ、明日菜さんへの記憶操作未遂、セクハラ行為の数々。おこじょですか？」

「そこなんじやが、どうにかならんかな」

「やつは云われても、ネギ先生からは謝罪の言葉もない」と明日菜さんが仰有っています。私も先ほどの件ではネギ先生が謝罪しているところを拝見しておりませんし」

外国人ですから安易に謝罪しないということなのでしょうか？

「いや、ネギ君。君のアスナくんへの行為は非常に礼を逸した行為だった。反省し謝罪したまえ」

学園長の言葉にネギ先生はコメツキバッタのように頭を下げ、謝罪のことばを口にします。基本、素直な子なんでしょうか？

「宜しいですか？明日菜さん。では、ネギ先生の処分に関しては学園長に一任させて頂きます。それと今後は魔法に関しては、存在は知っているが関わり合いを持たないというスタンスでいきたいと思いますが異存はないですね。ネギ先生が魔法バレしそうなときにはフォローぐらいはしますが。ところで、2・Aで魔法に関係している生徒について教えてもらえますか？連携して対処したいのですが」

多分ネギ先生のつづかりはしばらく続くでしょう。

「しかたないの、春日美空君、桜咲刹那君、龍宮真名君、エヴァンジエリン君、絡繰茶々丸君は確実に知っている。特に刹那君はこのかの護衛役をあれの父から依頼されておる。あと、おそらく知つてあるだろうと云うのは超鈴音君、長瀬楓君、葉加瀬聰美君、あたりじやるつか」

「わかりました。ところで、ホームルームで話題になつたネギ先生の教員免許の件ですが、もちろん誤魔化しなどないでしょうね。3月までは教育実習扱いですから4月までにはちゃんと必要なカリキュラムを履修されていることでしょう。マギステル・マギさん」

まあ、今回はじめてでしょうか。

「では、私たちはこれにて失礼させて頂きますけれど、2-Aでネギ先生の歓迎会を企画しており、その為ネギ先生を捜してあります。すでに準備も完了しておりますのでお説教は短めにしてください。すると助かります。あつ、このことを呪文で忘却してもらえばもうと助かります。サプライズパーティーだったのです。では廊下でお待ちしております、ネギ先生」

そう云い残し、明日菜さんをつれて学園調査室を後にしました。

〔近右衛門〕

完敗じゃった。

閉められたドアを見て儂は思った。相手に話の主導権をとられたの一度も取り返せなかつた。さうにはうかつな言葉から相手に情報をもぎ取られていく。

「さて、ネギ君。今回の件について反省文を明日中に提出してもらうぞ。また、アスナくんの服は弁償することとし費用はネギ君の給料から天引きとする。そして、今年度中に教員免状に必要な科目の単位をぜんぶ取つてもらうぞ。最後に：すまなつた。儂のわがままでネギ君にやつかいな役目を押ししつけるところじゃつた」

「それについては僕も考えが足りなかつた。反省している」

高畠先生も続いてくれる。儂たちの言葉にネギくんも謝罪を受け入れてくれた。

「しかし、正木吹雪とはどの様な娘なんじゃ？・しづな先生、高畠先

「生

「恥ずかしながら僕はあまり接点が無かつたんですよ。ただタレントがそろいすぎてまとまりに欠けていた2・Aの要石の様な立場にいますね」

「そうですね、彼女がまとめて雪広あやかさんが引っ張るというのが今の2・Aでもつとも効率の良い運営の仕方になっています。彼女自身、学業の方もかなり優秀ですし、問題になつたことはないですね」

今回の件では正木吹雪を非難する要素はないが潜在的に危険人物と僕は認識した。

08話 ネギ・スプリングフィールド（後書き）

ネギは5日間宿泊、学園側は規定の宿泊費以上の支払いは拒否 学園長が立て替え

今日はなぜ学園長が木乃香たちとネギ先生を同居させようとしたか？
？の第一弾

なお京都弁に関してはもんじろう先生頼みなのでスルーの方向で

09話 ネギ先生歓迎会 裏（前書き）

主人公は木乃香の内情を訊こうとして刹那に接近します。

〇九話 ネギ先生歓迎会 裏

2003年2月3日 午後4時

〔吹雪〕

ネギ先生が学園長から解放され、しづな先生と高畠先生を伴つて、Aに着いたのはそれから30分あとでした。私にとっては最早なれたこのノリですが、ネギ先生は田を白黒せてくれりますね。

刹那さんが一人で壁際にいらしたのでそつと私は近づきます。いつもながら、抜き身の刃物の様な感じの方ですね。

「刹那さん、少し宜しいですか？」

「なんですか」

警戒感むき出しです刹那さん。

「木乃香さんとネギ先生が同栖される「ことは」存じましたか？」

「このちやんが？」

「このちやん？」

「は、はい学園長が木乃香さんが魔法を知るきっかけとして、ネギ先生を利用しようしたのです。まあ未遂に終わりましたが」

一連の騒動の顛末を刹那さんに説明します。

「そんな、学園長がそんなことを」

「はい、そこで確認ですが木乃香さんの魔力が大きすぎて、いずれ魔法使いとして顕現するというのは事実でしょうか」

「それは多分………… 本當です。お嬢様は見る者が見ればさながら力の塊でしょう。日常の何氣ない動作で何らかの魔法現象を発生させてもおかしくはないのです。下手をすれば暴走した力で自分自身を傷つけることもあります」

それを、防ぐのも私の仕事ですと刹那さんが続けます。
そうですか、学園長のはつたりではなかつたのですか。

「放つておくのも危険なのですね。ところで関東魔法協会と関西呪術協会は仲は宜しいのですか？」

「いえ、悪いです。表だつて事を起こしていませんが、水面下では足の引っ張り合いをしています。長同士が義理の親子関係でパイプがつながっていますが組織としては事実上冷戦状態でしょう」

刹那さんからの説明では関西呪術協会はもともとは平安京を守護した陰陽寮を祖とした団体だそうです。陰陽寮が廃止され勢力を失い始めた日本の呪術者に代わって台頭してきた西洋魔術。その西洋魔術に対抗するため幾つかの魔法結社が集まつて結成したのが関西呪術協会だそうです。元々関東、関西と名乗った訳ではなく、関東、もしくは関西に本拠地を持つ魔法集団という意味合いだったそうです。そのどちらにも属さない小規模な結社は日本各地にあるらしいです。

例えるなら関西呪術協会は地元の商店街が構成する商工会で、対す

る関東魔法協会は大手のスーパー・マーケットチェーン店と云つところでしょうか。

関西呪術協会は多数の魔法結社の集団であるがゆえ一枚岩と云い難く権力争いも熾烈で、そのため木乃香さんの父親は木乃香さんを麻帆良学園に入学させたそうです。関東魔法協会こと麻帆良学園が関西呪術協会から木乃香さんを守り、学園長が関東魔法協会から木乃香さんへの干渉を防ぐ、と云う事だったのでしょうか。

「そう云つじとだったのですか。となると、学園長の策は次善ぐらいの案だったのでしょうか？」

「どう云つ事ですか？」

「木乃香さんの魔法の発現が避けられないと思つた学園長が直接木乃香さんに魔法の存在を教えた場合、組織の目からみれば関西呪術協会の要人保護の要請を関東魔法協会が不履行したと云うことになります。これは他団体から関東魔法協会への、関東魔法協会内での学園長への信用の失墜につながります。しかし、ネギ先生がもとで木乃香さんに魔法がばれた場合、未熟な見習いの暴走と云う形でネギ先生を処分することで決着をつけられるでしょう」

「それでは、ネギ先生が好い面の皮では？」

「ネギ先生は子供ですから、と云つじとで軽い罰になるのでは？ 実際若いですしやり直しするにも十分可能でしょう」

うまく誘導すればすんで泥を被つてくれそうです。

しかし、難しい問題ですね、木乃香さんの魔法の発現が避けられないならば、そ第三者の私が明日菜さんから話をもつていくしか：いやいやいや、やはり間接的にも明日菜さんを魔法に近づけない方

が好い気がします。

「刹那さんは関西所属なんですね」

「はい、でも内密につけられた護衛なので表向きには関東魔法協会に食客扱いでやつかいになっていますが」

「とりあえずこのことを木乃香さんのお父さまに報告していくださー。木乃香さんへお父さまから魔法について説明なされるのが一番波風が立ちません」

「わかりました。長と相談してみます」

「このクラスには魔法に関連する生徒あと4人いるとお聞きしましたが、皆さん ネギ先生が魔法をうつかりばらした場合フォローをして頂けるのでしょうか?」

美空さん、茶々丸さん、真姫さん、エヴァンジエリンさんの名を挙げます。

「正直、美空ぐらいでどうか。龍宮は報酬がないと動きませんし。エヴァンジエリンさんと茶々丸さんは基本不介入でしょう。私もお嬢さま優先ですので」

「まあ、あまりにも酷ければさつと英國へ戻つてもらひだけじよつし大丈夫でしょ?」

「…とにかく吹雪さんはあの『正木』なのですか?」

「正木ですか? もうこう意味で正木なのですか?」

「はい、あの、関西にいた頃、岡山の柘木神社周辺に住む柘木の一族には手を出すなど云う話をなんども聞かされたので。かなり優秀な剣の使い手でちょっとかいを出した者が皆痛い目にあつていて」

「やつらの意味ならその『柘木』ですね。もしかして学園長もその話は知つておられるのでしょうか？」

「はい、関西では有名な話ですし学園長も昔は関西呪術協会の一員でしたので知つていて思いますが」

ああ、これは想定外でした。うちの村の人間は基本、足下（封印した鬼）か、真上（宇宙）だけを見て、周り（地球）については興味を持つていませんでした。考えてみれば実力で中立を勝ち取つていたわけですし周りにもつと気を遣うべきでした。偽名を使えば良かつたのですがわざと勝仁さまが本名で申し込んでいましたし。

「もしかして、最初の頃私を警戒なされていたのはそれでしたか？」

「は、はい。すみませんでした」

木乃香さんは警護対象、私は要注意人物として注目されていたのですね。真名さんは魔法生徒仲間でしたか。まあ私はもつと酷いことを刹那さんに対し考えていたのですから責めはしません。

「ばれればれだったとは、赤面の至りです。いまさら取り繕つても仕方ありませんので告白しますが、私もとある目的を持つてこの学園に通っています。大事な物を落としたのか、置き忘れたのか判りませんがそれを探すお仕事です。この件に関してはお見逃しいただければ幸いです。取引とは云いませんが木乃香さんの関してはお力

添えができると思います」

「本来ならば今の話を学園長の報告するべきですが、それではあなたに対して不義理となります。ただ、あなたの話だけでは今すぐ返事はできません」

「そうですね、それが宜しいでしょう。ただ、刹那さんが私を危険と判断されるまで私が『柱木』であることを公にしないで頂ければれば恩に着ます。ところで、実際、刹那さんはどの様なお仕事をなされていらっしゃるのですか?」

「はい、学園内の護衛は魔法先生や生徒によって監視や結界があるのでそちらにまかせています。代わりに私も学園の防衛のために監視任務に協力しています。お嬢様が学園外に出るとときは影から護衛します」

「学園の防衛とは敵対組織がいるのでしょうか?」

「関西呪術協会はときおり間者を忍ばせてきます。所属不明の者も多いです。麻帆良には世界樹や図書館島等秘密が多いのそれを探ろうとする侵入者は事欠きません」

しかし、それを守るのが教師と生徒というのはいかがなものでしょうか?自称魔法使いさん達にはいろいろと問い合わせたいことが多いります。

「刹那さん、もし私が木乃香さんに危害を加えるならばどうしますか?」

「切れます」

短く、しかし迷い無く云い切ります。すでに覚悟はできているのですね。

しかし、その答えでは合格点はあげられません。あなたの力量では私に及びません。見抜けないのは経験不足でしょうか。応援を呼ぶとか、木乃香さんを連れて逃げるとか、現実的な案を出してほしかったです。

「切られるのは痛いですから、やめておきましょう」

そのあと、お互いの携帯電話の番号とメールアドレスの交換をして刹那さんと別れました。

「近右衛門」

夜中、近衛近右衛門に関西呪術協会の長であり、義理の息子でもある近衛詠春からの電話を受けた。タイミングが良すぎる故、今日のことが詠春の耳に入ったのかと思ったが話の内容は一人にとつては良くある協会の近況や不仲に対する懸念や打開策の検討であった。話が一段落してから学園の様子を訊かれた。

『そう云えばナギの息子はもうやけうに行っているんですか?』

「ああ、今日着いたところじゃ、木乃香のクラスの担任にしてみたい。ナギとは違つて理性的な子じゃが、少しやんちゃなところはあれの息子らしいぞ」

『 そうですか、私もすこく興味がありますので早く会いたいですね。お義父さんなら、ネギ君や木乃香に適切な指導を行ってもらえると信じていますよ。ああ、それと修学旅行の件ですが…』

電話を切つて儂は今日何度目になるかわからないため息を又吐いた。

『 釘を打たれてもうた』

詠春からの言葉の本当の意味は判つた。いま、木乃香かわいさでうかつに動けば関西呪術協会との関係をこじれさせてしまう。ネギ君の行動を詠春が観察しているなら迂闊なことはさせられないしのう。しかし、問題はどこから情報が漏れたかじや。木乃香の護衛、桜咲刹那か詠春の独自の判断なら好いが、あの正木吹雪が一枚かんでいふとなると面倒なことになりそうじや。柾木の一族が自分たちの領土以外にでてくることは稀だから麻帆良に来た目的も不明じや。吹雪の今日の対応を見る限りでは魔法関係に明るくなさそうじやが、鬼の封印を護る一族とも云われておるし実際どうなんじやろう?とりあえずは、情報を集め、監視を密にするしかないのう。

09話 ネギ先生歓迎会 裏（後書き）

主人公は木乃香の内情を訊こうとして刹那に接近しました。できれば違う視点からの魔法協会の姿を知りたかったからです。神の視点からすればここが彼女のルビコン川。

なぜ木乃香が麻帆良に通つているか？ に対する考え方です。
古い歴史故に派閥が多い関西呪術協会
メガロの特定の派閥の出先機関である関東魔術協会 と考えています。

ネギの同居に関しては学園長はそのほかにも一石二鳥とか考えていたもよう。

それと木乃香の魔力顯現について
詠春…もうちょっと、もうちょっと
近右衛門…むり、もうむり
ぐらいの意識差、

「吹雪」

「では第一回 近衛木乃香を守る会 合合を始めます」

女子寮の刹那さんの部屋で明日菜さんが開会の言葉を宣言します。近衛木乃香を守る会とは先日の騒動の際 木乃香さんの潜在的な危機について知つてしまつた明日菜さんが発起人となつて設立。護衛役の刹那さんと私がメンバーです。正確には明日菜さんにむりやり呼び出されたわけですが。ちなみに刹那さんのルームメイトの真名さんは少し離れた所に座つて私のおみやげのケーキを食べています。

「わたしは無関係だと思つのですが」

と、明日菜さんに云つてから『あなたがばらしたのですか?』といふ田線を刹那さんに送つてみます。刹那さんは『とんでもない』といつた顔で首を振ります。昨日、刹那さんには木乃香さんの護衛を手伝つと申しましたが能動的に行つつもりはありませんでした。情報提供とか口裏合わせぐらいを想定していましたが。

「「」ねん、でも吹雪ちやんは頭が良くて頼りになりそうだから、お願い」

そう云われると悪い気はしませんね。

心配なのはむしろ明日菜さんです、こんな会を立ち上げれば自動的に魔法に関わつてしましますから。……明日菜さんが魔法に関することをすっかり忘れて無防備になるよりもましでしょうか。

明日菜さんの「」気性では木乃香さんの危機に自分だけ逃げをつづく

「え？」ともやめたつにありませんし。

昨日の夜には刹那さんからの正式な協力の要請がありました。関西呪術協会の長、近衛詠春さんはクラスメイトとしか報告してないそうです。一応、信じておきましょうか。

「ところで、このかから聞いたんだけど刹那さんってこのかの幼なじみなんだつて？ こっちに来て一緒になつたのに以前の様に接してくれないつて云つてましたわよ」

ほう、明日菜さんも木乃香さんから事前に情報収集をされるとは結構本気みたいですね、しかし…

「それは、『え？』とぞしょつか刹那さん」

聞いていませんよ？

「その、ですね」

刹那さんは昔、木乃香さんと親しくなされていたそうですが、木乃香さんが川で溺れたとき助けられなかつたことを悔いて、一度と同じ失態を繰り返さないため、いったん木乃香さんと離れて修行に励んだそうです。

「このかお嬢様が麻帆良に移られたのを機に私が護衛に抜擢されましたまだ未熟ゆえお嬢様の前に立てないと云うか、そのう影からお嬢様を守つてこいつかと…」

はいはい、『サヨナラ』と云つて別れた後10分後に出合つたと同じ状態ですね。

顔を赤くして話す刹那さんですがやつてこむ」とがおやまつです。

「刹那さんの想いはこの際置いておきます。護衛なら四六時中そばにいるのが理想なのですから幼なじみの立場を有効に活用しなくてどうしますか?」

「やつだよ、桜咲さん。」とか も態度が急に冷たくなって、ときどき睨む様にこのを見ながら 何か恨まれることをしたんじゃないかって云つてたよ」

「そんな

がつくりうなだれてしまつ刹那さんです。

「まあ、過ぎたことは致し方有りません。お一人の関係以外には悪影響がでていないのですから。明日から刹那さんは木乃香さんにべつたりくつづいて過ごす様にしてください」

「えつ、い、いまさらちょっと」

「護衛なら自分の体面よりも護衛対象の安全を優先させなさい。だいたい、護衛対象に気づかれない様に護衛するなんて無理です。街で不良にからまれたら当然木乃香さんの前にでるわけでしょう。そんなことが数回続けばさすがに木乃香さんでも気づくでしょう

「やつだよね。事情を知らないと桜咲さんがむりやり とかの護衛をさせられて怒つているとか考えないかな?」

「あり得る解釈でしょ?」

「そんな」

ああ、刹那さんが落ち込んでいます。

「話を戻しますが、要は刹那さんが木乃香さんと仲良くなれば好いだけの話です。実際、いきなり関係改善を刹那さんが行うといふのも不自然ですので明日菜さん、その辺のフォローを宜しくお願ひします、と云うよりも力ずくで刹那さんを木乃香さんの横に引っ張つて来てください」

「了解しました。隊長」

敬礼しながら明日菜さんが云います。私が仕切っていますからしょうがないですか。2・Aではあやかさん以外では私がリーダーシップをとることが多いです。自分がやれば部下より早く終わる仕事は自分でやってしまった悪い癖がありますからね。上司の水穂さまもうですが。

その点では瀬戸さんは割り振りの達人ですよね。……瀬戸さまに割り振られた仕事を部下に任せられず自分で処理する……婚活などする暇など生まれませんか。

いやいやいや、今は木乃香さんの話です。

「ところで、刹那さん、木乃香さんのお父さまからは」返答有りましたか?」

「はい、長期の休みにお嬢様の『』様子を見て魔法のことを打ち明けるかどうか判断すると仰有つてました。そのため夏休みまでは今の状態を保持してほしいと」

「春休みは?」

「多分帰らないと思つよ。」このか去年も帰らなかつたし

まあ、一週間程度ですかね。

「やつなると少なくとも半年間は木乃香さんを守らなければならぬのですね。ところで外部から木乃香さんにちょっとかいを出される方は多いのですか？」

「いえ、こまのところあえてお嬢様に手を出さないとする者はこまさん」

「なら、学園長とネギ先生の動向を気をつけなければ好いのですが」

「学園長には長が念押しをすると話していました」

「やつですか、では木乃香さんにはネギ先生をあまり近づけさせないという方針でいきましょう。明日菜さんもネギ先生、いえ魔法使いたちにはあまり接触しないほうが好いかもしません」

「やうなの？」

「ええ、魔法と関わることは日常との決別を意味する可能性があります。刹那さんは極端ですが交友よりも任務を優先させていますし。魔法を隠匿するならば近しい友人にも隠しておかなければなりません。ときには嘘を吐かなければならないときもあるでしょう。しかも明日菜さんは…」

「うん、高畑先生にもう一度訊いたけど何も話してくれなかつた」

「そうですか。明日菜さんにとつて魔法とは今まで空想上の世界でした。意識的にはあり得ない世界、例えば壁があつて進むことが出来ない場所という認識だつたはずです。しかし、魔法が存在すると知つたいまその壁は無くなり、今まで以上に広い世界があるのがわかります。けれど、壁があつた場所には明日菜さんには見えない線があり、それを踏み越えれば今までの生活に戻れなくなります」

すでに越えてしまった感がありますが…

「その見えない線を見るためには明日菜さんがもっと魔法について知るしかないのでしょうね。一番やつてはいけないことは、見えない線に見えないまま近づくことなのであるから。

刹那さんは明日菜さんが不用意に線に近づいたら引き戻してくださり。明日菜さんにとって魔法に関わることは木乃香さん以上に危険になるかもしだせん」

「どうこう事、吹雪ちやん

「学園長が女子寮に口出し出来るなら普通、護衛の刹那さんと木乃香さんを一緒にするはずです。そこをあえて明日菜さんにして云ふことは何らかの意味があると思うのです」

「私に…」

「まあ、仮説の一つですけど」

言葉では仮説と云いましたが確信はあります。あの学園長には老獴と云う言葉がよく似合ひそうです。

「拡大解釈するなら2・A自体が魔法バレを期待されている節があ

りますね。刹那さん、学園長からネギ先生の本当のプロフィールを伺っていますか？」

「イギリスのメルティアアナ魔法学校を飛び級、主席で卒業したことと魔法世界の英雄ナギ・スプリングフィールドの息子である」とべらいです」

「なに、その英雄って」

「えっと、魔法世界の大戦を終了させたそうです。その後、世界各地をNGOとして紛争地域での復興支援とか災害救助とかをしていました」

「魔法世界に大戦…ですか。でもうかつにつっこみをいれると危険ですね。刹那さんは結構その手の情報を提供してくれますが、大っぴらに話しても大丈夫なんでしょうか？」

「で、そのネギ先生のお父さまはいま何をなさっているのでしょうか？」

「十年ほど前に亡くなつたみたいです」

「そうでしたか。

話を戻しますがネギ先生は魔法使いたちにとつては期待のエリートであると言ふことですね。その彼と私たち2・Aの面々をくつづけることで何らかの利益が彼らに生まれるのかもしれません」

「もしや、ネギ先生のパートナー探しでは」

「何ですか刹那さんそれは」

「はい、術師は呪文の詠唱中無防備になります。陰陽師ならば式神に護衛させますが、西洋の魔法使いは剣士などと特別な契約をして護衛させます。これがパートナーですが男女間での契約は結婚と同義とされるそうです」

「つむ、私やこのかがあのチビッ子のお嫁さん候補なの？」

「確かに2-Aの面々なら能力的には他のクラスよりすば抜けでいますね。ただ、ネギ先生のパートナー候補を2年も前から用意していたのか疑問ですね。まだ要注意人物を一力所に集めたと云つたほうが信憑性が高いでしょう」

しかし一般人を魔法使いのパートナーに斡旋する？教職と魔法使いの一足の草鞋ではなく、教職を魔法使いの道具にしていることになります。いえ、表向き学園を名乗っている以上一足の草鞋も拙いのですが。

「ネギ先生はある意味、道化ですので一部始終観察しても意味は無いと思います。学園側がネギ先生に何か指示したときこそ注意すべきでしょう。いずれにせよ私たちの本分は学生ですので、勉学をおろそかにするわけにも参りませんし」

「そうだね、私もやつと成績が上向いてきたから、勉強も頑張らないと」

「明日菜さんの今回の目標は100番以内でしたね」

「え？」

刹那さんがびっくりした顔をします。以前の例の五人衆の印象が強いのでしょうか。確か前回の期末試験では明日菜さんは200番辺りだったはずです。

「はは、さすがに100番以内は難しいんじゃないかな」

「でも木乃香さんがもう明日菜さんの先生役はいらないと太鼓判を押していましたよ」

実際、明日菜さんの成績は急上昇中で質問される内容もレベルが格段にあがっています。

「刹那さんは前回の期末、何位だったの？」

明日菜さんの問いに刹那さんが顔をしかめます。そこに、

「刹那はだいたい500番中頃だな」

と、今までベッドで銃の分解清掃をしていた真名さんが仰有ります。今まで見ないふりしていましたがそれ本物ですよね？

「龍宮ー。」

自分の成績をばらされて刹那さんが大声をだしますが真名さんは平気な顔です。

でも500番中頃とはかなり刹那さんも成績が悪いですね。もしかして、今まで情報をくれていたのはただ考えなしに喋っていたわけではないですよね？

「ちょうど好い口実です。刹那さんは木乃香さんから勉強を教わつ

てください。そして、来年中には木乃香さんと同学力まであげても
らいります」

「そ、そんな、無理です。」のちゃん前回70位だし

「刹那さん。もし木乃香さんが魔法使いとして生きることになり関
西にもどって普通の学校に入学するとき木乃香さんに今の刹那さん
が入学できるレベルの学校しか選ばせないつもりですか？」

「う…」

「むろんそんなことはできませんよね。刹那さんが同じ学校に入れ
なかつたらどう致しますか？一日中、学校の敷地の外を堀沿いにグ
ルグルまわるおつもりですか？」

「いや、多分その時点で護衛役から外されるから大丈夫じゃないか
？」

真名さん、身も蓋も無いことを…

「…勉強しましょうね」

「…はい」

「明日菜さんも木乃香さんが都合がつかないときには手伝ってくだ
さいね」

「私が？」

「人に教えることは自分にとつても勉強になりますよ。明日菜さんはもう十分にそれだけの学力をもっています」

「いや、でもバカレッジに勉強を教えられてもさ、ね？」

「いえ、私からもお願いします。明日菜さん、私に勉強を教えてください」

「ええ！ 刹那さん？」

ともかく、第一回 近衛木乃香を守る会はこゝにして幕を閉じました。

次の日、明日菜さんが刹那さんを引っ張つていき、木乃香さんと仲直り？を強引のすすめ、早速その日から3人で勉強を始めることがなりました。

結果的に見てこれは、ネギ先生と親しくなった同じ図書館探検部の面々から木乃香さんを少しだけ遠ざけることになりました。もつとも元々 学園長からネギ先生と親しくする様に云われている木乃香さんですのでまだ田を離せません。

10話 守る余発足（後書き）

今回もぐだぐだとお喋りだけで終了。

次回から図書館島編となりますのでご勘弁を。

作中 婚活できないと云つてはいる主人公の上司 桟木水穂のことです。

性格、器量、能力全て良しだが周りの環境から嫁に行けない人。

主人公は素敵な人と家庭を持ちたいと思つてはいるが、理想の人はどんな人か問われると想像できない。容姿のせいで結婚出来ないとなげくことはあっても結婚したいと云つわけでもない。

一応 作者の見解では2・Aは監視をし易くするために集めただけ。

1-1話 最終課題

2003年2月20日 木曜日

「近右衛門」

「これがネギ先生への最終課題じゃ」

しづな先生へと一枚の書類を差し出す。

「拝見いたします」

ネギ君のサポート役のしづな先生が書類を見て顔をしかめた。

「確かに難しいかもしだれんが…」

「いえ、違います。2-Aはすでに最下位から脱出しており、前回の期末試験では15位でしたが？」

なにか仕事をきちんとこなした顔でしづな先生が睨んでくるが、

「おお、やうじゅつたのか」

てっきり2-Aは最下位をばく進していると思いついた。

「はい、例の正木吹雪さんが転入し、彼女が音頭をとつて勉強会を始めてから2-Aは学力が向上しています。」

「ほひ、そうか。吹雪君は学年でどの位の成績なのか

「はい、だいたい10番台の後半あたりでしたね」

「…まあなかなかの成績といったところかの」

あの、頭の回転の速さからもう少し上かと思ったのじゃが。

「いえ、彼女は英語以外の教科はかなり成績が良いのです。一般的な先生方は英語さえ他の教科なみなら5位以内に食い込めると残念がつています」

「むり、それは高畠先生への当たつけかの?」

「…吹雪さんは一般的の先生方にとっては評価が高いですから。彼女が来てから、2・Aが自習中に他のクラスに迷惑をかけることもなくなりました。成績の悪い生徒たちのフォローを始めて彼女たちの成績が向上した事実を知っているので、吹雪さんが一部の先生たちの尻ぬぐいをしているせいで割をくついている様に見えるみたいです」

「やうか、まあ、今回ネギ先生が教鞭をとっているから大丈夫かの」

「そうですね、私の目からみてもネギ先生は判り易い授業をしています。その点は問題ないですね」

「やうか、じゃ、今回の試験はいつするかの」

僕は書類の文字を書き直してしづな先生へと渡した。

〔ネギ〕

しづな先生から手渡された最終課題の書類、開ける前は新しい呪文の習得や魔物の討伐とかの課題を予想したのだけれど実際は『2-Aの期末試験の総合順位を5位以内にする』と書いてあつた。

期末テストまであと2週間足らずだが、時間はまだ十分にある。そう思つて以前の2-Aの成績を確認してみた。はつきり云つて難しいのか易しいのか判断に苦しむ。

以前まで最下位だった2-Aだが2学期の中間テストから順位は急上昇し期末テストではほぼ中間の15位。ただ、全体的に学力が上がつた訳ではなく、最下位近くだつた生徒達が成績をあげたため順位があがつた様だ。

個人の順位で云えば総合3位までを独占しており、更に10位台が2人。100位以内が3人、200位以内が3人、のこりは300位以降とだいぶ偏りがある。

前回の期末テストの結果では平均点を5点上げるだけで5位には届くけど、上位の生徒達にこれ以上成績を上げることは難しいと思う。超鈴音さんに至つては全教科満点であるからこれ以上の点を取ることは不可能だ。前回、前々回のテストで急上昇した生徒も今回も同じよう伸びるのは難しいだろう。順位は平均点できまるのだからここは下位の人たちの平均点を上げることに重点を置くべきだろう。

問題はうちのクラスはあんまり期末テストに向けて勉強していないことだと思う。トップクラスのメンバーは所謂ガリ勉タイプではないので他のクラスと違い机にかじりついている生徒がいない。そのため他のクラスほどの緊迫感がない。

裕奈さんや桜子さんの云う通りエスカレータ式だから今の成績でも

進学には問題はないせいか成績下位の生徒も危機意識が無いらしい。
どうにかして、みんなにやる気をだしてもらわないと。

「今日のHRは大・勉強会にしたいと思います。次の期末テストはもうすぐそこに迫ってきます。」

早速、みんなに提案してみたけど反応は様々だ。いいんぢょさんは賛同してくれたがほとんどの生徒は啞然とした顔をしてる。あれ、なんでだろう？

そのとき桜子さんから提案があった。

「お題は『英単語野球拳』がいいとおもいます」

英単語野球研？賢？　野球を取り入れた勉強法なのかな？なんとなく面白そうだし、ここは生徒の自主性にまかせて…

「じゃあ、それで…

いきましょう、と云う途中で、パンパンといつ手拍子で吹雪さんに話しかけられた。

うひ、吹雪さんは初日の一件以来苦手だよ。特に何をされるわけでもないし、いや、HRでクラスが暴走したときは止めてくれるからありがたい人なんだけど。でも、あれ以来ずっと監視されている様な気がするし。

「ネギ先生は野球拳をこ存じでしょうか？」

「いえ…知りません」

「そうですか。では一度正式な野球拳のやり方をしづな先生にでもお尋ねになられた方が宜しいかと思います。多分10分かからないと思います」

「そ、そうですね。ちょっと訊いてきます」

良かつた。知りもしない勉強法を指導するのか、と怒られると思つたよ。しづな先生は空き時間だから職員室にいるはずだ。急いで職員室に行くと、しづな先生が一ノ宮先生と談笑していた。女性同士、年齢も近いのか一人は仲が好いみたいだ。

「あら、ネギ先生どうかしましたか？」

先にしづな先生が気がついて声をかけてくれた。

「しづな先生、僕に野球拳を教えてくださいー。」

あれ、……なんでふたりとも汚い様なものを見る目つきで僕を睨むのかな？

野球拳に関しては5分とかからず教えてもらつたけど残りの時間いつぱいお説教を受けた。しかも一ノ宮先生との二人がかりで…

「吹雪」

「吹雪つて結構意地悪、いや愛の鞭が厳しいよな」

戻つてこないネギ先生を待つこともなくおののおの血盟をしてこると
じりで千鶴さんがつぶやきました。

「なんですか？人聞きのわるい」

「いや、さつきのネギ先生への一言でもぞ、あのまま野球拳なんか
始めてたら先生の管理責任問題なるから止めるのは判るけど、わざ
わざしづな先生を引っ張り出したのはいささか意地が悪いよな」

「む、失礼な。生徒よりも指導教員のしづな先生からおしかりを受
ける方がネギ先生の体面を保てると思つただけです」

「いや、それにしてもいつこりて戻つてこないだ」

「それならば、そのぶんだけ命拾いをしたと思つて頂ければ幸いな
のですが」

「さすが、私の宿敵。『麻帆良の歩く理論武装』の面目躍如です」

夕映さんが後ろを振り返つて仰有ります。なぜか最近、夕映さんは
私を不俱戴天の天敵と呼ぶ様になりました。

「私も2学期の『読書をしてるつもり』発言にはいささか、かちん
ときたです。しかしおかげで国語は成績が上がつたです」

夕映さんは先の期末試験では国語で満点をとられました。満点の答
案用紙を私にみせていたのはそういう意味があったのですか。満点

でうれしかったのかと思っていましたが、ただ、国語以外の成績は以前とさほど変わりないのが夕映さんらしいのですが。ではもう少しおまじないをかけてみましょつか？

「夕映さんは哲学同好会にはいつおられますよね？」

「…ええ、実は祖父が哲学者だったものでその影響で…」

「話を変えられたことに訝りながらも尊敬しているしゃるお爺さまを弓き合つにだせてこれかうれしそうです。」

「そうですか、では私の意見ですが哲学を語るには論理的な裏打ちがなければそれは出来の悪いポエムでしかありません。その論証を考える論理学は以前は哲学の一分野でしたが数学とは切り離せない関係があります。また自然哲学を語るには数学や、宇宙学を始めとする自然科学の知識が無ければ話になりません。」

また哲学を語ると哲学者が生きた社会、歴史的な背景を知った上で語らなければ片手落ちと云わざるを得ません。

さらに付け加えるなら外国の著作ならば翻訳文でなく原文を読んでみるべきだとは思いませんか？」

私がにこやかに云ひと珍しく、口元を左右せぬながら、

「覚えてるです」

と云ひ残して前を向き一心不乱に勉強を始めました。

「千鶴さんの仰る通りかもしれません」

「だろ」

千鶴さんが満足げに笑いました。

〔ネギ〕

教室に戻つたとたん、授業終了のチャイムが鳴つたので起立・礼をして終つた。結局、僕のしたことは自習をさせただけだ。いいんちよさんはこのクラスは自習になれているから大丈夫と云つてくれたけどなぐさめにはならなかつた。

「あの、吹雪さん」

帰り支度をしていた吹雪さんを僕は捕まえた。

しづな先生からは吹雪さんに礼を云う様に云われているけど正直なつとくいかない。だつて、もう少し云い方があつても好いんじやないかな？そりやあのまま野球拳を始めていたらもつと大変なことになつたのは判つたけど。

「何でしちゃうか？ ネギ先生」

「いえ、先ほどの件でお礼を…」

「お礼されるほどのことはしてはいません。実際、お小言をしづな先生より頂いたみたいですし」

「しかし…」

「では、先生、先ほどの件で正解の行動はどうだったと思ひますか

？」

「え？」

「先生はなぜ、野球拳をしようとしたのでしょうか？なぜ、桜子さんに野球拳がどの様なものがお尋ねにならなかつたのでしょうか？なぜ、他の人に野球拳で好いか意見を聞かなかつたのでしょうか？それについて反省にたつた上でのお礼なら受け取れますか？」

僕はなにも云えず立ち去りました。

僕はなにも反省せず、しづな先生にそつするよう云われたからお礼を云おうとしただけだったから。

吹雪さんはじょじょじょへ僕を見ていたが、お辞儀をして去つていった。

11話 最終課題（後書き）

図書館島編1

主人公は通常は皇家の樹のサポートは受けていないが年上のプライドで本気で勉強にいそしんいる。

宇宙では基礎データは機械で強制的に脳に転写し、思考、思索を重点に行っている（と云う設定）なので暗記物でケアレスミスを出す。英語も同様、ただほかより多いだけ。

あやかが3位 他の勉強会先生役も成績向上

麻帆良の歩く理論武装

このフレーズを使いたいため主人公の中の方は千早に決定
千早の容姿は樹雷に合わないので本来なら色違いの千歳なのだがいまいちピンと来ず優雨か雅楽乃か迷つたあげく優雨に決定

2003年2月24日 月曜日

「ネギ」

僕は今、英語の補習授業をしている。2・P組の…

先日のH・Rの補習がつまらないなかつたので、今度は放課後に補習をしようと考へてみた。前回は誰にも意見を聞かず失敗したから今回はいいんちよさんに先に話を聞いてもらうことにした。きっと賛成してくれると思ったのだけ…

「先生に意見は立派です。私も賛成ですが…」

いいんちよさんの話では2・Kと2・Pが前回、前前回の最下位と次点であり、これに2・Aと2・Dを加えると…

「僕の受け持ちです…」

正確にはタカミチの受け持ちだったクラスは軒並み平均点が低く2・Dもだいたい20位くらいである。2・Aは独自に勉強会を開いて点数を上げてきたが他のクラスはやはり授業日数が少ないため英語に足を引っ張られているらしい。

あれつ2・Aだけはタカミチに見切りをつけたつてこと？

「ですので補習を開くにしても他のクラスを優先すべきではないか

と

常識的に考えればそうだ。教師としてなら遅れているクラスがあるならそこを是正しなければならない、のだけど 今回に限ってはそうも云つていられない。

「で、ですが僕は2・Aの担任ですので」

「ええ、うちの元担任のせいで成績が伸び悩んでいるクラスに申し訳ないと吹雪さんも常々……」

吹雪さんの怒が出た時点で僕は抵抗を諦めた。

職員室に戻ると浮かない顔をしたしづな先生が僕を出迎えた。

「先ほど、正木吹雪さんがきて遅れているクラスの補習授業を頼まれたのけれど」

吹雪さん、僕に何か恨みでもあるのですか？

正確にはしづな先生に吹雪さんは補習を頼んだらしい。

『ネギ先生は麻帆良に来てまだ口が浅いですし、いろいろやることもあるのではないですか？』

と云つたらしい。他の先生方は額面通りに言葉を受け取っていたが僕には、

『教職課程のカリキュラムをきちんと取つてください』

と聞こえた。

どちらにせよ、僕の受け持ちが遅れているのは確かだし、それをしずな先生にまかせて2・Aの補習を行つなんて出来なかつた。

2003年3月3日 月曜日

はあ、結局なにも出来ずに今日まで来てしまつた。試験は木曜日からだからまだ3日があるけれど。2・Aでは先の土日に勉強会をする予定だつたから僕も参加しようとしたけども

『私的な集まりですから試験直前に担任が参加するのは自粛すべきでは?』

と、いいんちよさんに云われてしまつたよ。また吹雪さんが裏で手を引いているのかな?

「はあ、僕は無力だ」

ため息を吐くと

「ネギ先生、どうしたのですか」

優しい声に尋ねられた。

「あ、宮崎さん」

赴任初日に助けた富崎さんはあれ以来僕と積極的に交流してくれる生徒の一人だ。確かに吹雪さんや明日菜さんには魔法がばれてしまつたけど富崎さんを助けたことには悔いはない。

「いえ、折角皆さんの担任になれたのに全然力になれないなと思つただけです」

「そんなことはないです。去年の今頃は英語の試験範囲の半分も履修できていなかつた」とに比べれば十分ましです」

綾瀬夕映さんが云つてくれるけどやつぱりタカラミチ批判？

「でも、折角担任になつたのなら成績が上がつてくれた方がうれしいじゃない」

早乙女ハルナさんが云つてくれるけど、上がるとうれしいんじやなく上がつてくれないと困るんだけど。3人は図書館探検部のメンバーだけど一人足りないな。

「で、図書館島の深部に読めば頭の良くなる本があるんだつさ」

「本当ですか、それ

もし、そんな本があれば、

「見てみたいですね」

ぼそっと綾瀬さんが云いました。

「へえ、夕映がそんなこと云つなんて」

ハルナさんが感心した顔で云います。

「見返したい人がいるです」

「ん? 『歩く理論武装』?」

「！」のまえも手ひどくやられたですか」

「でも夕映、吹雪さんは間違つたことは云つていよいよ」

「別にあの人云つて『』とこ腹を立てていてるわけではないですよ、のどか。むしろ尊敬やあこがれがある故にですね」

「ただ、キャラがかぶつててからねー、夕映」

「あ、あの、その『歩く理論武装』て誰ですか?」

僕が質問するとハルナさんは笑いながら吹雪さんの事だと云いました。確かに綾瀬さんと吹雪さんはいろいろと似ててゐるな。しかし『歩く理論武装』か、ハルナさんが云うには吹雪さんは相手を云い負かすのではなく納得させてしまつといふのが恐ろしいらしい。

「多分、出来のいい参考書の類とは思つのですが…」

「でも、それなら吹雪ちゃんの『傾向と対策』の方が確実に御利益があるんじゃない?」

「傾向と対策？」

「ああ、持つてますよ」

富崎さんからカラー印刷されたテキストを受け取つて僕はびっくりした。これは日本史のテキストだけど要点がきちんと整理されていし試験範囲じゃない前後関係や世界史にも言及している。ただ余白が意外にあるとおもつたけど富崎さんの字で書き込みがしてある。

「吹雪さんがこうには見て、口に出して読んで、思ったことを書き込むことで血肉になるやつです」

「歴史の熊谷先生に見せたらひょっと書きつってた。でも感心もしてたよ」

「これが全教科？」

「はいです。吹雪さんがベースを作つて委員長と超さんが手直します」

ああ、あの勉強会のテキストなのか。

「でも、あるならば見てみたいです。もし吹雪さんの『傾向と対策』を越える参考書があれば」

「じゃあ、探しに行く？」

「行くです」

「とにかくで先生今夜10時、女子寮に集合よ

「え？　え？」

唖然とする僕を尻目に早乙女さんと綾瀬さんは宮崎さんをつれて行つてしまつた。

〔吹雪〕

「どうした事なんですか？」

「いえ、その私にもわざぱり」

ここは刹那さんの部屋で、刹那さんが正座してお辞儀をしている前で私が仁王立ちしている…様にも見えます。ちなみに刹那さんに横には明日菜さんが普通にすわり真名さんはベッドでくつろいでいますね。私が立つてるのはただ部屋に入ってきた直後だからです。

とりあえず、場所代として持参したパンナコッタと紅茶をみなさん配ります。

「試験直前にもなつて、木乃香さんが図書館島へ探検に行くと伺いましたが？」

「そ、そなんです」

刹那さんの話では図書館探検部のメンバーで今日の夜、魔法の頭の良くなる本を探しに行くに付き合つことになつたそうです。しかしこの字面は本当に頭が悪そうですよ。木乃香さん自身は早乙女ハ

ルナさんに誘われたそうです。しかし、試験直前に部活動とはビックリつことでしょう。本来ならばそれを止める立場でしうに、刹那さん。

刹那さんは木乃香さんに勝てないので私が仲に入つて交渉してほしかつたみたいです。

「図書館島とはどの様な場所なのですか？」

「地上部分は普通の図書館ですが、地下はかなり深く50階以上の迷宮であると聞いています。稀観本や魔導書も多いためトラップやゴーレムなど配置して警護しています」

いろいろな意味でめまいを起こしそうです。図書館島の奇天烈ぶりは置いておき、刹那さんの情報のまだ漏れは考えがあつてのことでしょうか？ 多分、素直に問われた事に返答しているだけではないのでしょうか。まあ今は便利なので問題なしとしますけど、あとあと問題になるかも知れません。

「図書館探検部の面々は慣れてはいるかと思いますが、今回は話からすると通常よりも深部を目指す様ですね。図書館探検部の活動の一端ならば木乃香さんを無理に引き留めるのは不自然ですし、刹那さんが監視役として後を付けていくしかありませんか」

「はあ」

「…乗り気ではない様ですね、判りますが。ではビックリしう、学園長に連絡してみては？ 学園長の立場からすれば図書館島への不法侵入を阻止するために何らかの手をついてくれるでしょう。」

「わかりました、学園長に連絡してみます」

刹那さんが携帯で学園長と話したところ、図書館探検部では試験の度に頭の良くなる本のネタを上級生から下級生にふつており、図書館探検部の恒例の行事だから気にするなど云われたそうです。そして、責任を持つから静観してほしいとも云われたそうです。

「あの、刹那さん？ なんで中止の要請を出したのに学園長先生に丸め込まれているの？」

明日菜さんから突っ込みが入りました。

「刹那さんからの中止の要請を断り、そこには干渉されることを嫌がっていますね。少なくとも刹那さんは監視として隠れて同行すべきですね」

とは云え、刹那さんだけではなぜか心配ですね。

いつたん部屋に戻り自分の荷物から使えそうなものとノートパソコンを持って刹那さんの部屋に戻りました。

「これをかけてみてください」

刹那さんに縁なしのサングラスを渡します。

「明日菜さん、照明を落としてもうりますか」

「うん、消すよ」

明日菜さんがスイッチを切ると部屋全体が暗くなります。まだ目がなれていないのはつきりとは見えないはずです。

「あれ、これは」

「赤外線スコープの機能付きです、さらば」

隠し持ったマグライトを点灯します。

「うわ、まぶし」

部屋の照明よりも数倍の発光度を誇るもので。直接マグライトの灯りを見ていない明日菜さんが叫びますが刹那さんは平気ですね。

「対閃光防御付きです。スタングレネードが目の前で閃光しても眼だけは守れます」

部屋の照明を戻し、ノートパソコンを開きアプリを立ち上げます。

「夜中にサングラスもないでしょからレンズの色は透明にしておきます。ズーム機能は慣れないと視界が安定しないので無効。マーカー視覚化は有効」

赤外線ポートから通信で設定の変更を行います。

「驚きました」

普通のメガネになつたサングラスを見てそう仰有いました。

「ちょっと剣那さん、動かないでくださいね」

剣那さんの額にコンタクトレンズ風のガラスの半球を、ほお骨との
間に透明なシールを貼ります。

「では、ここのマイクに向かつてモニターにでる言葉を仰有つてくだ
さい……　はい、次は首だけ右を向いて、左を向いて、はい、正
面に戻して上、下」

これで準備完了です。

「額に付けたのは魚眼レンズで、ほおにはスピーカ、のどにはマイ
クを付けています。そしてこのストラップです」

縦10cm 横2cm 厚みが1mmのプラスチックの板に目、耳、
唇を模したマークが描いてあります。

「ここの目のところを長押しするとマークが光つて、ここのパソコンのモニターに映像ができます」

「うわ、ほんとだ」

「では、剣那さん、ちょっと部屋の外まで出てもうれますか。出た
らこのストラップの耳と唇のマークを光るまで押してください」

「はい」

刹那さんが移動する同時にモニター映像もリアルタイムに切り替わります。あ、モニターに耳と脣のアイコンが点灯しました。

「刹那さん、聞こえますか？」

『あ、聞こえます』

「はい、こちらも刹那さんの声が聞こえます。ちなみスピーカーは骨伝導を利用してるので周りには聞こえません。逆に周囲が騒がしくても明瞭に聞こえる筈です。戻つて良いですよ」

「吹雪、映像がぶれないのは仕掛けがあるのか？」

珍しく真名さんから質問がきました。

「のどにつけたシールはマイクのほかに首の筋肉の動きを検知して、首を振つても常に体の正面を映す様に補正をかけています。あと、音声の方も先ほど刹那さんの声をサンプリングして唾などの嚥下音を拾わない様にして、かつ刹那さんの声に近くなる様に補正をかけています」

サンゴラスもこのシステムもすでにオーバーテクノロジーです。本来は調査時の記録用に持つてきただのです。サンゴラスは私物ですけど。

「吹雪ちゃんていつたい」

「まあ、私もある目的を持って麻帆良に来た調査員です。いまところは麻帆良の実態を見聞する以外のことはいたしておりません。ま

た、木乃香さん、そして明日菜さんの身柄の保護は私自身で決めたことですので出来る限り協力することと、無断で反故にすることを誓います」

「あ、そつなんだ。やっぱり」

え、ばれてました？

「その、学園長先生とやりあつたときなんか、すぐ大人びていて刹那さんみたいな関西呪術協会？ の様な組織から派遣されたエージェントみたいだつたから」

「はあ、実際その通りですから否定できません…て…？」

ふとモニターをのぞいて血の気が引きます。リビングに戻つてくると思っていた刹那さんはいつのまにか違う部屋に移動していました。この内装は、トイレ！ なまじ近くにいるからドアの音がパソコンからでていることに気がつきませんでした。

急いでノートパソコンを閉じます。やっぱり刹那さんを100%信
用するのは危険です。

刹那さんが戻つてみつちりお説教をした後でまた、モニタリングの話になりました。

「EJのシステムを使って私がサポートします。地下に入つたらこれを曲がり角に貼つていってください」

ポストイットを刹那さんに渡します。

「これはポストイット風の電波中継器です。また特殊な波長の光を

だしていますのでそのサングラスを使えば光って見えます。刹那さんに渡したストラップがアンテナの役割をしていますのでなくさないでくださいね。レンズもシールも専用の溶剤でないと簡単にはとれないのでもうかりなくすと恥ずかしい光景が生中継されますし録画もしていきますので」

「うへ

レンズは隠せても音は難しいでしょう。

「怪我や遭難したとき速やかに救助するためのサポートと考えてください。今、6時ですから3時間ほど仮眠をとつてはいかがでしょう。これは睡眠導入剤です。1錠で10分からず眠りにつけますし眠った時点で成分が分解されるので起きられないことはありません」

「すみません。頂きます

「では9時半に又来ます」

いつたん私と明日菜さんは部屋をしました。

夜11時

刹那さんを見送った後、明日菜さんの部屋に移動して刹那さんから送られてくる映像を見ています。

画面には地下3階を行く、木乃香さん、夕映さん、古菲さん、楓さん、そしてネギ先生。のどかさんとハルナさんは地上に残ったようですね。

「なんでネギ先生までいるのかな?」

最後尾をスースーにリュックと木の棒?を背負つたネギ先生が歩いていらっしゃいますね。試験前の生徒になにをさせているのでしょうか?

「刹那さん、今から質問しますが声をだしても氣づかれませんか?声をだせるのなら声で、だめなら田の前でチョキを出してください

『多分大丈夫です。長瀬にもまだ気付かれていなければ』

「では、ネギ先生が同行しているのは存じでしたか?」

『いえ、お嬢様からは聞いていません、学園長も何も云っていませんでした』

「学園側は今回の侵入には気づいていますか?」

『多分。私は避けましたが幾つかの対侵入者向けのトラップに引っかかるつてるので警報は出たはずです』

「わかりました、ではそのまま監視を続行してください」

いつたんこちらのマイクをオフにしてからモーターに注目します。一行はすでに普通のルートを外れ本棚の上を移動しています。

「ねえ、吹雪ちゃん、私はこの学園にあきれるべきなのかな?そ

れともそれを平然と対処するクラスメートにあきれるべきなのがし
ら」

「なるほど楓さんや古菲さんを呼んだのは武闘派だからですね」

モニターには飛んでくる『矢を手でつかみ取る楓さんや倒れてくる本棚を蹴り飛ばす古菲さんが映っていますが2人とも結構な腕前でいらっしゃいますね。明日菜さんがあきれた口調で、私はは感心した口調で感想をもらします。しばらくして一行が休憩に入ったのでこちらも休憩することにしました』

「刹那さん、リコックにお弁当を入れてありますので休憩をしてください。あと、したくなくとも」不淨はすませてください。後で急にしたくなつてもする暇があるかわかりません」

今まで護衛と云う名のストーキングをしていた刹那さんは当たり前のことがもしませんけど。

こちらも刹那さんのお弁当と同じものを食べながら休憩に入りました。

「ねえ、吹雪ちゃん。最近、私おかしいんだよ」

「何ですか、いきなり」

「うん、魔法を知つてから麻帆良のノリになんとかついて行けなくなつたの。図書館島のトラップも変だし、それ以前にあの本棚なんで誰が管理してるのかしら。本なんて読めないじゃない、あれじゃ」

「それはしかたがないですね、手品のタネを見てしまったのと同じなのかも知れません。あるいは魔法を脅威と明日菜さんが無意識に

判定してしまつていいのかも知れません」

「それとね、変な夢も最近見るの。例えば幼い私が砂漠を数人で旅しているの。そのなかにはガトウと呼ばれる渋いオジサマやナギと呼ばれる赤毛の青年がいて、そしてタカミチって少年がいるのよ」

ナギとは最近聞いた名前ですね。…確かにネギ先生のお父さまの名前でしたか。タカミチは高畠先生のお名前ですが明日菜さんが幼い頃に保護者になつているのですから歳が合いませんか?いやいやいや同一人物でない可能性もあります。第一、明日菜さんの夢ですからね。

「それで、その夢をみたあとはどうでしたか?」

「懐かしかつた。すゞく懐かしかつた。いまだそのガトウさんのタバコの臭いは覚えている」

「嗅覚は人間の感覚でも最も原始的な感覚です。そして記憶と密接した感覚と云われています。…明日菜さんが夢で見た光景は実際に過去の記憶かもしませんね」

明日菜さんの過去にネギ先生のお父さまと接触があつた?やはり明日菜さんはもともとあちら側の人間だったのでしょうか?

『刹那です。お嬢さまたちが移動を始めました。追跡を再開します』

刹那さんの声でモニターから聞こえました。

再開した図書館島探検ですがさらに危険度は増しています。なんでしょうあの30m以上もある本棚とは?しかし、ものともせずロープで降下する図書館探検部と楓さん、古華さんそしてネギ先生たち。

図書館探検部の慣れた様子にふと疑問を覚えます。この部活結構危険があると思うのですが刹那さんはご存知だったのでしょうか？

「でも、刹那さんて命綱のなしでよく降りられたよね」

「はい、本棚が足場になつたとしても普通足がすべりでしょ。訓練の賜です」

さらに一行は移動して匍匐前進しなければ移動できないフロアに来てます。巫山戯ているのかここにも本棚と本はあります。しかしあつかいですね天井が低いので音が反響して近づけません。一行が天井の一角から脱出してしばらくしてから刹那さんが辺りを警戒して移動します。

「IJのちやん！」

追跡者が声を上げるなど云いたいところですが私たちもそれどころではなくなりました。

画面に映し出された光景。

2体の身長5・6mはあらうかという石でできた騎士。

それぞれ大槌や大剣を振りかざすその足下に組んずぼぐれつし、あられもない姿をあらわにする女生徒たち。ネギ先生は周りで観戦モードみたいですが。

「なにをなさつているのでしょうか？」

「なんかツイスターゲームっぽいよね」

「……ばかばかしくなりました。刹那さん聞こえますか。あの石つじろを切り倒してネギ先生たちを連れ戻してください」

『そ、その、ちょっと待つてください、あの石像から聞こえてくる声は学園長です。もしかすると学園長になにか考えがあるのかも?』

「ないと思つわ」

「狂人の思考は理解いたしかねます」

『ハズレじゃな フォフオフオ』

モニターからそんな声が聞こえたかと思つたら1体の騎士が大槌を振り下ろしツイスター板を破壊し先生達ごと床の下へ消えていきました。

『1Jのちやーん』

あまりに刹那さんの声が大きいので音声をカットします。

「……まあ、あの学園長が噛んでいるなら命の危険はないでしょう。しかし、このままにするわけにもまいりません。ちょっと私が刹那さんのところまで行つて参ります。明日菜さんはアルバイトがあるのでありますよ?」

「……いま、私に出来ることはなにもない。わかつた吹雪ちやんにまかせる」

「はい、まかせてください」

玄関で靴を履き、見送ってくれた明日菜さんにお辞儀をしたあと、マスターキーを懐から取り出し空間移動を開始します。

12話 図書館探検部（後書き）

カリキュラムにこだわるのは英会話スクールの講師ではないから英語が喋れても教師の仕事はそれだけではないのであとあと大変になるのではないかと

描写はないが普通複数クラスの教科担任にはなるものではないかと
考え方設定追加

古菲、楓、まき絵の学力向上は超のちからが大主人公だけのちからでなく各人の努力の結果の成績向上

2011/04/07 文章変更

13話 ネイシナー・刹那（前書き）

今回もアンチ色が強いです。

学園長の行為は脚色はありますが全くのねつ造でもないとおもって書いております。

ネギ先生、学園長のファンの方はお戻りを。

13話 ネイシナー・刹那

2003年3月4日 火曜日 午前3時

「吹雪」

「吹雪さん？」

刹那さんにお渡してあるストラップを目標に空間移動しましたので刹那さんのすぐわきに出ました。刹那さんは私が何ができるか話していないので驚いておられますね。

「質問はあとで、木乃香さんたちはそこ」の穴から落ちたのですね？」

「はい」

覗き込みますが底が見えません。では降りるしかないですね。
マスター・キーの一つ『千早』を握り佐久夜から力を受け取ります。
背中には佐久夜の力が3対6枚の羽根状に具象化しているはずです。

「さて、私は下まで降りますが刹那さんも同行されますか？」

呆然と私を見つめる刹那さんでしたが、私の言葉に自分を取り戻したようです。

「は、はい、一緒に行かせてください」

「それでは」

刹那さんの手を握ると力場を発生させて穴の下へと移動します。羽根の実際の役割は各種センサーです。同時に光学迷彩も発生させたので光学系センサーには捉えられないでしょう。魔法にも効けば好いのですが。

しかし結構深いですね。いさか不安になります。

100mほど降下するとやっと底が見えてきました。

「なんなんでしょう？」
「ほんせ」

地下とはどうてい思えない空間が広がっていますが、湖の中の本棚がここが図書館島であることを示しています。なかには洋館らしき建物が建っていますからここも管理されているのでしょうか？光源がなにかわかりませんが十分な光量はあり樹木が柱のごとく天井を支えている様です。いやむしろ巨大な樹のなかの様な……あちらこちらに地面に倒れている生徒の姿が見えました。いまはそちらに集中しましょう。

「皆さん、気を失っている様ですが外傷はありませんね。やはりにか魔法が使われたのでしょうか？」

「そうですね」

刹那さんも落ち着きを取り戻した様です。

「あ、木乃香さんです」

近づいて観察してみますが外傷は無い様です。

「気を失っていると云うよりも眠っているみたいですね」

「やはり、学園長が魔法でなにかした様です」

「さて、どうしましようか？眠ったまま全員を連れて帰れば問題が少ないのでですが楓さんだけ見あたりません、彼女だけ意識を持つて辺りを警戒している可能性が高いと思います」

「長瀬も一般人とは思えませんが不用意に魔法をばらすことは避けたいです」

それをこの時点で云うのも何だかなと云つた感じですが建前と云うのも大事なんです。

「ではいったん戻りましょうか。一応、学園長が安全を保証しています。かなり不安は残りますが今ここで選べる選択肢はこれだけではないでしょうか」

「いや、私はここでお嬢さまの監視を」

「不許可です。刹那さんには上でやつて頂きたいことがあります」

例のストラップを刹那さんから返してもらい、それを木乃香さんのブレザーの胸ポケットに入れます。

「発信器にもなっていますので、先ほどの様にこれを目標に移動するのも可能です」

そして、そのまま明日菜さんの部屋へと帰還します。

「ただいま！吹雪ちゃん、刹那さん」

戻つて刹那さんと打ち合わせをしていると明日菜さんが戻られました。

「ほんとに、」のむ無事だよね？」

「はい、それは確認しております」

「よかつた」

一応メールはしていましたけれど、改めて確認し安堵されます。安堵の表情を浮かべる明日菜さんのとなりで刹那さんが険しい顔を浮かべています。

「吹雪さん、あなたはいつたい何者ですか？ 先ほどのは魔法ではないのですか？」

まあ、云われると思いました。明日菜さんにも見せてしましたし。

「私が魔法使いか？」と云う問い合わせに對しては失礼にはなりますが魔法とはいつたい何か？ と云ひ、問い合わせて返させて頂きます。『高度に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない』とアーサー・C・クラークと仰有る作家の言葉がありますが、刹那さんの仰有る魔法とはいつたい如何なるものなのでしょうか？ 私はネギ先生たちが使う魔法については原理はさっぱり理解しておりませんが科学とは違つたものと推察しております。

私が先ほど使つたものは云つてみれば『物理法則を自分の好い様に

書き換える』のですが、それが刹那さんの仰有る魔法と同一かと問われても返事はいたしかねます」

「吹雪ちやん、刹那さんを煙に巻いているでしょ？」

「なんの」「いや」

「でも、なんかす」「こと聞いた。物理法則を書き換える？ もしかして光の速度を超えたり、時間を遡つたりもできると」「うう」と。

以前の明日菜さんなら聞き流しておられたでしょうに、刹那さんの方はポカんとした顔をしています。「これは明日菜さんの成長を喜びましょ」。

「因果律の崩壊と同時に世界が消滅する可能性が高いのでやりませんが、時間移動は可能です。光の方は普通に超えられますね」

実際に例を挙げられたおかげか刹那さんにもようやく理解してもらえた様です。

「そこまで…」

「まあ、私のことは好いでですから、木乃香さんの対策に移ります」

パソコンを操作して先ほどの映像からいくつかのシーンを静止画にして刹那さんの携帯に送ります。主にツイスターゲームと石像のところですが。

「その画像を木乃香さんのお父さまへメールしていください。それで放課後までには学園長に面談出来るように手筈を整えましょう。お

一方とも寝不足でしそうからお休みになつてください。私が責任を持つてお起します」

ご自分の部屋に戻られる刹那さんと一緒に部屋でした。

約2時間後

お貸し頂いた合鍵を使い、明日菜さんの部屋に入り用意した蒸しタオルを明日菜さんの顔にのせます。

「あつしー」

効果観面ですね。

「おはようございます。明日菜さん、早速ですが着替えて頂けない」と遅刻です

ギリギリまで起しきれなかつたので本当に危ないです。 着替えを手伝いながら話します。

「刹那さんは先に行つてもらつています。これはサンディイッチです、車内でもつまんでください」

「う、ちやんありがとー」

そのまま一緒に登校しましたが明日菜さんって足が速いのですね、ギリギリかと思った電車は一便早いものに乗れましたので明日菜さんの朝食は教室に着いてからとれそうです。ですがにこの時間帯での社内飲食は無理でした。

教室に着くとあやかさんとハルナさん、のどかさんが騒いでいました。むろん図書館島の件です。

「どうしましょ、吹雪さん、ネギ先生が」

本来冷静なあやかさんが取り乱しているので話が進まないようですね。

「一応、明日菜さんから話は伺っております。木乃香さんたちが図書館島へ部活で探検に出かけたきり戻つてこないと云つたりでしたか？」

ハルナさんの説明でネギ先生を含めた5人が戻つてきていないと云う説明を受けます。

「まず、あやかさん、しづな先生に報告してください。ハルナさんはあやかさんと一緒に行つて詳しい説明をしてください。ついでに今日の連絡事項をしづな先生から聞いておいてください」

「は、はい」

あやかさんがはじかれたように教室から出て行きハルナさんもそれを追つていきます。

「なんだ、ネギ先生たち遭難したのか」

席に着くと千鶴さんが話しかけてきました。

「はい、どうやらそうみたいですね。昨晩は木乃香さんが戻られないでの結局徹夜でした」

千鶴さんは木乃香さんが図書館探検部の用事で出かけるため明日菜さんと刹那さんの勉強を代わりに見ると云っていました。

「無事であれば好いのですが」

〔ネギ〕

気がついたら砂浜で横になっていた。さつきまで図書館島の地下にいたはずなのに。ここも図書館島の地下なのだろうか？ 空こそ見えないが生い茂った木の間から光が差している。

長瀬さんは気を失わずにすんだようですが、と出口を探していくくれたけど見つからないと云っている。樹の生い茂ったところはかなりのジャングルらしく迂闊には入れそうにないらしい。みんなが気がついてから手分けして探したけどやはり出口は見つからなかつた。

探索の途中 食料も見つかり、気温も地下のせいなのか温暖であるので閉じこめられたこと以外には問題はない。携帯電話の使用はできないけど、地上に残った高崎さんと早乙女さんが搜索隊を呼んでくれるはず。しかし、期末テストは明後日だからそれまでにもどりたい。いやとなつたら僕が杖でとんでも出口を探せば好い。

夕映さんはここが地底図書室だと云っているけどその名の通りあちこちに本棚があり、なかには中学2年用の参考書も混ざっていた。搜索隊が来るまで勉強して待つことにしよう。

〔吹雪〕

職員室から戻られたあやかさんの話では『とりあえずこれ以上騒がずにおとなしくしていろ』と『云つ』ことでした。さて、どの様な対応をとられるのでしょうか？

「でも、心配です、吹雪さん。しづな先生は心配するなの一張りで具体的には何も云つてくれないので」

確かに説得力が欠けますね、それでは。

「もし、放課後になつても安否が確認出来なければPTAに連絡すると云うのはいかがでしょう。PTAからの問い合わせならば具体的な進捗状況も学園側が説明をなさるでしょうから。むろん警察や消防に捜索依頼を出すことも可能でしょう」

「ああ、その手がありましたわ。幸い母がPTA役員です、すぐに連絡しますわ」

「いえ、今はやめてください。PTAを巻き込むと問題が大きくなります。特にネギ先生の監督責任については最悪、免職まで考えられますのでうかつに騒がない方が好いでしき」

あやかさんはどちらを優先するか悩んだあげく私の意見を受け入れ放課後に学園長に状況の再確認をすると宣言し、クラスもそれを受け入れ状況はいつたん静まりました。これで放課後までは問題は起きないでしき。

4時限目の終了と同時に刹那さんが教室の外へと出て行きます。そ

れを見送つてから千雨さんに用事があると断つてから鞄をもつて教室からです。空き教室に潜り込んでから鞄からノートパソコンを取り出します。

「あ、いたいた」

明日菜さんが入ってきました。

「で、いつたい何をするの?」

「刹那さんから学園長に早急に木乃香さんたちを連れ戻す様に要求します」

ノートパソコンのモニターには昨日と同じく刹那さんからの映像が届いています。

しばらくして職員室のしづな先生が映し出されます。

『しづな先生、ネギ先生達の件で学園長を交えてご相談したいことが』

『それは、こちらで対応する』

『これは生徒の桜咲刹那ではなく、近衛木乃香の護衛役の桜咲刹那からの要求です』

一応小声ですがきつぱりと云ふります。しづな先生はちょっと逡巡したようですが了解してつっこみなさいといつて立ち上がりました。

「これって、吹雪ちゃんの入れ知恵でしょ。刹那さんこんな行動で

「さなたそうだし」

確かにそうですね。

さて、刹那さんが学園長室に移動しましたがこれからが本番ですよ。

〔刹那〕

吹雪さんと相談した結果学園長に直談判することとなりました。一応吹雪さんから直接指示がもらえますが足がすくみます。

「昨日、学園長に電話をしたとき問題ないと聞きましたがお嬢さまは朝になつても戻つてきていません。これで問題ないとは到底思えません。また、クラスメイトの話ではネギ先生が同行していると云う」とでしたがなぜ電話したときに教えて頂けなかつたのでしょうか? まさか云いそびれたとか云いませんね?」

強気で行けと指示されましたが、正直胃が痛いです。お皿はとつてませんが食欲なんかありません。

「つむ、いや、ネギ先生が一緒だとはあの時点では知らなんだでの」

『写真とボイスレコーダーを投入してください』

吹雪さんの声が聞こえますけど本当に周囲には聞こえていないんでしょうか。とりあえず、吹雪さんから指示通りに学園長の机の上に吹雪さんからもひつた昨日の写真を並べます。

『ハズレじゃな フォフオフオ』

ボイスレコーダーのスイッチを押すと昨日の石像の声が再生されます。

『木乃香さんの護衛として後をつけたが学園長の指示は守り静観していた。けれど学園長の妨害で木乃香さんは行方不明です。今回の学園長の行動には抗議をさせて頂きます』

えっと、同じ内容を自分の言葉で云うんでしたよね？

「…お嬢さまの護衛として監視をしていましたが学園長の指示通り手出しおしませんでした。けれど学園長の妨害でお嬢さまは行方不明になってしまいした。いまさらですが今回の学園長の行動には抗議をさせて頂きます」

〔近右衛門〕

ネギ君の修行の一環として少数の生徒と共に図書館島の最深部に閉じこめることに成功したがそれからがいがん。

朝はしづな先生から自分にだまつてネギ先生たちを図書館に閉じこめたことに苦情がきたが毎には刹那君から苦情がきておる。できればネギ君には今日と明日は地下で生徒たちを守つてリーダーシップをとつてもういたいんじやが。

「あの石像は一体どうやって動いているんですか？ お嬢さまには魔法を近づけさせないとこちらの長からも先日 再度の要請があつ

たはずです。 そしていつたい地下でこんないかがわしい恰好をさせられて何の得がお嬢さまにあるのでしょうか？」

ツイスターゲームの写真を刹那君は儂ではなくしづな先生に見せながら云つ。 しづな先生の目も儂に批判的じやのう。

「これは実はネギ先生の修行の一環でな、ネギ君の指導力を高めるためにじやな」

「お嬢さまには関係ありません。 また、そのネギ先生ですが委員長が心配して、放課後になつても安否が不明なら P T A を通じて警察に捜索願いを出すと云つています。 大事になればお嬢さまにも傷がつきます。 男性教員と無断外泊をしたといううわさが流れれば事実なだけに破滅的です。 早急に全員を解放してください」

2 - A の委員長は雪広あやかじやな、あの母親は役員の一人じやつたな。 まづいのう、 P T A も警察もじや。 特に雪広は大口の寄付者だし方々に顔が利く。 ひつ、 なにかうまい言い訳がないかのう。

「しかたありません……」

儂が黙つて考へている刹那君が先に折れてくれた？ と思つたが懐から携帯電話を取り出した。

「申し訳ありません、 長、 お願いします」

『 いえ、 刹那君、 君にこんなことまでさせないひつを申し訳ない』

この声は、 婦殿？

刹那君が持つた携帯電話から婦殿の声が聞こえると云つことは今ま

での会話をずっと聞かれていたのか？

『まずは、近衛木乃香の父兄として早急に行方不明の生徒の搜索を要求します』

もし、これを蹴れば関西呪術協会の長としての要請か。

「わかった、早急に迎えを送ろう。これでええじゃん」

「いいえ」

刹那君が反対の意見をだした。まだなにがあるのかい。

「今回の件でお嬢さまを含む全員が無断外泊、無断欠席、図書館島への不法侵入等の違反をしています。そしてクラスメイトや特にルームメイトには昨日から心配をかけまくっています。長やお嬢さまには申し訳ないのですがそれ相応の罰を受けて頂くの筋だと思います。むろん私も同罪ですが」

『いえ、刹那君、その言葉木乃香を想つてのことだとわかります。わたしもあとで説教のひとつでもしましょう』

「わかつたわい、生徒たちには試験後の休み中は奉仕活動に参加。ネギ先生には期末書提出と減俸、図書館探検部は休み明け一週間の活動停止、儂も今月の給料の半分を返納じや』

もう、やけくそじやわい。

〔ネギ〕

意外にいけるかもしないと思った矢先だった。

このかさんはともかく古菲さん、綾瀬さん、長瀬さんの3人は最近成績は上向いているが順位としてはまだ400番台だからここで一日中勉強させられたら成績がもつと伸びるはずと思ったのだけどお昼すぎにしづな先生が突然現れすべてが終わった。

しづな先生に案内され滝の裏の非常口から螺旋階段、エレベータで地上に戻った僕らはまずしづな先生からお説教を受けた。それぞれ罰則を云い渡され、僕にはまた始末書が待っていた。先生になつてもう2枚目だよ。しかも給料が一部カット、先月の給料は明日菜さんの服の弁償でほとんどしまつたし散々だよ。

でも本当に堪えたのは全員で教室に戻ったときだつた。いいんちよさんや宮崎さんが泣いているを見て自分たちがどれだけ迷惑をかけたのか思い知られた。

石像や最深部については立体映像を交えたものと説明を受けた。認識阻害の術もあるのでみんな納得してくれたようだ。

結局次の日も始末書作成のため何も出来ず期末テストを迎えたが学期末試験で2・Aは堂々と5位にランクアップしていた……

13話 ネゴシエーター刹那（後書き）

アンチとはいってあるが出来ればフォローしたいのだが、学園長、詠春義親子は組織人としていろいろ欠けていると思う。詠春も後に攻撃対象に？

緊急事態かもしれないのに主人公は力を使用しました。
ばれないだろうと思つてはいますが万が一の場合は別な方法を考え
るつもりです。

主人公の能力は独自設定です。これもあまりつっこまないでください。
次回 一回休み的な話で、その次から桜通りの吸血鬼編です。

14話 家庭訪問

2003年3月10日 月曜日

〔吹雪〕

ネギ先生は正式に麻帆良の教員になられたそうです。それは好いのですがなぜ今後もううちのクラスの担任なのでしょうか？別にネギ先生では嫌だと云うわけでもありませんが、小中高一貫教育を謳っているとはいえ新任の教師が最終学年の担任とは荷が勝ちすぎるのではないのでしょうか？10歳の少年が仕事に明け暮れると云うのもいささか不憫です。じゃあ高畠先生にする？と云われたら丁寧に辞退させて頂きますが。

「家庭訪問？」

「はい」

寮生活で家庭もあったものではないでしょう。ネギ先生の言い分では普段あまり喋ったことのない生徒を中心に寮の部屋に訪問して話をしたいそうです。女子寮でと云つてはいささかアレですが口ヒヨニケーションをとるひとする態度は評価できるでしょうか。

「それで、今からですか？ネギ先生」

「すみません」

千爾さんが怒るのはもっとともですね。女の子の部屋にいきなり上がらせひなんてエチケットに反します。まあ、つちは見られて困るのではありませんが…いや、かなりありますが厳重に隠していますのでどなたがいつ来られても大丈夫です。

〔ネギ〕

最終課題は結局なにも出来ないうちに終了してしまった。合格と言う形で。努力はしたつもりだけど、僕のちからが『2・Aの期末試験の総合順位を5位以内にする』という課題に貢献していうのか未知数だ。正直、僕が何もしなくても2・Aは5位になつたと思う。学園長にはそのことを云つてみたけど運も実力の内と云われてしまい、そのままだった。

家庭訪問と云うのも教師として自分に何が出来るかと考えてみての結果だつた。四月から2・Aは3・Aとなり来年中学を卒業する。おそらくみんな高等部へ進学するのだろうけれど、なかには違う生徒がいるかもしれない。来年度の3年の担任はみな今年度からのよこすべりだ。僕も一応そうだけど、2月に赴任したばかりだから実際にまだ一月しか付き合いがない。2・Aの生徒はフレンドリーな人が多くよく話しかけてくれるけど逆に云えば僕から話しかける機会が少ないと云うことだ。

3年になつたらいろいろ忙しいので今年度中に終われる様に今日から始めることにした。

長谷川千爾さんと正木吹雪さんは僕があまり話をする機会のない生徒たちのなかの一人だ。

吹雪さんは赴任初日に魔法使いであることがばれて以来、距離を置かれている様な気がするし、長谷川さんは朝倉さんの話では吹雪さん以外の生徒とはあまり親しく付き合つことはないらしい。

「押しかけるよう形になつてすみません」

「そうですね、今回はかなり急でしたのでこちらも何も用意できていません」

「いえ、別にお構いなく」

もひ、紅茶を出されているし。

「いえ、そう云ふ意味ではありません。先生に何を相談すべきか、と云ふことです。例えば進路とか」

あれ、またやつちやた?

そうだよね。突然、進路はどうこにしますかと聞かれても困るよね。

「まあ、具体的でなくて結構です。進学かそれ以外かだけでも」

「私は高等部へ進学です」

「私もそつなりますでしょうか」

二人とも進学と。

「学園や寮生活はいかがですか？ なにか不便なことや困ったことはありますか？」

「特にはない」です

「私もそうですね。いえ、ありますか」

よかつた、何があるんだ。

「相坂をよせんば」存じですかね?」

「は、はい、もちろん」

出席番号1番 相坂をよせん。ずっと欠席しているので一度も会つたことはないけど。

「では、さよせんの」容態はいかがなのでしょうか?」

「え? なんでそんなことを」

「いや、相坂さんは一応この部屋の住人なんですが」

本当ですか千雨さん。あれ、でもここは一人部屋?

「すいません、僕は一人が寮で同じ部屋だと聞いていたけど相坂さんまで同じ部屋だとは知りませんでした」

「別に千雨さんも責めているわけではありませんよ。事実、寮は一人部屋が圧倒的に多いのですし、この部屋も一人部屋ですが名田上3人で使用しているわけですから」

「そうですか。相坂さんですが僕も何で休んでいるのか知りません」

「以前、あやかさんに伺つたところ、体が弱いせいで治療中とは聞いております。ネギ先生も一度お見舞いに行かれた方が宜しいのではないかでしょうか」

「はい、そうします」

なにか、順番ちがうんじゃないの？ と問い合わせられている気分だよ。長期欠席の子がいるならその子のお見舞いに行くのが筋だよね。訊かなかつた僕もわるいけど申し送りしてくれても良かつたんじやないの、タカミチ？

そのあと、雑談で過ごしたけどもグダグダだった。結論から云えばさつき吹雪さんが云つた通りで僕自身も何を話したら良いのかわからなかつた。でも、済んでしまつたことはしかたがない、明日以降の家庭訪問では失敗しないように話す内容を決めておこう。

14話 家庭訪問（後書き）

当人にはその気がないのだがネギに会つとボディーブローを連発する主人公。

二日目以降は逆にうちに来い、うちに来いと引っ張りまわされエヴァまで回れず。

初日の失敗から二日目以降は無難に面談できた。
原作の千雨の部屋訪問にあたる話。

ネギの内面もある程度成長か？

15話 桜通りの…

2003年4月8日 火曜日

〔吹雪〕

新学期です。春休み中に誕生日を迎えるました。65歳の…早くこの微妙な年齢域からお祝いをしたいものです。

春休み中は結構忙しかつたりしました。

中間報告を瀬戸さまに行い、本格的な調査を行つたためいくつかの装備を受領し講習を受けました。

私の船、佐久夜も麻帆良の上空の静止軌道上に乗せ本格的に調査体制にはいったため艦橋要員も6名配置されました。なかでも副長と射撃管制官に士官学校同期が入ってくれました。彼女達はとくに仲が好い二人なので私も安心して艦を任せられます。

そんなこんなで麻帆良に戻ったのは昨日でした。

それでも千雨さんや明日菜さんたちが誕生日パーティーを開いてくれました。

「吹雪ちゃんが私たちのなかでもっともお姉さんなのね。見た目はともかく、納得出来るわ」

明日菜さんに云われました。まあ、私がこのクラスで一番年上のは朝日が東から昇るがごとく当たり前ですけど。

新学期と云つても教室は同じですし、担任も同じです。しかし今日

は顔ぶれがちょっと違います。まき絵さんが欠席ですか、めずらしいですね。それと隣の席のエヴァンジョリンさんが今日はやる気?を出しているのか熱い視線をネギ先生に送っています。

始業式もそこに身体測定です。

今現在、体の一部份は下から1／3あたりにいますが、来年辺り最後尾にいてもおかしくはありません。だいたいトップ集団はいつかい何なのでしょうか? 年齢詐称はあなた方ではないですかと、問い合わせたい気持ちになります。

「まつ黒なボロ布につつまれた 血まみれの吸血鬼が」

美砂さんが怪談で鳴滝姉妹やのどかさんを怖がらせていますが吸血鬼ですか? もしかして潜入時の偽装につかえるでしょうか?

途中から吸血鬼から吸血生物に変わっていますが.....以前別惑星で出会ったヤツに似ていますね。明日菜さんがそんなのいるわけないと否定しますが珍しくエヴァンジョリンさんが明日菜さんをからかいります。そんな折 突然、

「先生!、大変や、まき絵が、まき絵が」

教室の外から人の走る足音とともに亜子さんの声が聞こえてきました。

『先生』?

注意する間もなく誰かが教室のドアが開けると、やはりネギ先生がいました。しかし、なぜ身体検査中の教室の前でスタンバッティングのでしょうか、ネギ先生は。まだ笑って許される年齢ですがそのまま成長されたら痛い目にあうでしょう。ネギ先生に男性を感じた瞬間から態度が180度変わる方も出るかも知れません。

ネギ先生は陽気で気さくな方ですが、突然部屋に押しかけるなど他人のことに考慮がかかる行為が見受けられます。……考えてみればネギ先生はまだ10歳。この年頃の少年なら土足で他人の気持ちに踏み込んだり踏み込まれたりしながら他人との「ミニミニケーション」の仕方を学んでいる頃です。10歳で教職に就かれるほどの学力を得るには才能以外にも寝る間や遊ぶ間を惜しんで勉強なさったのでしょうか。そう考えれば納得できますが周りが大人ではそう云つた學習は難しいですね。大人は本音を隠しますし。……そのための担任?

わざわざ魔法使いのネギ先生を担任にするなどリスク一だと思つていましたがそれなら腑に落ちます。ネギ先生の精神年齢からすれば同年代とはうち解けにくそうですし。それが事実だとした場合、今後いつたいどうなるのでしょうか?今はプラスになつてているみたいですが。

学園ドラマで新任教師が生徒に『一緒に成長していく』と云つシンを見たことはありますかそれを文字通り実践されても……ねえ一応、みんなで保健室で眠つているまき絵さんをお見舞いしましたがただ眠つてているだけの様ですね。

「はい、では第一回 明日菜さんを想う会を始めます」

「ううう、『めんなさい』

夜、刹那さんの部屋をお借りして明日菜さんから相談を受けています。

なんと云つて明日菜さんの話を要約するといつです。

図書館探検部の4人と一緒に下校途中でハルナさんのお買い物に付きましたにしてはいたがのどかさんだけが用事があるので先に帰つた。

のどかさんと別れたあと、のどかさんが向かつたさき 桜通りで大きな爆発音が聞こえたのでいそいで木乃香さんと向かうと裸の のどかさんを抱きかかるネギ先生がいた。

煙の中に人影が見えてそれをネギ先生が追いかけ、明日菜さんがさらにもそれを追いかけていった。

しばらくしてネギ先生を建物の屋根の上に見つけたので、屋根につたらエヴァンジエリンさんと茶々丸さんがネギ先生をいじめつたので蹴り倒した。

エヴァンジエリンさんと茶々丸さんは屋根から飛び降り、ネギ先生は杖にまたがつて飛んで逃げた。

「まずは明日菜さんですね。なにをやつかい」と匕首をつっこんでいるのですか？ ネギ先生には氣をつけようといひておきましたの」「

「「」みんなさい。なんとなく夢中で」

正座から深くお辞儀をします。

「次に刹那さん」

「え？ 私ですか？」

隣で人「」とみたいな顔をしていましたがあなたにも云いたい「」とはありますよ。

「聞けば、木乃香さんは氣づいていないようですが、のどかさんを襲つた犯人と木乃香さんは「」く近距離にいたことになります。そのとき刹那さんは「」におりました？」

「部活です……」

「まだ、剣道部をやつていたのですか…… わざわざと退部して図書館探検部に移籍しては？」

「ええ？ そんな！ あそこは本も読むんですよ」

……なぜ、刹那さんが図書館探検部に入らないのか判りました。

「まあ、好いでしょ？」

あえて今まで訊きませんでしたがエヴァンジョンさんも茶々丸さんも魔法を「」存知だそうですが詳しい話を教えていただけますか

クラスメイトの個人情報を一方的に引き出すのはアンフェアと思いまして今まで自重していましたが今回はそもそも云つておられませ

ん。

「詳しい話は知りませんが、エヴァンジエリンさんは闇の福音の一
つ名がある600歳の吸血鬼です。昔は賞金をかけられていたそう
ですが、今は学園の警備の一人です」

吸血鬼を警備員として雇っている？ 麻帆良学園のシステムとは何
と複雑怪奇なのでしょう。 あるいは全ての怪物を平等に扱ってい
るのでしょうか？ 茶々丸さんは人造人間ですから狼男もいる可
能性もあります。 まあ、後でその辺も詳しく調べましょ。 しかし
600歳ですか。

「やうなると、ネギ先生がのどかさんを襲つてそれをエヴァンジエ
リンさんが捕らえようとしたと云つ見方もできますね」

まあ、それはないとは思いますが。

「吸血鬼と云えば、美砂の云つていた桜通りの吸血鬼の話つてどいつ
なの？」

「去年から満月の夜に襲われる生徒はちらほらいるとは魔法生徒で
もつわさになつていましたが、学園側からは特ににはなにも」

「エヴァンジエリンさんが学園に反旗を翻して生徒たちを襲いネギ
先生がそれ阻止した。と云うのがもつとも分かり易い話の筋ですが
去年から吸血鬼の話があるところがネックでしちゃうか」

「そうですね、私も桜通りの話が出るたびエヴァンジエリンさんを
連想していましたが学園側でも特に何もなかつたので单なる偶然だ
と思つたのですが」

「いや、刹那さん、そこはけやんと確認しようよ」

「基本、善人な刹那さんですから。とにかく、

「クラスメイトから一人も犠牲者が出ておりますが私たちは警察ではありません。ここには学園長に連絡をとり早急に対処してもらひべきでしよう。刹那さん、学園長に連絡をお願いします」

「えと、なんと説きましようか?」

「そうですね、明日菜さんも のどかさんが襲われている現場は見ていないのでエヴァンジョンソンさんが犯人だとは限定できませんしそれでは、木乃香さんが裸の のどかさんを抱きかかえいまにもいたずらじようかと云うネギ先生を目撃してショックを受けているがどの様に説明をすれば好いか、ではいかがでしょうか?」

「吹雪ちゃん、ネギ先生についてみでもあるの?」

「まさか。ただ、学園長に本気で捜査をして頂きたいだけですよ。去年から被害がでているのに注意を呼びかけないなんて怠慢と云わざるをえません。まあ、桜通りの吸血鬼ぽいものに女生徒が襲われネギ先生が追いかけていった、ついでに木乃香さんもそれを目撃したで好いでしよう」

「こちらも本業に着手したいのあまり関わりたくないと言つ事情もありますが。

「わかりました。…ひひ、最近学園長が冷たい目で見るんですが」

泣き言を漏りしながら刹那さんは電話をかけました。

「学園長、ネギ先生の」とお話をあるのですが

「ネギ先生に話を聞くと云っていました」

「あまり、積極的には云えませんね。いつそネギ先生が女生徒たちを襲つているというわざでもたてましょつか」

「さすがにそれはまずいんじゃない。実際、本屋ちゃんも被害にあつていいんだし」

さすがに大人げないです。

のどかさんは木乃香さんが寮に運んだそうですが、木乃香さん共々で不思議がついています。が騒ぎにはなつていません。

「変に大騒ぎになるよりは好いけど、このかも本屋ちゃんあまり気にしていないのは、やっぱ魔法のせいなの? 刹那さん」

「はい、結果内はそういうことをあまり問題視しない様になります」

「なにかすつきりしなわね」

本当に悪影響はないのでしょうか?

「明日、教室で全員が顔を合わせるわけですし、様子を見てから対策を考えましょうか。もしかすると、すでに決着がついているかも

しません「

もちろん、決着なんてついていませんでした。

1-6話 ハンマー秒のたまご

2003年4月9日 水曜日

〔吹雪〕

当たり付きアイス程度の期待値でしたが外れたら外れたでがつかりはするものです。

今日のネギ先生はH.Rに遅刻してきて、蒼い顔をしながら授業をしていますし、エヴァンジョンソンさんはサボリです。茶々丸さんが教えてくれました。

問題が解決していないのはあきらかです。

「…パートナーを選ぶとして10歳の年下の男の子なんてイヤですよねー」

身の入っていない授業を行うと思えば意味不明の発言にクラスが騒然とします。

おそらく昨日エヴァンジョンソンさんと茶々丸さんの一人がかりでぼこぼこにされたので応援がほしいこと云つたところでしょうか？しかし、なぜ生徒に応援を頼もうとするのでしょうか？

ネギ先生は授業終了と共にふらふらとでていきましたが、残された生徒たちは今の発言についてお喋りをしています。普通に考えればパートナー＝伴侶でしょつか。

放課後、明日菜さんと歩いている途中にエヴァンジエリンさんと遭遇しました。

ネギ先生を助けるためとはいっても暴力をふるつた明日菜さんは身構えますがエヴァンジエリンさんは特に気負つた風でもなく話しかけてきました。

「昨日はどうも、神楽坂明日菜、そしてここには正木吹雪」

茶々丸さんは声なく一礼してきます。

「ここにちは　エヴァンジエリンさん。率直に記いますが桜通りの吸血鬼はあなたですか？」

「ああ、そうだ。富崎のじかや佐々木まき絵を襲ったのは私ぞ」

「なんで、そんなことするのよ」

「それは、私が吸血鬼だからだよ。神楽坂明日菜。人が牛や鳥を食べるが如く、吸血鬼は人間から血を吸う。ごく当たり前のことだ」

「さて、それはどうでしようか。刹那さんのお話では桜通りの吸血鬼は昨年からの出没し始めたそうですし、満月以外の日には活動しておりません。つまり少なくとも血を吸わなければ命にかかる問題ではなさそうです。趣味や嗜好で吸血をなさいているとしても同様になぜ最近始めたか疑問はそのままです」

「確かに口は回りそうだな正木吹雪。確かに最近になつてある目的のため吸血をし始めた。それが何なのか教えてやる義理はない」

「いえ、別に教えて頂かなくとも結構です。おそらく学園長から何らかの処分が下されるのではないでしょ？」

「ふん、じじいが動くわけ無い。ぼーやが来ること教えたのはじじいだからな」

じじいは学園長でしょうね。ぼーやとはネギ先生ですか。

「エヴァンジエリンさんはネギ先生を襲う準備として桜通りで吸血行為を行っていた。しかし、なぜネギ先生を……ああ、確かにネギ先生のお父さんは英雄と呼ばれた方らしいですね。もしかして以前になにかあったと云うことですか」

「…察しが良いな」

「ネギ先生への直接の「うちみはないが確か…ナギさんの代わり、つまりはハツ当たり」と云うことですね。更にはそのために無関係な女性生徒を襲うとはまったく下衆な行いですね」

「魔法の素人が大きい口を叩いているがそれがどれほど危険なことが教えてやろうか？」

「さて、先ほどの疑問点。何故、エヴァンジエリンさんは女性生徒を襲う必要があったのか？一つの推論ですが、吸血鬼が人間の血を吸うと云う行為は精気を吸うともれます。精気、魔法使いさん達的に云えば魔力の補充が必要だった。それなら何故エヴァンジエリンさんは魔力の補充が必要だったのか？何らかの理由でエヴァンジエリンさんの魔力が枯渇、あるいは封印されていて満足に戦うことが難しい。…さて、いかがでしょうか？」

「……じじいが警戒するわけだ。だが、例え私が戦えなくとも私は従者がいる。茶々丸、けがをしない程度に遊んでやれ」

おや、剣呑な雰囲気になりました。図星だったのでしょうか。

「…申し訳ありません、吹雪さん」

後ろに控えていた茶々丸さんが前へと出ます。

「…マスターの命令ですので」

「茶々丸さん、茶々丸さんはそれで宜しいのですか？　主人の間違った行為を正すのも従者の役目ではないでしょうか？」

「…私は機械です。命令は絶対です」

「では何故、先ほどから茶々丸さんの行動に若干のズレが生じているのでしょうか？　いつもの茶々丸さんの行動や返答のタイミングがコンマ数秒遅れています。無論　茶々丸さんの方がくわしいデータをお持ちでしょうが」

「…確かに平均コンマ3秒の遅れが生じています」

「おめでとうござります。茶々丸さん。そのコンマ3秒があなたの魂です」

「私の、たましい？」

「茶々丸なにを話している？」

まあ、無粋な。とりあえず、こゝは逃げましょうか、茶々丸さんと戦いたくはありません。明日菜さんの手をとり、同時にマスターキーを取り出し佐久夜から力を受け取り明日菜さんともども飛び上がります。

「では、『おげんよ』、ヒヴァンジエリンさん、茶々丸さん」

光学迷彩をほどこしつつ女子寮へ向かいます。

〔ヒヴァンジエリン〕

空にとけ込み急速に飛び去った正木吹雪と神楽坂明日菜を見送りつつ茶々丸に問いかける。

「魔力の反応はなかつたが？」

「はい、加えて推進方法も不明です」

ふむ、じじいが2-Aに入れて直々に警戒しろと云つてきたときには訝しかんだが、なるほどかなり喰えない奴らしい。半年となりに座つていたが多少お節介な少女としか認識できていなかつた。

「茶々丸。帰るぞ」

「まだにあれが飛び去つた方を眺めている茶々丸に向かつて云ひ。

「申し訳ありません。マスター」

なんだ？

「命令を実行できませんでした」

「ああ、やつやのことか。まあ、いい。私は何も云わはず歩き出した。

〔吹雪〕

「ここですか、女子寮まで飛んで帰りました。

「本当に飛べるんだ」

感慨深げに明日菜さんが云います。まあ、今まで明日菜さんが生で体験した超自然現象は服を脱がされたことぐらいでしじうかい。あれと一緒にされのはいやですが。

「でも、遅刻しちゃうなときでも使いませんよ」

先に釘を打つておきます。

「うわ、ひび。でも茶々丸さんの反応のずれつて本当に。」

「まあ、多少はつたりに近いですね。なんとなく、茶々丸さんの態度がいつもと違った印象を受けたので云つたみましたが正解だった様ですね」

「吹雪ちやんの方がよっぽど魔女のばあちゃんっぽいかも」

失礼な。

寮の近くの人気の無い路地裏に入り、ビルの入り口で光学迷彩を解除します。多分防犯カメラがあつてもビルから出たぐらいに見えるでしょう。

「IJの前も聞きそびれたけど吹雪ちやんの力って」

「明日菜さん、緊急でない限り外でその手の話はNGですよ」

「あ、そうか」

「うっかりしていると怖い魔法使いさんに記憶を消されますよ」

「それはいや。でもエヴァちゃんにみせてもよかったの?」

「まあ、秘密にはしておきたかったのですが私が焚きつけたおかげで明日菜さんを危険にさらす訳にも参りません。それに茶々丸さんと鬭うのも気が引けます。ですが、大丈夫です。エヴァンジエルさんは学園長とは完全に一枚岩では無いようですし、有益な情報なら交渉のカードになりますので簡単には詰さないでしょう。それに他にも考えがありますので」

女子寮の前に着くとネギ先生に出会いました。まだ家庭訪問が続いているのでしょうか?

「明日菜さん、僕のパートナーになつてください…」

ネギ先生が私たちを見るなり開口一番、そう仰有いました。いつた
い何なんでしょうか？

「立派な魔法使いにはパートナーが必要なんです」
マギスティル・マギ

周りに人がいるのもお構いなしだすか？

「ばか、何云つてるのよ」

あわてて、明日菜さんがネギ先生を寮の中へと引っ張り込みます。
とりあえず、先生を連れて私の部屋へと向かいいます。幸い千鶴さん
は遅くなるそ�です。紅茶とケーキをお出ししながら話を促します。

「いつたい藪から棒になんでしょうか？」

「それは俺っちが説明するぜ」

ネギ先生の背広のポケットから白いいたちが現れました。

「俺つちはおじじょ妖精のアルベル・カモミール。カモと呼んで
くれい」

……なんと云うかネギ先生関係には本当に関わりたくなくなつてき
ました。私の内心などお構いなくカモさんは喋り続けます。

ネギ先生との出会いからネギ先生のお姉さまからの頼みで麻帆良に
来たこと。ネギ先生がエヴァンジエリンさんと戦うためにパートナ
ーが必要である」と、等々。

「ナリで、明日菜さんには兄貴のパートナーになつてもうござりたいんすよ」

「ナリで話が繋がるのですか。

「で、明日菜さん、いかがしますか?」

「え? 私?」

「無論です。明日菜さんをナリ擬名ですわので」

「ちよつと待つて、見捨てないで」

「いえ、見捨てるつもりはあつませんが、最終的には明日菜さんのお胸一つですのでそこはきちんと判断願います。さて、カモさん」

「なんてい、吹雪の嬢ちゃん」

嬢ちゃん……

「まず、あなたが怪しいですね。おこじょ妖精など仰有つていますがはつきり申しまして信じられません。以前 魔法をばらすとおこじょにされるとネギ先生が仰有つていましが犯罪者の成れの果てでないとどう証明されますか?」

「ナリの、ケット・シーに並ぶおこじょ妖精をおこじょの刑の犯罪者といつしょにあるなんて」

「カモ君は犯罪者じやありません!」

…ネギ先生、聞いた話だと一度あつたきりの妖精？ を何で無条件で信じるのでしょうか？

「なら、カモさんはネギ先生が全責任を負うと云う事で納得しました。では、次に明日菜さんがパートナーになつたとしてどの様なメリットが明日菜さんにあるのでしょうか？」

「いえ、その

「賃金を支払われますか？」

「その、考えてませんでした」

「…ネギ先生、先ほどの先生の依頼を極端に云いますと『俺の盾になれ』になりますが」

「そんな

「では、まったく危険がないと仰有るのでしょうか。いえ、それは明日菜さんにパートナーになつてもらう意味がありません。それとも、エヴァンジエリンさんは出汁で明日菜さんにプロポーズするのが目的なのでしょうか？」

「確かに危険だが、このままじゃ兄貴も本当にやばいんだ。兄貴の話じゃ昨日、エヴァンジエリンとか云う魔法使いと闘いになつたとき茶々丸ってロボットに邪魔されて呪文が唱えられなかつたんだ。魔法では負けてないからとにかく呪文を唱えるだけの間兄貴を守つてほしい。そこで、姉さんには仮契約をしてもらつ

「パクティイオー？」

「応よ。パートナーと云つても仮のパートナーだな。お試し期間と云つても良い。本当のパートナーを選ぶ前に期間や能力を限定して仮契約を結んでお互いの相性を確認するんだ。仮の契約でも従者になれば身体能力も上がるしうまく行けばマジックアイテムももらえるから危険はぐってさがるという寸法だ。これも人助けと思つて頼まれてくれないか?」

結局は盾なんですね。

「そのパクティオーとやらはどう行うのですか?」

「魔方陣のなかで兄貴とブチューとキスを」

「却下!」

すかさず明日菜さんが大声で制止します。まあ、当たり前ですね。さて、どこから切り込みましょうか?

「ネギ先生、先生は今回の件をどう思つてらっしゃいますか? ハヴァンジエリンさんは教え子ですか、それとも敵ですか?」

「もちろん、僕の生徒です」

「…ある教師が自分の生徒を補導しようつとしましたが、生徒の仲間によつて殴られてしましました。さて、その教師はどうするべきでしょうか?」

少なくとも自分も手勢を集めてその生徒に仕返しをする、と云つのは教師の道から大きく外れていると思いますが?」

「で、でも

「教師としては話し合いで解決するしか術はありません。それでも云うこと聞かず暴力をふるうのならば、そこからは警察の仕事です。教師の職掌に暴力で生徒を従わせると云つものはないのです」

「しかしよ、吹雪の嬢ちゃん。相手は魔法使いだぜ」

「ネギ先生が魔法使いとしてエヴァンジエリンさんと対決するのならば、まあ勝手にどうぞ、と云いましょう。ただし、一般人である明日菜さんや3・Aの生徒を巻き込むのは止めてください。理由はおわかりでしょう」

「でも、やつしたらビリヤード

「しづな先生や学園長に相談しましたか？」

「いえ、していませんけど」

「なぜでしょうか？」

「その、僕の生徒だし」

「ネギ先生、確かにネギ先生は正式な教員となられましたが、それは何でも全て自分で処理して良いと云つことではありません。普通の組織では報告・連絡を常に自分の上司と行わなくてはなりません。ネギ先生の問題はネギ先生だけの問題ではなく麻帆良学園の問題でもあるからです。故に、今回の件でもまずはしづな先生に相談されるのが筋と云つものでしょう」

「は、はい」

「また、仮に闘いになつた場合、先生のパートナーが誤つて人を傷つけたら、その方は平氣でいられるのでしょうか？」

「あ

「今回、ネギ先生はあまりにも自分のことしか考えていないように見受けられます。状況が状況故にご自分でも気がつかれないうちに焦つてうらつしやるのでしょう。その点を含めて、やはりしづな先生や学園長に相談なさるのが一番だと存じます。明日菜さんはどう思われますか？」

「そうだね、目の前で誰かが襲われているならともかく、やつぱり誰かと闘うのはいやかな」

「とにかく」とです。ネギ先生

「わかりました。ご迷惑をかけてすみません」

そう云い残し肩をおとしながらネギ先生は部屋を出て行きました。

「なんか、後味悪いね」

「全ての人間が幸せになれる選択肢なんてそつありません。ただ、今回は他の先生方に相談すればすぐに解決するはずです。問題があるならば、この選択肢は常にネギ先生も思いうかべられたはずなのに、どうして実行しようとしたのか、です」

「カモ」

「どうしよう、カモ君」

しょんぼりした顔で兄貴が話しかけてくる。無理はねえか、明日菜つて云う娘つこの同情心でパートナーになつてもうらう話がご破算になつたうえに説教までくらつちゃな。しかし、もつひとりの娘つこの方は一筋縄ではいきそうにはないな。

「でも兄貴は他の先生には相談したくないんだよな」

「うん、あの人はサウザンドマスターを知つてたんだ。僕が捕まえられればサウザンドマスターの話が聞けるかも知れない」

「まあ、他の先生に頼る前に何とか自分で解決する努力をするのも悪くはないさ。兄貴」

とりあえず、兄貴には何人か仮契約^{パクティオ}を結んでもらわないとな。

2003年4月10日 木曜日 昼

「カモ」

午前中、兄貴のポケットに忍び込んで3・Aの授業をのぞいていた
が…

「いい…、すいへいぜ」

結構、兄貴の奴もてているんだな。好感度の高いのが結構いるし、

「こりやうまくやればボーナスかも？」

「とりあえず、好感度の高い のどかつて娘と仮契約させよ」パクティオうか考
えたが昨日釘をさされたばかりだからな。それは追々考えよう。

今は先にエヴァンジエリンて奴を倒すことを考えよ。まほネットで調べたら奴は闇の福音の一いつ名をもつ真祖の吸血鬼で15年前まで600万ドルの賞金首だつたらしい。これを知ったときはさつさと逃げようかと思ったが、奴の賞金が取り下げられたのはサウザンドマスターに負けたかららしい。兄貴と鬪つたときには魔法薬で補助していたそうだから、サウザンドマスターに負けて魔力が減衰したのかもしねえ。ならば、チャンスだぜ。

『復活した闇の福音をサウザンドマスターの息子が退治する』

うまく行きや従者候補の方が兄貴を求めて集まつてくれるぜ。相手は二人だ、一人ずつ相手すれば勝機はある。

「兄貴、まず茶々丸って奴が一人になつたときに接触しよ」ひづぜ

「なぜ、茶々丸さんなの」

「まず、エヴァンジエリンは全力が出せない様だが、元600万ドルの賞金首だ。強さから云えばエヴァンジエリンの方が上だろ」う。こう云うのは弱いのを先に叩くのが常道だ。それに、茶々丸はロボットだからな。万が一、壊れても修理できるだろ」

「うん、でも、」

まあ、兄貴は優しいからな。

「何も最初から鬭えて云つてゐるわけじゃねえ。茶々丸を説得できればエヴァンジエリンも思い直すかもしけねえじゃねえか」

「うそ、そうだね。とつあえず茶々丸さんと話して会つてみよつ

2003年4月10日 木曜日 夜

〔吹雪〕

「下着泥棒ですか？」

「はい、いえ、それが」

あやかさんが夜更けに部屋を訪れてそう仰有いました。なんでも最近寮内で下着が無くなる事件が相次いでる注意を呼びかけているそうです。

「白い、フコレットみたいな小動物が下着をくわえて走るのを見た」と云う人が

白いフコレットって……やはり犯罪者じゃないのでしょうか？

「その、いたちもじきの飼い主に云つてあります。とりあえず被害にあつた人に被害金額を申請する様に云つてください。損害賠償をしてもらう様交渉してみます」

「そうですか、わかりました」

信用してくださっているのか深く追求されることなくあやかさんは帰つて行かれました。あとで聰美さんか鈴音さんに連絡して防犯力メラから証拠映像が抜き取れないか訊いておきました。

2003年4月11日 金曜日 夕方

「カモ」

よし、チャンスだ。昨日からエヴァンジエリンたちを尾行していたが、やつとエヴァンジエリンと茶々丸が別れて行動した。

茶々丸の後を兄貴といつしょにつけたが、樹に引っかかった風船をとつたり、婆を背負つたり、猫を助けたり、猫にえさをあげたり：

「…いい人だ」

て、感動してる場合じやないぜ、兄貴。

教会の裏手で猫にえさをあげている今なら人目がない。

「ネギの兄貴は命をねらわれたんじよ、しつかりしてくださいよ

「でも、カモ君」

「確かに茶々丸ってのは良い奴かもしれねえが、ああ、もしかして命令だから仕方なくやっているかもしけねえじやねえか、兄貴。こ

「は、心を鬼にして一発やらねえと」

「や、そうか。そうだね、カモ君」

「ふつ、あぶねえぜ。」

「茶々丸さん」

「 こんなちわ ネギ先生」

「茶々丸」

油断しました。ネギ先生の行動パターンから単独行動時の奇襲は確率が低いのでネギさんのえさやりを優先しましたが失敗だったようです。

「茶々丸さん、あの 僕を狙つのはやめていただけませんか?」

「 申し訳あつませんネギ先生。私にとつてマスターの命令は絶対ですので」

「うつ 仕方ないです」

ネギ先生は手を腰に回し銃を取り出しました。魔法銃ですか。なるほど、威力はさほど高くありませんが即応性はあります。銃で牽制しながら魔法を撃つタイミングを計るつもりでしょう。ネギ先生自身も距離をとる様に離れていきます。

近づこうとしますが銃を撃たれては距離をとるしかありません。あと、呪文が完成します。

「魔法の射手 連弾・光の11矢」

呪文の詠唱が完了しネギ先生の周りに11個の光が生じます。魔法の射手は初歩の攻撃魔法ですがネギ先生ほどの人が撃てば小銃弾以上のダメージになるでしょう。それを主要部に何発か命中させられたら全壊する可能性があります。ならば…背中の魔力ジエットを開にしてネギ先生へと呐喊します。魔法の射手はある程度誘導できますが急激な機動にはついていけない筈。魔法の射手が何本か体を貫きますが致命傷ではありません。ネギ先生に肉薄して口ケットパンチをうちま…

「ひっ！」

私におびえるネギ先生の姿を見てロケットパンチの機動シーケンスが強制終了しました。

なぜでしょう。自分自身の保護のため他者への攻撃は許可されます。しかし、これ以上のネギ先生への攻撃はできません。ネギ先生も呆然としているので、その隙にジェットをふかして退却します。

「ネギ先生への攻撃を止めたのは私の意志？ わかりません、マスター」

魔法の射手を受けているので修理のため葉加瀬のところにいくべきなのですが私はマスターの家にもどります。マスターに話を聞いてもらいたいのです。

2003年4月14日 月曜日 午後4時

〔ネギ〕

茶々丸さんと闘いで怖じ氣づいてしまった僕は当てもなく山に逃げ込み、あげく遭難しかけた。運良く修行中の長瀬さんに助けてもらい、休日の間いつしょに修行して気がついた。魔法学校をいい成績で卒業して何でも出来るつていい気になっていたんだ
おじいちゃんの言葉『わざかな勇気が本当の魔法だ』って言葉さえ忘れていた。

意を決して出勤したけど肝心のエヴァンジエルさんはお休みだった。力ゼだと和泉さんが云っていたけど、吸血鬼でも力ゼをひくのかな？ 茶々丸さんもお休みだったので、放課後、家庭訪問に来ている。

エヴァンジエルさんは女子寮ではなく、茶々丸さんと一緒に別のところに住んでいる。名簿の住所を頼りに来てみればログハウスが建っていた。

「へえー、案外素敵な家だなア 墓場にとかに住んでるのかと思つてたけど」

玄関に赴き呼び鈴を鳴らす。

「あのー、じんじゅはー、担任のネギですけど家庭訪問に來ました

「一

「あ、はい、お待ちください」

中から現れたのは制服にエプロンをつけた吹雪さんだった。えつ、なんでいるの？

「いらっしゃいませ、ネギ先生。エヴァンジーロリンさんは風邪でお休み中です。茶々丸さんは聰美さんのところでメンテナンス中なので代わりに私が看病をしております」

さすが、麻帆良の歩く理論武装。僕の知りたいことをすべて教えてくれたけど…

「あの、吹雪さんはエヴァンジーロリンさんの仲間なんですか？」

「ネギ先生の仰有る仲間の定義が判りませんが、クラスメイトが風邪でフリフリになっている所をお見かけしたら助ける程度の仲でしょうか。どちらかと云えば茶々丸さんが仲が好いと思います。ネギ先生はお見舞いに来られたのでしょうか？」

「いえ、違います。ただの家庭訪問です。すみません。変なことを訊いて。今日は出直します」

果たし状を送りつけたつもりだったけど吹雪さんがいるんじゃできないな。

〔吹雪〕

「あの、吹雪さんはエヴァンジエリンさんの仲間なんですか？」

もしかして、まだ決着がついていないのでしょうか？　お見舞いに来たのかと思いましたがお見舞いの品も持つていませんでしたし、家庭訪問？　病欠した人に普通行うものでしょうか？　英国人だからと云うのも変ですし、魔法使いだから？　それともネギ先生だからなのでしょうか？

「誰か来たのか？」

エヴァンジエリンさんが2階から降りてきました。

「あら、もう起きて大丈夫なのですか」

「ああ、あの薬はよく効くな……飲んだ瞬間は気が遠くなるが……」

「ま、まあ、うちの方ではあの薬を飲まないために健康に気をつけ様になると云われてますが……先ほどネギ先生が訪問されましたが、お休みになられていると申しましたら出直すと言付けされて帰られました」

「……なんだか、新しいメイドを雇つたみたいだぞ、正木吹雪。メイド服を着てみんか？」

「お断りします」

なぜ、皆して私で着せ替えをしたがるのでしょうか？

「ああいい、先ほどの桃缶は皿かつた。まだあるのか?」

「はい、それを刻んでゼリーで固めた桃ゼリーを作りましたが?」

「食べる」

「判りました。」用意しますからベッドでお待ちください」

「うむ」

モモゼリー 자체は缶詰の桃を刻んでゼラチンを混ぜたシロップで固めただけなので味 자체は桃缶と同じなので生クリームとソースの葉でアクセントを付けてみます。

「うむ、皿に

「あつがとうござります」

「といひで何でお前はいる?」

えつ、今更それを云いますか?

「昨日の買い物出しの途中、ふらふらと足許がおぼつかないエヴァンジエリンさんをお見かけしましたので事情を伺ったところ風邪と花粉症でダウンされたとか。茶々丸さんがメンテナンス中のためいらつしやらないでしかたなく薬を取りに行くと云うことでしたが、あまりにつらそうだったので、そのままにここまでお連れして看病いたしました」

あやかさんによく解説をとつて泊まり込みで看病していました。

「うむ。『苦勞』

なにか氣まずい空氣が流れます。國らすも主人とメイドの様なやりとりになってしまいますね。

「私とお前は敵対していたはずだな」

「まあ、そういう見解が可能なことは否定をしませんが」

「のひつへりつと、別に恩とは思わんぞ」

「ええ、貸しひとつで結構です」

「くつ… 夜には茶々丸は戻るそうだ。ヒツと帰れ」

「わかりました。茶々丸さんは夜まで戻られないのですね。『夕食を用意いたします。中華風のおかゆなどいかがでしょうか?』

「勝手にしろ」

幸い材料は結構ありました。さすが茶々丸さんですね、素材は厳選されています。乾燥した貝柱がありましたが水に戻してこれを具に粥にします。炊きあがった粥に蕪と大根の葉を刻んだものを混ぜます。トップピングには蒸した鶏肉と油条の代わりに油あげを炒つたものを用意しました。

夕食の準備が整ったのは6時頃でした。一階のエヴァンジーロリンさんの寝室に伺うとベッドのなかで携帯ゲームで遊んでいます。

「夕食の準備が整いました、どちらで召し上がりますか?」

「食堂へ降りよつ」

「わかりました。ではガウンをビブヤ」

あの薬を飲んだなら多分大丈夫でしょうが、また風邪を引かれたら私の2日間がむだになります。

食堂でテーブルについたエヴァンジエリンさんに粥をよそいます。

「貝柱の中華粥です。蕪と大根の葉を混ぜています。トッピングは蒸した鳥肉と油揚げを炒ったものです」

「皿」

レンゲで粥をすくい一口 食べてから云われました。

「恐れ入ります」

「蕪と大根か。一草粥だな」

蕪と大根の葉は七草粥に使われますね、すずな、すずしろです。

「かゆ…つま… べべつ」

エヴァンジエリンさんが独り言を云いながら笑っています。なんでしう？ 中華粥に笑いのつぼなどがあるのでしうか？

「ピータンがあつたはずだが」

「ええ… 駆け上がりますか?」

「ああ、出してくれ」

「はい、しませんまいへだたこ」

病み上がりにピータンを食べますか。だいぶ、回復なさったみたいですね。そのとき玄関のドアが開く音がし、茶々丸さんが現れました。

「マスター ただいま戻りました」

「ああ」

「おかえりなさい、茶々丸さん」

「吹雪さん?」

珍しく…いえ、初めて茶々丸さんがびっくりした表情をみました。

「気にするな、お節介が一人いるだけだ」

「わうですね、茶々丸さんが戻られましたので私もお暇しましょう。
… ハヴァンジエリンさん」

「なんだ、正木吹雪」

「先ほどの貸しひつですが、ネギ先生にちょっとかいをおかけになるのは致し方ないとはいえ、一般の方々、特に3・Aに迷惑をかけになるのはお止めになつて頂けませんか?」

エヴァンジエリンさんをはじめ、お手伝いして仰有ります。

「よかろう、準備も整ったし、じじいもひるたこからな

「お皿葉承りました、ではエヴァンジエリンさん、茶々丸さん、ご
きげんよう」

エヴァンジエリンさん宅を後にします。ああ、私も中華粥を食べた
くなりました。明日の朝食は決まりですね。

18話 停電の夜

2003年4月15日 火曜日

〔吹雪〕

「停電ですか？」

「ああ、吹雪は初めてだよな。前回まゝ9月だったし。うちの学園では、とにかく、麻帆良全体で年2回、システムのメンテナンスを行つんだ。夜8時から1~2時まで一斉に停電だ」

「…何故、今なのでしょうか？ 長期休暇中に行えば宜しいものを… せめて深夜から早朝に行えばまだましではないでしょうか？」

「まあ、なかには深夜停電される方が困る連中も多いからな」

千鶴さんが意味不明な弁護をしていましたが。
さて、私のとなりには、むつり顔のHヴァンジョーリンさんがいらっしゃいます。

「おはようございます。Hヴァンジョーリンさん、茶々丸さん」

「おはようございます、吹雪さん」

「ふん」

やや、不機嫌そうに仰有ります。ちゅうじのときネギ先生が入つてきました。

あやかさんのお令で起立・礼をしたあと、

「うわあ、H、エヴァンジエリンさんーーー!？」

エヴァンジエリンさんをみてパニックになつています。なにやら意味不明の言葉を連呼しますが良く聞き取れません。とりあえず、授業が始まりましたが先日までと逆にやたらとテンションが高いのは、これはこれで困るのですが…

〔エヴァンジエリン〕

果たし状か。ネギ・スプリングフィールドから渡された封筒の表にそう書いてある。書面のほうは読む氣にもなれん。どうせ、正義とか正義とか正義について書かれているのである。

パソコンルームで茶々丸に学園都市のネットにハッキングをかけてさせている間にあの坊やをどう弄ぶか考えてみる。

「サウザントマスターのかけた『登校の呪い』の他にマスターの魔力を抑え込んでいる『結界』があります。この『結界』は学園全体に張りめぐらされていて大量の電力を消費しています」

「ふむ、超の云う通りか

魔法使いが科学に頼るとはな…

「まあいい、茶々丸、ぼーやに返事しろ。『今夜9時、桜通りで待

「… 『ヒ

… イエス、マスター』

「吹雪」

寮に帰ると鈴音さんから依頼してしておいたものが届きました。ものを確かめてため息をもらします。あやかさんの方にお願いしておいたものもすでに届いています。本来あやかさんに頼むべき事ですがあやかさんでは妙な方向に向かいそつなので私が交渉を行つもりです。

8時になると停電を告げるアナウンスのあと電気が消えます。千雨さんはさっせと寝てしましました。明日早起きてブログの更新をするそうです。もしかしたら、潜入調査のチャンスでしょうか？とおもつたら明日菜さんからメールが来ました。

> from 神楽坂明日菜 <
> sub 助けて <
> 寮のエントランスで <

なんとなく予想がつきます。とりあえず小物のはいったポーチを持ち、千雨さんに一応声をかけて部屋をでます。
エントランスには明日菜さんとケダモノがいますね。

「ネギ先生がらみでしちゃうね」

「やうなの、ネギ先生、一人でエヴァちゃんと決闘するって出て行

つたみたいなの

「だから、姉さん、『』は緊急事態だから、ネギの兄貴を助けてくれねえか？」

なるほど、切羽詰まつた今なら明日菜さんを動かせると思いましたか。

「私行くね」

「……代わりに私が参りましょ」

「嬢ちゃんがかい？」

「はい、そうですが」

「いや、その、なんだ。相手は闇の福音^{ダーク・エヴァンジェル}、不死の吸血鬼だ。ただの助つ人じや危ないから仮契約^{パクティオ}しねえと危ねえぜ」

「ちなみに聞きますが、エヴァンジエリンさんは一撃でこの麻帆良を壊すぐらいの力はありますか？」

「いや…… わすがにそこまで無」と思ひながら…… なんで？」

「じゃあ、何とかなりそつです」

「なるんだ……」

「では、ネギ先生はじず」？

「桜通りに9時だったんだが…」

ならば、もう始まっていますね。さて、明日菜さんですが、ほつておぐのも危ない気がします。特にこのケダモノが。

「さて、明日菜さん。部屋で待っていてくれませんよね。見学だけならば一緒にきても好いですよ」

「え、好いの？」

「ええ、でも本当に見学だけですよ」

「え？ ちょっと待つてくれ…」

ケダモノを置き去りにして非常口から外へ出て明日菜さんを連れて飛び立ちます。

「あの、力モ置いてちゃって大丈夫なの」

「ええ、はつきりつけて手の内を見せたくないのです」

情報は貴重です。

〔 ハガアンジーリン 〕

田の前でぼーやは茶々丸に接近されるのを嫌つて飛行しながら

闘いが始まるとぼーやは茶々丸に接近されるのを嫌つて飛行しながら

ら魔法やマジックアイテムを駆使し応戦していた。無秩序に逃げ回つてゐる様に見せかけ外辺部の大橋に誘導しているのが見て取れた。いざとなつたら麻帆良から出るつもりか？と思つたが、じじいがぼーやに私が登校地獄で麻帆良から出ることが出来ないと教えていふとは思えない。故に罠と推測する。だいたい杖で飛んでいるのに、橋にこだわるのは不自然だ。まあ、性格は違うが親子だな、同じ戦法をとるとは。

案の定、捕縛結界の陣の罠があつたが茶々丸の結界解除プログラムを起動させ難なく解除出来た。無論、私もいまではこの程度の結界などすぐに無効化できるが、じじいに手の内をさりすのはおもしろくない。

ぼーやから杖を奪つと今度は逆ギレしながら泣き出した。1対1なら負けないと？笑わせるな。決闘を申し込んだのはじこのどいつだ？まあいい、邪魔が入る前にさつさとぼーやの血を頂けりと思つた矢先、ぼーやの体が地面に沈み込んでいく。転移か？

「じんばんは、Hヴァンジョンさん、茶々丸さん」

正木吹雪がぼーやを抱きかかえて10cmほど離れたところから浮き上がりてくる。隣りにいるのは神楽坂明日菜か。

「さて、ネギ先生、子供ちは睡眠をよくとらないと大きくなれませんよ」

と、云つてハンカチでぼーやの鼻や口をふすぐと、すぐぼーやはぐつたりとした。……おい！

「吹雪ちゃん？」

神楽坂明日菜も驚いているらしい。

「麻酔と睡眠導入薬を混ぜたものです。体には害は無いはずですが、様子がおかしくなつたら教えてください」

「ぼーやと刀の柄みたいなものを明日菜に渡すと吹雪はゆっくつとこちらに向かつて歩き出した。さて、どうしたものか。

「正木吹雪！ 貴様、私に昨日、ぼーやにちょっとかいを出してもいいと云つてなかつたか？」

「ええ、申しました。そして、」「いつも同じいました。3-Aに迷惑をおかけになるのはお止めになつて頂きたいと。これ以上のお痛はネギ先生にとって大怪我やトラウマになるかもしません。それは3-Aにとつて喜ばしいことではあります」

「なるほど、そういう理屈か。で、私が納得するとでも？」

「無理…でしょうが」

私は返事の代わりに呪文をたたき込んだ。

〔刹那〕

停電による結界の消失の隙をついて現れる侵入者を警戒して私と龍宮は麻帆良の外苑部のビルの上から大橋を監視をしている。魔法生徒の私たちの受け持ちは危険度の低い地域に限られ、山間部などは

魔法先生でも腕利きの人達が警戒にあたつている。

橋故に周りから丸見えで、一本道なので侵入を試みるものも少ないのだが今日は違つた。いや、侵入者ではない、ネギ先生とエヴァンジェリンさんが大橋で闘つていた。

学園長から今日一日、ネギ先生とエヴァンジェリンについてはよっぽどのことがない限り不干涉を貫けと指示されていたが、そろそろまづいのではないかと思い始めた矢先に事態が一変した。吹雪さんが突如現れ、エヴァンジェリンさんと闘い始めたのだが…

「す」「いな」

二人は橋から離れ湖の上で闘つている。エヴァンジェリンさんの魔法で湖には氷の島がいくつもできている。いや、下手すると湖全体が凍結するかも。真祖の魔力とはこれほどのものなのか…

しかし、それ以上なのは吹雪さんだつた。攻撃はしていないが縦横無尽にエヴァンジェリンさんの周りを飛翔し相手を翻弄している。緩急のついた3次元機動は時には信じられない動きを見せる。減速なしで逆方向に向きを変えたり…消えていいのか？あの動きは飛翔しながら縮地で再現できるだろうか？私は遠くから俯瞰しているからわかるがエヴァンジェリンさんからすれば吹雪さんが多人数で襲いかかっている様なものだろう。

「しかし、攻めあぐんでいる」

龍宮がつぶやく。目のいい龍宮には私よりも詳細に観察できるのだろう。そうだ、今 龍宮はサングラスをかけている。以前、私が借りたサングラスと同じ機能を龍宮の好みのフレームで作ったものだ。吹雪さんからの口止め料らしい。暗闇でのマズルフラッシュを避けたり、服の上から銃刀類を見つけることができるので重宝しているらしい。

「ちょっと貸せ」

案の定サングラスをかけると吹雪さんの姿がズームで映し出されている。しかも自動追尾らしく吹雪さんの姿を間近に見える。

「正木は攻撃に剣を使つていない」

確かにこれまでの攻撃は蹴りや掌底だけでの桜色に輝く剣は使用していない。氷を切り裂いているので飾りではないはず。

そして私には困った顔をした吹雪さんの顔がみえていた。

〔吹雪〕

まったく失敗しました。

エヴァンジェリンさんは不死と聞きましたが、どの程度の不死のか聞きそびれました。寿命が無いと云うだけではありませんよね。吸血鬼と云えば胸に杭を打てば滅びるとか聞きましたが、それ以外なら大丈夫なのでしょうか？ 今更、エヴァンジェリンさんにお尋ねするわけにもまいりません。敵に教えてくださいと頼む？ そんな間抜けなことはできません。とは云え、明日菜さんや茶々丸さんの前でエヴァンジェリンさんをイモムシにするのも気が引けます。蹴りなどで様子を見ていますがたいしたダメージが与えられた様にもみえません。もともと私は殲滅戦が多く、出来うる限りの力で目標を即座に粉砕することを第一にしてきたのでこう云つたデリケートな闘いには不向きなのです。さて、愚痴をこぼすのも兵士としては失格です。与えられた条件で与えられた目標を達成すべく努力すべし、です。

〔ヒガーンジヒリン〕

想像以上の奴だな、正木吹雪は。

闘いに入った瞬間からいつもの穏和な表情はなくなり、ただ、一つの機械のごとく精密かつ正確な攻撃を行つてくる。ふむ、後で茶々丸にこの動きをトレースさせてみるか。しかし、この機動には正直云つてあきれ。普通の人間に行わせればそれだけで死ぬだろう。いや、あいつらならば何とかやりそうな気するな。

こちらの攻撃はすべて見切られている。まあ、あの機動では悠長に呪文を唱えるのは『これから攻撃しますから避けてください』と、云つているも同然だからしかたがない。むしろねらいは湖上に足場をつくること。3次元機動は奴に分がありそうだからな。

奴は魔法使いと云うものに疎いの筈だ。ならば、遅延魔法や無詠唱など知らんぢろ。無論、体術とて引けをとるつもりはない。勝ち目はある。

奴がこちらの誘いに乗り、氷上を蹴つて突つ込んでくる。躊躇した蹴りは今までと段違いだ。地面に足がつくことによつて体全体の筋肉の力を集約出来ると言つことか？

右手の掌底を受けとめ手首を取り、ひねつてそのまま肘を極めようとしたが、よほど体が柔らかいのか腕をひねられても体勢がゆらがない。むしろ密着した状態から左脚を横から上げて踵落としをしかけてきた。こいつ、どれだけ体が柔らかいのだ？ 奴を突き放すと同時に私も後ろへ下がつて体勢を整えようとしたが、宙返りをしな

がら近づいてくる。早い回転で間合いが測りづらい。無詠唱の氷の射手をはなつたが、いつたん大きく背後にとんぼをきつてこれをかわし、素早く脇から回り込んで背後をとられた。

〔吹雪〕

それは卑怯と云うものでしょう？

思わず口にしそうになります。背後をとり、とりあえず組み付こうとした矢先にエヴァンジエリンはたくさんの蝙蝠と化してその場から逃げました。確かに吸血鬼にはそんなことも可能だつた気もしますが、実際に目の前で行われると、一瞬ですが呆気にとられました。すかさず何かが飛来しました。氷の矢？ 詠唱しなくとも魔法が使えるのでしょうか？ これは吸血鬼故の能力か、それともそういう技なのでしょうか？ 先ほどの技に比べると威力が違いますので、詠唱無しでは十分な威力が出ないのでしょう。でなければ、敵前で長々と呪文を唱えるなんて馬鹿げています。その行為自体、自殺行為にしか思えません。故にパートナーが必要なのでしょう。エヴァンジエリンさんでなければすでに詰んでいる筈ですが…まあ、殲滅目的ならエヴァンジエリンでもすでに達成出来ているはずですが。

とは云え、あれを連発されたら打撃も組技も効かないでしおうし、剣で切り刻むのは最後の手段にしたいのですが……
そうですね、エヴァンジエリンさんが吸血鬼の能力を使うなら私は吸血鬼の弱点をつきましようか。

「刹那」

「これが正木の本来の闘い方かな?」

吹雪さんとエヴァンジエリンさんは湖にできた氷の島で格闘戦に移行していた。ここでも吹雪さんはエヴァンジエリンさんを圧倒している。素早い移動に宙返りを加えて相手を翻弄し、異常にさえ見える体の柔軟性で相手の読みを外していく。

「体の小さい吹雪さん故にパワーよりもスピード重視、互角に組み合つのを避けトリックキーな動きで相手を翻弄する… 口にすると簡単だな」

「ああ、しかし、一撃も当たらそれでお仕舞いと云う可能性もある」

圧倒的な攻撃でさえエヴァンジエリンさんは吸血鬼の能力を駆使して躲していく。私がエヴァンジエリンさんの立場なら吹雪さんのスマミナが切れるまで待つが…いや、エヴァンジエリンさんだからまだ保つてているのか?

「なあ、龍宮。さつきから比べて激しくなっていいか?」

最初のうちは組み付こうとしていた吹雪さんが、今ではヒットアンドウロイで懐に潜り込んでするどい蹴りや掌底を放つてまた離れていく。エヴァンジエリンさんは無詠唱の呪文を織り交ぜながら真祖のパワーで圧倒しようとしている。

「そうだな、どうやら一人とも相手を殺すつもりが無かつたのかどう

うかは知らないが手加減はしていたみたいだ。相手をしているうちに、これぐらいなら大丈夫と判断して力を入れ始めたんじゃないかな？」

「あ！」

エヴァンジエリンさんが吹雪さんに牽制として5メートルはあるつかと云う氷柱を蹴り碎き、氷の礫を吹雪さんへと飛ばす。氷の礫が吹雪さんを襲つた瞬間、氷の島が爆発した。

「吹雪」

エヴァンジエリンさんがこちらに氷の田畠ましをかけた瞬間、光鷹翼の剣でエヴァンジエリンさんの足許周辺の氷を切り刻み、体勢を崩したエヴァンジエリンさんの体を捕まえ湖にダイブしました。

案の定、エヴァンジエリンさんは水中でパニックを起こしました。ならば、この隙に拘束具でエヴァンジエリンさんを拘束します。この拘束具は優秀なんですが見た目が、まあ、アレです。拘束した人間の周りを緑色のジエル状の物質で覆つてしまい、一見、スライムに捕食される人間の様です。ジエルは拘束の他に生命維持装置として傷の手当をしたり、時には保護装置として口封じなどから被拘束者を守つたりします。対超能力機能つきですが効きますか？

拘束したエヴァンジエリンさんと共に大橋へと移動します。さて、どうしましょう。これだけの人数では転移はできません。とりあえず、ここで話し合いをしましょうか。

「マスター！」

茶々丸さんが駆け寄ってきます。

「これ以上 危害を加えるつもりはありません、茶々丸さん、エヴァンジエリンさん。おとなしくしてもらえたならば、すぐにでも解放します。

「好きに」

今、エヴァンジエリンさんは首だけジョルの上に出しているのでだるまみたいですね。いや、やさぐれた幼女の顔があるだけにいつそシユールと云うべきでしょうか。なんとか身をよじって拘束からのがれようとしていますがあきらめた様です。もし、呪文を唱え始めたラジールに溺れて頂きましょう。

「明日菜さん。ネギ先生は」

「多分大丈夫、普通に寝てると思つ」

エヴァンジエリンさんとネギ先生をこんな風にあわせた私が一番状態が危ういですね。

季節外れの寒中水泳（四月ですが氷のせいでもさしく寒中でした）で一人ともずぶ濡れです。エヴァンジエリンさんはそれでも拘束具の生命維持機能で体を暖めてくれますが、私は濡れ鼠のままです。橋のうえだけに風が吹くと寒いです。

さて、問題です。拘束具はもう一個あります。

……だるまが一人になりました。

「なに、やつてゐるの吹雪ちゃん」

「いえ、これは被拘束者の身体を守る機能もあるので体を温めているのです。出入りは自由ですから明日菜さんもいかが？」

やつてみるとお湯に浸かつたみたいで結構気持ち好いです。

「いや、遠慮するよ。先生をおぶつていてるから結構温かいし」

「せうですか」

さて、これからが問題です。

「エヴァンジエリンさん、取引をしませんか」

「取引？」

「ええ、エヴァンジエリンさんが真祖の吸血鬼である故に麻帆良学園と一枚岩でないようですので。私に全面的に協力していただけるのならば、エヴァンジエリンさんにかけられてこいるギアスの解除に力を貸しましょう」

「魔法使いでもないお前にか？」

「いえ、私が直接行うのではなく、出来そうな方を紹介すると云ふことです。もちろん、その方が失敗したならこの話はなかつたということで結構です。いかがでしょうか？」

「それはこちらに有利だが好いのか？」

「契約の不履行ですか？ 別にかまいませんよ？ エヴァンジエリン・A・K・マクダウエルとはそう云う方だつたと云うだけです」

「まつたく、ああ云えば」「云つ女だな…ひとつ教える、正木吹雪。貴様、今いくつだ」

ばれました？

「… 65歳です」

「うそ！？」

「なるほど、ご同類でところか？」

明日菜さんはびっくりしていますが、エヴァンジエリンさんはさも当然と云つた顔をしています。むしろ200歳とかなら賃祿がついて宜しいのでしょうか。

「さて、くわしい話は、明日にでもしまじょうか。お客様もいらしてようですし」

エヴァンジエリンさんの拘束具を解除します。幸い服は乾いていました。

大橋の学園側から3人のシスターが現れます。一人は成人、一人は中高生ぐらい、一人は小学生ぐらいですね。

「あなたがたはいったいここで何をしているのですか？」

「女子中等部3・Aの正木吹雪と申します。実は事情はよく分かりませんがうちの担任、ネギ・スプリングフィールドがこちらのエヴァンジエリン・A・K・マクダウェルさんに決闘を申し込みました。そのことを聞き、神楽坂明日菜さんと共にエヴァンジエリンさんに決闘を止める様説得をしに参った次第です。今、エヴァンジエリンさんは快く矛を收めもらつたところです。ところでシスターはいつたいどこの所属でしょうか？」

「私は教会に所属するシスターです。シャークティと呼んでください。これは…」

「なぞのシスターです」

「美空ちゃん？」

「美空さんですね、学園長から魔法関係者と伺っていますが？」

「うがー」

美空さんが何か呟えています。

「…そして、こっちがココネ・ファティマ・ローザ。ここであったことを全て聞かせてもらいます。全員私についてきてください」

まあ、しかたが無いですね。しばらく、てくてく橋を歩いていましたが2台の車が迎えにやってきました。私が乗った方にはガンドルフィーーこと名乗る先生が運転手をされていました。向かつた先は中等部学園長室です。

学園長室には学園長の他、高畠先生、しづな先生、そしてサングラスをかけた男性教諭、髪の長いメガネの女性教諭…しづな先生と/or/ぶつてます…がいました。それともう一台のほうの運転手は思い切り丸い方ですね。あとから、刹那さんと真名さんがやつてきました。総勢17名ですか？ 部屋が狭いですね。ちなみネギ先生はもう起きています。

「もう、やつれ田付が変わりますがココネさんを帰してはいかがですか」

シスター・シャークティに提案してみましたが拒否されました。

「いえ、この子も慣れていますので」

ふむ、能力があるのか、それとも見た通りの歳ではないのか？ 気にとめておきましょう。本当は『もう、遅いから明日にしませんか？』と、遠回しに提案してみて、その対応から学園側の反応を見ることでしたがこの件を重要視していると伝つことですね。

改めて学園長が口を開きました。

「さて、今回の騒動じやが」

「その、騒動とはいつたいなんでしょう？ 桜通りの吸血鬼騒動？ それともネギ先生の生徒への体罰のことでしょうか？」

私の言葉を受け先生方は色めき立つていますがそこは流しておきます。

「まず事の起つますが、ここ数ヶ月満月の夜 女子生徒が襲われ

る事件が連續して起きていました。犯人はエヴァンジエリンさん、そうですね」

「ああ」

「なぜですか？」

「ぼーや…ネギ・スプリングフィールドがここに来ると知つたからさ。奴の血を吸えれば私にかけられた呪いは解けるからな、だが襲うための魔力さえないから女生徒を襲つて魔力を補充しようとした」

「やっぱり、貴様か！」

「エヴァ」

エヴァンジエリンさんの告白に周りの先生方は怒りを露わにしていますが…

「たしか、エヴァンジエリンさんがネギ先生が麻帆良にいらっしゃることを学園長から聞いたとお伺いしましたが、学園長…？」

「ほひ、やうじやつたかのうひ？」

惚けるつもりでしょうか？

「では、先生方にお訊きしますが桜通りの吸血鬼に関してうわさを聞いて問題にしたりはなされませんでしたか？ そしてエヴァンジエリンさんと結び付けて考えたことはありませんでしたか？」

一瞬でしたがガンドルフリーー先生が学園長を睨み付けました。

「つい、先日も刹那さんから連絡がされていますが？ 刹那さん？」

「はい」

あわてて、飛び出してきた刹那さんが携帯を操作すると、先日の刹那さんとのやり取りが再生されます。

「確かに、始業式の放課後でしたから一週間前になります。さて、先生方、再度お尋ねします。桜通りの吸血鬼やネギ先生について学園長からの指示はありましたでしょうか？」

皆さん、渋い表情でこちらと視線を合わせようとしません。

「さて、エヴァンジェリンさんは以前ネギ先生のお父さまから酷い仕打ちをされたそうですね。その行為自体が正しいか、そうでないかは置いておき、恨みをもつたエヴァンジェリンさんにネギ先生のことを教えるのは復讐をそそのかしているのも同然ではないでしょうか？ さらにはエヴァンジェリンさん行動も黙認していた様ですが？」

さて、これで一方的にエヴァンジェリンさんだけが糾弾されることはないでしょう。

「確かにエヴァンジェリンさんの行為は許されるものではありません。ですが、結局どなたどなたが被害にあられたのでしょうか？ 認識阻害の魔法とやらであきらかにエヴァンジェリンさんが関わったと判断るのはネギ先生が田撃した富崎のどかさんへの襲撃未遂その後のネギ先生への襲撃だけです。

さて、提案ですが、やはり停学処分が妥当ではないかと。ただしエ

ヴァンジエリンさんは普通の停学処分では反省なされないと想いますので、停学期間中は…そうですね、補習として水泳の授業を受けるといふのはいかがでしょうか?」

「ちよ、まて」

水泳と云つ言葉にエヴァンジエリンさんがきつちつ反応してくれました。先生方の一部も苦笑しています。

「ダーバーを渡れる様になるまで停学のままといふのは?」

「止めるー」

「そうですか。まあ、処分の方は先生方で検討をお願いいたします。次にネギ先生、先生がエヴァンジエリンさんに行つた指導内容を仰有つていただけますか?」

「…はい」

ネギ先生の口から桜通りの一件から、明日菜さんへのパートナー申し込み、茶々丸さんへの襲撃、エヴァンジエリンさんとの決闘まで話されました。……茶々丸さんにまでちよつかいをかけていたのですか、ネギ先生…

学園長がエヴァンジエリンさんと茶々丸さんに確認をとりましたがおおむね間違いはないそうです。

「僭越ですが申し上げます。エヴァンジエリンさんが先に手を出したのは原因ですが、その後のネギ先生の対応は私にとっては異常としか思えません。それとも麻帆良では先生が生徒に決闘を申し込む

のが当たり前ののでしょうか、シスター・シャークティ？」

とりあえず、常識っぽい方に振つてみます。普通と答えられると拙いのですが。

「いえ、そんなことがあります

「しかしじゃの、ネギ先生も必死じゃったのだし」

「それがわざわざ、ネギ先生をエヴァンジエリンさんの担任に抜擢した人の言葉でしょうか？事前にネギ先生や他の先生方に説明を行えば何事も起きなかつたのです。いえむしろ、この様な事態になる様にお膳立てまでしてみせた。エヴァンジエリンさんはあえて乗つたのでしうが、他の人間を掌の上で踊らせるのは愉快ですか？」

「……とにかくお主達はどうしてあの場におつたのじや？」

あきらかに話をそらしていますが避けては通れない話題でしょうか
ら乗つておきましょう。

「迷惑なことです、ネギ先生の使い魔と称するケダモノが明日菜さんにパクティオーとやらを要請してきたので、とりあえず私と明日菜さんがネギ先生とエヴァンジエリンさんを説得しようと大橋まで赴いたのです。私たちが到着したらネギ先生は安心したのか意識を失つてしましましたが、エヴァンジエリンさんもこひらの説得に快く応じてくれました」

後ろで明日菜さんがニヤニヤしている気がしますがほつておきましたよ。

「どうして、ネギ先生たちが大橋にいると分かったのじゃ？」

「桜通りから延々と痕跡が残つていましたか？」

「どうやら、私たちの戦闘は直接見られてはいなにようですね。ならば出来るだけ忘れておきましょう。」

「龍宮君」

「一いちうで確認できたのはネギ先生とマクダウエルの鬭いだけだが、刹那さんと真名さんが呼ばれていたのは二人が監視者だったのでしようか？それならば、前回の口止め料がまだ有効なのでしょう。念のため もう少し保険をかけておいた方が好いかもしません。」

「わかった、今日はもう遅いので帰つて好いぞ。処分は追つて連絡する」

学園長が云います。さて、帰る前にもう一仕事です。

「恐れ入りますが、ついでにお願いがあります」

「…なんじゃ」

「最近、女子寮内で下着の窃盗事件が頻発しているのです」

「そうか。わかった、早速調査しよう」

「いえ、犯人の田星はついているのですが」

ポーチから封筒を取り出し中の『写真を学園長に見せます。

「ん、なんじや、動物のいたずらか？」

「いえ、そこに[ア]つっているのはネギ先生の使い魔です」

私の一言で部屋の空気が重くなります。ネギ先生も写真を見てカモ君と呟いています。

「これは有志の方が隠しカメラで撮影した犯人の姿です。他にも目撃者は複数います。ついでに発信器を取り付けたおどりもつかませておりますが、ネギ先生も認めているようですので必要ではないでしょうか。さて、ネギ先生、これが昨日までの被害の明細ですが弁償をお願いいたします」

合計金額が6桁の明細書をネギ先生に渡します。金額も被害者の方の言い値ですからね。金額を確かめてネギ先生がうめいていますがしかたありません。

「よもやネギ先生の命令で下着を集めていたとは思いませんが、人語を操るケダモノのさわった下着を持ち主に返却するわけにも参りませんので弁償という形をとつて頂きたいのです。それと、女性の先生方のどなたかに盗まれた下着をきちんと処分して頂いてほしいのですが」

「つむ、わかった…」

「それでは、[イ]きげんよう、皆様」

そう云い残して、部屋をしました。

〔近右衛門〕

子供達が出て行つた部屋で、ガンドルフィー君に詰め寄られとる。ちなみにネギ君も帰らせた、下着の件でしづな先生をつけとる。

「くわしい、事情を話してください」

「うむむ、仕方があるまい。儂は覚悟を決めて話し始めた。

「今回の件は儂の仕組んだことじや。ネギ君とエヴァンジエリンを鬭わせてネギ君をきたえるつもりじやつた。エヴァンジエリンも恨みこそあれ子供は手にかけんじやうからうから。既に教えなかつたのは勝手に手助けされると拙いと思つたからじや」

「我々を信用していないのは置いておいて、実際に生徒に被害が出ていたのは初耳でした。それよりもネギ先生を優先なさるとほどつ云つことですか」

「それについては生徒には悪いことは思つとる。しかし、エヴァンジエリンに頑張つてもらわねば襲わせる意味も無くなるじの」

「納得できません」

「やうじやの。出来れば儂も他の方法をとつてもらいたかったが警告程度ではエヴァンジエリンも方法を改めなかつたから」

気がついたら共犯じやつた、と云つてもわかつてもうえんじやる。

「関係ない一般の生徒が襲われていたんですよ…」

「うむ、しかし、先ほどの正木吹雪の言葉はエヴァンジエリンを糾弾するようでいて実際にはこちらの動きを撃討するものじゃったの。

「確かに被害者が把握できなければ罪として成立しない。エヴァンジエリンに聞いても惚けられるじゃろ。しかも隠蔽したのはエヴァンジエリンではなく麻帆良の認識阻害魔法では責めようがない」

儂の言葉にガンドルフィー二君は悔しそうな顔をする。

「儂自身の弁明は無いがエヴァンジエリンには吹雪くとの云ふうどおり停学が妥当かもしれん」

「それよりも、エヴァンジエリンを今後学園の警備につかせることやこのままネギ先生のクラスに在籍させるのも問題です」

「確かに問題もあるうが警備に人手が足りないのも事実じゃ。それに今回エヴァンジエリンが云つておつた通りあやつも他人から魔力を補充しないかぎりネギ先生に挑むことは不可能じゃ。監視さえ怠らなければ問題はない」

なおもぶつくも云つておるがここは無視じゃ。エヴァンジエリンにはまだやつてもらいたいことがある。

「ネギ先生とエヴァンジエリンの決闘は双方とも怪我がなく、一応闘う前に交戦の意志を互いに確認してあるので魔法使いどうしの私闘扱いとし、これは双方への叱責のみとする。ネギ先生の使い魔の件はネギ先生に処理をまかせて妥当じゃない場合のみこちらで修正を加える」

ガンドルフィーー君も仕方がないと云つた風情で黙つてゐる。あきらかにネギ先生びいきの裁定じやからの。むしろH'ヴァンジエリンへの貸しになるかもしかん。

「で、学園長ですが、今後独断専行は控えてもらえますか」

「うむ、わかつた」

とりあえず今日の所はこれで仕舞いじや。しかし警戒すべきは正木吹雪じや。どうやら最近扱いにくくなつた桜咲刹那が結託していたば。となると、龍宮真名の証言もあやしいの。監視者をかえるべきかの？

19話 スターブックで

2003年4月16日 水曜日

〔吹雪〕

朝からエヴァンジーロンさんは登校しね、ギ先生も表面上、普通の授業を行っています。チラチラこちらを見なければですが。

放課後、エヴァンジーロンさんと茶々丸さん、明日菜さんで街のオーブンカフェで今後の相談です。

「とにかく、いいわけですか？」

「ん？」

「ええと、のぞき見したり聞き耳を立てるのはいかないかと」

「ああ、魔法的にはいないな」

「防犯カメラにはマスターと吹雪さんは背を向けています、隠しカメラやマイクの電波は受信をていませんので盗聴、盗撮の可能性も低いです」

昨日の今日で事件の関係者が隠れて密談をするのは拙いと思い、ある程度向こう方に監視をせりふもつです。

「で、学園長からは」

「来週の修学旅行は病欠扱いで停学だそうだ。しかも、お前が云つたとおり水泳の授業だ」

「マスターは水の中で田をあける」とも出来ません

茶々丸さんに暴露されました。なにやら茶々丸さんにねじを巻いていますがおしおきなのでしょうか？

「そうですか、まあ、その程度ならば問題ないですね」

「Jijiで軟禁処分にでもされたら私が困るところでした。

「ところで茶々丸さん、茶々丸さんの創造主は聰美さんと鈴音さんですが、お一方に茶々丸さんの記憶が流れることはありませんか？」

「管理者権限で記憶の閲覧は可能です」

「では、申し訳ありません。しばらく席を外してもうれますか」

「茶々丸、買い物にでも行つて」と

「Yes マスター」

茶々丸さんには悪いのですができるだけ情報を知るものは少ない方が秘密を守りやすくなります。

「では、まず私の正体からですが、分かり易く云えば宇宙人ですか。正確には地球に流れ着き地球人と結婚した異星人の子孫になります」

「胡散臭さは超の火星人なみだな」

「はは、本当に超さんも火星人だつたりして」

「てつとり早く宇宙船を呼んで宇宙へお連れすることも可能ですの
でそれまでは話半分でも信じてもらえれば結構です。
私たちは寿命や能力のせいで地球人と交わって暮らすのが難しいの
で成人したら宇宙の方で生活をしてあります。私も今まで御先祖さ
まの生まれた星にやっかいになつておりました。

さて最近、この麻帆良にあるものが発見されました。くわしくは機
密ですのでいまは云えません。仮に原子力発電所みたいなものと云
つておきましようか。

宇宙でも私の国だけが運用可能な筈の原子力発電所が何故かここに
あり、現地の人間がそれを利用している。まず、ここに原子力発電
所がどうやって作られたものか？ 現地の人間が作りあげたものな
のか？ それとも我が国が漏洩していたのか？

例え我が国の技術でなくとも他の国がこれに気づいて原子力発電所
を奪取されると我が国のアドバンテージがなくなります。また、原
子力発電所の運用に失敗して周囲に汚染をされたり、原子力の力で
宇宙進出されると我が国も非常にやっかいなことになるので調査に
参りました」

「なんなのその原子力みたいなものって」

「私には見当がついたが」

まあ、魔法使いのエヴァンジエリンさんにはバレバレの比喩だった
かも知れません。

「こ」の麻帆良には認識阻害の魔法や結界等があるようなのですが、

我々にはそんな概念がありませんのでアドバイザーとしてHゴアンジエリンさんに協力をお願いしたいのです」

「まあ、面白そつた話だな。ところで私の呪いはとけたのか?」

「…銀河最高と謳われた天才科学者ですので能力的には問題ないかと」

「やうか? よほよほの爺に魔法などと云ひ異文明に対応できるか?」

「我々は延命調整といふ技術で一般の方々でも千年弱の寿命と老化防止を行つておつます。また、見た目も若いまま方も結構ありますよ」

「お前もやうなのか?」

「私の場合は遺伝子障害みたいなもので成長自体止まつております」

「……それで、そいつは何時に来れるのだ」

「今、岡山県に住んでいらっしゃるので、GW中にでもお招きしようかと」

「おかやまー?」

胡散臭そうに仰有りますが現にそつのですから仕方ありません。

「宇宙では有名すぎるためここに隠棲なさいてこると思つてください。宇宙一の哲學、いえ科学者ですので」

「まあ、期待せずに待つでおこひへ

やや苦虫をつぶした様な表情のエヴァンジエリンさんです。

「その、宇宙入って話、私に聞かせても大丈夫なの？」

明日菜さんが心配そうに仰有ります。

「まず、第一にお一方とも私が信頼するに足りると判断しました。次に具体的な証拠さえ残さなければ言い逃れなど如何様にもできます。先ほどの鈴音さんの火星人発言も証拠が無い以上誰も信用しておりませんし。具体的に私が所属している機関さえ表にでなければいいとも思っています。

私もここにきてから遊んではばかりいた訳ではありませんので学園から退去命令が出ても潜伏しながら調査は可能と考えています。

まあ、明日菜さんにもこの話をお聞かせしたのは秘密の共有と申しましようか、うかつにべらべらお喋りされてたらどうなるか、やくざ映画など「覧になつた」があれば想像がつくでしょう

「うそ？」

「はー、もちろん冗談です」

「おどかさないで」

ちょっと明日菜さんがイスから飛び退いていますが、それほど真実味があつたのでしょうか？実際に明日菜さんを共犯者化して情報を守らせようなどは考えていません。

むつとも私が勝仁さまから天地さまたちの話を聞かされたのはそう

「云つ意味もあつたと思つていますが。しかし、あんな情報どこに売
りつけができるでしょうか。敵に回る者の大きさを考えれば割
に合ひ話ではありません。

「失礼しました。さてこの件は今日までにいたしましたか。
……話は変わりますがエヴァンジョンジョンさんは相坂さよさんについて
は何か」存知でいらっしゃいますか？」

「変なことを聞くな、宇宙とやらに関係するのか？」

「いえ、単に興味だけです。私のルームメイトですので」

「ふふ、つづくクラスメイトに入れ込むのだな、まあ好い。相坂
さよは幽靈だ。ずっと、あの教室、あの席にいる」

「つか、幽靈？」

「ああ、やうやく」とでしたか」

「あまりびっくりしていない様子だな、正木吹雪」

「靈魂についてはどちらもある程度研究されておりますので、そ
う云う事例が確認されているのは知っております。ただ、むやみに
関わっていい問題でもないのですが」

アストラル界はうかつに触れたたりがありますからね。皇家の
樹に携わっていると実感できます、触らぬ神に……瀬川さまの
ことではありませんよ。

「……こんなにちわ、エヴァンジョンジョンさん、明日菜さん、吹雪さん

突然ネギ先生が現れました。昨日の騒動のメンバーが顔をつき合わせて話しをしていれば声もかけたくなるでしょうね。

「ふん、ぼーやか」

「！」モグモグ、ネギ先生」

「！」ヒンヒンははは

一応空いている席を先生に勧めます。

ネギ先生は昨日の事を改めて謝罪され、一応エヴァンジエリンさんも謝罪を受け入れました。昨日の闘いぶりから見ると、ネギ先生とは完全に遊んでいたのであまり拘りはない様ですね。

「それで、エヴァンジエリンさんに訊きたいのですが、サウザンドマスターを知っているのですか？」

「知っているとも、この学園に縛り付けたのは奴だからな

エヴァンジエリンさんは麻帆良に入学する経緯をネギ先生に話し始めました。それとネギ先生のお父さまについていも。けつこう、ちやらんぽらんな人みたいですね。むしろネギ先生が神聖視しそぎていると云つた方が正しいのかもしませんが。

「そんな 奴が サウザンドマスターが生きているだと

逆にネギ先生からの情報では、先生は6年前にお父さまと会つており、そのとき頂いた杖が証拠だそうです。ネギ先生のお父さまが生きていると云う情報にエヴァンジエリンさんは「満悦の様子です。

「京都だな。どこかに奴が一時期住んでいた家があるはずだ」

「京都ですか？」

「ちよつとよかつたじゃない、ネギ先生。来週から京都に修学旅行じゃない」

「本当にですか？」

「はい、そうです。しかし、残念ですね。ネギ先生」

「？」

ネギ先生が不思議そうな顔をしています。何故でしょう。

「いえ、せっかく京都までいっても訪ねる暇が……あの、ネギ先生？ 修学旅行の引率をほっぽりてお父さまの家をお探しになるつもりではありませんよね？」

「いえ、その、休みも旅費もないのに……服の弁償代で……」

致し方ありません。自業自得と云うものです。

「ネギ先生はマギスティル・マギになるために教職についているのですが、ネギ先生のお父さまを捜す事はそれとは関係ありません。お父さまの捜索を優先させる」とはマギスティル・マギから離れる「」となると思うのですが？」

ネギ先生は難しい顔をして考え込んでしまいました。子供に親を捜

すな、と云つのも何なのですが無自覚で行われるのはよしとしません。無論、考への末に選んだ結果に口をはさむつもりもありませんが。

「服の弁償代と云ふば　あのいたちは処分されましたか？」

「処分ですか？」

「人語を解す生き物ですから物の価値觀は判るはずです。下着を集めた事も窃盗と知りつつ行つたとしか思えません。弁償したから罪が無くなつたとは云わせませんよ。ネギ先生がきちんとした罰を与えて、今後の予防策を私たちに提示できない場合は害獸として駆除させて頂きます」

「駆除ですか？」

「真名さんに頼んでモーテルガンで狙撃でもして頂きましょうか？」

「ひえー」

真名さんの妙にリアルなモーテルガンを知つてゐる明日菜さんが悲鳴を上げます。ネギ先生の背広のポケットからもぐもぐした声も聞こえます。

「はい！　すぐに検討します」

とネギ先生が逃げる様に帰つてしまつたのでそこで私たちもお開きになりました

20話 3・A西へ（出発準備）

2003年4月17日 木曜日

「ネギ」

いきなり学園長に呼び出されて修学旅行が中止になつたと云われたときはびっくりしたよ。確かに吹雪さんには釘を刺されているけどチャンスがあるなら父さんの家の手がかりを見つけたいし、純粹に日本の古都、京都・奈良の方がヤンキーのハワイよりずっと良い。結局、僕が特使として学園長いや、関東魔法協会の長の親書をもつて訪問することになった。降つてわいた大役だけどこれが成功すれば立派な魔法使いに一步近づけるだろう。

「吹雪」

放課後、修学旅行について懸念事項があると云つて刹那さんの部屋にいつものメンバーが集合しています。

「実は修学旅行で関西呪術協会は魔法先生の京都入りを拒否したのですが学園長がネギ先生を親善特使として派遣することを関西呪術協会に通告してきました」

「では昨日までに刹那さんからも相談されて知っていますが。

「それで最終的に関西呪術協会は？」

「何の『メントもしてこません』

「と云つことは最初の状態を維持ですね？」

「はい、基本的に関西呪術協会は魔法先生自体を西洋魔術師の隠れ蓑とみなして不快感を持っています。裏は裏に徹して表に出ない、と云つのが今までの日本の術者ですので。

しかし、本当はこのかお嬢さまが麻帆良からでて護りの薄い普通の旅館に滞在することに詠春様が危機感を覚えて回避しようとしたのですが」

京都に観光に来るな！ と云つのもおかしな話ですからね。静いが起きそだから来てほしくないと云つてしまつと逆に管理体制に問題有りと取られかねません。

「結局学園長がゴリ押しを？」

「はあ、いえ、一応京都行きはクラスの決定らしいので」

それを盾にして京都行きを決定ですか。さて学園長の真意はどこのあるのでしょうか？ ある意味挑発行為ですが鉄砲玉をネギ先生に与せるとも思えません。

ここでは関西呪術協会と戦争でも始められると麻帆良の警戒レベルが引き上げられ調査に支障ができるのは必至ですんとか穩便にすむようにするべきでしょ？。

「ところで刹那さん前々から思つておりましたが、刹那さんの得物は野太刀ですよね」

「はい、そうですが

「修学旅行にも持参されるのですか？」

「はい」

迷いの欠片もなく仰有りますが、

「世間一般には銃刀法と云うものが…」

「そ、それは符で認識を阻害できるので大丈夫です」

「……例えば京都で木乃香さんと刹那さんが並んで歩いているときにお巡りさんと出会いました。そのとき何者かが刹那さんの術を打ち消しました。修学旅行生には不似合いな背中のものに気がついたお巡りさんが質問してきました。さてどうします?」

「……」

切り捨てます、と云われたらどうしようかと思いましたがまだ常識はありますよね。

「神鳴流とは野太刀以外は使えないのですか?」

「いえ、神鳴流は武器を選びません。ただ、この太刀、夕凪は長からお嬢さまの護衛に選ばれた際に託された物です」

「それにこだわってトラブルを巻き起こしてどうしますか? 詠春さんもその夕凪を刹那さんに預けたのは、木乃香さんを託すにあつて感謝と信頼を形に表したのであって、それにより刹那さんの護衛の仕事に支障をきたすのは本意ではないでしょう。それに修学旅

行中の移動は電車、バス、タクシーなどですが、混雑した車内でもそれを振り回すおつもりですか？」

「刹那さん… 多分口では勝てないからあきらめたほうがいいと思うよ」

「なにか私がわがままを云つているみたいじゃないですか？ 明日菜さん。

「今回の修学旅行で詠春さんが麻帆良の受け入れを拒否しているのは何か関西呪術協会側に動きがあると見るべきでしょう。木乃香さんの護衛ならば攻めより防御に重きを置くべきだと思います。敵に襲われた際も敵の殲滅よりも木乃香さんをかばいつつ逃げるべきだと思つのですが刹那さんはどう思われますか？」

「いえ、それは理解しているのですが」

「太平洋戦争当時日本海軍の軍艦には菊の紋章、天皇家の家紋が付けられていました」

「？」

「戦争などで艦が沈没するとき天皇陛下の持ち物である軍艦を損なうことをわびるため艦長が艦と共に沈むことが度々ありました。当時周りの人間はそれを賞賛しましたが、今の私たちからすれば人材を無駄にするだけで戦争にはなんら寄与しない行為でした。刹那さんが詠春さんからお預かりした夕凪を大事に想われるのは私にも推察できますが、それにこだわりすぎて大局が見えなくなるのはよくありません」

「……そうですね。今回、夕凪は置いていきます」

「しかし、そうなると、難しいですね。野太刀がだめだから普通の刀と云うわけにもまいりません」

「なら木刀がいいんじゃない。修学旅行のお土産の定番だし」

明日菜さんのアイデアですが結構良いですね。

「そうですね、木刀ならそれほど不自然ではないですね。氣で強化すればその場はしのげます。あと、用心のため短刀も用意します。これなら大丈夫ですよね」

私はアドバイスのつもりなのですが決定権はこちちらにあるのでしょうか？

「それは刹那さんの判断に任せますが鞄内に収まるものならばいいと思いますよ。それと、投げることもできる細身のナイフを忍ばせておくと便利ですよ」

常識かもしれないですが一応アドバイスしておきます。

「それとエヴァンジエリンさんと茶々丸さんは欠席されるので6班は3名になります。何とか理由をつけて5人班に振り分けられる様にしてください。刹那さんは5班に」

「うん、私が引き取る様に先生に云つよ」

5班は明日菜さんが班長でメンバーに木乃香さんがいますのでは非とも刹那さんを入れておきたいですね。ちなみに班分けは以下の通

りです。

第1班（5名）

柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子、鳴滝風香、鳴滝史伽

第2班（6名）

古菲、春日美空、超鈴音、長瀬楓、葉加瀬聰美、四葉五月

第3班（5名）

雪広あやか、那波千鶴、長谷川千雨、正木吹雪、村上夏美

第4班（5名）

明石裕奈、朝倉和美、和泉亜子、大河内アキラ、佐々木まき絵

第5班（5名）、

神楽坂明日菜、綾瀬夕映、近衛木乃香、早乙女ハルナ、富崎のどか

第6班（5名）

桜咲刹那、絡繹茶々丸、龍宮真名、エヴァンジェリン・A・K・マ
クダウェル、ザジ・レイニー・ディ

先頭の方が班長です。

「それじゃ、龍宮は吹雪さんのところに」

「いえ、真名さんには4班に入る様にしてもらえますか？」

「別に構わないが、何故？」

「云つてみればネギ先生対策です。関西呪術協会といざいざが起
るとしたら、第一に木乃香さん、次にネギ先生がらみでしょう。今

現在、ネギ先生と親しいのはあやかさん、まき絵さん、のじかさんですね。班単位の行動時、ネギ先生を誘う可能性が高いので、もしそうなつたら注意をお願いします。刹那さんは木乃香さんの護衛を第一に、明日菜さんは問題が起こつたら私が真名さんに連絡をしてください」

「なるほど、了解した。あそこには朝倉もいるからちょいと良い」

「じゃあ、私もパルには気をつけろわ」

今回の修学旅行中、真名さんに協力を依頼しています。基本1時間／¥10,000で契約しています。戦闘などの危険手当は別途支給。弾薬等の消耗品も此方持ちです。破格の待遇だと真名さんには云われましたがやはり14歳の少女を危険な目に遭わせるのは年長者として気が引けます。もちろん真名さんの実力は確認済みでの話なのですが。

「しかし、吹雪ちゃんも大変よね。結局、ネギ先生たちの後始末まで考えなきゃならないなんて」

「理不尽だと思いまが、だからといってこちらの都合だけではうまくいきません。時には『損して得取れ』と思つて行動した方が良いことが多いのです」

それがす―――つと続くのは、いかがなものかとは思いますが……

21話 3・A西へ（一田田）

2003年4月22日 火曜日

「ネギ」

さて、今田から修学旅行だ。教員は早めに集合地点まで行かなくてはいけない。うん、楽しみだから早く行きたい訳じゃないよ？

「でも本当にたのしみだなあ。日本の古都の京都・奈良に五日間も行けるなんて修学旅行つて何て素晴らしいんだー」

「しかし兄貴 関西呪術協会の長への親書つてのもあるし油断すんなよ！」

「うんサウザンドマスター住んでた家も、もしかしたら関西呪術協会の長さんなら知っているかも」

集合の大宮駅に着くと新田先生やしづな先生、瀬流彦先生がすでに集合していた。もちろん遅刻じゃないけど一番乗りしたかったな。他にものどかさんやまき絵さん達も集まっていたのには驚いたけど、みんな楽しみにしていたんだね。

「それでは京都行きの3A 3D 3H 3J 3Sの皆さん。各

クラスの班ごとに点呼をとつてからホームに向かいましょう

しづな先生の命令により、よいよ修学旅行が始まった。

1班から順に『全員集合』の報告が来たが6班の桜咲さんからエヴァンジエリンさんと茶々丸さんが欠席して3人になってしまったと云われた。しまった、前々から一人が修学旅行に参加できないのはわかつたけど班分けまでは考えてなかつたよ。

「6人班もあるんだから5人班にふりわけたら? セつかくの修学旅行なんだからみんなでわいわいしようよ。刹那さん、うち来る?」

「は、はい。お願ひします」

僕が考える間もなく出欠の報告を終えて近くにいた5班の班長の明日菜さんが刹那さんをひっぱつていつてしまつた。

「明石、頼めるかな?」

「もひ、OKだよ」

龍也さんは4班へと移つていつた。

「じゃあ、ザジさんは我が3班へ」

「(ハク)」

あれよあれよと云つ間に問題が解決してしまつた。でも、あやかさんつて普通にザジさんとハリコニケート出来ているよね…

〔吹雪〕

ネギ先生が『6人班から一人回して4人にしましょつ』など云い出す前に無事に刹那さんを5班に送り込むことができました。明日菜さん上出来です。

東海道新幹線 ひかり213号 新大阪行きが発車してから改めてしずな先生とネギ先生からの出発の挨拶がありました。

しばらく何事もありませんでしたが、いきなり、そこかしこにカエルが出現しました。と、同時にものすごい勢いで移動する人影が！

犯人かと思いましたが楓さんでしたね、もしかして苦手なのでしょうか？カエル。

ふつうのアマガエルでしたが大きさ拳大なのでインパクトが大きかつたのですね。数も数ですし、予想外の場所でしたので車内はパニックになりました。

まあ、普通に考えれば関西呪術協会の妨害でしょうがいつたい何の意味があるのでしようか、と思っている矢先に封筒をくわえたツバメが通り過ぎ、それを追つてネギ先生が走つていきました。早くも親書を奪われましたか？まあ、あちらは今刹那さんが偵察にでかけているのでうまくやつてくれるでしょう。

しばらくすると刹那さんが戻ってきました。

「途中、ネギ先生と出合いませんでしたか？」

「はい、式神が親書をくれていましたので回収し、ネギ先生へ返しました」

「「」へりもでした。で、術者は？」

「いえ、やぢりのまつせつぱつです」

トイレに籠もられたいたら巡回しただけではむりでしょう。もつとも逃げ場も無いので誘拐などは不向きですし下手に術をつかえば自身を巻き込んでしまいますし、車内ではこれ以上は無理でしょうね。

「先ほどのカエルは陽動でしょうか？」

「はい、あちらも式神でしたので同一犯と思われます」

「多分、小手調べと云つたところでしょうか？ 次は京都に着いてからと思こますが気はぬかないよつこたてしましょう」

「はい」

それ以後何事もなく京都に着き、京都駅からバスで清水寺へ移動しました。清水寺近辺の出店で早速刹那さんが木刀を買つていました。

「せつちやんはほんと剣道がすきやね」

木乃香さんにからかわれています。

しかし、ここでも妨害が起きました。落とし穴はともかく音羽の滝にお酒を混入されたのはちょっと頂けません。酔いつぶれたクラスメイトをバスに押し込んでホテルへ移動しました。

「刹那」

まったく犯人は何を考えているのだろう？ やつてすることは子供のいたずらだが式神の術者の実力はかなり高いかも知れない。目標がお嬢さまかネギ先生か、それとも両方か？

「なあ、せつちゃん、なに、むづかしい顔しとる？」

「このちゃん、折角現実から目を背けているのに引き戻さないでください。」

5班に編入された私は班行動や就寝をいつしょにできると内心喜んでいましたが、そう、お風呂までいっしょなのでした。

あれ、なんかかなりじきじきしてきました。武人の心得として着替えや食事など早くするようにしている私はさつさと脱いでしまい、このちゃんが脱ぐのをゆっくり観察……いや、何してる？ 私！

そのとき、露天風呂から人の気配がしました。このホテルは麻帆良学園のみが宿泊しているはずだし、女性教諭はしづな先生だけです。入浴は3・Aからだが、まだほとんどの生徒がダウン気味だったの私たち3人が一番乗りはずです。

「さきにいっています」

露天風呂は湯煙で見通しが悪いが、誰かが隠れている気配がします。

「誰だ？」

一瞬迷ったが誰何の声をかける。無関係な人を巻き込むわけにはいかないし、例え敵を逃がしてもこのちゃんさえ無事なら問題ない。手ぬぐいをお湯で濡らしてもつ。武人がもつ濡らした布は鈍器と同じだ。

ゆっくり、気配がする音に近づくと、

「風花 フランス 武装解除 エクサルマティオ」

いきなり呪文を唱えられた！ 西洋魔術師か？ 手にした手ぬぐいが吹き飛ばされるが構わず回り込み相手の首に手をかけた。

「ネギ先生？」

そこにいたのはネギ先生だった。なぜ、女湯にネギ先生が？ もしかして、このちゃんを覗くつもりか？

左手でネギ先生の急所をつかむ。このちゃんを汚す奴など、つぶす

！ いや もさる！

ネギ先生から奇怪な声があつた。

「くえ
「ひやあああーっ」

重なる様に脱衣所からこのちゃんの悲鳴が！

急いで戻るとここのちゃんと明日菜さんがおさるに襲われている。脱衣所に置いておいた木刀をつかみ、このちゃんを襲うおさるをなぎ払う。低級の式神らしいおさるは氣で強化した木刀の一撃で術がと

け符にもどる。

「明日菜さん…」

もう一方の明日菜さんを見ると……明日菜さんにもおれるはひとつ
いているが明日菜がさんの蹴りや突きで符に戻つていく。確かに低
級な式神だが一般人の攻撃で符に戻るわけはない。なぜだ？

全ての式神を倒しはしたが……このちゃんとどう説明しよう。

「せつちゃん、ありがと」

「いえ、お嬢さまも」無事で

「ふー、また、お嬢さまに戻つとる」

「いえ、その……ああ、実はネギ先生がなぜか風呂場にいたんですね
が」

あれ、ネギ先生はどうしたのかな？

……
バスタオルを体に巻いて露天風呂に戻るとネギ先生が浮かんでいた

刹那さんから呼び出され6班の部屋にいます。この部屋は6班が無

〔吹雪〕

くなつたのでだれも使用していません。そこに明日菜さんと剣那さん、そしてネギ先生がいます。あと ケダモノも…

「おひおひ、きつきり吐いてもらおうじやないか！」

なぜか ケダモノが偉そに剣那さんに詰め寄っています。

「どういたしましたですか？」

「お風呂について、先に剣那さんだけ脱衣所をでたんだけど、なぜか浴場にネギ先生が居て驚いた剣那さんがネギ先生を氣絶させてしまつたの。そしてここに連れてきたんだけど、カモが剣那さんを関西呪術協会のスパイだと云い出して」

明日菜さんが説明してくれます。ネギ先生はと見れば回復されたようですね。

「生徒名簿にもちやんときょーとかみなるじゅーとか書いてあるしネタは上がってるんだ！」

「人を犯人扱いされるならそれなりの証拠と覚悟はおありなのでしようか？ ネギ先生」

「でた！」

いたちが何か云いましたか？

「確かに明日菜さんたちは露天風呂に向かわれた筈ですが？」

「そうだよ」

なんで、そんな所にネギ先生がいたのでしょうか？

「そんな、ちやんと男湯と暖簾が掛かっていましたよ」

もしかして、これもいやがらせの一連でしょうか？

「新幹線のなかで親書を奪われそうになつたとき、ここにが奪われた親書を持っていたんだぜ」

「それは式神を切つて取り戻したんですね」

「どうだか、ばれそなつたから返しだけじゃないのか？」

刹那さんもケダモノと水掛け論をしてる場合ではないでしょ。

「以前、学園長から刹那さんが木乃香さんの護衛であるとお聞きしたのを覚えていらっしゃいますか？ネギ先生」

「はい、はい、覚えてます」

「学園長が刹那さんの身分を保障しております。信じて頂けないでしょつか？」

「…わかりました」

なにか、いやいやっぽいですが刹那さんは何かしたのでしょうか？

「学園長が話された通り木乃香さん自身の立場は関西呪術協会のながでは不安定です。木乃香さんが京都に来る、いえ、麻帆良を出る

」と何らかの動きがあるのを関西呪術協会の長が察知して今回の修学旅行を渋つていたのです。刹那さんもそのため過敏に反応したかもしれませんがそこはお察しください

「そうだったのですか。…わかりました、僕も木乃香さんの護衛、お手伝いします」

「お志はありがたいのですが遠慮させて頂きます」

「何ですか?」

「今回の修学旅行にまぎれて親書を関西呪術協会に渡すのがネギ先生の役目と伺っております。つまりはネギ先生は関西呪術協会から何らかの妨害を受ける可能性が高いのでそんな人物を木乃香さんに近づけたくないのです」

「うひ

強く云いすぎたでしょうか? とは云え、事実ですから。

「なあ、嬢ちゃん、兄貴と手を組むのは間近にメリットは見いだせないが、長い目で見たら関東魔術協会と関西呪術協会の橋渡しになつて木乃香嬢ちゃんにもメリットに成るはずだ。」(こは、仲良く…)

「いらっしゃる親書を渡されても早急には関係は改善されませんよ」

「なに…」

「お訊きしますが、ネギ先生は関西呪術協会に赴いて句をされようとしていたのですか?」

「それはもちろん親書を関西呪術協会の長に渡します」

「それで？」

「え？」

ネギ先生は不思議そうに私に云いますが、私としてはそんなネギ先生いや関東魔術協会に疑念を抱かざるを得ません。

「それで終わりですか？　：　関東魔術協会の親書とやらは、受け取つたら無条件に関東魔術協会と仲良くしなければならないほどの効力があるものなのしょうか？　だいたい、書類を渡すだけならば郵便でも電子メールでも手段はいくらでもあります。そもそも何故関西呪術協会と関東魔術協会が対立しているのかネギ先生はご存じですか？」

「…いえ、知りません」

「それでは、もし関西呪術協会の長が親書の受け取りを拒否したり、親書を受け取つても親交を結ぶつもりないと返事されたらどういたしますか？」

「それは読む様に頼んだり、仲良くするように説得します」

「いったい何がもめている原因か知りもせずに？　例え原因を教えてもらえたにせよネギ先生にいったいなにができるのでしょうか？　ネギ先生は英国からの研修生ですから正式な関東魔術協会の魔術師では無いと思いましたが？」

「…はい」

「親書を渡す、と云うのは歴とした対外交渉の一環です。関西呪術協会の中には、まったく地位のない者が親書を持つて交渉の席に臨むこと自体侮辱だと考える者もいるかもしれません。体面とか面子を重視するからです」

「それでは、僕のしていることはまるきり無駄なのですか？」

「困ったことにそういうきれない部分もあります」

「えつ、そなんですか」

「ただし、それは関東魔術協会からみた場合の話です。誰にかは判りませんが、関東魔術協会が関西呪術協会との友好を求めていると云うアピールになります。また、それをネギ先生…いえ、サウザンドマスターの息子が行つと云うのも大きいのかもしれません」

「あの、吹雪ちゃん。なにか思い切り生臭い話なんだけど

「周りにアピールすることで外堀を埋め関西呪術協会を交渉の場に引きずり出すのが目的ならば長期的な視野から見れば和平に有効でしょう。

話を戻します。関東魔術協会の特使になられた先生は実情がどうであれ今現在、京都にいる関東魔術協会の代表です。その様な方に庇護を受けるのは木乃香さんの立場がまだ微妙なためプラスになるかマイナスになるか判りません。ここであえて博打を打つこともないと思い先生の申し出を辞退させて頂きます」

「しかしだな、嬢ちゃん。ともかく関西呪術協会の妨害あるのは事実なんだしクラスのみんなも危ないんだぜ」

「そうですね、ですが私は今日の一件は妨害と云うより、嫌がらせ、いえ、あてこすりと云つたものだと思っておりますが」

「あてこすりですか？」

「関西呪術協会が関東魔術協会と折り合わない原因の一つに魔法の秘匿に関する両者の見解の不一致があります。ともに一般の方々には魔法を秘匿するのが原則らしいのですが、関西呪術協会からみて麻帆良学園とはそれを守っていないのです。元々一般的の学校だったところに魔術師が潜んでいるのではなく、魔術師が作った学園に一般の生徒が通っているからです。

魔術を一般人から遠ざける理由として魔術が危険であると云うのがあります。しかし、麻帆良では逆に一般の人を呼び込んでいます。穿った見方ですが麻帆良の魔術師が人間の壁として一般的の生徒を置いているとも考えられます」

「そ、そんなことはありません！」

「それなら、麻帆良の魔術師は一般生徒の安全に責任を持たなければなりません。しかし、今日のさわぎで、あのカエルが爆弾だつたり、お酒の代わりに毒が混入されたとしたらどうだつたでしょうか？『生徒が守れないなら巻き込むな』と云うメッセージにも思えるのですが？」

「云いたいこと云わせたもらいましたが部屋の温度をだいぶ下げてしましました。

「無論、今のは私の推測です。麻帆良には麻帆良の考えがあつて魔法使いと一般人が一緒に生活しています。私自身、取り立ててなんらかの被害を魔法使いから受けているとも思えませんし。

今、云いたいのは関西呪術協会と関東魔術協会には意見の相違が多数存在するため対立しているのです。親書を交わして仲良くしようと云うのは簡単ですが、どう仲良くするかは難しい問題なのです。あてこすりとは申しましたがこれ以上妨害が続くようなら、妨害を阻止するのではなく修学旅行自体をとりやめるべきでしょう」

「では、僕はどうすれば良いのですか？　親書を渡してはいけないのですか？」

ネギ先生が沈痛な表情で訴えかけてきます。　建前として私はあなたの生徒なのですが…

「ネギ先生のお立場からすれば職務を勝手に放棄されるわけにも参りませんから、とりあえず親書を関西呪術協会に届けるしかありませんねえ…

私や明日菜さんが刹那さんに協力しておりますがなんの力持たない身ですから簡単なサポート程度しかできません。基本、刹那さんに負担がかかります。

まあ、ネギ先生がご自分の判断でホテルの周囲や、木乃香さんがいる場所以外をパトロールされてもなんら止める権限はもちません。ですがネギ先生も狙われる立場なのでお気を付けください」

「はい、わかりました」

弾かれたようにネギ先生が出て行かれました。

「あんなこと吹き込んで大丈夫なの？」

「真名さんもおりますし大丈夫ではないかと。東からも護衛の方がついているのです？」

「確かに瀬流彦先生が今回一緒に……」

「ちょっと不安げに刹那さんが仰有ります。しかしネギ先生に落ち込まれるとクラス全体が意氣消沈しますからね……」

「まあ、しかし、恥ずかしながら、今まで今日のことは質の悪い悪戯だと思つていました。いえ、それ以前になぜ西と東が仲が悪いの考えたこともなかつたです」

「まあ、現場には現場の理論もありますから。あまり考えすぎるとかえつて動けなくなることもあります」

私は単艦行動の艦長でしたから「いつ」ことが気に掛かるだけなのかもしぬれません。

「それとは話が別なのですが」

そう前置きしてから刹那さんが懐から2枚の紙を取り出し短く呪文を唱えると紙は鳥に変化しました。

「式神です。お一人とも軽く握つてもうれますか？」

一応、云われた通りにしてみますが何ともありません。しかし、明日菜さんがさわった方は紙に戻ってしまいました。

「やはり… 先ほども脱衣所で式神に襲われたのですが明日菜さんが叩くと術が解けてしまつた様に見えたので」

「え？ エ？」

なるほど、明日菜さんには術を破る力が有るようですね。刹那さんがなんともない様なので還す力ではない様ですし、無効化と言つものでしょ？

「確かに興味深いです。ただ、どの程度の力か判りませんね。麻帆良に帰つてからゆつくり調べましょ？」

それでこの日は仕舞いになりました。

〔真名〕

「なるほど、いつ使う使い方もできるのか」

正木にもらつたこのサングラスは重宝している。どう云々理屈が知らないが金属や爆発物を検知できるので服の下に何かを隠していることが事前にわかる。最も正木自身 魔法に疎いと云つているのでこれは魔法具に関しては大して効果はない。

さて、今はネギ先生と入れ違いにホテルに入ってきた女性従業員だ。事前に正木からホテル従業員の顔写真を渡されていた。正面と側面

からとられた顔写真をこのサングラスに記憶させることにより自動的に判別してくれる。記憶させると言つても写真を見つつロントローラの鈎を押すだけだから手間にもならない。

データに一致した人間にはタグで名前が表示されるが一致しないと何も出ない。この様に…

「そこのお姉さん。」こは麻帆良学園の貸し切りでね。従業員でもないの侵入したら不法侵入で警察を呼ばれるよ

ワゴンの前に立ちはだかり静かに云う。相手は一瞬、表情を変えたがすぐに平静さを装つた。

「あら、うつかりしていました」

あつさりと女はひきかえしていった。残念ながら荒事にはならなかつたので、危険手当の上増しぬなかつたがクラスメイトたちの安全が優先だからな。

一応、メールで報告だけはしておいつ。

「天ヶ崎千草」

東のチビッコ先生がわざわざ結界を開けてくれたのにガングロの嬢ちゃんに見つかってしもた。

チビッコのうかつをからするとお嬢の護衛か？腕も立ちそつそやしわざと引き返したわ。

「千草はん、今日の襲撃はなしじですか？」

月詠はんかえ。

「ええ、潜入に失敗してんからに。けど本番はこれかいつやし、そ
からおきばりやす」

「モードすかー、残念どすが明日以降に期待しますー」

この娘はほんまに闘いが好きどすな。

云うた通り、これまでお偉いはんからの依頼の单なる齧しやつた
けどこれからほんまの目的を行える。愉しみどすわ。

2003年4月23日水曜日

〔ネギ〕

「うひょ、朝倉さんに魔法使いであることがばれてしまった。

高崎さんは畠田されたし、親書も届けなきやいけないし、朝倉さんにはばれてしまつたし、高崎さんには……」

いつの間にか思考がループしていた。

「おーい、ネギ先生ー」

「ここにいたか兄貴ー」

朝倉さんとカモくん！？なんで二人いつしょにいるの？

「兄貴、このブンヤの姉さんが味方になつてくれたぜー！」

「本当、カモくんー」

「報道部突撃班朝倉和美カモっちの熱意にほだされて ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していく」とこしたよよりしくね」

「本当ですかー」

「本当にだよ、今まで集めた写真も返してあげる」

「うわー、こきなり一番の難問が片付いたよ。ありがとうカモくん。

「俺つちとしてはパクティオーしてほしかったんだが…」

「ははは 富崎の話は聞いたからね。先生がちゃんと返事するまでそれはちょっとね」

「ああ、そっちも何とかしないと。」

「まあ先生、そっちの方は私にも考えがあるからさあ」

?

「カモ」

密かに朝倉の姉さんと計画しているのは名付けて『くちびる争奪!
！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』だ。実際は仮契約
カード大量GET大作戦なんだけど。修学旅行の雰囲気を利用して
広域魔方陣で多人数の一斉パクティオーだ。うまくいけば、カード
1枚につき5万オーバージョ\$だから、20人とやれば百万長者だぜ。

「しかしいんちは乗つてくるだろつけど吹雪が何と云つか」

「やっぱり吹雪の嬢ちゃんが障害か…」

「那波もこの云う所は嫌いじゃないしね。吹雪も割と寛容だけど他のクラスに迷惑になりそつたら止めにでるよ」

あの嬢ちやんは俺ら」とつて天敵だしなー

「なんとか、あの嬢ちやんを一時的に外せないかな?」

「難しいね。ちょっと考えてみるよ」

〔和美〕

ちょっとおじやまな吹雪に席を外してもいつのにあれこれ考えた結果、一つ案をひねり出したよ。

新田にお説教されてしまふれでいるみんなに向かって『くちびる争奪!!修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』のあらましを聞かせてみた。

意外だつたけどいいんちょも乗つてきた。少しは渋るかと思つたんだけどね。

「しかし、問題があるんだよねー、ちょっと耳貸していいんちょ

いいんちょに私が考へた計画を耳打ちしてみる。

「しかし、それでは…」

さすがにここはで少し渋るか。吹雪は3・Aで敵にしてはいけない奴トップ3の一人だ。ちなみに後の二人は那波と四葉だね。あたしはちがうよ？

いいんちょも吹雪がこの手のイベントに厳しいことは知っているし思案顔だ。もつともネギ先生が絡んでなければいいんちょが率先して反対したんだろうけどね。

「でも、いいんちょ富崎がネギ先生に告ったのは知ってるっしょ？」

「わ、私だつて…」

「いいんちょ、リングバーグって知ってる？歌手じゃないほう」

「何ですかいつたい？それはもちろん存じています。飛行機で最初に大西洋を横断した…」

「そう、じゃあ2番目にそれを行つたのは誰？それとも最初に太平洋を横断した人知ってる？」

「……」

「そう、人の記憶に残るのは偉大なる先駆者のみ。2番手も2番煎じもお呼びじゃないの。ネギ先生に最初に告白したのは富崎のどかで未来永劫絶対変わらない。しかも富崎は知つての通りの性格だ。それをふまえればネギ先生の富崎から受けた衝撃はかなり大きいよ？でも、そこにもつと大きな衝撃が加えられれば最初の衝撃を忘れちゃうかも？例えば地球を飛び出すくらいのね！」

「それが…キス」

「そう、でもネギ先生は歐米人だからかるーいキッスじゃ衝撃受けないかも？」

いいんちよはしばらく考えてから呟つた。

「雪広あやか、ここは心を鬼にして……やります」

くくく、墮ちたよ。

夜11時、いいんちよからメールがあつて、予定通り吹雪は思いがけず転んだいいんちよが偶然持つっていたシャンプーをたまたま全身に浴びて温泉へ行つた。

「さて、諸君。狩りの時間だ」

1班は鳴滝姉妹、2班は楓と古、3班はいいんちよと村上、4班は裕奈とまき絵、5班から富崎とゆえっち。ははつ富崎出陣となるといいんちよは負けられないね。

警備システムを拝借した実況中継の始まりだ。

やる気があるのは、いいんちよにまき絵、富崎とそれをサポートするゆえっち。あとはだいたいお祭り騒ぎに参加するのが目的の様だね。村上は人身御供つてところか？

いきなり、バトルが始まつたけど新田が現れさつそく村上と裕奈が消えていった。

富崎とゆえっちがそのどでくさに紛れて画面から消えた？そう云えば鳴滝姉妹も見えないな。と思つたらそれぞれ非常口や天井から現れたよ。

すぐさまバトルになつたけどゆえっちが鳴滝姉妹どころか騒ぎにつけられて現れた古ちゃんまで相手に奮闘している。まあ、枕越しとはいえ分厚い本で殴られたら結構効くよね。実際はアウトなんだけど口で丸め込んでいる。ゆえっちって吹雪に影響うけすぎてないか？

その隙と云うか、ゆえっちの捨て身の攻撃の間に富崎がネギ先生の部屋へと侵入した。ネギ先生はあらかじめ手足を縛つて猿ぐつわで声を出せない様にしておいた。出歩かれると拙いからね。

猿ぐつわを外した富崎はそのままネギ先生に口づけを…

よっしゃ、良い画撮れたよ！

トトカルチョもいいんちよが本命、まき絵が対抗富崎は穴だつたら結構もうかつた筈。

残念ながら、新田がまたも登場して仮契約パクティオはこれ以上できなかつたけど、そつちはあたしの領分じやないし、いいか！

2003年4月24日 木曜日

「のびか」

朝倉さんから一枚のカードを貰いました。

「昨日のゲームの豪華賞品!」

そうでした。ネギ先生とキスは勝利条件で賞品ではありますんでした。昨日のことは思い出すだけで顔から火が出そうだけ幸せな感じです。

タロットカードに似た意匠のカードの図柄は空中に浮かぶ本をめくる私です。ええ? どうやつていつたんでしょう?

「あと、伝言だけ取り出しどきは『アデアツト』、仕舞うときは『アベアツト』だつてさ、人のないことじやつてね」

こわつと耳打ちして朝倉さんは離れていきました。アデアツト? いつたいなんでしょう。

「ネギ」

今日は完全自由見学日だ。学園長の指示で関西呪術協会に親書を届けなきゃいけない。他の先生方にも連絡が届いているから単独行動は構わないんだけど、問題は僕の生徒たちだ。なぜかみんな僕を捜しているみたいだ。せっかくだけど今日はみんなにはつき合ひつ」とが出来ない……はずだったけど…

気がつけば3班と5班に捕まってしまったよ。

〔吹雪〕

いつたい昨日はなにがあつたのでしょうか？

あやかさんシャンプーをかけられてしまい、しづな先生にお願いしてもう一度温泉に入ったのですが、ゆっくりしていいですよ云われたのでつい長湯をしてしまいました。千雨さん、明日菜さんがつき合つてくれましたので、洗いつこしたり、長時間座つて腰が痛いといった千雨さんにマッサージをしてみたりしてゐつちになにか有つた様です。刹那さんの話では朝倉さんが主催でなにやらイベントがあつたみたいですが刹那さんもよくわからないそうです。

あやかさんは昨日からなにかそわそわしていましたが、今日は『庵つぶちですわ』と云つてどうしてもネギ先生と一緒にすると宣言していました。

私は京都はちよくちよく訪れていましたから今更観光と云うことでもないのどうでもいいのですが。昨日も大仏殿そっちのけで春日大社の全お社をお参りしていました。まあ、柘木神社の巫女ですから。

ともかくあやかさんはネギ先生から離れるつもりはない様ですし、図書館探検部の方々も引かないみたいですね。

しかし…… 完全自由見学の今日、親書を届けるのかと思いましてがネギ先生、私服でいらっしゃいますし違つみたいですね。明日も一応、京都市内ですから明日中に届けるつもりなのでしょうか？ 親書を届けるのが目的ならば初口に渡すべきだつたと思うのですが…… これではいかにも『観光のついでに親書を届けにきました』と云う印象になつて相手を不快にさせないでしようか？ 他人事ですか気掛かります。

それとは別に気になつたのはネギ先生が持つてゐる布が巻かれた棒はいつたいなんでしょう。わざわざ田立つ様に持つていらっしゃいましたが、それでいて、『そこを宿から出て行こうとするネギ先生、理解に苦しみます。

結局、大人数になつてしまひましたので近くにあるシネマ村に行くことになりました。

シネマ村で貸衣装をみんなで着ることになりましたが…… 千両さんの目が怖いです。

「なあ、吹雪？」

「コスプレならお断りです」

「いや、みんな着てゐるから、思ひ出づくんだ」

「セツドレジあるよ、吹雪殿なら着物が似合つ出すじゃねえよ、一ソーン

あら、楓さんが現れました。忍者装束ですね。

「出たな、忍者。お前それ自前だら?」

「なんの」とひい

なんやかんやで結局衣装を着ることになりました。私は振り袖ですね。緑色の地に青い蝶の絵柄です。千雨さんも振り袖で白地に水仙や牡丹の花が咲き乱れています。明日菜さんも白地に桜咲の花びらをあしらつたものを選んでいます。

「お前、着付けも出来るのか」

「まあ、簡単な帯締めならですが」

「…浴衣や巫女服もレパートリーに増やせるか?」

なにやら千雨さんが真剣に考え込んでいます。着付けができる「」とを見せたのは藪蛇だったのでしょうか?

「のびが」

カードに向かつて教えられたワードを呴くとカードは本になる。まるで魔法。

ううん、魔法以外に考えられない。

本にはまわりのみんなの考えていくことが記されていく。
だけど誰でもと云つわけではないらしい。名前を呼ぶ」とによつて人の表層意識を読むと注意書きにも書かれている。

偶然…、うん偶然。ネギ先生の意識を読んでしまった。

関西呪術協会？ 親書？ 何だろ？ ネギ先生が困っている。

何とかしてあげたい。

〔刹那〕

このちゃん一人、貸衣装を着て歩いている。このちゃんはお姫様、私は新撰組風の衣装だ。このちゃんと一緒に写真に撮られた。このちゃんと一緒に買い物した。このちゃんと一緒に団子を食べた。このちゃんと一緒に…

幸せな時間。このちゃんが狙われているのが嘘の様なこの幸せな時間はすぐに誰かに破れられてしまつ……

一台の馬車が私たちの前に止まつた。馬車上には眼鏡をかけた亜麻色の髪の少女。この顔には見覚えがある。今朝方、吹雪さんからメールで送られてきたリストの中の一人だ。龍宮のサングラスで集めた情報から遭遇頻度の高い人物をピックアップしたと云つていた。見かけたら注意する様に云っていたが、まさか直に接触して来ようとは。龍宮が初日に会つた女は関西呪術協会に照会してもらい天ヶ崎千草と云う名の腕利きではことが分かつていて。多分無理だらうが関西呪術協会では拘束に動くと長が云つていた。

「どうもー、神鳴流です。先輩」

神鳴流？ 得物は持っていない様だが同門らしい。関西呪術協会と神鳴流は縁が深いから覚悟はしてある。むしろ宗家の方々でないだけありがたいと云つものだ。

しかし、今大事なのはお嬢さまの安全。芝居にかこつけてお嬢さまを掠つつもりか？

相手はツクヨミと名乗り手袋を投げつけ決闘を申し込んできた。

「IJのか様をかけて決闘を申し込みませて頂きます。 30分後、場所はシネマ村正門横『日本橋』にてー」

薄く笑うこの少女ひどくやがんでいる感じがする。ツクヨミは再び馬車に乗るとさつさと去っていく。とりあえず、吹雪さんに連絡しよう。

『はい、吹雪です』

「刹那です、実は…」

事情を説明するとあつさつ代わりに日本橋へ向かっても「うえの」とになつた。

『刹那さん、西の本拠地はここからどれくらいですか？』

『えーと電車と歩きで1時間半ぐらいですか』

『木乃香さん共々、お父さまに呼ばれているとか理由をつけて、西に向かわれてはいかがでしょうか？向こうも一般人を巻き込んで仕方ないと云う姿勢を見せた以上、残念ですが木乃香さんを他のクラスマイトといつしょにするのは難しいです。先生がたには後で了

承してもらいます。出来れば迎えがほし」ところですが、仕方ないですからタクシーを拾ってください。ああ、そのときは運転手には注意をしてください』

「わかりました。これから長のところへ向かいます」

どうしよう、まあ長に電話してお嬢さまを呼び出す様に段取りするしかないか?

〔ネギ〕

シネマ村を見学している最中、富崎さんと一人きりになつた。いや、正確には早乙女さんや綾瀬さんにもむりやり一人きりにさせられたんだけだ。

どうじよつ…

昨日いきなり畠田それで、夜、なぜか朝倉さんに縛られたのを助けて貰つたけどその際キスされてしまった。

一人で歩いているけど何と云つていいか分からぬ。

ただ、富崎さんはちらちらと手に持つた本を覗き込んでいる。

「あのー ネギ先生?」

「は、はい」

返事ですか? 返事をしなきゃいけないんですか?

「あの、ネギ先生。今日どこにいかれるつもりだったんではないんですか？」

「え、なんでそんなことを訊くのですか？」

女性をエスコートしている最中、その人以外のことを考えていたのがばれるなんて紳士失格だよ。

「その、関西呪術協会へ親書を届けなきゃいけないですよね」

「どうして知っているんですか？」

「うわー秘密までばれてるし。

「ふふん、嬢ちゃんのアーティファクトはもしかして読心系か？
こいつあレアだぜ！」

「え？ カモ君？ まだよ人前にでちゃ」

僕が力モ君を急いで隠そうとしたがカモ君は宮崎さんへと飛び移つていった。

「兄貴、実はもう嬢ちゃんと兄貴は仮契約パクティオしている仲なんだぜ。嬢ちゃん、朝倉の姉さんから貰つたカードがその本なんだな？」

宮崎さんはびっくりしながらも「クククと粗づちを打つていて。そんな、カモ君。聞いてないよー

「まあまあ、兄貴。ここの俺っちは信用してくれ。嬢ちゃん、嬢ち

やんは兄貴のパートナーになりたくないかい?」

「パ、パートナーですか?」

「応よ、うすうす分かつているかと思うが実は兄貴は魔法使いなんだ。ミニステル・マギ魔法使いには魔法使いの従者と云つパートナーが必要なんだ。魔法使いミニステル・マギの従者は魔法使いから魔力をもらつて体力・精神力がアップするし、中には嬢ちゃんみたくアーティファクトを契約で得られることだつてある。まあ、しばらくパートナーをやってみてダメかどうか確かめるつて云つのはどうだい?」

「わ、わたし先生のパートナーになります」

わわ、宮崎さん?

「詳しい話はあとで。兄貴、さつさと関西呪術協会へ向かおつぜ」

あ、そうか。今なら宮崎さんしか居ないからこのまま関西呪術協会へ向かえるんだ。

「すみません、宮崎さん。理由はあとで云りますから、僕と一緒に来てください」

僕たちはシネマ村を出て関西呪術協会へと向かうことになった。

「吹雪」

刹那さんからの電話を受け日本橋とやらに向かいました。
橋の上にドレス姿の少女が立っています。ああ、あれですね。

「いじわるよ！」

挨拶をしながら近づきます。

少女の手には小太刀と短刀らしきものを持っています。戦闘のスタイルは私と似ているのでしょうか？

「おやー、先輩のお友達ですかー？」

間延びした口調とは裏腹に剣呑な気配が漏れています。

「ええ、刹那さんのクラスメイトです。吹雪と呼んでください」

正木は名乗らない方がいいでしょうね。いじは岡山に近いですし

「吹雪はんが遊んでくれるのですかー？」

「ええ刹那さんに代わりに私がお相手します。鬼ごっこなどいかがでしょうか？ 刹那さんとの約束の時間までに私を捕まえたなら貴女の勝ちで、刹那さんにバトンタッチ致します。どうでしょう？」

「そやけど、その条件ではうちが参加するメリットが無い様なー」

「まあ、もともとそちらが強引に押しかけてきたので参加料とでも思つてあきらめてくださいな」

「あびしこどすなー」

「ええ、世間はきびしいのです。ですが、おまけで逃げ回る間に私が貴方にジテコピンを三回こられなかつたら私の負けにしましょう。鬼ごっここのルールは身体や衣服を手で触るのが条件です。シネマ村からでたら負けです。時間は10分後、ちょうど正午ですね。では開始…」

予想通り、開始直後に仕掛けできましたがカウンター気味にジテコピンを一発入れました。速度は常人離れしていますがエヴァンジェリンさんに比べればそれ以上でもありませんね。では、逃げましょうか。

〔月詠〕

刹那センパイを待つ間の暇つぶしかとおもって、お相手しましたが正直失敗でした。

多分ウチではとうていかなんほどのちからを持つことはわかります。

そんならそれでやりがあるとおますんですけど残念ですけど吹雪はんは闘いに関して何の感情も感じないどすな。

闘いでなんの気持ちの高ぶりも見せへん吹雪はんはウチの好みではあらしまへん。

とは云え、約束やから鬼ごっこをしてあるけどこつこも捕まりまへんなー。

向こうはウチが勝手に刹那センパイ達に向かうのを警戒してか常に目に見える範囲から出ようとしませんがコケにされると感じます。

つかず離れずで追いかけっこしてやはったがいつの間にかシネマ村

の外れの人気のあらへんトコにきています。

ちょうどよろしあす。ウチは刀を抜いて襲いかかるつとしたんやが
気がついたら田の前に吹雪はんがおりはります。
「ゴジンを受けウチは吹き飛ばされました。

「私の勝ちですね」

吹雪はんがそう云いますわ。まだ一回と云おうとしたら、

「ヤー」はシネマ村の外ですよ」

周りを見るといこはお寺さんどすなー。

ああ、さつきのルールはつちにもあてはまりますかー、 嘰えんお
人や。

「のじか」

ネギ先生と一緒に電車を乗り継ぎ関西呪術協会とやらの入り口まで
来てします。

鳥居がたくさんあって伏見稻荷みたいです。夕映が見たら喜びそつ。
移動中に魔法の事を教えて貰つたけど今でも信じられない。でも、
この手の中のカードは魔法のアイテムでアーティストと畳えると心を
映す本になる…

そして、大事なこと。

『ミーステル・マギ
魔法使いの従者』

私はネギ先生のパートナーになつた。

「のどかさん？」

「はい？」

ネギ先生にはパートナーになつたので名前で呼んで貰える様にお願いしました。

「行きますよ」

「はい」

長い長い参道を上つていきますがなかなか関西呪術協会にはたどり着けません。

途中にある休憩所で今休んでいます。

「でも、ここに休憩所つてことはまだ半分ぐらいなのでしょうか？
ごめんなさい、先生。私 先生の足をひっぱつていませんか？」

体力の無い私にはネギ先生の歩くペースでさしついて行くのがやつとです。

「なあに、いやつときは兄貴が魔力供給を行えば体力も回復するやうだ」

カモさんから魔力供給の説明を受け、試しとばかりにネギ先生から契約執行を受けてみました。

「はわわわー」

すごい、すごいです。ネギ先生からの魔力が身体に満ちるのが分かります。試しのジャンプしてみると、軽く2mも跳んでしまいました。

「まあ、のじか嬢ちゃんは前衛向きではないからあんまり使う機会はないかもな」

「それなんだけど力モ君、僕が僕に魔法供給したら前で戦えないかな？」

「うーむ、理屈じゃ可能だけど、魔法を撃つ隙がなかなかないじゃないか兄貴。それとものじか嬢ちゃんに援護射撃をしてもらか？」

ええ！ 私が魔法を？

「へえ、おもういやん、ちょっと試してみんか？ われ」

そのとおり、参道の入り口側から一人の男の子が歩いてそう云いました。歳の頃は先生と同じで学生服を着ていて頭にはニットで編んだ帽子をかぶっています。

理知的なネギ先生に相反する様な野性的な少年です。

「西洋魔術師は従者とかつれてちゃらちゃらしおつてわざこの」

「君は関西呪術協会の？」

「応よ、ネギ・スプリングフィールド。親書を渡してもうついで」

少年がゆっくり近づいてきます。

「あ、あのー 私は富崎のジカと云います」

「？」

「あなたの名前は？ それともやましいから名乗れませんか？」

「云うなあ姉ちゃん。俺は小太郎、犬神小太郎や。女を殴る趣味はないからモコでおとなしくしとつてや」

云つなり、ネギ先生に向かつて殴りかかっていきます。

ネギ先生も応戦するけど身を守るだけで精一杯みたい。途中、コタロー君の帽子が取れ髪の間から犬の様な耳が見える。獣人？

イドの繪日記を召還してみたが展開が早すぎて何のアドバイスもできぬ。

「おじじょ即席スタングレネードー！」

目映い閃光とすゞ音がしたとおもつたら誰かに抱きかかえられていました。

おじじょ即席スタングレネードとは爆竹とマグネシウムらしいです。杖にまたがり空を飛ぶネギ先生にお姫様だつこされていつたん戦線離脱をしました。

しかし、上に行ひつとも地上にもどされ脇にわれよつとじつも逆側から戻つてしまふ。

「「」いや、結界に閉じこめられたな

カモさんが云いましたが本当にありますね、結界つて。途中で先生の治療、と云うか水に濡らしたハンカチで傷をぬぐいながら今後の方針について話しあっています。

「あの小太郎クンが張ったのかな?」「の結界

「やつはタイプじゃなさそうだが

「それじゃ小太郎クンを倒しても術がとけないかも知れないね

「あのー、それなら私がイドの絵口記で読んでみます

「そりゃいい

「いえ、戦闘じゃ役に立てなくて」「めんなさい。それとも」「タロー君の動きは読めたけど読むだけでも精一杯だ

「それだ!」

「来ました

「タロー君を待ちかまえていたネギ先生が遠距離呪文を唱えます。

フェイントを含めた3連発で最後の一撃が決まりましたがまだ小太郎クンは大丈夫みたいです。

「よし次だ」

「契約執行180秒間 ネギの従者『富崎のどか』！」

「先生行きます」

「お願ひします。のどかさん」

「はい、上です、次回し蹴り！」

契約執行で反射神経も良くなつたので何とか小太郎クンの動きを伝えることが出来る様になりました。ですが、また押されてきました。こちらが小太郎クンの動きを読んで居ることに気がついて意識的に直前まで考えない様にすると云うことが絵日記に書かれています。

「よし、のどか嬢ちゃん今だ！」

「小太郎クン、おねしょは何歳までしていましたか？…まだ直つていらないそうです！」

「うそやん」

小太郎クンが一瞬こちらに注意が向いたとたんネギ先生のパンチと呪文が決まりました。

「やつたぜ」

「まだです」

小太郎クンの姿が見る間に変わっています。手足が獣みたくなりしつぽも見えています。みるからにパワーアップしています。

「ヤ二で何をしてーるー?」

突然声が掛けられました。え? 桜咲さん?

刀を抜いた桜咲さんがいつのまにか立っていました。

「やつ」

小太郎クンは後ろへ跳び消えていきました。良かつた。ネギ先生が無事に済んで。

「その一僕は、関西呪術協会に親書を渡そうと思つてここまで来ましたが途中、あの小次郎クンに襲われていました」

「そうでしたか。私もシネマ村でお嬢さまに危険が及びそうになつたのでいつたん長の所に避難してきたところです。屋敷の裏で結界術が行われたので様子を見に来たのですが」

「え? ヤツの裏なんですか」

「ええと、昔はヤツたちが表でしたが車が入れないと不便なので新しく入り口をつくつたそうです。それとなぜ宮崎さんがいるのですか?」

じゆうとじゆうちを見ます。刹那さんは最近このかと仲良くなっている
どあまつお話をしたことはありません。

「実は訳あってのどかさんには僕の従者になつてもらいました。の
どかさん、実は関西呪術協会の長の娘さんが木乃香さんで、刹那さ
んはその護衛なんです」

ええー、このかが？

「……いろいろと云いたいことはあるのですが……それよりどうしま
しょう。お嬢さまに畠崎さんをどう説明するか？」

「このかに云つちやダメなんですか？」

「実はお嬢さまにはまだ魔法関係の事は秘密なんです」

そつかー。でも刹那さんつてこのかをお嬢さまつて呼ぶんだ。

「どうあえずお嬢さまと顔を合わせない方向で」

なにか刹那さんが疲れた顔で云いました。

しかし、私たちが関西呪術協会の本山へ着いたとき、このかと顔を
合わせてしましました。
いえ、5班の全員と…

2003年4月24日 午後一時

〔明日菜〕

お昼に吹雪ちゃんからこのかと刹那さんが関西呪術協会へ避難したとメールが入った。犯人は吹雪ちゃんが撃退したし、念の為の避難だからそれほど心配はしなくて良いらしい。

ただ、5班の班長としてはあまり宜しくない状態であるわけで。

「のどかも捕まらないです」

夕映が携帯を操作しながら云つてくる。
のどかは夕映とパルが共謀してネギ先生とデートしていたそうだが途中で行方不明になつているらしい。その間は私は吹雪さんといつしょに千雨さんの被写体に成つてたわけだけど…千雨さんにあんな趣味があつたなんて。

班の人間の半数が行方知れずとは…ちょっとやばい?

でも、のどかがネギ先生と一緒にモジカしてあそこかなー? 関西呪術協会。

ほどなくしていいんちょからネギ先生と連絡とれないとメールが来た。

もちろん定時報告のためにネギ先生に電話しなければならないのだけど…なにやつてんのかなー

そのうちに今度は朝倉からメールが夕映に来た。

ネギ先生の荷物にGPS付き携帯電話を忍ばせたらしい。それでの

どかの居場所がわかるらしい。なんでネギ先生とのどかと一緒に居ると知っているのかと思つたけど、

「朝倉だからね」

「朝倉さんだからです」

で、二人とも納得していた。はあ、最近このところについて行けない自分がかなしい。

「では追うです」

え？

「こんな面白そつな」とまつとへ手はないって

やめてパル！

「班長、今日の自由行動は班行動が原則なのです。ですからのどかを班員が追うのは正しい行動なのです。ついでに云えば、何故かのどか達がいる地点はこの家の実家の近くなのです。もしかするとそこにこのかや刹那さんがいるかも知れないです！」

いや、みんながそこに居るのは知つていいんだけどね。行きたくなあんだ、私。多分、吹雪ちゃんにあきれられるから…

そして、なぜか途中で合流してきた朝倉と共に私たちはネギ先生やのどか、刹那さんを出迎えることになった。

2003年4月24日 木曜日 午後六時

「明日菜」

ネギ先生は「このかのお父さん、いや関西呪術協会の長と懇談中。

デートの途中でのビカからこのかの実家がここだと聞いてついでに家庭訪問したと云う設定ね。刹那さんたちはそれを聞いたこのかのお父さんに急遽呼び戻されたと云うことになっている。

しかし、ネギ先生、アポ無しで押しかけたの？ ビこのアネスケかと問い合わせたいわ。

ネギ先生たら会つた矢先に親書を渡そとしたけど近くにいたおばあさんに関係者以外の前で行うようなことではないとたしなめられていた。あのおばあさん、このかのお祖母さんて訳でもない様ね。このかも御前と呼んでいたし。

でも美人だつたなー、おばあさんだけど美人としか形容できない人なんて初めて見た。ストレートの黒髪と凜とした顔つきで並じやない存在感があるし。

このかのお父さんはわり泣い感じで、狩衣だけ？陰陽師風の衣装が似合っていたわ。あ、でも本当に陰陽師かも知れないわね。

〔ネギ〕

やつと親書を渡せた。けど、これで終わりじゃないんだよね。
目の前にはこのかさんのお父さんの近衛詠春さんと青山雅樂乃うたのと名乗った女性がいる。雅樂乃さんは詠春さんの義叔母にあたるらしい。呪術協会とは関わり合いは直接はないが詠春さんはかなり雅樂乃さんに気を遣っているみたいだ。

「確かに承りました」

親書を読んでいた詠春さんがそう云つた。

「それで、どう致します？ 詠春様」

となりで親書を読みながら雅樂乃さんが尋ねる。

「確かに関東魔術協会との仲違いの解消に尽力することは省かではありますんが、今回、この親書の返事として確約は致しかねます」

「ああ、やつぱり断られたよ。
でも、仕方ないよね。」

「おや、予想されていましたか？」「・スプリングフィールド」

雅樂乃さんが尋ねてきた。

「はい、今回の親書の件は関西呪術協会の都合を十分に考えていいことは承知しております。但し、関東魔術協会が関西呪術協会との共存協和を願うことにはこたつかのゆるぎはありません。あと僕

はネギで結構です

「では、ネギ君。関東魔術協会のどの様なところがいつの都合を考えていないとお考えですか？」

とりあえず、先日吹雪さんが話してくれた内容を思い出しながら長と雅楽乃さんに説明する。

「そうですか、ネギ君。貴方のお考えお若いながら見所があるとしておきまじょ。ところどころは書き損じが間違つてはいっていたのでしょ」

親書の中から一枚の紙を取り出し僕に差し出してきた。
それを見てみると…

『トもおされられんとは何事じゃ しつかりせい 婦殿
つこでに漫画も添えてある… 学園長…』

「そんな私信は添えられていませんでしたし、無かつた物を私たち
が読むはずもありません」

「つすら笑いながら雅楽乃さんが『う…』

「英雄の息子を送りつけてきて何をさせるのかと案じておりました
がいさか取り越し苦労だつたかと思います。ですがネギ君、女性
のお宅を訪問するときは事前に連絡の一つもこれないと嫌われます
よ」

あつ、やつひやたよー

「さて、親書の件はこれぐらいにしましょうか。ではネギ君にひらり
に」

僕は詠春さん追つて部屋を出た。

移動の途中で詠春さんから昔、父さんの仲間だったことを打ち明けられた。

すごい、あとで父さんの話を聞かせて貰おう。

【刹那】

長の計らいで屋敷に全員で泊まることになった。旅館には身代わりを送つたらしい。

しかし、青山の御前がいらしていたとはびっくりした。の方は詠春さまのお父さまの弟に嫁がれた人で生糸の青山ではない。しかし、神鳴流を受け継いではいるがその人望で裏方として神鳴流をまとめていると云つても過言ではない。本家の人は個の我が強いからまとまりが欠けるきらいがあるが、それをまとめているのがの方だ。剣を握った神鳴流剣士に一步もひかず理で諭す姿から御前と呼ばれ尊敬されている。

私も子供のころから何度も親しく声をかけて頂いた。今回は声を頂けなかつたが先ほども私を見て微笑んでくれた。それで十分だ。

それはともかく、このちゃんについて長と話をしなければならない。明日以降このちゃんを修学旅行に参加させて良いか相談しなくてはならないからだ。そして魔法についてもだ。このちゃんが継続的に襲われる様になるならばその理由を説明しなければならないだろう。こんなとき吹雪さんに相談したいが何から何まで頼りにするのも筋違いだろつ。吹雪さんの素性を黙っている代償にしてはあきらかに

大きすぎる。できれば自分なりに恩を返したいと思つてはゐるがお嬢さまの護衛があるかぎりままならない。

?

なんだか、気に掛かる..

先ほど今までこちらにまで届いていた5班のメンバーの歓声が消えていふ。いや、それ以前に屋敷にあつた人の気が無くなつていふ?

床の間に飾つてあつた刀をつかみ部屋をぐる。
案の定と云つて屋敷の者が石と化している。本山に直接しかけてくるとは!

途中ネギ先生と合流し、このちやんの部屋へ向かうが途中で長に会つた。石化しかけた長に..

長はネギ先生に学園長に応援を頼む様に云つて石となつてしまつた。

ネギ先生の話では5班のメンバーは石化したが、そのなかにこのちやんと明日菜さんはいなかつたらしい。

部屋にいなければ..このちやんの私室か風呂かトイレのいづれか。まず行つた風呂場で倒れている明日菜さんを発見した。近寄りうとした瞬間、学生服をきた白い髪の少年の口をふせられる。つ、強い..ネギ先生が対峙するが二、三言葉を交わして、興味なしとばかりにわつわと転移していった。

明日菜さんは幸い無事だった。しかし、このちやんは攫われたと云う。

「護衛のくせして本山だからと仮を抜いた私の責任です」

「気に病む明日菜さんにやつぱり。まったく何をしていたのだ、私は。」

「まず、応援を呼びます」

青山の本家に応援を頼もつ。幸い御前は帰られているから難を逃れたはず。

携帯で連絡するとすぐに御前に繋がった。事情を話し応援をお願いする。しかし剣士はすぐに手配できるが術師はすぐには無理らしい。手配でき次第、応援に出す云つてもらえた。

そして一瞬ためらつたが吹雪さんの携帯に電話をする。ここまで来れば関西呪術協会のお家騒動で吹雪さんの手を借りるのは憚られるがそんなことはどうでも良い。このちゃんの身さえまもれるならば何でも利用する。… そうか、このちゃんが溺れたとき助けられなかつた自分を責め強くなろうと決心したけど、それは私のわがままだつたんだ。本当に大事なことは……

「吹雪さん、お願ひします。助けてください」

〔吹雪〕

刹那さんから今日5班のメンバーと朝倉さんが木乃香さんの「自宅に泊まる」と云ふことを聞かされました。身代わりを立てると云われておりましたが不安です。身代わりの人（？）は突然笑つたり意味不明の行動をしていました。とりあえず、朝倉さんごと5班の部屋に押し込んでおきます。

まあ、今日は襲撃もなさうなので真名さんともどもゆっくり休めると思つていまつたが真名さんから楓さんと古菲さんが夕映さんに呼ばれたので一緒に付いて行くと云つてのメールが届きました。

ほどなく刹那さんからの緊急の応援要請が入りました。
今夜も早めに寝るのは無理みたいですね。

準備をしようとしたところまたも電話が入りました、今度は茶々丸さん？

『私だ』

電話に出るなりやつ仰有るのはエヴァンジルソンさんですか。

『実はぼーやから学園長に応援要請がはいつてな、私が送り込まれるひしひ』

「東に応援を頼んだことは伺いましたがいつ頃、到着されますか？」

大事なことですから確認しておきます。

『準備出来次第ぼーやの影に転移する。一時間はかかるんだひつ』

「時間はその程度しかないひつですね」

『そうひつじだ』

それでわざわざ電話をしてくれたのですね。と云っても私が責任者ではないのですが。

詠春さんが石になる直前に東に応援要請を出したと刹那さんより伺つてはいます。事情は察せますが詠春さんも迂闊としか云い様がありません。互いに事情が良くわからなければ最悪現地で西と東の応

援者同士で戦争でしょう。本山近くでなにやら騒動が起きており西の関係者が現場に様子を見に行ってみると西の術者と東の魔法使いの大立ち回り……ほんと、勘弁願います。

「ともかく手つ取り早く解決せんと近衛木乃香の疵になる」

確かに……若い娘さんが誘拐された。一昔ならその事実だけで世間からつまはじきにされるでしょう、例え被害者であっても。刹那さんの立場も微妙でしょう。木乃香さんの護衛役ですが関西呪術協会の本山に入られれば本山が本来その役を引き継ぐ筈でしょうが、急の帰郷でうまく引き継がれているとも思えません。最悪今回の襲撃の責を全て引き受けさせられかねません。

「しかし、麻帆良から出すことが可能なのですか？」

ネギ先生を襲つてまで解除しようとした呪いでしたよね？

『ああ、裏技を駆使するため期間限定らしいが一日一日べらばじいも、もたせるさ』

そこで、電話が切れました。なんとなく学園長に負担がかかる」とだけはうかがい知れます。
わて、こちらも飛びましょーか？

以前刹那さんとおそろいのストラップを木乃香さんへ渡しており、それに仕込んであるマーカーを田印に跳んでみました…

さて、どうでしょ、ここは？一応、関西唄術協会みたいですが、風呂の脱衣所でしょうか？電話をかけると脱衣かごから着信音が流れきました。刹那さんには普通のストラップしか渡していませんでした。これは凡ミスでした。

廊下にて、邸内を巡つてみますが無事な人間は誰もいません。皆、石になつています。しかし、本当に石になつていますね。時間凍結と云つわけではなさそうですし。

「吹雪ちゃん！」

後ろから声が掛けられ、振り返れば明日菜さんが駆け寄ってきます。しかし、何で明日菜さんは無事なのでしょうか？やはり先日の刹那さんの云つ通りなのでしょうか？

明日菜さんは足手まといになると思い此処に残られたそうです。明日菜さんが出てきた部屋には5班のメンバーが居りました。夕映さんだけ見あたらぬそうですが真名さんのメールから察すると難を逃れた様ですね。そのことを明日菜さんにも伝えます。

刹那さんの話では、皆さん術を解呪すれば元に戻るのですが動作の途中で固まつているのでバランスが良くないですね。強度がどれほどのものか判りませんが倒れて真つ二つと云つのは宜しくないので布団を敷いてゆつぐつと寝かしていきます。

「いじなことやつていて大丈夫なの？」

「まあ、本当に緊急ならば来た時点で手遅れでしょ」

「いや、達觀しないで…」

先ほどから電話しようにも刹那さんもネギ先生にも繋がらません。
ならば…

通信機を懐から取り出します。

「佐久夜、応答しなさい」

私の目の前にスクリーンが現れます。

『あら、吹雪、何かご用?』

定時連絡でもない通信で『何かご用』もないでしょう。

神近香織理、佐久夜の副長を務める私の友人です。亞麻色の髪を後ろ髪だけ伸ばし他は肩口で切りそろえ、伸ばした後ろ髪は編んで胸もとにもつけています。その胸元と云うか胸はこれでもかと女性を強調しています。一女性として羨ましいかぎりです。

『もませる以外は邪魔なだけよ

人の心を読むのはよしてください!。

「(いほん) 私の居場所をトースティングしますね」

『もちろんちやんとしているわ、京都市左京区…』

「ではこの辺をサーチして私のクラス担任と出席番号1~3番、15番を優先的に探してください。山間部を中心にお願いします」

「うーん、天頂からの俯瞰じや特定は厳しいかも。ところでいったいどう云う状況?」

簡単に香織理さんに状況を説明します。

「それなら、赤外線で手当たり次第にサーチしたほうが早いかも？さすが佐久夜ね、処理が早いわ」

荒い画像で上からの俯瞰でわかりづらのですがネギ先生と刹那さんですね…

「あれー？ 私、刹那さんが飛んでいる様に見える…」

「奇遇ですね。私にもそう見えます」

刹那さんの背中から翼が生えている様に見えます。杖にまたがったネギ先生が横にいますから実際、飛んでいるのでしょうか。変化の術とやりでしようか？

あら？ ネギ先生が落っこちていきます。対空迎撃されたみたいですね。かまわず刹那さんは飛び続けていますけど。モニターが2画面になりネギ先生に同じぐらいの年格好の少年が対峙しています。一応無事みたいですからネギ先生には自力でなんとかして頂きましょう。

もう一度刹那さんに視線を戻せば、後ろから同じように背中に翼をはやした人達が追いかけてきていて、時折鬪いにはなっていますが刹那さんが優勢のようで次々と落としていきます。しかし、こう云つてがなんですが自分の地元からほど遠くないところでこんなファンタジーな風景に出会えるとは思いませんでした。ここは宇宙よりも奇抜ですねー

「とつあえず、刹那さんに合流しましょ。明日菜さんせいどね
待ちください」

通信機を明日菜さんに渡します。

「香織理さん、以後連絡は始動キー経由で行います。佐久夜にリンクさせてください」

『了解』

「では、座標送れ」

『はー』

さて行きますか。

〔刹那〕

いつたんは追い詰めた賊だが、このちゃんの魔力で多数の鬼達が召還され、それを足止めにして賊たちは逃げた。

「先生、飛んで追います」

私はシャツとブラを強引に脱ぎ捨て封印しつづけた鳥族の翼をひろげ宙に舞う。

「え？ 桜咲さん？」

先生は驚きながらも杖に乗つて後を追つてくれる。鳥族も多数召還されていたので、それに対処するため思う様にスピードを出すことができない。しかし、あんな多数の召還なんて初めてだ。このちゃんの魔力量は本当にすごい。天ヶ崎千草の口ぶりではこれから何かこのちゃんの魔力を使って術を行うみたいだから、文字通り力の一端なんだろう。

途中、ネギ先生が狗神に襲われて脱落した。一瞬、ネギ先生を助けて一人でこのちゃんの所へ行くか、ネギ先生を見捨てるか、どちらが有利か考える。結果ネギ先生の力が未知数のため時間優先で、構わず飛び続けた。

しばらく、鳥族とやり合いつつ飛んでいたが、ついに賊が逃げ去った方向から天に向けて巨大な光の柱が立つた。しまつた、始まつてしまつた！

光の柱に近づくと小さな湖に祭壇が設けられている。祭壇の向かいには巨大な岩があり、それが光を放っている。そして光の柱の中に巨大な人影が実体化する。

「ふふふ、一足遅かつたようですね。儀式はたつた今、終わりましたえ」

女の声が聞こえる。巨神の前に浮かぶ天ヶ崎千草と…」のちゃん。

「『一面四手の巨躯の大鬼『リョウメンスクナノカミ』 千六百年前に打ち倒された飛驒の大鬼神や』

くつ、ネギ先生を置き去りにしたのは間違いだつたか？ リョウメンスクナに天ヶ崎千草、祭壇にはあの少年とツクヨミがいる。

試しに雷鳴剣を放つてみるが巨神にはかすり傷ひとつ付かない。ちつ！

「こんなとき、夕凪があればなんて思つていませんか？」

え？

吹雪さんが横に居た。以前見た輝く羽根の姿だ。羽根は黒のジャケットの上から広がっているので私の翼の様に身体の一部ではないのだろう。

「さて、どうしましよう。鬼退治は我が一族の家業ですが……やはりここには刹那さんにおまかせましょう」

ジャケットから刀の柄を取り出すとたちまち柄から桜色に輝く刀身が現れる。しかもこれは大太刀！

刀を受け取り振り回してみるがかなり軽い。

「実は時間があまりありません。さっさと大物を討ち取ってください

い

「はい！」

「もう、大丈夫だ。あとは」これを切り倒して、このちゃんと一緒に帰るだけ。

近づこうとした矢先にリョウメンスクナの腕が迫っていた。意外に動きが速い？ 躲しきれず刀で防御するが……

リョウメンスクナの腕がただ出しただけの太刀によつて切断された。

「ひえ」

情けないがそんな声が出てしまつ。だつて仕方ないじやないか！ 太刀があまりに切れすぎる為、刀身があつさり肉にすいこまれていき、通過してきた腕に当たりそうなるなんて考えもしなかつた。しかし、それならば！

- 斬岩剣 -

渾身の一撃は古代の鬼神をたやすく両断した。

あつけにとられる天ヶ崎千草からこのちゃんを取り戻す。

「！」のちゃん！』

「せつちゃん？」

「のちゃんに」この姿を見られてしまったがそれは仕方のない、例え

嫌われよ'つと…

「きれい…」

え？ 今何と？

「きれいなハネと、かわいい胸… なんや天使みたいやなー」

うわ、私は半裸でこのちゃんは全裸だ。

抱いたこのちゃんの躰のやわらかさと体温が…

『おたのしみの最中、悪いんだけど』

「えつ 明日菜さん？」

手に持った太刀から明日菜さんの声が伝わってくる。

『どうする？ いつたんこに戻る？』

『いえ、どこか安全な場所にお嬢さまを隠して吹雪さんに加勢を』

天ヶ崎千草も捕らえなければならぬし、あの少年も危険だ。

『なら、そのまま真っ直ぐ飛べば龍宮さんがいるから』

「龍宮が？」

『なんか、夕映ちゃんが応援に楓さんたちを呼んだのに付添つて
きたみたい。鬼とか妖怪と出くわして退治していくたらしきけどあら
かた片付いたつて』

ああ、それも置き去りにした連中だな。そいつはええ、あれもまつとくわけにはいかなかつたからありがたいな。

『近かづいたら教えるから』

「あつがとうござまわ」

私一人では多分何も出来なかつた。お嬢さまを奪われ、あの少年に返り討ちにあうのがせいぜいだろう。しかし、みんな私を助けてくれた。でも、いいんですね、吹雪さん。みんなを頼つても。

「せつちやん?」

「じのひやん… なんでもあつません」

さあ、早く龍宮城のひやんを託し吹雪さんへ加勢しなければ。

〔吹雪〕

困つた」と刹那さんは活躍して頂かなければなりません。まあ、夕凪を持つてくるなど助言したのは私ですから仕方ないですよね？

特定の団体に肩入れなんてしてませんよ？

とりあえず刹那さんがアレを片付けるまで足止めをさせて頂きました。

祭壇におりると早速昼間のお嬢さんがやつてきました。

もう2刀を抜いてやる気全開ですね。

やはり、私のスタイルに近いですね。斬り合いをして何をしてくるか大体判ります。

しかも：

「ざーんがーんけーん」

技をいちいち叫ぶのはなんなのでしょう?

それともそう叫ぶのがトレンドと云うものなのでしょうか?

スキだらけなのでロンダートで近づき、思い切りけつ飛ばしてみました。うつかりエヴァンジエリンさんとの闘いと同じ程度の力加減で蹴つたので湖の上を転がっていきます。あの方向での勢いだと湖の中心あたりで沈みそうですね。あとで助けがいるかなと思ったら別方向からなにかが飛んできてそれに巻き込まれて森へと消えていきました……

まあ、いいでしょうか?

さてもう一人、刹那さん達の話では残った学生服の少年は刹那さんでさえ遅れをとるほどの猛者らしいです。別々にやってくれるのは対処しやすいのがたいですね。まあ、シクヨミさんでしたか、あの方が連携をとれるとも思えませんが。

おや、刹那さんがあつさりでかいのを倒しました。ついでに木乃香さんも奪還した様ですしさつさと帰りました。別にこの少年を捕まえる義理もないですし。なんと云つても刹那さんに貸した始動キ

ーの『千早』に力を遠隔で送るのが思つたよりも疲れます。

「さて、私も仕事がかたづいたのでお暇させて頂きたいのですが

「僕も用事はあらかた済んだから帰つてもいいんだけども、最後に現れたイレギュラーだけは確認しないと…ヴィシュ・タル・リ・シユタル ヴァンゲイド……」

おや、呪文の詠唱とは、西洋魔術師の方でしたか。まあ、とうてい日本人の風貌とは申せませんでしたが。

「石の息吹！」
ブノナ・ペトラス

辺り一面濃い霧に覆われましたが？ 田眩ましでしょうか？

すぐに霧は風に流されていきます。先ほどと同じ場所に少年はまだおりました。と云つことは田眩ましではなく何らかの術だったのでしょうか？ 変わらぬ無表情ですがなぜか撫然とした雰囲気が漂っています。

「円詠くんから聞いてはいたが、かなりの腕らしいね」

その場から滑る様にこちらに走り込んできましたが…速いですね。エヴァンジエリンさん並です。エヴァンジエリンさんはこの世界でも最強クラスと仰有られていましたが最強とのエンカウント率が高すぎませんか？

少年は中国拳法風の体術で理詰めの動きですね。少年は得物を持つていないのでこちらも千歳をもどし、体術で相手します。もつとも正統派には私の動きも冷静に対処されることが多く威力が出せない

「」ともまああります。もつとも倒す必要もないのですが。

向こうから剣那さんが飛んくるのが見えました。木乃香さんはどうかに置いてきたのでしょうか、単身です。

「」

少年もからりと剣那さんを見上げて、やう吸いで水をまとわせてながら姿を消しました。転移? できれば捕まつてしまいのでは。剣那さん。

なりば

千歳を抜き打ちし振つてみますが……浅かつたみたいですね。

「木乃香さんは？」

「はい、龍宮にお願いしました。」の剣から明日菜さんの声がして龍宮のいる場所まで誘導してもらいました。ですがあの女は逃がしてしまいました

「それは我が従者が追つている……いや、捕まえたそつだ」

「つまにか」ウガウンジヒコンさんが近づいておられました。

「まあ、私もこれぐらにはしどかないと立場がないからな

「こつこつ」

「こまじがただ、ぼーやが犬にぼこられたので蹴り飛ばしてや

つた。せっかく力がもどったのに全力が出せないのは残念だよ」

蹴つた? もしかしてツクヨミセとぶつかったあれですか。

「それは仕方有りません。せっかくですから修学旅行を楽しむ方向で考えたらいかがでしょう? ホテルに戻るついでにどこかで食事をいたしましょう」

「おじりか? おじりだなー。」

「まあ、別に構いませんが… HUAンジHリンさんもべつにお金に困っているのわけでもないでしょ? ここに」

「ばかもん。ただ飯より皿い料理はあるまー。」

「そうですか。しかしあう口付が変わらうかと云う時間に女子中学生と云つた風体の人間が入れる店なんて限られていますから、うーめんとかファミレスになると想つのですが。真名さんを保護者にでも仕立て上げますか? 」

つらつらと考えてみると明日菜さんから連絡が来ました。

『「めん、吹雪ちゃん』

いきなり何かと思いましたが、関西呪術協会の応援の方にこちらが鬪つている様子ごと通信しているところを見つかつてしまつたそうです。ああ、すっかり忘れていました、呼んでいましたね、刹那さんが。

『事情説明をしてほしーって』

「まあ、仕方がありません。但し、こちらにも事情がありますのでネギ先生たちとは会わない様に計りつて頂く様お願いしてほしいのですが

『わかった。だめだつたら連絡するから』

まだまだ終わりそうにありませんね。

「フハイト」

切断された右腕を見ながら思う。彼女はなんなのだろう。
斬られた腕はすぐに治る。どうでもいい。

しかし、転移の途中で斬撃を受ける?あり得ない話だが彼女はしてみせた。月詠くんはなんて云つていたつけ、彼女を。

今回、関東魔術協会と関西呪術協会の不和の火に油をそいであまりあちらに干渉する余裕をなくすのが目的だったけどまあ残念な結果になってしまった。

それよりも、英雄の息子、僕の魔法をレジストした二人の少女。麻帆良に探しを入れる必要があるかな?

2003年4月25日 金曜日 午前1時

〔吹雪〕

私は関西呪術協会本山に転移で移動しました。夕映さん達に素性を知られるわけにも参りませんので他の皆さんとは別室にしてもらっています。しかし私をどう紹介すれば宜しいのでしょうか。それともあの『桟木』でなにかでつちあげましょうか？ 樹雷云々よりはましかもしれません。

「お姉さまー！」

え？ 宇宙広しと云えど私をそつ呼ぶのは…

「雅楽乃？」

そこに立っていたのは私の女学校時代に後輩、咲雅樂乃でした。実際に47年ぶりでしょうか。

「良い歳の取り方をしたわね、雅楽乃。あの頃の凛々しさと可愛らしさは失わず、それでいて大人の優しさも感じられるわ。ところでなぜここに居るのかしら？」

雅楽乃是私が女学校を卒業するときに自分が普通の人と違うことであることを打ち明け、二度と会えないと言つて別れました。次に会うのは墓前だと思っていましたのに…思いがけない出会いでしたがそれで思考を止める様では生きていけない商売を生業にしていたの

は伊達ではありません。自分…

「今は嫁ぎ先の青山を名乗つております。ここに、近衛詠春の義叔母にあたります」

なるほど、なんとなく判りました。

「詠春さんは案配は?..」

「はい、術者に解呪をさせました。もうしばらくしたら話ができると思いまや」

「わ、じゃあ一時間後にお話ししましょう。厨房かうるわよ、お夜食を作らせてもらひつわ」

「わかりました」

雅楽乃是側近のものを呼んで指示した後、私を厨房へ案内してくれました。

「さて、『飯があれば良』のだけれど」

業務用ジャーを開けると結構な量がありました。人数分以上ですがおむすびにしてしまえば応援の方々も食べられるでしょう。雅楽乃も割烹着をつけているけど…

「どうで貴女料理は大丈夫なの?」

女学校時代、雅楽乃是その当時珍しい自動車で送り迎えされるお嬢さまだったから、いっしょに料理した記憶はないわね。お弁当を食

べさせた記憶ならあるのだけれど。

「そんな失敗する姿なぞお姉さまに見せられません。以前、お姉さまが『どんな事でも自分がそれをして苦労したなら、他人にそれをしてもらつたときに自然と感謝が出来る』と仰有られましたのを忘れてはおりません。家事全般は一通りできます」

なに、その、こいつぱずかしい台詞は?

「……雅楽乃是汁物をお願いするわ。私はおむすびをつくります」

おかかと梅干し、しらすと菜つ葉をそれぞれ混ぜご飯にしてからおむすびにします。海苔は長方形に切つて食べるときにつつんでもらいましょう。30分ほどして、すまし汁が完成したので出来上がりた分から運んでもらいます。雅楽乃と二人でおむすびを作っていると、

「これで夢が叶いました」

「え?」

「お姉さまと一緒に料理をする夢です」

「そう」

料理中は当たり障りの無い話しかしていませんでしたが、この娘はいつたいどんな人生を歩んできたのかしら。

とりあえず、ご飯も無くなつたので互いにつくつあったおむすびを一つずつ食べ会場に向きました。

会場は12畳の座敷でした。中央に座卓があり、一応、詠春さんが上座に座っています。次いで雅楽乃、刹那さんの順で下座はエヴァンジョンジエリンさん、私、明日菜さんです。

ちなみに木乃香さん及び、石にされた方々は解呪後お休みされます。

夕映さん以下応援組は夜食を取られたあと入浴してもらい、ここに泊まられる予定です。

ネギ先生は失神されていました。怪我よりも疲労のせいらししいので治療後そのままお休み中です。ネギ先生には一応茶々丸さんがついています。

「さて、自己紹介からでしょうか。エヴァンジョンジエリンさんから

「いや、私は詠春とは知り合いだし…」

「はい、私も闇の福音の名ダーク・エヴァンジョンジエルは存じています」

そう、雅楽乃も知っているなら必要ないわね。

「私は正木吹雪と申します。現在麻帆良学園中等部に所属しておりますが、詠春さまにはあの『枉木』の一族のものと云つたほうが通りがいいでしょうか？」

「そして、お姉さまは私の女学校の先輩です」

詠春さんも剎那さんも雅楽乃の言葉にびっくりしています。お姉さまか先輩かどちらにでしょうか？

エヴァンジョンさんと明日菜さんは声をひそめて笑っています。

「えーと、吹雪さんはネギ先生が着任以来、ずっと相談にのつてもらっていました。学園長からお嬢さまにだされたちよつかいも吹雪さんの指示を受け対応していました」

「なにか見かねた様に剎那さんから説明が入りました。剎那さんにフオローセられる日が来ようとは…」

「とりあえず、一応私を信用して頂けるようなので話が早くて良いのですが。」

「そうでしたか。木乃香の父としてお礼を申し上げます」

「いえ、今回もそうですが私はクラスメイトのお手伝いをしているだけで西にも東にも協力するつもりはありません」

詠春さんはまさしく木乃香さんのお父さまと云つた真っ直ぐな感じの方ですが逆に云えば腹芸が出来なさそうな感じもします。普通の企業ならこぞりしらず秘密結社の首領がそれで務まるか…先ほどの対応からして向いていないのかもしれませんね。

明日菜さんの紹介のあと剎那さん、エヴァンジョンさん、私で事件のすり合わせが行われました。

「しかし、何であのよつた物騒なものがここにあるのかしら、雅楽乃知つていて？」

「はい、実は…」

「18年前のこと」を説明されましたがそんな因縁が…

「でも、せつと飛驒に戻したらよかつたんじやないのかしら」

「それは、大きさもさることながら重さも見かけ以上らしく、そのまま移動させるには運河を掘るか、西洋魔術師を頼るかとなりまして」

「仕方ないわね。あの方もここに居られるのは本望ではないでしょ
うから後で私が飛驒へお送りしましょう」

「ありがとうございます、お姉さま」

その後詠春さんから今回の事件で判っている事の説明を受けました。

「さて、今回主犯の天ヶ崎千草ですがもともと西洋魔術師を憎んでいたところに、ある関西呪術協会の幹部から麻帆良学園の修学旅行の妨害の依頼があり、それに便乗して親書の強奪、木乃香の誘拐を企てた様です。幹部から斡旋で犬上小次郎、神鳴流から月詠なるものが協力者として付けられていきましたが刹那くんがみた少年については不明です」

天ヶ崎千草以外は自分から名乗られたそうです。使い捨てっぽい雰囲気の連中ですね。

「ところで今日の一件をどう致しますか？ 今なら無かつたことこ
もできそうですが

「いえ、残念ながら私が術師を探すため声を広くかけましたので隠
蔽は無理かと思います」

雅楽乃が申し訳なさそうに云いますがそれは仕方がないわね。

「私見ですが、天ヶ崎千草の目的がちぐはぐな感じが致します。嫌がらせの依頼に便乗したとは云え、木乃香さんの誘拐は悪手です。まず木乃香さんの誘拐が成功しても以後 関西呪術協会の支援が受けられません。あるいは千草さんが属するグループと長のグループとの間で内部抗争が起きるでしょう。内部抗争をしながら関東魔術協会と事を構えるとは考えられません。

木乃香さんを誘拐して詠春様を失脚させようとするならばあの場で鬼神を召還する理由はありません。

また、同様に関東魔術協会を攻めるのならばこの場で鬼神を召還するのも妙です。そのまま東海道を下るつもりでしたのでしょうか？ 素人の考えですが関東近辺で鬼神の召還、例えば将門公のほうが適当ではないかと思うのですが…

あの場に祭壇が拵えられていたので追っ手を撒くための非常手段とも考えられません。

この様におおよそ首尾一貫を欠いているのです。

千草さんの尋問も始まるでしょうが多分、実のないものとなるでしょう

「天ヶ崎千草が主犯ではないと」

「いえ、本人は自分で考えて行動していたと思つていてるでしょう。ただなんらかの意識誘導がされていた可能性があるかもしれません」

「ではあの天ヶ崎千草は実力はある術者なので、たやすく術にかかるとは思えません」

「別に術を使わなくとも、一言二言呟くだけで人の意識を変えるの

が洗脳と云つものです」

なぜか、詠春さんをのぞくみんなが私を見ながら『あー』と云つて納得しています。雅楽乃まで…

「まあ、あくまでも私見ですので……」

「わかりました お姉さま。天ヶ崎千草や他の者の尋問を慎重に起こります」

雅楽乃には伝わったようね。多分言いがかりに近いのでしょうか？ らぬ泥までかけられるのが敗者です。真実はともかく、主犯が外部か内部かでは傷の深さがちがうでしょう。ここは天ヶ崎千草に道化になつてもらいましょう。

「さて、木乃香さんにについてどう致しますか？ もはや隠す以前の問題ですが？」

「はい、木乃香が起きたら全てを話します。今回の件が漏れれば誰もが木乃香の力を狙うでしょう。力の封印も考えましたが人の掛けた術は人によつてとかれるのです。関西呪術協会の後継者云々はともかく、あるていど術に関して学ばなければ身の守りようもありません。ですが、中学卒業までは平凡な娘として過ごさせてやりたいと思います」

まあ、麻帆良から出なければなんとかなるでしょうか？

「中学卒業後はこひらに呼び戻しますが、進学するか修行に専念するかは木乃香と話し合つてみます」

「わかりました。今日一日、じゅういちで詰合われるのが宜しいかと存じます。すると刹那さんも？」

「はい、今まで通り、いえ、関西呪術協会の長として正式に近衛木乃香の護衛に任命します」

「で、ですが私はお嬢さまに正体を知られてしまいました。もはや近くにいることなど…」

刹那さんの正体？先ほどの翼は術ではなかつたのでしょうか？つまり刹那さんの羽根は自前で出したり消したり出来ると…うん、まあ魔法ですから力学とか関係ないのでしょう。

「このかなら気にしないと思うよ、刹那さん。だいたい、あの学園長を身内と認めて居るんだから」

今回は全員『あー』が唱和されました。そうですね、あれが身内だつたとしたら友人に紹介するのは躊躇ためらわれます。それよりも麻帆良からでれば人間として認識されるのか否か微妙です。

「刹那さんは今回望外の働きをして頂けました。改めてあの娘の大叔母としてお礼を申します。それと勝手ですが以後刹那さんの後見をこの青山雅楽乃が務めさせて頂きます」

「御前！」

「御前？」 雅楽乃、ここでも御前と呼ばれているの？

「もはや関西呪術協会はお前を手放せなくなつたのだ、桜咲刹那。リョウメンスクナノカミを成敗し近衛木乃香を救つた英雄をな。腹

をくくれ

あ、エヴァンジエリンさん、云つちゃいました。

「え、英雄？」

「今回、近衛詠春は本山に敵の侵入を許したばかりか敵に不覚をとり、娘を誘拐された。それらの企てをすべて打ち碎いたのがお前だ。今お前は関西呪術協会の新たな求心力になつたのだ。今更ここを出るなど論外だ」

「そんな、あれは吹雪さんが力を貸してくれたおかげで……」

「私は剣を貸しただけですよ」

出来れば居なかつたことにしてほしいのですが。

「お前、事の内情を外に喧伝する気か？」

「あー、英雄でこいつやつてつぶられるんだー」

明日菜さんがしたり顔で云いますが、もつともですね。

「ふむ、この際、桜咲刹那は護衛のため女装していた男の娘だったと云う設定で木乃香の婚約者にしたてあげると云うのはどうだ？ 性転換薬なら研究すればできそうだ」

何故か全員の視線が刹那さんの胸に集中します。

まあ、それができれば一番の方策かもしませんね。

詠春さんも雅楽にも黙つたままですが……否定もしません。

HヴァンジHリンさんも黙つて浅く頷いただけです。

「『れが暗黙の了解?』

明日菜さん?

「説得マシーンなら『』に居るし、ほれ試してみよつと『』を説得してみる」

そう云われましても…

「木乃香さんが後継者に選ばれたなら…意に沿わない政略結婚もあるかもしれませんよ。例えば、結婚相手は有力者で権力があるがそれ故悪い噂も絶えない男。それでも嫌な顔一つせず木乃香さんは結婚を承諾しました。結婚式の日、刹那さんは木乃香さんに祝福を送ります。お嬢さま、『結婚おめでとう』『やれこめす…』

在り来たりですがこんなと『』じょつか。

「…」

刹那さんは言葉もだせず固まってしまいました。詠春さんもなぜか頭を抱えています。

「『れが洗脳でやつなのね』

もー、わざから明日菜さんも一言外こですよ。

とりあえず、私はこれでホテルに戻ることにしました。早朝には木乃香さんと刹那さん以外は戻られる予定です。

2003年4月25日 金曜日 午前5時

〔ネギ〕

早朝、茶々丸さんに起された。躰の傷は治療の術を掛けられたのかほどんど痛まない。

まだ、朝日も昇る直前だがつづらと光が差し始めている。カモ君はまだ眠っているからそのままにしておいた。

とりあえず顔を洗うと昨日の広間に案内された。広間にはすでに長さんがいた。良かつた術が解かれたんだ。それに雅楽乃さん、刹那さん、エヴァンジエリンさんがそろっていた。

エヴァンジエリンさんは昨日小太郎クンと鬪っている最中、僕の影から突然あらわれた。僕があれほど手こずった小太郎クンをあつさり蹴り飛ばしたあと……それ以降記憶がないな。この前みたいだ。

僕が座ると長さんから昨日の顛末を説明された。桜咲さんが鬼神を退治し木乃香さんを救い出したこと。エヴァンジエリンさんが犯人格ループの何人かを捕らえたこと。結局僕はなにもできなかつたな。

そのあと雅楽乃さんが話しおした。

「さて、お疲れのところ朝早く起こして恐縮ですが、昨日の鬼神リ

リョウメンスクナは実は18年前に貴方のお父さま、サウザンドマスターがこの詠春と協力して封じたものなのです

え！サウザンドマスターが！

「しかし、関西呪術協会のなかにはそれはサウザンドマスターの自作自演と呼んでいる者があります」

「うそです！ サウザンドマスターはそんなことしません！」

「なぜですか？」

「それはみんながサウザンドマスターが立派な魔法使いだと云つか
「う」

「そうですか。はっきり申しまして18年前のリョウメンスクナ復活はあるで原因不明なのです。そもそもリョウメンスクナは飛騨地方、岐阜県北部に祭られている土着神と呼ぶべき存在ですのでそれが京都で復活した理由が不明です。

リョウメンスクナは日本書紀と云いつ歴史書に朝廷、つまり政府に逆らう妖怪として登場しますが京都には当時、朝廷は置かれています。そして今では首都は東京に移り、帝もそこに御座します。

リョウメンスクナの復活が単なる偶然としても京都に復活するとは考え難いのです。

故に何者かが故意に京都にリョウメンスクナを復活させたと云ひになりますがやはり何の為にと云う疑問がのこります。

リョウメンスクナの退治の功もあって詠春は関西呪術協会の長になりましたが、それ故に詠春は疑われたのです。口さがない者達はこれを詠春の所属したグループもしくは関東魔術協会が仕組んだこと

と云つております。詠春は当時から関東魔術協会と融和を謳つてましたから結びつけられたのでしょうか。

結論からすればこれも事実無根ですがそれを主張する者は何がます。『みんなが云つてゐる』と

そんな……

「わざわざ早朝から遣る瀬無い話でしたが続きがあります。今回のリョウメンスクナの復活にたまたまサウザンドマスターの息子が京都にいたら先ほど関東魔術協会の仕業と勘ぐつた者達はどう思つてしまつ」「

「偶然とは思はないだらうな。いや、むしろ前回の復活共々東の陰謀だつたと結論づけるだらうな。リョウメンスクナ退治をぼーや、もしくは私がやつていたら著しく関西呪術協会の権威は落ちる。それで喜ぶのは誰だ?」

エヴァンジーロンさん!

「つまりは我々は今回の騒動に何も関係していない。そつ云つてしまだな」

「はい、はつきり申してあなた方に表に出られると関西呪術協会が空中分解しかねません。西の応援が到着するよりも先に東の応援が居るなど通常あり得ません。先の東の陰謀論者にとって真実はどうでもいいのです。詠春や関東魔術協会を叩く口実が手にはいるのなら。

申し訳ありませんが今回はそつ云つて立ててください。重ねてお願ひいたします」

雅楽乃さんがふかくお辞儀をした。

「わわ、わかりました。やめてください」

「ありがとうございます」

やつと頭を上げた雅楽乃さんはあこせつをして出て行つた。

詠春さんはサウザンドマスターの家に案内してくれると云つてくれた。午後に少しだけなら時間がとれるそうだ。木乃香さんと桜咲さんはそれまで用事があつてここに残るらしい。

エヴァンジーリンさんと一緒に食堂に向かう途中不意にエヴァンジーリンさんが話し出した。

「青山雅楽乃是近衛詠春の義叔母であること以外さほど関西呪術協会には関係していない。それが頭を下げる意味がわかるか？」

「いえ」

雅楽乃さんつて関西呪術協会の関係者じゃないの？ でもそれなら何故関西呪術協会のお願いをするのだろう？

「あの場で詠春が頭をさげれば関西呪術協会の立場が更に弱くなる。そのため本来頭を下げる必要のないものが頭を下げる。そんなものだ、この世界は」

僕には何も云えなかつた。僕が今ここにいるだけで迷惑をしているひとが居るなんて…

その後、みんなで早めの朝食を食べホテルに帰つたけど何で僕のご飯だけお茶漬けだったんだろう？

2003年4月25日 金曜日 午後3時

〔吹雪〕

夜中のうちに転移してホテルに戻りました。懸念事項の一つ、5班の身代わりです。案の定部屋を開けると全員が全裸で踊っていました。よほど腕の悪い術師に頼んだのでしょうか。

浴衣を着せればしばらくは持ちますがもう人前には怖くてだせません。早速雅楽乃に電話して起床前に全員送り届ける様頼みましたがそのあと一時間ほど長電話につきあわされました。

早朝、木乃香さん、刹那さんを除いて全員が戻りましたやつと氣楽な修学旅行かと思いましたがエヴァンジェリンさんがテンション上げすぎです。

今はホテルに戻つて自由時間です。生徒たちが疲れていると云うよりも先生方が限界に近いです。今日もあとでしづな先生にマッサージでもしてさしあげましようか？ 昨日もあまり寝てい無い様ですし。

自由時間なので近辺には出掛けても好いですし、温泉にも自由に入れるそうです。

ネギ先生に詠春さんからの使いが来たのですが…

「雅楽乃…」

「はい、お姉さま」

ちやつかり雅楽乃がその役を引き受けていました。

結局、5班+朝倉さん、エヴァンジエリンさん、茶々丸さん、ネギ先生、私でリムジン2台に分乗して移動です。両校前にお父さまのお宅を探さない様に釘を刺しましたがネギ先生はすっかりお忘れの様ですね。まあ、仕方ないですか。一応名目上生徒の外出の監督をされているわけですし、夕食までには帰れる様なので良しとしておきましょう。

「なんで明日菜さんまで来たのですか？ 最初バスとか仰有つていましたよね」

「つーん、その吹雪ちやんと雅楽乃さんをみてるのが楽しくて」

「…おもしろいですか？」

昔から婆と初孫とか干し柿並とか云われていたのですが…

「つーん、口調も雅楽乃さんには砕けているし」

「呼び捨てにあるのも珍しいな」

「いいな私も今度から吹雪ちやんをお姉さまと呼んでみよつかな。仮の設定でも年上だし」

「ダメです」

珍しく強い口調で雅楽乃が云いました。

「お姉さまをお姉さまと呼んで好いのは私だけで、お姉さまが呼び捨てにするのはお姉さまの子供が私だけです。旦那様も呼び捨てにしないと誓つてくれました」

ああ、雅楽乃！ それは互いに墓の中まで持つていぐ約束でしょう！

雅楽乃も気づいたみたいで謝つてくれました。

「『』めんなさい。お姉さま

「もう、仕方ない娘ね」

あんまりし�ょげているので頭をなでてあげます……はつ！

「あまあまだー」

「マックスコーピー練乳200%増量だな」

「…………」

『やつぱり吹雪は女たらしよねー』

? 4人目だれ？ 香織理さん？

突然車中に香織理さんの映像が浮かび上ります。あ！、通信機回

吸してしませんでした。

『ふふふ、聞いたわよ。吹雪』

「香織理さん、何などといひで」

『うん？ こじんじゃないの？ 明日菜ちゃんと雅楽乃さんには昨日挨拶したし、ヒカルンジヒロンさんたちは現地協力を頼むんでしょ』

「それはもうですが」

『可憐かつ愛くるしい、聰明で慈愛に満ちた正木吹雪さん』

「…何ですか？それ」

「あー昨日私が吹雪ちゃんの名を出したときに雅楽乃さんが云つた吹雪ちゃんの为人」

雅楽乃！…………いや誇りしげに胸を張られても……

「へへへ、あの学園長でさえ煙に巻くお前もまつたく形無しだな」

ヒカルンジヒロンさんが大笑いです。はあ、まつたく…

結局、羞恥プレイの様な騒ぎはネギ先生のお父さまのお元まで続きました。

現地には詠春さんと木乃香さん、刹那さんが待っていました。

天体観測ドーム付きの家ですか？ 素人にしては大げさな設備ですね。

ネギ先生たちは書架を眺めてわいわいやっています。

「アスナ、吹雪ちゃん。さーつかんうちにお世話になつとつたんなー、かんにんなー」

「別にどおりで」とないわよ。このか

「ええ、お友達ですから。迷惑かけてもらえなくて何が友でしきうか」

明日菜さんと顔を合わせて笑います。

「でも、吹雪ちゃんて雅楽乃大叔母様のお姉さんやつたんやねー。あれ、吹雪ちゃんも私の大叔母様？」

雅楽乃…そう云えば、昔お姉さまと呼ぶのを許したときも辺り構わず吹聴していたわね……

「雅楽乃、これ以上ばらさないでね」

「はい、お姉さま」

雅楽乃のお姉さま発言に木乃香さんが笑っています。はあー

〔明日菜〕

吹雪ちゃんと雅楽乃さんを見てちょっととつらやましくなった。私は家族がいなから甘えたことはない……もしかしたら記憶がないだけかもしれないけど。麻帆良に帰つたら吹雪ちゃんに甘えてみようかな？ 香織理さんが云つてたけど、吹雪ちゃんて女性がなくて母性だけでできるって。見た目があれだから甘やかそうと近づいたらいつの間にか甘えていたって人が多いらしい。そう云う人つて逆に甘えたことがあまりないし、甘えると甘えるだけ吹雪ちゃんが甘やかすから結構ファンがいるみたい。

雅楽乃さんを見て理解できた。吹雪さんに会つまであれほど毅然としていた人が蕩けちゃっているもの。うーん、もしかして香織理さんもその一人？

ん？ ネギ先生のお父さんの写真？
そう云えば夢に出てきたわね、ナギ・スプリングフィールド。確認しそうと思つて写真を見ると……

HUGAちゃんと吹雪さんをひつぱつへくる。

「HUGAちゃんは詠春さん達を知つていいよね

「うん？ まあな」

「あの写真、右端のタバコをくわえたオジサマ、ガトウさんて云わない？」

「……なぜ、その名を知つている？ 神楽坂明日菜。ここにつのなは

ガトウ・カグラ・ヴァンデバーグ…」

カグラ？

「ガトウ…確かに、明日菜さんが夢で見た方でしたね。タバコの香りがする」

あーん、吹雪ちゃんていいなあ。ちゃんと覚えていてくれるんだ。

「うん、そう、そしてナギさんも夢で見た通り。タカミチくんはないけど」

「たしかにタカミチはあの写真には写っていないが、どう違う」とだ

とりあえずエヴァちゃんに夢のことを話してみるけど。

「明日菜さんは幼い頃の記憶がないそうです。ただ最近昔の記憶らしきものを夢にみるのですがそれに出てくるタカミチと云つ名の少年が高畠先生ならば明日菜さんの年齢と合いません。また神楽坂の姓は高畠先生がつけられたそうですが」

「高畠・ト・タカミチはガトウの弟子だからその少年はお前らが高畠先生と呼ぶ人物で間違いかろう。タカミチがガトウのミドルネームを忘れるはずもないし…まあ、他人の記憶を覗く術もあるからな、早急に結論はだせんぞ」

「うん」

あ、吹雪ちゃんが手を握ってくれる。

うん、いいなあ。吹雪ちゃん。甘えちゃおうかなー。雅楽乃さんの
視線が痛いけど。

2003年4月26日 土曜日 午前7時30分

〔吹雪〕

やつと修学旅行も終わりです。おうちに帰るまでが遠足ですからまだ気は抜けません。犯人グループの一人はまだ逃走中ですねですが実際には妨害もないで静かなものです。3・Aもほとんどが眠っています。ネギ先生も一緒に寝ているのは一瞬なんだかなど思いましたがまあ仕方ないと思いそのままにしておきました。ネギ先生が寝ているのでつられる様にみんなも寝っているのだから、このままにしたほうが楽でしょう。

起きているのは窓の外を眺めるに忙しいエヴァさんと茶々丸さんですね。先ほど今後エヴァと呼べと命令されました。

あとは刹那さんは木乃香さんにより掛けられていますが、思案顔です。まあ、あれでしうね。

あとは真名さんですが…

「これぐらいなんだが」

「これだけですか?」

「まあ、クラスメイトを助けるのに儲けまでだすのはなんだからね

昨日の騒動の危険手当の請求なんですが必要経費分しか請求されていません。

真名さんの云い分も判りますが…あんみつでも研究いたしましょうか？

麻帆良に帰れば今度はエヴァさんの呪いをとかなくてはなりません。と云うよりあのマッドをお呼びするのがかなり不安ですがの方以外にこころあたりも有りません。

GW中にもう一度京都にいかなければ雅楽乃が麻帆良にやつてくると脅されましたし。

まだまだ前途多難ですね。

2003年4月27日 日曜日 正午

〔吹雪〕

先田のお礼と云つて木乃香さんと刹那さんに食事に招待されましたが、指定された懐石風レストランに着くと両名の他、明日菜さん、エヴァさん、茶々丸さんが到着していました。私が最後でしたか。

本来ネギ先生達も呼ぶべきでしょうが、私と明日菜さんが関係していたことを知られるのはあまり宜しくありませんので後日、別にお礼をして頂けるそうです。

今夜はこの小部屋を貸し切りにして貰っているので魔法の話も大丈夫です。

「みんな、おーきになー」

本当はきちんと挨拶をされる予定だったのですが、そんなかたぐるしい挨拶するくらいなら最も云いたいことを大声で云つた方が伝わると明日菜さんを通じてに伝言しておきました。木乃香さんのお礼の挨拶の後、和気藹々とした雰囲気で食事が進んでいきます。茶々丸さんは食事は出来ませんが明日菜さんや木乃香さんがしきりに話しかけています。もともと、人懐っこい一人ですので簡単にうち解けていました。エヴァさんは孤高に料理を愉しんであります。

「酒が呑めないのはもったいないな」

それは仕方のないことです。まあ、京都の人間が指定した懐石料理ですでのでかなりレベルが高い料理がだされてるので気持ちは解らないでもありません。

そのなかでも、刹那さんだけがなぜかときおりうかない顔をしてエヴァさんを覗き込む様なそぶりを見せますが…なんなのでしょう?エヴァさんを危険視しているわけでも無さそうですが?

さて、食事も終わりデザートを頃いている最中でした。

「あのわ」

なんでしょうか、明日菜さん。

「いや、誰も指摘しなかったからほっておいたけど、ネギ先生が魔法使いつて結構ばれてない?」

あー、いろいろあって、後回しにしていましたが、そういうのもありましたね。正直ネギ先生の問題まで手が回りません。私としては魔法を知つてしまつた生徒が本人の意志と無関係に危険な目に遭わなければいいのですが。

「夕映ちゃん、長瀬さん、古菲は決定的。

それと一日目の夜、朝倉の主催でネギ先生とキスするイベントがあつてそのとき先生とのどかがキスしたんだって」

「一日目? 私たちが夜中、温泉にはいったときでしょうか?」

「ネギ先生とキス?」

「仮契約だな」
「パクティオー」

「私もこっちに戻つてからパルから聞いたの。パクティオ仮契約したなら本屋ちゃんとネギ先生が一緒に関西呪術協会へ来たのも判るし。本屋ちやんなら事情を聞いてもネギ先生についていきそうだなって。ファンタジーとかも好きそうだし」

いや、やべれ映画好きが極道になると云ひの諷法ですよ、それは。

「互いに納得しているなら口を挟む気はありませんが、ネギ先生がどこのまでのどかさんと説明なされてるかが不安ですね」

「でも、こざとなつたら記憶を消して普通の生活に戻すんじゃないの？」

「魔法では記憶はそんな簡単に消せるものでしょうか？」エヴァさん

「ん？ 記憶の消去には大まかに分けて2種類あるな、記憶自体を消す方法と思い出せなくする方法だな」

「それってどーちがうん？」

「パソコンで例えるなら前者はデータそのものを消して、後者は隠しファイルにして検索できなくなる感じでしょうか？」

「パソコンは良く判らんが検索と云うのは適切な言葉だな。まず記憶自体を消す方だがこれは文字通り記憶が消える。後腐れ無いようにきれいさっぱり消える。思い出すことはない」

「ふーん？ ならそっちの方が簡単そうだけど？」

「それが、そんなにうまくいかんのだ。 大体、自分の記憶がどこにあるのかわかるか？」神楽坂明日菜「

「あー、あたまのなかつてぐらいかー」

「例えば原稿用紙に幾つかリンゴと云つ文字が書かれている。魔法ではリンゴの文字だけ消しゴムで消すようにはできない。で、どうするかと云ふと原稿用紙ごと破棄してしまつ」

「それじゃその原稿用紙に書かれていたこと全てなくなつちゃうじやない」

「そうだ、だからこれは大体直前の記憶を消すべりにしか使えんな。」

「剣術の訓練で氣絶したときにちよつとまえの記憶がとんでこる」とはあります

「人の記憶は夜眠つている最中に保存すべきものとわうでないものをより分けるそうです。

ゲームで云ふばセーブする前のデータが消えて最後にセーブしたところからやつなおしでしょうか」

「その例えなら判る。逆に古い記憶を消そうとするときデータ丸ごと消えかねん」

「あれー私そんな危ない術をかけられたの」

以前ネギ先生にかけられていましたね。

「まあ、出回っている記憶消去の呪文で済ませてしまおう。3分間
ぐらこだひつ」

下手に長時間記憶を消去だと犯罪に頻繁に使用されるでしょう。
今ままでも十分危険ですが。

「次のやつだが、二つちは少々やつかいだ。
まず人間の脳の仕組みからはいるが、記憶の種類には幾つかあって
そのなかにエピソード記憶と云うのがある。所謂思い出と云うやつ
だ。それと対になるのが意味記憶、こちらはむしろ知識と呼んだ方
が通りが早い。これらは相互に補完しあつている」

「記憶から意味を取り出すには知識が必要、知識は記憶を解体したものとしておきましょうか」

「言葉に置き換えるのは難しいな、話をすすめるや。この食事会を
あとで思い出すには、『6人での食事会』『4月27日』『昼食』
『懐石』等のキーワードで検索すれば思い出すと云ふのは判るな?
逆にそのキーワードを消し去ればこの記憶は再生されてこない。但
し、キーワードなんていづれでも出来るからな、そこで重要なキー
ワードが揃った場合でないと再生出来ない様にするのだ。更に全く
日常では使わない文章をパスワードとして無理矢理記憶に関連づけ
してキーワードの一つにしておけば思に出すことは無いだろう

「それで記憶が封印されると云ふのか？」

「そうだな、問題もあるがな」

「あるの?」

「大ありだ。人間と云つのは考える動物だからな、考えるなど云わ
れてもなにかしら考えてしまつ。試しにやつてみる」

そう云つたあとエヴァさんはしばらく黙ります。しかし、思考の
停止は訓練しないとできないので皆さん日々に出来ないと仰有いま
す。

「ある出来事に対しても脳は勝手に関係しそうなものを連想するのだが、もともとが重要な記憶だからそれは優先順位が高いから検索には頻繁に引っかかるが使用されることはない。その無駄なぶんだけ思い出す能力が低下するな。

またやばすぎるキーワードはそれで検索しない様にもするだらうから一々検索条件にも判定がいる。自分自身の思考とは別に脳のちから使うわけだからその分だけ思考能力が低下する。

また記憶は常に同じ場所に保管しているわけではなく重要なものとそうでないものに選別される。しかし封印された記憶は不必要に残っている。脳から見ればだが消すわけにもいけない。さきほど出た記憶の整理の邪魔になる。すなわち物覚えが悪くなる……
覚えられない、思い出せない、考えられない……総じて端からみると……バカになる」

がーんと云つた表情でショックを受けでいますね、明日菜さん……

「まほら戦隊バカレンジャー バカラッドは正義の秘密組織に脳改
造されたヒーローだ！ふん、笑えんな」

まあ、確かに。エヴァさんの説明も大きく違つともないでしょ。簡単に云えば脳に負担がかかりますね、明日菜さん……

「でも魔法使いでどうやって記憶を消す呪文なんて編み出したん？」

話題を変えるよつて木乃香さんが仰有ります。それは私も是非聞きたいですね。

「経験則からだな。やつてみたらこうなつた。それの繰り返しだ。今云つた理論も私が近代科学の知識から後付けしたものだからな」

「だからと云つて経験則をおろそかにして好いものではありませんよ。刹那さんの剣術の型など経験則の最たるものです。こう斬りかかつてきたのをこう受けるより、こう受け流した方が反撃しやすいと云つたものを積み重ねたものです。先人達が血と汗で培つた百万あまた数多の経験の中から篩にかけて残つたものです」

「そうだな、だがそれゆえ停滞しつつあると云うのもある。皆効率化された呪文を同じ様に唱えるだけだ。魔法学校でさえ既存の呪文を覚えることそれを効率良く運用することしか教えない。新しい呪文の開発など大学院レベルの話らしい。桜咲刹那、貴様もただ技をつつことだけを考えていると一流より上は目指せんぞ」

「一流より上とは？」

「超一流。至高。最強。貴様も関西呪術協会の看板を背負つていく身なら覚えておけ。くくっ」

「えー！ せっちゃん。関西呪術協会の看板背負うん？」

しどろもどろで刹那さんが受け答えをしている最中、

おや、着信音ですが私ではありません。

茶々丸さんが携帯を取り出しディスプレイをしばし眺めてから電話にしました。一言一言、言葉を交わしてから、

「マスター、ネギ先生からお電話です」

と携帯を差し出します。ネギ先生からですか、奇遇ですね。

「私だ、…………構わんが今外出中だ。……ああ、その頃には戻るだ
うう」

それだけで切つてしましました。

「ほーやからだ、何か用事があるらしい。今から家に戻る」

エヴァさんが席を立つて出て行かれます。茶々丸さんも一礼して出て行きます。

「やっぱり私、記憶操作されていたのかなー」

テーブルに突っ伏しながら明日菜さんが仰有ります。

「そうですね。確かにその可能性が高いですね

「なんでそんなことしたのかなー」

「おやうへは明日菜さんの幸せの為に」

「私を『ばか』にする」とが？」

「ええ、正直に申しますと私もこの手の記憶操作の知識はあります。暗示の領分ですが、エヴァさんの説明通り脳に負担をかけるものですから施術の際には細心の注意が必要になります。最悪記憶障害どころか即、廃人になる恐れもあります。しかしながら明日菜さんに危害を加えるだけならばもっと簡単な方法がいくらでもあるのです。薬の中には副作用を承知で医師が処方する場合もあります。確かに思考に制限を受けていましたが、明日菜さんが麻帆良に来てから生活を思い出してください。決して悪いものではなかつたと思うのですがいかがでしょうか？」

私はそう云ふと明日菜さんはしばらく黙つて考えてから仰有いました。

「そうだね、あやかが居て、このかが居て、吹雪ちゃんや刹那さんが居て、みんなが居て…悪くない…いや最高だよ…」

私にもたれかかりながら明日菜さんが泣いています。
しかし、あのとき高畠先生を糾弾する形になつてしましました。事情が判らなかつたとは云々申し訳ないことをしてしまつた気もします。

「記憶の封印は人の心の領分ゆえ時間が経つにつれ如何様に転ぶかを想像するのはむずかしいのです。故に高畠先生は保護者として出来るだけ明日菜さんのそばにいたのかもしれません。だからこそ、封印をとくことも承知せざるを得なかつたのかもしれません。……人の厚意の全てが幸福に変換されれば宜しいのですが」

肩にもたれかかっていた明日菜さんの頭が膝へとすくべり落ちていきます。なで肩ですし、胸に摩擦力など期待しませんから仕方がないですが…膝枕？

しばらく明日菜さんが落ち着くまで髪をなでていましたが…どうしましょう。間が持ちません。こいつはうとうときね…

「えと、序^{つい}ですから耳かきをしましようか？」

〔明日菜〕

いいんだよね。私、高畠先生を恨まなくとも。いいんだよね。

あこがれていた高畠先生。ネギ先生が来たあの日からずっと胸にこかえていた気持ちがすとんと落ちていく様な気がする。

まだ本当のことは判らないけどもうちょっとだけ高畠先生を信じてみようと思った。

.....

あれれ、気がついたら膝枕されてる。

どうじょひ。

起きるタイミングを計つてみると

「えと、序でですから耳かきをしましようか？」

と吹雪さんが云つてくれた。

「じゃあ、お願ひ」

みみかきが終わつたら、笑つて『ありがと』と言えばいいんだ。

でも、膝枕で耳かきつて初体験かも？

ポーチから取り出した耳かきを耳に入れられたけど耳垢たまつてないかな？あれ？たまつてたほうがいいの？悪いの？あんまりたまつてなればいいなー

あ、他の人に耳の中をこすられるつて気持ち好いかも？

しばらくして耳かきが終了したみたい。残念。

「じめんなさい、綿棒を切らしていました。細かい垢を吹き飛ばしますからちょっとふきますよー」

吹雪さんが顔を近づけて…

-フツ-

……なに？ 今になに？

耳から足の先まで電氣と云つか柔らかい羽根で撫でられる様な感覚は？

「じゃ、ウヒシトライッシュで耳をふきますよー」

私の狼狽を知つてか知らずか耳やうなじ拭いてくれている。い、いまのうちにどきどきしずめなきや。

「じゃ反対側ー」

なんですよー！

そうだよ。耳はもう一つあるんだよ。

吹雪さんが私の下にしていた方の肩の下に手を差し込んで力を入れると簡単に身体が回ってしまう。必然、顔がお腹に向いてしまうわけで、上を向くとおっぱいじりして吹雪さんの顔が見える…

耳かきが再開されたけど、ちょ、まよいよー 最後にまた『フツ』
が来たらまよいー

27話 訪問者達1

2003年4月27日 日曜日 午後1時半

〔Hガアンジエリン〕

アホか貴様

思わず云つてしまつ。

敵と承知で弟子入りを志願してこよつとは。

桜通りや京都の戦いを見てだと? どちらも半分もぼーやには力を見せていないがな。

しかし、向上心は認めてやるわ。

「悪い魔法使いにモノを頼むときにはそれなりの代償が必要だぞ……
まずは足をなめろ 我が下僕しもべとして永遠の忠誠を誓え
話はそれからだ」

「そんなのだめです」「
「なに云つてゐるですかー」

ぼーやの従者の富崎のどかと付き添いの綾瀬夕映が囁みついてくる。
しかし、頼りなさそつなを選んだな。と云つた何を望んで従者に
したのだ?

「巫山ふざけ戯ているのは貴様達だ。

私が知つてゐる戦い方とは私自身の戦い方だ。それを教えると云つ
のは私自身の長所、短所を教えると云つこと。私には敵が多い。貴
重な情報を与える相手に絶対の忠誠を求めるのはあたりまえだらう

が

私の言葉にぼーやは声を失つてしまつ。しかし、

「H、HヴァンジHリンさんは『闇の福音』の一一つ名を持つ真祖の吸血鬼です。たかだか10歳のネギ先生に幾つか戦い方を披露して引き出しが無くなるとも思えないです。それとも天才のネギ先生に全てを見透かされそ�で怖いですか！」

ほう、ほうではないか。付き添いと云つてゐるが従者候補なのだろうか？

「まあ、いい。今度の土曜日もつ一度ここに来い。弟子にするかどうかテストしてやる。そのときまでに報酬はなにが好いか考えておひづ。ふふ、楽しみだ」

「お金をとるですか？」

「当たり前だ。ぼーやは授業料から給料を貰つてゐるのだひづ。バイトをして授業料を払おうとする生徒もいるなかで自分だけただで教えて貰うつもりでもあるまい？」

「わづですが、ちょっと最近出費がかさんでいて」

「ふん、金など困つておいら」

「その、血とかですか？」

「それも好いが…吸血鬼が血を吸う理由に血液中に魔力の基になるマナやオーデと呼ばれるものが含まれているのだが……別に血液だけ

と云つわけじゃない」

ぼーやの股間に視線を送る。

「いけませんー」

「だ、ダメですー」

二人ともぼーやの前に立ちふさがる。
なんだ、わかるのか。くくつ
ぼーやの方はきょとんとしておる。

「初物は甘露と云つが……」
「冗談だ。テスト内容は追つて伝える」

とりあえず、3人を追い払つてやつた。

フフッ

自分が気に入った人物なら敵だらうなんだらうが構わない奴だった
な、あいつも…

2003年4月30日 水曜日 午後6時

〔吹雪〕

またも刹那さんに呼び出されました。大切な用件があるそうですが、
寮の部屋ではなく市街のビストロに呼ばれました。

出迎えたのは…

「お姉さま、『きざん』よつ

雅樂乃？」「ちらから行くと云つてゐるじゃない。

「ええ、お姉さまの仰有りたいこともわかりますが、私たちともに京都近辺は何度か足を運んでおります。なら、こちらを散策するのも好いのではないか思つたのです。それに本当の目的は関東魔術協会の長に今回の騒動の顛末と協力のお礼を云いに来たのです。……もし迷惑ならこのまま京都にもどつて待つております」

はあ、この娘は…

「仕方ない娘ね、私が貴女のお願いを聞かなかつたことがあつて？」

「はい、お姉さま」

はっ！ 辺りを見回すと何故か皆紅い顔をしています。見渡せば一昨日の面子ではありませんか。

「（口ホン） エーと用件はそれだけかしら？」

「いえ、本題はこれからです。天ヶ崎千草の尋問ですがお姉さまの云う通り意識誘導されていました様です。こちらから矛盾点を指摘するうちに千草自身が自分に疑いを持つてきています。記憶を読む術者の証言から、要所である少年がアドバイスしているのがわかりましたが実にうまく意識誘導しています。天ヶ崎千草が主犯ではありますか計画には深く謎の西洋魔術師が関わつていたと云つ見解で派閥の領袖たちとのコンセンサスがそれそうです。
その少年、フェイト・アーウエルンクスと名乗っていたのですがこちらは足取りをたどれておれません」

「そう」

「逃がしちゃ拙かったかしら？ 雅楽乃がいると判つていたならいくらでもやりようがあつたんだけど。」

「それと木乃香ですが、すでに力に目覚めた以上、こちらに居る間も少しばかりの制御を覚えてもらわないといけないのですが、はつきり申しまして適當な人材が見つかりません。ですのでこちらにいる術師に協力してもらう所存です。それを含めて関東魔術協会の了解を得たいと思っています」

「しかし近衛木乃香の魔力は鬼100体以上、そして鬼神を召還してもまだ空にならなかつた。術の練習も好いが制御は難しいぞ」

「そうなのですか？」

「そうだな、蛇口をひねつたら消防車の放水並の水圧で水が押し出される感じか？ それでコップ一杯分だけ水をくむ様なものだな。最初のうちは魔力の暴走も覚悟しないといけないな」

「ああ、麻帆良市内では周りに危険、市外だと木乃香さんが危険と」

「うむ、そうだな」

「その辺も協会長と相談ですね」

「云つてから雅楽乃是薄い手提げ鞄をとりだしファスナーを開けると、パソコン？」

「貴女の？」

「いえ、孫のです。動画が再生出来ると聞いて借りてきました。茶々丸さん、お願ひします」

「はい」

雅楽乃もパソコンは扱えない様ね。

受け取った茶々丸さんがパソコンを開けるとそのままモニターが表示される。スリープだったの？

しかし、この壁紙は…たしかビブリオン？ 千鶴さんが鑑賞されているアニメでしたよね？

「ねえ、雅楽乃。お孫さんにほちやんと断つてお借りしたのよね？」

「いえ、あいにく不在だったので書き置きして持つてきましたが？」

お孫さんにお気の毒と伝つたほうが好いのかしら？

「このぐらじ気にしません。私も男の子一人を育て上げましたので。しかし、殿方と云うのはおかしいものですね。あれで隠したつもりなんですから」

な、なにを見つけたのかしら、雅楽乃。

茶々丸さんが腕からコードを伸ばし、USBポートへ接続します。しばらくパソコン側でデバイスを探していましたが認識されたようです。

m vと云つ動画ファイルがあり、デスクトップへコピー後再生されました。

夜空を貫く一條の光。その中に実体化する異形の巨神
ゆっくりと上下に視点が移動し、下方から眺める視点はそのままの
巨大さをあらわしている
そこに近づく一体の人影

空中を翼で飛翔し、大太刀をもつて巨神へと向かっていく
巨神の一撃を無造作に切り払うと巨神の前へと回り込む
一瞬の間の後
両断される巨神

翼持つものはその場から消え去り画面は崩れおちる巨神を映しつづける

不意に画面が揺れ夜空を映し出す、先ほどの翼持つものが髪の長い
少女を抱いて飛んでいる

段々とその姿は大きくなつていき裸の少女と見つめ合ひ翼持つもの
のアップで映像は終わる

3分もない短く荒い映像でしたが云つまでなく先日の一件ですね。

「うわー、ひつなってたんだ

「いややわ、はずかしいわー」

明日菜さん、木乃香さん口々に感想をもらします。刹那さんは真っ赤になつたきり黙っていますね。

「エヴァンジエリンさんから先日の映像があるとお聞きしましたので」

「つむ、茶々丸の記憶映像だ」

「はい、先日の証拠物件として申し分ありません」

証拠物件？

「え、あきらかにプロパガンダ用ね。本気で刹那さんでまとめるつもりなのかしら？まあ、私が口を挟むことではないのだけど。

「ところで木乃香。あなたも近衛の家の惣領娘ですから残念ですが自由な結婚は望めません」

「そやな、おじいちゃんも見合いを勧めるし」

「近右衛門さまも？……それはともかく、だからと云つて貴女の幸せを望んでいないわけではないのです。夫婦の不和は私たちも望みませんし。木乃香、貴女理想の殿方はいますか？」

「ええ、急にそないなこと云われてもー」

「では、例えば…そう、刹那の様な方はいかがでしょ？？」

「せつちゃん？……ええかもなー」

ぽつと、頬を染める木乃香さんに刹那さんは先ほどと同じく真っ赤になつたきり黙っています。明日菜さんはぼそつと「これが外堀を埋める」と呟いてます。なにか嫌な経験値だけ増えしていくような気がします。

しかし、あの話本気ですすめるつもりかしら、雅楽乃つたら。冷静になれば『太話だつたと流れるとおもつっていたのだけれど。

「そうですか。責任を持つて刹那さんに似た方をさがしましょう。ですが最終的には貴女の意志しだいですので深く考えすぎない様に」

「はい、大叔母様」

あせつて変な男に気を向けるなど聞こえるのは私が黒いせいよね、雅楽乃…

雅楽乃が迎えの者と帰つてから私たちは繁華街を歩いています。G W中ですので社会人の方などで大いに賑わっていますね。できれば千雨さんもお誘いしたかつたのですが一人で来てくれとのことだったので仕方ありません。まあ、昨日一日『れば』とやらにお付き合いしたのでがまんして頂きましょう。

「そう云えばネギ先生はどうな用事だつたのですか？」

木乃香さんに魔法のこと知つて貰つたため、ネギ先生を警戒する必要もなくなり『守る会』も自然消滅でしょうか？麻帆良内ならば外

敵からの攻撃も無いようです。

ネギ先生が仮契約^{パクティオ}で生徒を従者にされたことは些か納得できませんが口をはさむつもりもありません。それは関東魔術協会の管轄でしょうから。

ただ、のどかさんとは一度話をしておいた方がいいでしょうか？

「うん？ ああ、ぼーやが弟子入りに志願してきた。英雄の息子が悪の魔法使いにだぞ。笑えるだろ？」

「それでお引き受けされるのですか？」

「一度は蹴ったが土曜日にテストして決める

「つまりはお受けなさると

「なんですか？」

「引き受けの気があるからテストなされるのでしょうか？ つまりは引き受けたいと云つ願望がある。テストするのは、受けたから仕方ない、弟子にするしかないと云つて自分に対する方便では？」

「だまれ、勝手に人の気持ちに解釈いれるな

「そうですか。まあ、気持ち云々は置いておきましてネギ先生を子弟にされる」とには賛成しますよ

「ほひ、今後のからみから反対するかもと思つたが

まあ、ネギ先生がエヴァさんの周りに居ることが多くなるならば若

干エヴァさんと接触しづらくなるかと思こますが、手は幾つでも考えられます。

「あちらの方はさして影響はないかと。
ここでエヴァさんがネギ先生に恩を売つておけばなにかとエヴァさんに有利になるのではないでしょうか？」

「おい」

「英雄の息子と云う肩書きはあちらでは大きい様ですのでネギ先生に太いパイプを作つておけば今後何らかの利となるでしょう」

「なんでそうなる？貴様の交友とは全て損得尽くなのか？」

「…ああ？失礼いたしました。お友達から始めたいと？」

「うがあー」

「マスターが面白い様に転がされています」

「恩と借りとはどう違つたん？」

木乃香さんがふと思いついた様に仰有ります。

「一概には申せませんが返せるのが借り、返し尽くせないのが恩でしょつか」

「そりなん?」

「一般的には親から子への恩でしおうね。子は親に受けた恩を全て返せません。物理の面でも心情面でも。ですから子は返しきれぬ恩を含めて自分の子に愛情をそそいでいくのです」

皆さん概念としては判るのでしおうが木乃香さん以外には具体的には納得できなでしおうか?かと云つて他に適当な例が思い浮かびません。

「貸しとは返すことを前提としていますから割と対等な関係ですね。逆に恩は返すことをあてにしない、返すことが難しい状況ですから立場に優劣があります。一度立場に優劣がつくとくづがえすことが難しいものです」

明日菜さん、エヴァさん、茶々丸さんが木乃香さんと刹那さんを見比べます。

「ですからそんな勘定を踏み越えてただ『友達だから』と云つ理由だけで動ける友情は素晴らしいのですよ」

「うわ、あんなに真っ黒い話をいい話でまとめた?」
「力技にもほどがあるぞ」

そう云われましてもねえ。

「どう云つ理由かは存じませんがネギ先生は人から教えて貰うことを避ける節があります。こうした観点からも是非引き受けた恩を貰ったのですが」

「なら、最初からそう云え」

〔Hガアンジヨリン〕

「で貴様達は何をしていたんだ」

「これ以上吹雪のおもむきにされたくないからとりあえず話を振つてみたんだが……」

「それがなー、なんやいつのまに吹雪ちゃんがアスナを膝枕してなー、じうみみかきしてー、ふつとふいたらアスナがあつとかゆうてー」

ふん、ぐだら…

どがつと何か倒れる音がしてそちらを見ると茶々丸が地面に膝をついている。

初期には不安定だった茶々丸も今ではすっかり安定していたが何で急に？

「マスター、なぜその場に私はいなかつたのでしょうか？」

「なぜって、だからぼーやに呼ばれて…」

「そんなことまで判らないのか？」

「ネギ先生…私はネギ先生をにくむ…」これが憎悪、そして絶望…ワタシハコンナコトナラタマシイナドホ・シ・ク・ハ・ナ・カツ・タ」いつもの茶々丸の音声から急に合成音に切り替わった。どうなつている?

「なんやーそないに残念なひもつこへんすればえんの一」

むくつと茶々丸の頭があがる。

「私は別に構いませんが」

「私たちもつやつもらつたから」

そう云う明日菜の隣ではすゞい速度で刹那が相づちをつゝてくる。
と云つか何で私を見る? ちょ、まて、茶々丸…

〔超鈴音〕

「どしたね、ハカセ」

ハカセに呼ばれて研究室に入るとモニターの前でハカセが難しい顔でキーボードやマウスを操作している。

「超さん、先ほど茶々丸からシステムエラーが報告され、今データ
が転送されてきています」

茶々丸は重大なシステム異常が出たときには緊急回路から無線通信

でエラー報告と位置情報が発信されるπ。場合によつては重要記録をバックアップのため転送するね。つまりは力ナリやばい状況ね。

「それは日付からすると今現在の映像らしいんですね」

「バックアップじゃナイ?」

「途中で記録がどぎれる可能性が高い危機的状況かもネ」

「どうあえず再生してみまや」

「エヴァンジロリンさん?..」

「吹雪力?」

画面には吹雪に膝枕されたエヴァンジロリンさんがいるね。

「何なのでしょウ」

「何かナ」

「と云いつつハカセ、何だモニターから皿をばざさない?..」

「ちや、超せんじや」

「あとでこのデータ「ペーしてほしいね。
紅い顔してハカセがこたえる。判てるけど多分わたしの顔も紅いね。

「え、ええ、茶々丸には悪いけど何故茶々丸が重要視するか解析する必要があります」

むじる気持ちが判りやすくなるけどネ。室内には私とハカセの呼吸音と云つか、鼻息だけが響いてるア。

2003年5月1日 木曜日 早朝

〔Hヴァンジエリン〕

「ずいぶんと熱心じゃないか、ぼーや」

警備の帰り、世界樹の下でぼーやを見かけた。相変わらず富崎のどかを侍らせていると思つたら佐々木まき絵までか。

それはともかく、ぼーやの動きが気に喰わん。中国拳法のスタイルだが何時習つたのだ？京都のときは私が着いたあとぼーやは闘つていなから判らんが、私と闘つたときにはずぶの素人だつた。まだそれから2週間ぐらいでこうも様になるものか？

少なくとも本などの知識だけではないな。誰かがちゃんと指導している。中国拳法なら超鈴音か古菲だが……古菲だな。あれなら部活感覚で教えることだらう。

とは云え、弟子入りを要請しながら無断で他にもちよつかいをだしていふとは…

「あ、おはよー！ やこますー！」

「あれー、Hヴァちゃん、茶々丸さんおはよー」

「おはよー！」

皆、挨拶していくがざつでもよー。

「カンフーの修行をするこにしたのか？じゃあ、私への弟子入りの件は白紙でこいつとでいいんだな？」

「いえ、それは京都で1対1の戦闘で手も足も出なくて、古華さんが麻帆良で一番強いと聞いたのでそれでアドバイスを…」

ふむ、私がぼーやに見せたのはオーソドックスな魔法使いスタイルだけだからな。無論、接近戦で遅れをとるつもりもないが。とにかく、無性に腹が立つ。

さつさと帰らひとしたがなにやら佐々木まき絵が囁みついてきた。またたく、つるをこ。

「いいだろ。立つた今貴様の弟子入りテストの内容を決めたぞ。そのカンフーもどきで茶々丸に一撃でもいれてみるがいい。それで合格にしてやるわ。ただし一対一でだ」

「jeeよ、わかつたよ。そんなのネギ君なら楽勝だよ」

なぜ貴様が云う？佐々木まき絵。

「もんでやれ……茶々丸？」

茶々丸を見るとなにかいつもと違う。と云つかこれは殺氣？

「ネギ先生…私を絶望に陥れたあなたが許せません」

なにやら神鳴流の剣士が暗黒面に目覚めたときに様な表情でつぶやいている。

「吹雪さんと明日菜さんの膝枕シーンの録画を邪魔した罪、万死に
値します」

なに云つておる。貴様、私を生け贋の祭壇に捧げて満足そつた
じやないか。

ぼーやも茶々丸の異常な態度に腰がひけておる。

「間接のロック解除、左手モーター高速回転開始、ターゲットロック、ファイア」

茶々丸の左手がすごい勢いで飛んでいく。ぼーやはとっさに避けて
無事だがあれば当たつたら拙いぞ。回転力で威力を増すなんてこで
ができたか？

「ネギ先生、避けると痛いですよ」

拙いところに当たつたら痛みなど感じる隙さえないだろ？よ。

やる気満々の茶々丸が第一、第三のロケットパンチを放つがぼーや
はかるうじて躲していく。

すると突然ジェットを全開にしたかと思えば急制動をかけ左右にス
ライドしながら相手の読みを外す動きは……吹雪か！茶々丸流にア
レンジされているが基本概念は湖で見せた奴の動きに違いない。

「茶々丸、やめい」

あきらかに異常な攻撃に慌てて停止命令を出すが茶々丸が止まらない。
い。

「ちー、ぼーや逃げい」

私の言葉にぼーやが初級杖で自分に魔力供給の呪文を唱え茶々丸から逃げ出すが…「ばか、そつちに逃げたら…」

ぼーやは茶々丸に背を向けて逃走したためそれを茶々丸も追跡し始めた。両者が私から遠ざかる方に走っているため仕方なく私も二人を追うが…

「追いつけるわけ無かるわ！」

同じく一人を追う佐々木まき絵はおろか、あの宮崎のどかにさえ追いつけないとは…「ぐづぐづ」の身体を恨めしく思ひ…

あまりの高機動でのエネルギー切れやオーバーロードで動きの鈍った茶々丸にどうにかの停止信号を打ちこめたのは5分後であった。

「そのー、すまんかった。まあ、あの攻撃で生き残ったのなら見込みはあるだろ？ 弟子にする」

「あ、あ、ありがと『じゅわ』います」

ぼーやが半泣きなの感激のせいとしておいで。

2003年5月4日 日曜日 午後6時

「吹雪」

自分の行いが恒に正しいと限りませんので検証とかはかかせません。

あの方をここに呼んでよかつたのか？

サンプルも何もなしでいきなりトラブルの対応策を提示できるような科学者、樹雷の最高機密の維持を確約していく方となると手近にはあの方しかおりません。

「いよ、吹雪殿」

「遠路はるばる感謝します。よつこそ麻帆良へ、わ、鷺羽ちゃん」

絶対なれない呼称を要求されるこの方は銀河アカデミー最高の哲學士、白眉鷺羽さまです。今回エヴァさんの登校地獄の呪いを解呪して頂くべく麻帆良にお呼びしました。

麻帆良駅の改札で出迎えです。今回は地球の交通機関の調査とか仰有り新幹線を乗り継いで麻帆良までお越しになりました。

一応辺りを見回してお一人であることを確認します。いえ、尾行とかではなく…

「気にするのは判るけど云われた通り誰も連れてきていないから、
魍魎とか美星殿とか…」

「いえ、恐れ入ります」

作り笑いを浮かべ返答しますが、名前を聞くだけで心臓の鼓動が早まります。特に美星さんはこの麻帆良と相性が悪いと云うか良すぎると云うか…混ぜたらどんな化学反応を起こすか考えたくもあります。

一人でタクシーに乗りエヴァさん宅へと移動します。

そして今はエヴァさん宅です。

自己紹介でいつも「鷺羽ちゃんと呼んで」でエヴァさんも呆気にとられていましたが…問題はエヴァさんの呪いです。

「さて、始めるまえに一つ確認しなきゃいけないんだが、茶々丸殿

「なんでしょうか。鷺羽さま」

「今後、いろいろエヴァンジェリン殿に協力してもらうんだけど茶々丸殿を介して情報が漏れるのは好ましくない。つまりは茶々丸殿には黙つっていてほしいんだけど」

「私には上位管理者、超とハカセには情報を隠すことが出来ません

「それは十分承知してるよ。別に管理者情報を書き換えようと云つ話じゃない。ただメモリーの一部を秘密領域化して茶々丸殿以外の

許可なくして閲覧できない様にするだけだ」

「私からもお願ひします。出来れば茶々丸さんをのけ者にする様な真似はいたしたくありません。鷺羽ちゃんはアカデミーでも5万年もの間最高と呼ばれ続けた方ですのでバグを残す様なことはないと信じております」

頭を下げ茶々丸さんにお願いします。

「マスター宜しいですか?」

「お前の好きな様にすればいい」

「わかりました。鷺羽さまお願ひします」

「そいじゃ、これ乗つけて」

鷺羽さまは懐からノートパソコンと黄色のハンドボール大のタマをとりだしました。タマの方は大きな黒い目と小さな口?がありアタマのしたには小さな身体が付いています。まあ、身体検査用の口ボットです。これを茶々丸さんの頭の上に乗せると目が踏切の信号機のじとく交互に点滅を開始し、解析を(多分)始めました。

およそ10分ほどで解析は完了しました。解析の途中から鷺羽さまはキーボードを忙しく叩いていました。

「ふむ、癖がないプログラムだね。まあ、[冗長]みだけど変なバグが紛れ込むよりはいいね」

「どれくらいで出来ますか」

「もう出来たよ。権限の一部変更と再変更の禁止、序でにデータ圧縮アルゴリズムの追加だからね。考えるほどじゃないよ。じゃあ茶々丸殿いくよ」

リターンキー一発で終了です。

「これで、茶々丸殿が開放指定したメモリー以外は外部からの読み出しを行えない。仮に記憶媒体ごと取り出されてもそれ自体が暗号処理されていてるからよほじじゃないこと解析はできないよ」

まあ、それを鈴音さんたちに伝つて試されるのは困るのでなにか保険はかけておきましょ。」

「さて、次はエヴァンジロリン殿だけど」

多少、あれを頭にのせる事に抵抗を見せていましたが渋々とかぶっています。

エヴァさんの解析には時間がかかる見込みなのでお茶を頂きながら時間をつぶしていました。

「とにかく、今更なのですが本当に呪いをとくつもりなのですか？」

一応念押しをしておかないとけませんからね。

「私がエヴァさんにお願いするのは麻帆良に対する裏切りです。場合によつては麻帆良から追われることもあるでしょう。それでも構いませんか？」

「当たり前だね。サウザンドマスターは私をここに縛り付け、麻

帆良の奴らは私から力を奪つた

「まあ、奪われたものを取り戻すのはお手伝いします、約束ですか
ら。ですが復讐の手伝いはしませんよ」

「いるか。力さえ戻れば私一人で十分だ」

「復讐できたとしても結局は賞金首に逆戻りでしょう。少なくとも
退屈で平穏な日常からは遠ざかります。先日、明日菜さんに話した
のですけれど……」

日曜日のエヴァさんたちが帰られてからの高畠先生の記憶操作に関
する見解をお話します。

「少なくとも麻帆良に居る間は外敵からソレを逃げ回る必要もな
かつたのでしょうか? 衣食住すべて足りていますよね。他になにか必
要だったのですか?」

「しかしあいつは帰つてくるといったのに約束をやぶつたのだぞ」

あら、そっちが問題なのですか? カッコいい奴なのですね、エヴァ
さん。

「私はナギさんと無論面識はないのですが、約束を守らない様な方
なのでしょうか? いえ、それならばもともと期待などしなかったの
ではないのですか?」

普段ちやらんぽらんでも要所要所では信頼出来る方だったからこそ
エヴァさんの失望が大きくなつた様に思えます。ネギ先生も一緒に
生活されたご様子ではないみたいですし、よほどの訳があつたと考
えた方が自然ですね」

「しかし、毎度毎度卒業の度、取り残される私の身にもなつてみる」

「その」となのですが、不自然ですよね」

「なにがだ？」

「登校地獄はエヴァさん本人にかけられたものですが卒業した人間がエヴァさんの事を忘れると言つ事象がです。登校地獄はナギさんの創作された魔法ですか？」

「たしか魔法教本を見て唱えていたからオリジナルでは無いはずだが」

少しばかり遠くの方を眺める様な感じでエヴァさんが仰有ります。

「登校地獄と名前は物々しいですが実態は登校を余儀なくされると云つたもので呪いにしてはぬるいですね。察するにこれは元々不登校児にかけるギアスだと考えた方がしつくりきます。ならば卒業と同時に解けると考えるのが自然…ですよね。

卒業と同時にクラスメイトがエヴァさんを忘れると言つてもクラスメイトだけでなく全学年の生徒、一般教員に影響を及ぼしています。一回の卒業でおよそ3千人以上人間に影響を及ぼしているのです。この多人数に関わる記憶障害…なにかと似ていませんか？」

「麻帆良の認識阻害…か」

「エヴァさんが卒業できないこと、もしくは成長しないことを隠すために認識阻害が発動したとも考えられます」

「迂闊だつたな。全てが登校地獄のせいだと考えていた

「まあ、だからそれがどうしたと云われると困るのですが。もしも今後学園長と交渉することがあるのならばカードの一枚ぐらいにはなるでしょ?」

「なるほど、そこへ落ち着かせたいのか

全ての呪いがとけてエヴァさんが自由になつたとしても今しばらくは麻帆良にいてもらわないと困りますし、ある程度発言権があれば尚良いですし。

「しかし、今更なんだが魔法を識らないで解呪できるのか?」

「んー?まあ、云つてみればこれはエヴァンジロリン殿に出来た癌を外科手術で切り取る様なものだね。その癌がいつたどりやつて出来たかまではわからない。……できたよ」

そういうしてごるうちに解析が終了したようです。

「やつぱり無理みたいだねえ」

鷲羽さまがモニターを覗き込んで難しい顔をしています。

「やつぱりは難しいと思つていました。やはり浸食が激しいですか?」

「やつだね。無理に引きはがせばエヴァンジロリン殿のアストラルまで影響がでるね」

「ちよつと待て!いまさら解呪が出来ないなんて云うのが?」

あつ、うつかりしていました。鷺羽さまと顔を合わせ互いに苦笑いです。

「失礼、エヴァンジェリン殿。無理つて云つたのはこの不完全な人体強化プログラムのことさ」

「鷺羽ちゃん違います。吸血鬼化のことです」

修学旅行の帰りにエヴァさんから聞いた話ではエヴァさんは他人から吸血鬼にされたとのことでした。勝手な判断ですが元の人間に戻せる可能性が無いか鷺羽さまに調査をお願いしていました。ただ600年の年月が普通の人間には長すぎるためアストラルが変容していないか気がかりだつたのですが、やはりうまくいかないようです。

「ああ、そうだった。まあ吸血鬼化つて血を吸いたいから吸血鬼になるんじゃなくて吸血鬼の能力、つまりは人間以上の力がほしいから吸血鬼になるんだろう?」

「そうだな、多分そうだろ」

エヴァさんは「自身の意志とは無関係でしたが。

「私から云つと吸血鬼の弱点は人体強化の副作用と云うかバグだね」

「? ああ、なるほど、吸血鬼と云う概念が最初にあつたのでそういうものだと納得していたが、単に生物と見た場合妙な弱点だとは常々思っていたよ。

だが、麻帆良で15年か弱い少女をやつていたがやはり私は吸血鬼だ。それを取られても、もはや私ではいられない。人間のエヴァン

ジエリンは600年前に死んだ。今此処にいるには真祖の吸血鬼エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだ

まあ、エヴァさんらしいですね。

「了解したよ、幼年固定のプログラムもそのままでいいかい？」

「何？」

「いや、吸血鬼化の方は肉体のポテンシャルが最大になる年齢までは加齢されるんだけど別のプログラムでそれを抑えているんだけど」

「つまりは歳をとると云つたほうが正しいのか？」

「成長すると云つたほうが正しいかね」

ちょっと待つてください。それは想定外でした。いえ、普通の人になつて普通にお歳をめされるのは歓迎しますが…いえ、歓迎しないわけでも…

まあ、ともかくエヴァさんの呪いは揃つて解除され、今後は普通に成長されるそうです。

「それじゃ、いくよ」

鷺羽さまのかけ声と共に登校地獄等の呪いが解除されました。

しかし、鷺羽さまは科学だけで全ての呪いを解除されたのでしょうか？先ほどのエヴァさんへの説明でも隣でわかつたふりをしていましたが内心、本当ですかと云いたかったです。以前、津名魅さまと鷺羽さま、そして名を知らないもうひとかたを交えた酒盛りにつき合わされたことがありましたが、お三方ともそこに太陽があるかの

様な気を発しておつ正直近づきたくなかったのですが渋々着つくりをした記憶もあります。まあ、この件は深く考えないことにします。

「では」ひるの契約の債務を履行したと回答します」

エヴァ センに向かつて云こます。やつと、どつかかりを掴めた心境です。

「確かに了解した。ふふ、わて向をしようか?」

エヴァ センはびっくりしなぐりました様子ですね。

「その前にこちらの要求をこへつか。まあ、この家に転送ポートを設置したいのですが」

一応、市内には幾つかの転送ポートをすでに設置していますが学園内にはできていません。

「貴様、自身で転移できるだらうが

「それは近距離だけです。ちゃんとした印が無いとまく跳べません。

このポートは私の船に直結をるので船から物資だけを送ることもできます。ポートは麻帆良以外にも置いてありますので学園側に知られずに出る」とも可能です、多分」

「多分ってなんだ?」

「いえ、今まで何度か転移しましたが学園側からのアクションが無

いので大丈夫ではないかな?と云つ「」じで。むしろHガワさんにはそれに探しを入れてほしい訳ですが」

「わかつた。他には?」

「魔法についてのレクチャーでしょうか。まあ、それはおいおいに。そう云えればネギ先生を弟子にされたとか?」

「まあ、その、なんだ、成り行きでな」

なぜか私を睨みつけます。

「ネギ先生と鉢合わせだけは避けたいので設置場所には気をつけください」

「わかつた。どれくらいの広さが必要だ?」

「まあ面積で云えば直径3mあれば足りるでしょう。設置が完了したら船に招待いたします」

本来は禁止されますが一応協力者と云うことじで。第一世代の佐久夜ならぬにかしかけられても自分で判断して対応できますし問題はないでしょ?」

「愉しみにしておひづ」

さて、とりあえずエヴァさんの呪いも解けましたのでお祝いの宴会です。

茶々丸さん以外は見た目はあれですが一応全員成人ですのでお酒の

乾杯からはいります。

「それではエヴァ殿の回復と今後の成長を祈つて…乾杯」

「乾杯」

「乾杯」

グラスに注がれた神樹の酒をそれぞれ飲み干していきます。

「でもいいのかい、こんなとこであけちやつて」

「それはこいつらの台詞です。魅呼さんが怒りませんか?」

「いいんだよ。あのザルに飲ませるよりお祝いの酒として飲んだ方がいいに決まってるわ。それにサンプルなら少量残れば十分だ」

鷲羽さまが気遣ってくれていますが、この神樹の酒は皇家の樹の実からつくるお酒で、ものがものだけに樹雷外では各国の元首以外手にいれる手段がないのです。かつてオーラクションに流れた神樹の酒に可住惑星並の値段が付けられたとか云われています。それでも樹雷の人間ならば一生に一度は口にはできる筈です。多分…
佐久夜でもあるていど収穫でき神樹の酒にしていますが流通させることも出来ないので仲間内のお祝いでしか飲む機会もないのです。今回の依頼料として佐久夜の神樹の酒を少量分けてほしいと鷲羽さまから云われていましたので、もののついでです。瀬戸さまの了解を得て一瓶もつてきました。

「茶々丸、お前も一口ぐらい飲め

エヴァさんも無茶ぶりしますね。以前聞いた話ではセンサーで味を分析できるが体内にいれることはできないそうです。

酒呑みの悪い癖ですよ、とにかくおつとしたりやれや「乾杯」ひやひやや、茶々丸さんがグラスに口をつきました。

? 茶々丸さんが固まっています。

「…おいしい?」

おいしい?その概念はないと言つていきましたよね?茶々丸さん。鷺羽さまを振り返りますが首を振つて違うと身振りで答えます。

「ふうん、興味深いねー。多分こいつちが問題だと思ひナビね

神樹の酒の瓶をつまんでゆらゆら揺らします。

茶々丸さんは飲み干すことができないので口にお酒を含んだままですが逆に考えればいつまでも味わつていられるのですね。

しばらくしてハンカチを口にあて含んだお酒を移しています。

：神樹の酒の複雑な成分にセンサーが過剰に反応してそれをおいしいと誤認識した。と云う見解も出来ますがまあ、小さな奇蹟と思つた方がいいでしょう。

「とにかく、今日は神楽坂明日菜を呼んでいないのだな?」

「やつですが、なにか?」

「けつこいつあれを連れ回していたからな。鍛えているのかと思ったからや。それと、一緒に奴の記憶封印も解除するのかと思ったのでな」

ああ、それですか。

「先日の記憶封印の話ですが常々幼女にわざわざ施す様なものではないと思つてはいたのです。子供の記憶など無理に封印するよりも過剰な情報量で上書きしたほうが後腐れないでしょ。ですが、明日菜さんが見かけ通りの年齢ではなかつた場合、話が違つてきますね」

「なるほど、まあ、我々からすればあながち無い話では無いな」

ええ、こちらにも幼生固定で数千年生きた方もおりますし。実際の年齢と生理年齢のずれなどいくらでも生じます。

「以前、明日菜さんに思い出せばいいとそそのかしたことがありますが、他人が強制的に封じた記憶では話が違つてきます。思い出したとたん退つ引きならない状況になるやしれません」

そうなつたら私もなんとかしなくてならないでしょうが出来れば今は避けたいですね。

「なるほどな。それで脇に侍らせていたのか。よからう、こちらもちょっと探りを入れてみよ」

「ありがとうございます」

おそらく、明日菜さんの記憶の筐の封印は解けているのでしょうか。あとは何時それが開くかです。いかなる記憶なのか推測できないので無理をするわけにも参りません。私が発端ですからできるかぎり何とかしたいとは思っています。

「で、結局前に云つていた捜し物…世界樹がお前達の捜し物ならどうするのだ?」

「もちろん、交渉しますよ。出来れば金銭で折り合いがつけばいいのですが」

折角言葉が通じるのですから話しあうは可能でしょう。

「話しあうか。奴らがそれでOKするか?」

「交渉とは相手の首根っこをつかんで交渉の席につかせ、論拠を固めて相手に選ばせるのはYESか、はいかの違いだけでしょう?」

それを聞くとエヴァさんはなぜかぐつたりした表情で仰有ります。

「ああ、お前はそういう奴だよ」

「まあ、「冗談が半分ですが」…交渉を行つ前提で調査を行つていますが場合によつてどの様な交渉になるか判りません。例えばあわれが宗教的シンボルとして信仰対象になつてゐるならば交渉でなんとかなる可能性は低いでしょう。死をまつたくおそれない、あるいは人命を軽視する傾向があるならば砲艦外交も威力が薄いですし、独裁ながら組織よりも個人の性格の調査にシフトせざるを得ません」

「なかなか面倒なのだな。力で圧倒するのかと思つていたが

「アクトローラではありますんで、むやみにそんなことはいたしません。国民党にしたら私の首」ときでおさまりもしませんし

今日のことやりとスタートが切れた様なものですが動き出したら
加速は楽でしょう。

関東魔術協会だけの調査ならばエージェントの追加も可能です。む
しろいやといふときまでおどりとしてあからさの目を引きつけておく
のもいいかもしません。

今夜はジュースが美味しいです

神樹の酒が無くなったあとはエヴァンジエリンさん秘蔵のお酒で酒
盛りでした。基本私は酔わないで酔っぱらいのあのテンションに
はついて行けず、茶々丸さんと肴を作ったりしていました。

ただ、エヴァさんと鷺羽さまの会話で性転換薬の魔法からのアプロ
ーチなる講義が始まる頃に強引に話に参加させられました。

「魔法薬なるものなんて私も知らないんだけどね」

鷺羽さまの言葉にエヴァさんが茶々丸さんに命令して赤と青のキャ
ンティーの入った瓶をもつてこさせると赤いキャンティーをおもむ
ろに口に入れるとエヴァさんが大人の女性に姿を変えます。

驚く以前になにか大事なにかが壊れた気がするのは気のせいでは
どうか？本当にここは私の故郷の地球でしょうか？

ふと、鷺羽さまに田を移すといつの間にかアダルトモードに変化し
ています。我々はあるていど年齢を調整できますけどポンポン変化
できるわけでも無いはずなのに…

一応私も一つもらいましたが変化はしませんでした。しかし茶々丸

さんでさえ妖艶な美女になつたのに何故私だけ…

落ち込んだ私を茶々丸さんが髪を撫でてくれます。

「吹雪さんは今まで十分です」

そう云つてくれるるのは貴女だけです。

ただ、そう仰有つてくれる茶々丸さんですが、アダルトエヴァさんを見る目つきが冷めている気がするのは気のせい…ですよね。

2003年5月4日 田曜日

〔千鶴〕

最近、私のパソコンに変な客がやつてくる。

それは二つの間にか私のパソコンのデスクトップ上にいた。2頭身の髪の長い女の子でぶつちやけて云えばルームメイトの正木吹雪をデフォルメした感じだ。初めて見たときはウイルスかと思い、駆除ソフトを走らせてみたが効果はなかつた。回線を物理的に遮断して、さてどうしようかと考えていたときチャットルームが強制的に開き、「おはなしして」と彼女が云ってきた。

彼女は『さくや』と名乗つたがどうやらこのパソコンと通信しているかとか、なぜ私に接触したとかは教えてくれなかつた。しばらく会話して彼女が帰つたあと、やつぱり気になつたのでハードディスクを初期化しOSの再インストールを行つた。

次の日、まだ物理的に回線はつなげていないのにさくやはまたデスクトップ上に現れた。正直オカルトかと思つたが画面上のさくやが泣きそうな顔で「ちうはさくやがきらこ?」と吹き出しつきで表示されたら罪悪感でいっぱいになつてしまつた。

吹雪本人に「このことを云おうと思つたが、「実は私のパソコンにお前そつくりな奴がいるんだよ」など云つたらどんな痛い奴なんだよ!と思われるのかと考えると云に出せなくなつてしまつた。うん、まあ、オタクなのはすでにばれてはいるんだが。

パソコンは初期化したので個人データもほぼいれていないので、試しでしばらくさくやにつき合つことにした。

さくやは変な奴だった。

常識に欠けるが知識は豊富だった。感性もちょっと人とずれているがそれがこっちには新鮮だつたりもする。

なんと云つてもルームメイトの姿が私の警戒心を解いたのか、私もさくやを全く警戒しなくなり、いつしか普段の様にネットに潜り始めた。

しばらくして気がついたがさくやはパソコンに寄生?してからパソコンの処理速度が向上したりソフトの不具合がなくなつた。いつたん初期化したせいかとおもつたがあきらかにパフォーマンスは向上している。さくやはデスクトップ上に存在する時点で処理が遅くなるはずなのだがそれは全くなく、逆にさくやがいないときの方が遅いのだ。ベンチマークを走らせてみるとあり得ない数値を叩きだしてくれた。

しばらくして気づいたことはさくやは吹雪の存在を知つている。吹雪が近くにいるときはアイコン状態になつてしまつ。吹雪が自分のノートパソコンを開くときにはさくやは留守になる。吹雪はさくやを知つているのだろうか?訊きたい氣もあるが今のさくやとの関係が壊れてしまう様な気がして訊けていない。

-ちつ、お手紙 -

お、ちゅうじメールが届いた様だ。さくやがあまり抑揚の無い声で知らせてくれる。

今日のさくやはメイドさんだ。アバターの着せ替えは写真やピクチ

ヤーをやくやに見せる（ドラッグ＆ドロップ）だけでやくや自身が勝手に着替えてくれる。吹雪はそういうのを嫌つてゐからなおうれしい。いまブログでは妹分として活躍中だ。

やくやはこりこりと役に立つてくれる。テレビ録画のCMカットや動画変換なども手伝つてくれている。OSやソフトを勝手に魔改造していくようだが実害はいまのところないし、荒しのアドレスなど簡単に突き止めてくれる。欠点と云えばかなりの甘えん坊なのが問い合わせを無視したりするといじけて悪戯で勝手に動画とかを再生したりすることだろう。チャットでキーボード入力が煩わしくなったのでボイスチャットに切り替えてみたがこれもさくやの魔改造のおかげで驚くほど変換率だ。近頃、吹雪は神楽坂や桜咲とよくつるむ様になり、留守がちでちょっと寂しい気がするが同時に気兼ねなへやへやと遊ぶことが出来る。

昨日から吹雪が関西からきた親戚と近くのホテルに泊まり込んでいるので今日はダンジョンに潜る予定だ。無論ネットゲームだが、もちろんこれも魔改造済みだ。パラメータをいじつているのではなくキャラクターや風景がハンパなくリアルになつてているのだ。デモ画面よりも緻密な画のキャラクターに書き換えられている。さくやもゲームのアバターになつてゲームに参加しているが、そのなかでは吹雪を10歳前後にしたぐらいいの姿になつていて

- がん・ほー、がん・ほー、がん・ほー -

早速やくやの声が聞こえてきた。ちょっと待つてると、吹雪は食事だけは作りにおきしてこるので、ちゃんと食べないとこわいんだ。

30話 訪問者達4

2003年5月5日 月曜日 午前9時

昨日はそのままエヴァさんに泊まり、いえ呑み明かしました。日の出のころに一旦仮眠をとつていま起床したところです。お一方ともかなり呑んでいましたが大丈夫そうです。

「…まったくなんともない。完全復活だ」

エヴァさんが叫んでいますが酒盛り自体が性能試験を兼ねていたのでしょうか？

とりあえず部屋の換気をして酒臭さを追い出します。
アセトアルデヒドの臭いは、はつきり云つて耐えられません。昔、最初にお酒を頂いた翌日、あの臭いが自分の中からでてきたとき、その臭さで気分がさらに悪くなってしましました。
以降お酒を頂いても速攻でアルコールを分解してしまう様になりました。まあ私が酔っぱらっている姿は倫理基準からはみ出しそうですしね。

「さて、そろそろこきましょうか」

今回、鷺羽さまには個人的にお願いもしております。休日にしてはやや早い時間ですが私たち4人は麻帆良学園中等部3・Aに移動しました。

「じいかい」

「ええ、やつです」

休日そのため誰もいない教室に入りました。お田辺では最前列の窓際の席です。

「はい、これ付けて」

鷺羽をまから安っぽいボール紙でできたメガネを渡されました。赤と青のセロファンがグラス代わりに張られています。これは3D：いえ、立体メガネと呼んでいたあれです。云われた通りにメガネをかけてみると窓際に髪の長いセーラ服の少女が見えました。

「やあやん？ 相坂やあやん？」

一瞬びくっとした彼女は私の問いかけに答える様こぢりこ近づいてきて何やら話しかけてきますが声のほうはさっぱり聞こえてきません。しかし…

「ふーん、ずっとここに居るんだ。……そりやつらいねー」

鷺羽をまは普通にやよさんとお話をされています。立体メガネをしているのは私と茶々丸さんだけです。

幽霊と会話をされる鷺羽をま… 常々思つのですがこの方、本当はいつたい何なのでしょうか？

「これだけ綺麗にアストラルだけ分離した状態ならば逆に新しい身体になじみやすいかも」

やよさんの偽体を用意して頂くのが鷺羽をまへのお願いの内容です。

「ちなみに訊くが、相坂さよを甦らして何の得が貴様にあるのだ？」

エヴァさんが仰有るのも当然ですね。銀河連盟の規約にも反する部分もあります。まあ、当然抜け道はつくってはいますが。

「私はただ3・A全員そろつて卒業したいだけです」

これには嘘偽りはありません。おそらく今私の本当の素性を知らない方々とは、いずれ一度と会つことが出来なくなるでしょう。

女学校時代の卒業アルバムは私の唯一最高の宝物です。私は卒業する年の夏まで自分が普通の地球人でないなど疑つたことなどありませんでした。私は父親のせいで柾木の村では負い目を持つて生きていました。しかし、それを不憫に思つた勝仁さまが神戸の寄宿学校に通わせてくださつたのです。その3年間は私の黄金時代でした。しかし、卒業の年の夏、勝仁さまから私の素性を知られ普通の方々と同じ時を生きられないことを知りすべてを捨てて宇宙へでました。

今から思えばやり方は幾らでも有つたはずですが…若かつたのでしょうね。

卒業アルバムは以来、私の心の支えでした。

私は3・Aの卒業アルバムも同じように宝物にしたいのです。それにはエヴァさんやさよさんが必要なのです。

本来の役目もそこに無くしたものもう一度取り戻せる機会を得てはしゃいでいるのでしょうか。まあ、我ながら浅はかな行為です。

ですが鷺羽さまとエヴァさんは詳しく訊いてもせずただ、そうか

と仰有いそれきつです。

「セヒト」

鷺羽さまはしばらくセヒトさんと話をしたあと、おもむろにハンティクリーナを取り出しほよたんを吸い取つてしまわれました。

「まるで魔法だな」

Hヴァーさんもあきれ顔で仰有ります。私もそうですねと同意したいところですがそれは拙いですよね。

校舎外へ移動すると鷺羽さまは、セヒトさんの偽体造りのために帰られると仰有いました。

「いやー、一晩エヴァンジエリン殿と語り明かしていろいろインスピレーションをもらつたからねー」

…何か激しく嫌な予感がします。しばらく桟木の村には近づかないことが良いかも知れません。

「ん?」

エヴァーさんが遠くを見つめて呴きました。同じ方を見るとネギ先生とのどかさん、そして夕映さんがこちらに向かってきます。ただそれだけならば別に問題ないのですが、3人が空を飛んでいるとなると話が違つてきます。

「「」んな朝っぱらから3人揃つて何を?」

「もう九時半は、過ぎていますが……それより堂々と空をとんでいる」とが気にかかるのですが

「一応、認識阻害の呪文がかけられておる」

……そうなのですか。私には効いていませんが。まあ、それは置いておいて。

「何となく物々しい感じですね」

ネギ先生は始め皆さん荷物を詰め込んだリュックを背負つておられます。荷物を運ぶために杖に乗つている感じです。

「のびかさんと夕映さんは図書館探検部ですね」

方角も図書館島です。

「やう云えば、坊やが詠春からナギの手がかりをもらつたとか云つておつたな」

私の知る限り麻帆良学園で最も怪しい場所は図書館島です。以前、木乃香さんたちを捜索した際にちらりと見ただけで、それ以来、足を踏み入れていません。最重要ポイントですので不用意に侵入して無用な警戒をされたくなかったからです。……まあ、自分でも行動に矛盾はあるとは思っています。主にエヴァさんとの一件ですが。まあ、こちらを警戒して探つてもうつても逆にカウンターをしかけることも可能になるのでいいのですが……むしろ未だに何の反応もないでござとか不気味です。

「どうする？」

「はー？」

「行きたいんだろう？ 客人は私が駅まで送つてこくさ。 茶々丸、お前もついていけ」

「Y es マスター」

「え？」

「これでも、あいつの師匠だからな。 とくにより私に無断であれこれやるのが気に喰わん」

何となく、いまエヴァさんと鷺羽をまから田を離すのが怖い気しますが好機であることも間違いないでしょう。

勘ですが、ネギ先生のお父さまの手がかりが世界樹の秘密にからんでいる気もします。

ネギ先生には悪いのですが、後をついていけばネギ先生がおどりになつて学園側の注意をひいてくれそうです。 茶々丸さんに鷺羽さまを送つてもらつと云う手もありますが、その場合エヴァさんに付いてきてもらうことになり、何かしらネギ先生たちにあつた場合、私がエヴァさんが助けに入ることになります。 そうなつたらどちらが助けても問題になるでしょう。 私の場合は何故そこにあるのか、エヴァさんの場合は封印されている力はどうなつたのか、がです。 やはり茶々丸さんについてきてもらうことなどが正解です。

「うーは、エヴァさんのお言葉に甘えさせて頂きます。 鷺羽ちゃん、今回ほかにありますかといつぱりれこました。 そして、さよさんのこと

を宣しくお願ひいたします

「いいよ、まかしておいて」

じゃあ、じばかりに手をあげて挨拶されると鷺羽さまとヒガアさんは駅の方へと向かつて行かれます。私と茶々丸さんはいつたん手近な物陰へと移動し監視がないか確かめます。

「茶々丸さんのジットー燃料は15分ほどいの量でしたね」

「はい、通常ならそのぐらいです」

「こぞれとほりときに燃料切れは困ります。とつあえず私につかまつてください。」

「以前、神楽坂さんといっしょにとんでいましたが？」

確かに、桜通りの吸血鬼のときでしたか、確かに茶々丸さんとヒガアさんの前から明日菜さんと一緒に飛んで逃げましたね。

「はい、力場を形成して飛びます。手をつなぐなりさえすれば茶々丸さんにも力場の効果が現れます。もちろん抱っこでもいいですよ」

「はい、お願ひします」

もちろん[冗談ですと続けようした矢先に茶々丸さんの言葉に遮られました]。

「お姫様抱っこを希望します」

「は、はい」

茶々丸さんの迫力に負けて承諾してしまいました。いや、まあ、別に構わないのですけれど。茶々丸さんの背後に回つて茶々丸さんを抱きかかえます。

「重くは…ないですか？」

思い出したかの様に茶々丸さんが仰有りますが問題ありません。

「全然ですよ。空を飛べるくらい軽いです」

そう云つてから力場を展開し飛び上ります。ネギ先生たちはかなり先まで行つてしましましたが、図書館島の上空で発見しました。島の上空をゆっくり旋回していましたがしばらくしてから着陸されました。地上であばら屋らしきものに入り込んで…でてきません。そこが入り口でしょうか？

後を追いつまえに辺りを調べてみますがセンサらしきものは感知できません。

さして広くはない図書館島ですがこのあたりは樹木が多く道路や対岸からも遮られている様で人気もありません。電子機器の類もやはり感じられません。一件朽ちた城壁の一部ですがそこがエレベーターになつているようです。

エレベータは稼働中で地下へ降りていく最中です。これはネギ先生たちでしきう。しかし、エレベータに乗るのは拙いですよね。監視カメラが付いている可能性が大です。光学迷彩でも無人でエレベータが起動したら不審に思われるでしょう。

そう云えばネギ先生達は今回正式に麻帆良学園の許可をとっている

のでしおうか？期末試験の際、こつてりとお説教をされた様ですか
ら今回は前回とは違うのでしおう。それならばネギ先生はおとりにはなりそつにないですね。

エレベータに乗るのは剣呑ですが、エレベータが使えないわけでは
ありません。エレベータのシャフトを通ればいいわけです。さて、
転移でもしましちゃうか。

「夕映」

京都の修学旅行で魔法と云うものを初めて目にしたです。その後、
ネギ先生に灯りの呪文とかを実演をしてもらいましたが、実際に杖
に乗せてもらい空を飛ぶと魔法とはすこいものだと実感できるです。
女子寮から図書館島までの短い距離でしたが杖にまたがり空から眺
める麻帆良学園にはさすがの私でも感嘆の声をあげてしまつたです。
図書館島の大迷宮は魔法使い達がつくつたらしいです。そう考えれ
ばあの迷宮も不思議ではありません。…いえ、以前はさほど不思議
とは思つていなかつたですが、それも魔法の仕業だということです。
魔法の存在を知つてから世界が拡がつた気がするです。魔法は裏の
世界らしいのです、しかし裏の世界を覗かなければ眞の世界は見え
てこない筈です。無論、私が表の世界の全てを知つているわけでは
ありませんが、ありえないことも実はあるかもしれないことだ
と知つたことは今後の考え方にも重大に影響を及ぼします。

京都の事件の後、のどかからネギ先生の従者になつたと教えられた
ときには正直のどかに羨望を覚えました。のどかやハルナが石に

されたときや、長瀬さんたちが鬼と闘っている現場では恐怖を感じましたが、それでも魔法と云うものに携わりたいと思つていたからです。

のどかがネギ先生に魔法を教えてもらえたるそつなので、序でに私も教えてもらえる様にネギ先生に頼みました。一応、これで私も魔法使いの弟子です。ネギ先生の使い魔と名乗る白いオコジョはしきり従者になるように勧めてきます。

のどかのアーティファクトと云つものをみせてもらひ…よしましょう、この話は思い出したくありません。とにかく、今はなんの力が無くても仮契約パクティオとやらを行い強力なアーティファクトを手に入れればネギ先生の手助けができるそうです。

しかし、儀式にキスをする必要があると云われて断りました。一応、のどかの想い人であるネギ先生とキスをするのは気が引けます。まして京都で見たネギ先生のお父さまたちのパーティの写真では写っているのは全て男性で内幾人かはネギ先生のお父さまの従者だそうです。カモさんはキス以外契約の方法は知らないと云っていますがちょっと信用できません。麻帆良内では京都の様なことは起きないそうなので無理に契約する必要はないと思つてゐるです。

ネギ先生が京都でもらつたお父さまの手がかりの地図をコピーしていただき、のどかと二人で調べて驚くべき事実をつきとめましたです。…驚いたのはなんでネギ先生が気づかなかつたことでしたが。地図上の門のらしきものに『オレノテガカリ』とか描かれていました。そして犬の様な絵がありましたがきっと彫像かもしくはそれっぽい岩か何かでしょう。きっと鍵穴かなにかがあるはずです。門にたどりついた私はそう思つて壁や天井を見回していましたが……ドラゴンと目が合いました。

目があつた瞬間、生態系はどうなつてゐるのかとか、腕がないから

「イヴァーン」と呼ばれるタイプだとしようもない知識が頭の中を駆けめぐり……つまりは固まってしまったです。

ドラゴンに踏まれそうになつたとき、誰かに抱えられてその場から逃げ出されました。

「脱出します、ネギ先生」

私とのどかは突然現れた茶々丸さんに抱きかかえられていました。抱きかかえられたまま後ろを見るとドラゴンが飛び立とうとして……ゆっくり崩れ落ちていきます？？？

のどかはネギ先生に預けられ、私は茶々丸さんに抱きかかえられたままその場を後にしました。

エレベータで地上に戻ると予想外の人気が私たちを待っていました。
吹雪さんです。

「畠さん、『無事でな』によりました」

なんで知っているですか？

「茶々丸さんがいつしょと云ふことは何かトラブルに遭われたと云うことですから」

吹雪さんは自分たちが何故ここにいるか説明してくれたです。私たちが飛んでいる姿を目撃したことや、一緒にいたエヴァンジェリンさんが監視として茶々丸さんに跡をつけさせたことなどです。

「え？ 僕たちが見えていたんですか？」

「ネギ先生が驚いています。確か認識阻害の魔法がかかっていると説明してくれたですが。

「認識阻害の魔法も万人に効くというわけでもなさそうですよ？その他にも定点カメラや偶然に携帯電話のカメラなどに回り込む可能性も考えた方がよさそうです、ネギ先生」

うつと顔を蒼くするネギ先生です。しかし、吹雪さんも魔法関係者なのでですか？

「私は魔法の存在を識つていますが関係者ではありませんよ。今回ここにいるのは夕映さんとのどかさん云いたいことがあったのですが…もう云つ必要もありませんか」

「かまいません、云つてください」

たぶん、危険なことをするな、とか云つお説教でしょう。しかし、私たちには覚悟があるのです。

「そうですか。では質問を一つだけ…もし、夕映さんとのどかさん、お一人だけで肉食獣等に遭遇しそれから逃げる途中、相手の方が怪我をされ歩くことができなくなりました。あなたは相手の方を見捨てて逃げますか？」

「そん」とできません

「逃げるわけないです」

いつたい何を云いたいのでしょうか？吹雪さんは

「なるほど。では、逆の立場ならどうでしょうか？」

え？

私が怪我をして動けなくなり命を落とすのは仕方ありません。それも覚悟の上です。しかし、私のミスでのどかまで危険な目に遭わせることまでは考えていなかつたです。反面、残つていてほしい気持ちもあるです。いや、やはりここは……

私たちが返答につまつていると吹雪さんは云いました。

「これには答えて頂かなくとも結構です。もともと正解などない質問ですから。ただ、こちら側に関わつているといつか答えを求められる日が来るかもしません」

またも吹雪さんにやられてしまつたです。

「吹雪さんなりじりあるですか？」

悔しくてとつとつ尋ねていました。

「私ですか… そうですね、まず、相手が自分か、どちらが優先的に生き延びるべきか考え、どうしても私が生き延びなければならない場合には相手を見捨てます。逆に相手を護らなければならぬ場合、戦つなり、おとりになつて猛獸の注意をひいてみるなりしてみます」

ネギ先生ものどかもびっくりした顔で吹雪さんを見てゐます。

相手と自分の命を天秤にかけると云う言葉に驚いてゐるようですが。いえ、でもそれは論理的には間違つてはいないです。もちろん、人間味に欠けている面もありますが。

なんとなく考えていた自分の役割に関して答えが出た様な気がするです。

従者でなくとも魔法のサポートが出来なくとも、ネギ先生とは違つた物事の解釈を行い、助言できるならば私がネギ先生のパーティに入れる価値があります。

ですが… そういう意見がすぐにできる吹雪やんつていいたい…

「EJの問い合わせの唯一の不正解は… なにも選べない」とでしょう。逆に努力次第では選択肢を増やすことも可能だつたはず

そうです。今の自分を基準にしましたが、魔法や体術が使えるなら戦うことや、のどかを抱えるなりして逃げることも可能です。ですが…

「止めないですか？」

「義務教育の最終学年ですから進路をEJ自身で決める時期でもあるでしょう。まあ、かと云つてお勧めする気はないのですが

私の中でいろいろ疑問がわき上がります。そのなかでも一番大きいものを質問するです。

「吹雪さんはなぜそう、淡々としていられるですか？魔法を知つて興奮したりはしないですか？」

私がそう云つと吹雪さんにしては珍しく一瞬はつとした表情になり、そのあと遠くを眺める様な面差しでしばらく考えた後、うつむき加減で話し始めました。

「そうですね。私が感じたものは失望です」

「『自分が魔法使いではない』ことにですか？」

「いえ、… それもあるかもしませんが、魔法があつても結局世界は紛争と貧困にまみれています。魔法でも魔法のごとくそれらを解決できないと思い知らされたからです。それとも、一部の人間がそれを独占しているからでしようか？」

三度、言葉を失つたです。この人はどの位置から世界を見ているのでしょうか？

打ちのめされた自分の他にこの人に私を認めさせたいと強く思う自分がいます。いいでしょ。私は魔法に希望を見いだす。あなたとは違った世界を見つけ出します。

茶々丸さんに抱かれて去つていいく吹雪さんを眺めて心に誓つたです。

「茶々丸」

ネギ先生と別かれてからずっと吹雪さんは押し黙つたままです。珍しい… いえ、初めてみます。… メランゴリックな吹雪さんも趣がある… いえいえ、もしかしてネギ先生と何かあったのでしょうか？主に綾瀬さんと話されていたはずですが、もし、ネギ先生が問題ならば… 次こそは！

「茶々丸さん… 茶々丸さんはエスペラント語と云うのは『存じでしょうか？』

検索……エスペラント語 人造言語 エスペラント博士」とラザロ・ルドヴィコ・ザメンホフが提唱

「知つていると云つよりデータベースにありました。それがなにか？」

「いえ、私が本当に女学生だつたころのSF小説を検索し、あらすじを確認してみます。

なるほど、この頃には未来＝ユートピアとした題材のものが数多く見受けられます。

「いつか人類は戦争を放棄できると無邪気に信じていました。しかしながら結局、人類は未だに争いをなくすことができません。いえ、『3人よれば派閥ができる』とはいまだ事実です。それとも人間の根源的な性質に攻撃性が含まれておりそれを失つたら滅びを迎えると云う証左なのでしょうか？」

「ああ、吹雪さんの云う世界は地球上の世界だけでなく、宇宙のことも含まれているのですね。」

「昨夜、マスターが今まで聞いていた情報を改めて私も吹雪さんから教えてもらいました。吹雪さんは樹雷と云う星間国家のエージェントらしいのですが、つまりは宇宙では今もってそういうことが行われているのですね。」

とりあえず私ができることはただ一つ、この憂いを帶びた吹雪さん
の映像を未来永劫に残すことです。

2003年5月10日 土曜日

「吹雪」

今日は約束通り皆様を佐久夜へ案内する日です。

今回招待したのは、明日菜さん、刹那さん、木乃香さん、エヴァさんそして茶々丸さんの5名です。

エヴァさんの家の裏手から地下へと入ります。元々脱出用のルートの一つだったそうでおかげで玄関を通过することなくエヴァさん宅へ入ることが可能になりました。これなら不用意に他人と鉢合わせすることもないでしょう。

先日、エヴァさんが通販で買った家具に偽装して搬入した転送ポートはすでに地下室に設置しています。設置したと云つても床と天井にボードを張り付けただけなのですが。

これは、正確には転送ではなく、こと佐久夜のポート内の空間を入れ替えるものです。この装置自体には転送（入替）機能はなく正確な座標を佐久夜に送ることしかできません。普通の転送ポートに比べればより大きなエネルギーが必要ですが、佐久夜からみれば些細な差ですし、なにより簡便な機能なため万一二度に接収されても問題は生じないでしょう。

6人そろつてポートに入ると転送が開始され瞬き一つの間に軌道上の佐久夜へ移動しました。

「ようこそ、佐久夜へ。乗艦を許可します」

佐久夜側の転送ポートには香織理さんが待機していました。香織理さんはこの艦の副長です。艦長と副長がそろって応対するのはいろいろと問題があるのですが、こちらの人員をなるだけ知られたくないのであればホステスをしてもらっています。

香織理さんと皆さんの会話を紹介が終わるとそのまま指[定]しておいた部屋へと案内します。

部屋に入るなりエヴァさんを含めた全員が歓声をあげました。この部屋は半球体の展望室になつており青い地球が3mほどの大きさの真円で見えるのです。

「改めまして。よつじや佐久夜へ。よつじや宇宙へ」

その言葉と同時に展望室の重力制御が解除され、無重力状態になりました。

「え？」

「なんやー」

主に明日菜さん、木乃香さんがびっくりしつつも喜んでいらっしゃるようです。のこりの三方は空を飛ぶことが出来るので興奮するほどでもない様で、エヴァさん、茶々丸さんは地球の方に興味を抱いているみたいで窓越しの地球をじっと眺めています。

お約束の空中に漂うジュースを飲んだりして10分ほど遊んだ後、重力制御を復帰させます。

「もつと遊びたかった」

運動神経の良さか猫の様にくぐくぐると空中を飛び回っていた明日菜

さんが仰有ります。

「無重力空間では身体が慣れるまでは体液が頭に上って顔がむくん
だり、頭痛や味覚障害が一時的に発生します。そこまで体験された
いと云ひなれば…」

「いやいや、それはけつ」

おののおの自分の顔をさわって「むくんでる」と云っていますがじ
きに直るでしょう。

さて、ここからが今日の本題その壱です。

半月状のテーブルに皆さん座つてもらつとテーブル中央に立体映像
が華々しい音楽とともに映し出されます。

『ほんにちは、地球の皆さん。私たちは星間國家、樹雷です。樹雷
はこの銀河系で最大規模の国家の一つです』

銀河系のモデルに樹雷の領土が青く色づけされていきます。

『そしてここが地球です』

銀河の外れに地球がぽつんと光ります。改めてここが辺境区だと思
います。樹雷から地球に戻ると宇宙でこんなに暗かったかしら?と
愕然とします。銀河系中心部とは恒星の密度が違うのです。女学校
時代、神戸から岡山に戻ると街灯の少なさに田舎だと思い知られ
ましたが宇宙にでてからも同じ思いをするとは……

『さて、まずは私たちの姿に驚かれているでしょうか? 宇宙人と云え
ば…』

おなじみのタコ型火星人、グレイタイプ、あと地球上で3分しかもたないタイプのイメージが映し出されます。

『私たちの祖先が恒星間移動に成功し銀河の方々に進出しました。そこで彼らが驚いたことは自分たちとあまりに似すぎた人類が至る所で発見されたことです。そしてもう一つの発見…遺跡です。数億年前に栄えた大先史文明の遺跡が発見されたのです。遺跡の調査により今現在の銀河の生命体の多くは大先史文明が意図的に生命の種をばらまいた結果と結論づけました。しかし、大先史文明がどの様なものだったか、何故銀河に生命の種をばらまいたのかはいまだ不明のままです。

さて、皆さんの住む地球ですが、実は樹雷の領土であります。

今から十七万年ほど前、当時海賊を生業としていた樹雷はとある星を樹雷と名付け、正式に國家樹雷を建国しました。その後樹雷は領土を広げるべく調査船や開拓移民船を送り出しましたがなかには冒険をもとめて樹雷の勢力圏から遠く離れたところまで進出した者もありました。地球もそう云つた冒険の果てに見つけられた惑星の一つです』

うそですけどね…

書類手続きの不備で最近まで宙に浮いていたとも申せませんし。

『その飛び地の一つである地球に独自の進化を遂げ文明を築き上げた皆様を樹雷は敬意を持って接していきたいと思つております』

「おい」

エヴァさんが訝しげに声をかけてきました。

「なんだ、これは」

「なんだと仰有いましても……プレゼンですが？」

「プレゼン？」

「はい、プレゼンテーションですよ。関東魔術協会との交渉に使用するもののひな形です。その場の思いつきで説明するならどんなボロが出るか判りませんから事前にまとめてあるのです」

これは香織理さんによつて頂いたもので、内容のチェックも兼ねています。最終的には瀬戸さま、水穂さまのチェックを受けるのですが。

「不明点や感想があぬならばどん仰有つて頂きたいのですが」

「あれを本気で交渉でもさせとるつもりか？」

「ええ、そつですよ。せつかく言葉が通じるのですから争いでなく話し合いで解決したいと思つております。実際私たちも武力介入は避けたいのですよ。出来るなら金銭で譲つて頂ければ宜しいのですが」

一応、こちら側にもいろいろと言つ分はあるのです。元々、地球が樹雷の領地である故世界樹の所有権が樹雷にあるとか、しかしそれを云つてしまふと水掛け論になつてしまふでしょう。武力での解決は遺恨がのこります。また、連盟にしれたらそれはそれで問題になります。

「いらっしゃりで買ひ取るつもつだ？」

両の掌を開いてみます。

「10億円？」

明日菜さんが云つますが…

「いえ、単位が違います」

「え？ 衍じやなくて？……まさか10兆円」

明日菜さんが一百千万と指折り数えてから云いました。

「はい。無論いきなり10兆円で売れとは云いませんが」

一応、10兆円規模の予算は下りています。但し値切れるだけ値切れとも財務から（涙顔で）云われていますが。

「問題は直接地球の紙幣や小切手が用意できることですか。こちらに出先機関がなかつたため銀行等に預金がありません。香織理さんたちに頼んで物資を現金に換えてもらつていますが10兆円ではさすがにすぐには無理です。多分、金塊等での取引になります」

ネットワークに侵入すればいくらでもデータを改竄できますがそれはできませんね。我々は犯罪集団ではありません。できれば、こちら側では枯れた技術でも地球では最先端の先にある技術なので、それらを見返りにとも思いましたが麻帆良だけでなく地球全体の文明レベルを底上げしてしまつ可能性もあります。

まあ、宇宙と地球ではレアアースやレアメタルの価値が違つてゐる

のでうまくやれば想定以下の支出で交渉成立するかもしれません。しかし、後でガラス玉で島を買ったなどと云われるのも樹雷としては宜しくはないのではどうぞしておかないと。長い付き合いになる場合勝ちすぎは負けると同等に良くはないのです。

「10兆円とは…それほどの価値があるのか?」

「あれが私どもの予想しているものならば、下手を打つた場合に被る損失は計り知れません。最悪、全銀河規模の大戦が起るかもしません。そして世界樹の認識阻害能力などは麻帆良学園にとってはかかることのできないものでしそう。それを無理を云つて買い取るならば売り手側の値段で買うしかないのです。まあ、麻帆良学園が急にお金が入り用になつたのならばそうでもないかもしれません

が

「マッチポンプかよ!」

「なあ、マッチポンプてなんなん?」

エヴァさんの言葉に木乃香さんが不思議そうに疑問を投げかけました。

「それはですね、木乃香さん。偽善的な自作自演と申しましようか。マッチは放火、ポンプは消防車を意味します。隠れて自分で起こした火事を自分で消すことであたかも英雄面をすると云つた行為です。いまの話で云えば、先になんらかの方法で麻帆良学園に財政面やその他で損失を与える学校経営を困難にしてから、そしらぬ顔で援助と引き替えに交渉をもちかける感じでしそうか」

「あんまり、おじいちゃんいじめんといつてなー」

「しつとした顔で説明するな。話し合いで解決しましょ」と云つた次の台詞はそれか？」

「誠意ある方には誠意で対応いたしますよ？」

「はあ、『田には田を』もいつひつと良じ言葉に聞こえる」

あ、明日菜さん？

「まあ、いい。続ける」

エヴァさんから巻きがはいました。

「はい、では香織理さん、お願ひします」

『樹雷を銀河系最大規模の国家にのし上げた原動力、それが皇家の樹です。皇家の樹はそれ自体が卓越したエネルギー・ジェネレータと演算ユニットの能力を兼ね備え、その皇家の樹を核とした皇家の船と呼ばれる船は一隻で一個艦隊以上の打撃力を持っています。他国で同様の打撃力を持つ戦艦はほぼ惑星並のサイズに至ります』

世一我の惑星規模艦と佐久夜どが比較されていますが、

「香織理さん、皇家の樹を説明されるのですか？」

「そうね、迷つたけどこれを説明しないとなぜあの樹が必要なのか判らないのよ」

確かにそうですが……

「逆に断固死守とか、なりませんか？」

使い方がわからなくとも強力な兵器をもつていると云ひことは大きなアドバンテージになるでしょう。逆にそれを売り飛ばすことにも抵抗を感じるはずです。

「そうね、もうちょっとほかしてみましょうか？高性能なコンピュータと云う線で」

「それでもふつかれられそうですが…」

「セレはネゴのじဉ�ဉ�ား？」

「おい」

そこにまたエヴァさんが話しかけてきました。

「惑星規模艦とかでてきたが、この船はどの程度強力なのだ？」

「佐久夜ですか？全力でないこの惑星系を消し去ることは可能です」

高速機動しない目標に時間や防御など考えない場合ですが。皆さんは私の言葉に少し呆然とされていますが…

「理論上出来ると云つことで実際にやつた船があるか私は存じません。また惑星系を消し去る程度のことは手間暇かかれば大抵の国家、または企業にでもできます。やる価値があるかどうかは別ですが」

「まあ、貴様達が別次元だとは判つていたがな」

「恐れ入ります」

「ヒカルでー。」

突然明日菜さんが話しに割り込んできました。

「皇家の船つて皇帝の家の船つて意味よね。吹雪ちゃんて、もしかしてお姫様?」

そ、そこに気づきましたか。

「そうね、吹雪は現樹雷皇、つまりは皇帝陛下の血を引いているのも確かね。正木吹雪樹雷、これが吹雪の本当の名前」

香織理さん、余計なことを…

「一応、皇族の末席を汚しておりますが正木は柾木家の眷属、分家です」

「でも佐久夜と契約したときには柾木を召乗る様に云われたのよね?」

だーかーらー、いまさらその話を蒸し返さないでください。

「現樹雷皇の第一皇子が600年ほど前、凶悪犯を追つてこの地球までやってきました。犯人を捕まえた皇子ですが実は妹姫との結婚が決まっており、それを厭うてそのまま帰らずこの地で妻を娶り子を成しました。その子孫が私です。皇子は今だ表向き家出中なので私も柾木家とはとおーい親戚ぐらいで」まかしています

私が宇宙にて偶然佐久夜と契約したとき柾木家に養子に入る様にも云われましたが、皇族など制約ばかりで得るものがないので丁重にお断りしました

「あれは駄々をこねたと云ひべきよね」

うつ、自分の恥ずかしい過去を知る人間は部下には向きません… ただ、うかつに柾木を名乗り、柾木を快く思っていないものに私の素性を探られるといろいろほこりがでてくるのでそれを避ける意味もあつたのですが。

「その… 妹姫との結婚つて?」

そつちに食いつきましたか…

「文字通り近親婚ですが遺伝子治療は進んでるので問題になるのは倫理面ですね。まあ、あえてタブーを犯すことで皇家の特異性を押し出すこともありますが実際は『お前は将来何になりたい』『お兄様のお嫁さん!』『よし婚約だ』と云つノリだったそうで

以前瀬戸さまよりお聞きした話ですが。

あまりのばかばかしさに皆様も呆然とされています。しかし勝仁さまこと遙照様の初恋の相手は義母の美砂樹さま、自分の樹に母親の名前を付け、最初の妻は実の叔母……単に好みにあわなかつたのでしょ?

「さて、一応プレゼン映像も終わりましたが…… そうですね。なし崩しに明日菜さんや木乃香さんを巻き込んでしまっていますが、今の映像から判る様にこの船は軍艦、そして私は軍人です。海賊討伐などで直接、間接多くの海賊を討ち取ってきました。てつとり早

く云えば人殺しです。今後どう転ぶか判りませんがもしかすると関東魔術協会と闘いになることも考えられます。場合によつては誰かを殺すこともあるでしょう。残念ですがそんなことはないとは申せません。以後、そういうものとしてお付き合いください。もちろん、つき合ひきれないと仰有いましてもけつこうです」

先日夕映さんと話していて気がつきました。私は、はしゃぎすぎていました。明日菜さんたちに私が近づくことで逆に危険を呼び込んでしまう可能性を故意に考えないようにしていった様です。

銀河宇宙は確かに科学は進んでいますが…ただそれだけです。決して理想郷などではありません。思い出を捨てて手にいた今の生活ですが等価交換であったかどうか…答えはできません。まあ、選択の余地などなかつたのも確かでしたが…

三二話 訪問者達6（前編め）

はあ、やつと完成しました

「明日菜」

なんでそんなことを云うの？
食事を用意すると云つて吹雪ちゃんは部屋からでていってしまった。

「あれなりの誠意だらう。闘いぶりからそういう修羅場をぐぐりぬけてきたのは判るからな。…だが、それを云うならば私の方が問題が多い。奴は軍人だから謂わば国家の一部として暴力を振るう者であり國によつてその行為の正当性が保証されている。しかし、私はすべて私闘であつた」

エヴァちゃんは吸血鬼になつたいきさつ、そしてエヴァちゃんを吸血鬼に変えた人間を殺したこと、そして追つ手との闘いのことを語ってくれた。

「でも…殺したくて殺した訳じゃないんでしょ…」

「そうだな、しかし私を吸血鬼にした男だけは自分の意志で殺した。その他にも沢山殺したよ。無論、私からすれば正当防衛だが奴らからにしてみたら自分たちが正義だからな、無念だつたろうよ。そして奴らの家族からすれば佳き夫であり佳き父であつたはずだ。それを奪つた私はまぎれもない極悪人だよ。

桜咲刹那、貴様も木乃香を守るためにならば人を斬る覚悟はあるのだろ？？」

エヴァちゃんの問いに刹那さんは黙つて頷いた。それを見たこのかが悲鳴ににた声をあげたけど…

「近衛木乃香、これがこちら側の世界の定めだ。お前の父は愚か者呼ばわりされようとも、この定めからお前を遠ざけようとしていた」

エヴァちゃんの言葉にこのかが泣きそつた顔になりながらも、うん、と頷いた。

「神楽坂明日菜、貴様もバカレンジャーを卒業したのならよく考えることだな」

「うん……」

「しかし、吹雪つて全然可愛げがないわね」

今まで黙つて聞いていた香織理さんが話しだした。

「せっかく暴走し始めて面白くなりそつだつたのに勝手に一人でまとめてしまつたわね。面白くないわ」

いや、面白くないって…

「でも、こんな所まで連れてきておきながら考え方直せと云われてもねー？あの娘も、ときどきばかよね。そつ思わない？」

くすくす笑いながら香織理さんが云つ。

「香織理さんは…宇宙のひと…なんだよね？」

「そうね、ワウ人ほど外見に差がないからわからないわね。一応、私は樹雷の生まれよ」

「香織理さんは吹雪ちゃんのこと良く知りますよね？その、吹雪ちゃんのこと教えてほしいんですけど？」

自分で云つていて驚いた。私、吹雪ちゃんのこと何も知らないことに…

「そうね、私が知っていることは……」

香織理さんが話してくれた吹雪ちゃんの身の上話。

「吹雪はね、自分自身が実際はどこで産まれたのか知らないらしいわ。

父親に連れられて赤ん坊の吹雪が村にきたのが約60年前。

母親は死んだとしか吹雪も他の人も聞いていないみたい。名前さえ父親以外知らないらしいわ。ただ、吹雪は自分が父親似だつて嘆いていたことがあったわね。

しばらくして、吹雪が中学に上がったころ父親は村の住人にかなりの借金をして村から姿を消したのね。実際は借金と云うよりも詐欺に近かかったみたい。

村の住人は残された吹雪には同情していたけど、吹雪自身はかなりそれを負い目に思っていた様ね。

村の神主さんの勧めで神戸の女学校に進学したけれど、女学校の卒業の年に村のしきたりで宇宙人の子孫であることを知られ卒業と同時に宇宙へ出たわ。

樹雷星を初めて訪れた時に皇家の樹のマスターに選ばれたらしいわ。実際にはかなり複雑なことがあったみたいね。皇家の樹のマスターになることは皇族になることだものね。

その後は皇家の船のマスターとして軍に席を置いていまに至る。て
ところね

「そうか、あいつもままならない人生を歩んでいたんだな」

「ほそりとHグアちゃんが呟いた。

「そりかしら?」

〔反論したのは…香織理さんだった。〕

「確かに私が云つた内容では吹雪には選択肢は無いわよね。でもあの娘、結構我が儘なのよ。本当に嫌だったら卓袱台ごとひっくり返してしまつわ」

「え?でも、周りの人とかに迷惑にならない様に考えた結果じやないの?」

「そう云つ氣遣いもできる娘なのは確かだわ。だけど、あの娘は結構人と違つた思考回路を持つていて、思想もかなりとんがつているわね」

そんなに変わつた考え方してたかな?確かに一を聞いて十を知る様な感じはあるけど。

「宗教が嫌い、多数決も嫌い、民主主義すら嫌つていふところがあるわね」

ええ?

「民主主義も民衆のレベルが低ければ衆愚政治や民衆迎合政治にすぐになつてしまつわ。あの娘初めて会つたころは理想主義者みたいな感じだつたけどすぐに現実主義者に転向してたわね」

頭が良いと欠点が目につくのかな…

「くわしくは云えないけれど今銀河で有力な国の大半は形としては専制政治に近い政治体系をとつてゐるわ。特定の家系もしくは個人が政治の中核を握つてゐる。もっとも民衆を弾圧などはしていいなけれどね。

支配階級の人間は延命措置でとんでもなく長生きするから政治的には安定してゐるわね。逆に選挙で頂点が入れ替わるところは長期的に見た場合あまり安定しているとは云えないわね。

あの娘も民主主義が嫌いじゃなくてそのシステムを活かせない人類に失望している… てところかしら」

うーん、確かに今の政治が10万年たつても同じレベルだつたら袁しいわね。

「いま、私たちの上司が気にかけていることはあの娘がいつ、人類に見切りをつけるかつてことなの」

人類に… 見切り？

「あの娘、昔から考古学に興味を持つていて幾つもの種が進化の途中で消えていったこともよく知つてゐるわ。私たちは遺伝子を調整することで寿命や病気を克服したけれど、あの娘に云わせればそれは進化の道を自分で閉ざした様なものなの。それで理想郷を築ければ良いけれど結局、今だ人類同士のいざこざは絶えないわ。数十万年かけてもたどり着けない境地にいつか本当にたどり着けるのかし

ら？

あの娘自身の問題なら見切りをつけた時点でさっさと他の者に席を譲るでしょう。でも、それが人類全体の話なら……私たちの上司はそれを懸念しているのよ。もちろん、吹雪が人類全体に徒なすとは思っていないし、したところで成功する可能性などほとんどないわ。ただ私たちはもしそうなったときにいつでも対処出来る様にしているだけ

「ふむ、話は分かるがそんな危険人物か？あいつが」

エヴァちゃんが香織理さんに話しかける

「危険人物ではないわ。でも以外と重要人物かも？意外とあの娘顔が広いのよ」

香織理さんが右手の人差し指を振ると一枚の写真が空中に現れた。大きな振り椅子にドレスを着た二人の少女が並んで座っている。片方の少女はもう片方の少女に寄りかかって眠っていて、寄りかられている方の少女は片手で眠っている少女の髪を撫で、もう片方の手持つた小さな本を眺めている……つてこれ吹雪ちゃん？

「珍しい。こんな服もきるんだ、吹雪ちゃん……」

今まで見た吹雪ちゃんの私服つてシンプルなブラウスやスカートで色も白や黒、茶色と落ち着いた感じのものがほとんどだったけど、写真の中ではフリルや造花をふんだんにあしらった豪奢なピンクのワンピースドレスを着用している。吹雪ちゃんはここ五十年は容姿の変化はないって前に云つてたから大人になってからの写真だらうけど、子供らしい服装に対してやけに大人びた表情をしている様に

見える。

「これは吹雪が三十歳の頃の写真ね。このころ吹雪は要人警護の仕事を中心にしていたわ。まあ、本人は気にくわないらしいけど、あの娘なら子供たちに混じつて中から警護できるからわりと重宝されたみたい」

うん、まあ、こんな感じの服装をされて、いつもみたいにふわふわした感じの笑顔をされたら成人とは思えないわね。

「つまりはその仕事は最近はしていない口ぶりだな」

「」明察。結論から云ひと評判が良すぎたのよ。我が児な子供が素直になつたり、自閉症気味の子が心を開いたり、疎遠だつたおじいちゃんやおばあちゃんとの仲を取り持つたりしてね。

そのまま家庭教師にとか将来の側近にとか引き抜きの話も多かつたらしいわ。息子の婚約者とか、養女になつてほしいと云ひのものあつたわね」

「婚約？」

「一応、皇家の樹のマスターであることは隠していたからそっちがらみではないけれど、逆に正式に申し込まれると無碍むげにできない方々だから余計にね…」

はあ、そうなんだ。つまりはセレブな人達からいろんなラブコールがあつたんだ。

「なかには吹雪を自分の姉妹と思いこんでしまつた娘もいて、ちょっとした騒動になりかけたのでそちらの仕事は現在控えているわ

はは、雅樂乃さんには聞かせられないな…^{うたの}

「そのお世話をした子供たちも今では成人しているし、警護してきた大人の方々とも交流は続いているみたい。つまりは顔が利くってわけね。

話を戻すけど、あの娘が宇宙の現状を知つて、皇家の樹のマスターになつたとき、私の上司でありあの娘の後見人でもある人は、あの娘が皇家の樹のマスターの資格を返上して地球に戻ると考えたのよ。だってそうでしょ、宇宙に出ても何ら理想に一步も近づくことない。確かに皇家の樹のマスターであることはメリットはあるけれどそれ以上にデメリットがある娘にあつたと思つわ。

でも、あの娘は地球に帰らず、皇家の樹のマスターとしての資格も返上もしなかつた。むしろ積極的に職務をこなしていたわ。あの娘に尋ねてみても一応、筋の通つた返答はされるけど……本当かどうか判らないわ。

つまりは、表面的な強大な力とは別に潜在的な力も持つていての娘が何を考えているかがいまいちつかめないの。

あの娘が大事にしているもの。それは学生時代の思い出……と云うよりも友人達ね。会うことができなくて大切なことにもかわりはないわ。でも、あと20年もすればその人達とも縁が切れてしまうわ。ある意味、何からも束縛されなくなつた吹雪が暴走を始める切っ掛けになるかもしねり。

だからお願い。あの娘のともだちのままでいて。身の危険があるのは判るわ。けれど、『さよなら』でなく『またね』の間でいてほしい

いの「

「でも、香織理さんだつて吹雪ちゃんのともだちでしょ？」

「そうね、でも私はあの娘の監視役もあるの」

監視役？

「樹雷の機密である皇家の船のマスターには何らかの監視がつくる。このことは吹雪も知つてゐるし私が監視役だつてことも承知しているわ。むしろ監視役だからこそ吹雪も安心してともだちづきあいができるのかも？すくなくとも敵方のスパイではないのだから」

そうか。吹雪ちゃんは迂闊に友人も作れないんだ…

「あの娘が皇家の樹のマスターであるかぎり近づいてくる人間に対して私達はチェックをしなければならない。それを知つてゐるからあの娘もあまり交遊を広げることもしない。地球の友人達に連絡をしないのはそれが壊れてしまふことを恐れているからじゃないかしら。

あなた達は皇家の樹のマスターの正木吹雪樹雷ではなく、正木吹雪をともだちに選んだ。この絆を切らないで頂戴」

ゆつぐりと香織理さんが頭をさげた。

「うなせ…」

このかがゆつぐりと喋り始めた。

「つむは、関西呪術協会の一員になるから今更、危険がビリビリ関係ないなー」

「私もです。それに吹雪ちゃんはこりこりお世話になつてこますので恩返しもしたいです」

「私も今更危険がビリビリ問題じゃない。まあ、それを見越して協力者に選んだのだらう」

「私はマスターの従者ですのでマスターについていきます。ですから吹雪ちゃんとは末永くお付き合っこをしていくと考えています」

4人とも自分の意見を云つて私を見る。

「私だつて吹雪ちゃんとよならなんてしたくないわ

確かに危険なんだらう。でも、やつぱりよならなんてしたくない。

「つられて云つていなか?バカレッズ

「別につられてなんかいないわよ。それこそその理論で云つたらこのかや刹那さんとも付き合えないじゃない。確かに吹雪ちゃんが宇宙に出たやつたら余つ」となんてできないけど、ともだちを止める理由にはならないわ

「アーヴィングくれるといわれしー

再び香織理さんが頭をさげた。

昼食の後は香織理さんに先導されて転送ポートの部屋まで来た。

転送ポートにはこつて転送されると、ナリセ……

「え？ 地球？」

辺り一面白い砂浜、澄んだブルーの海。南国風の樹が生い茂るリゾートドーチに私たちは立っていた。え？ 戻っちゃったの？ もう？ 地球に？

「エリは佐久夜内にある惑星なの、名前は無いわ」

え、惑星？ 船の中なの？

「ええ、ほんとこぶさかしているわよね、皇家の船って。一応、圧縮空間と呼ばれる技術はあるのだけれど、惑星ひとつまるまる閉じこめることができるのは皇家の船だけ。それも一握りのね」

皇家の樹つてこんなことでもできるんだ。うわー、10兆円出すよー。いや、安くあるかもー、10兆円。

「まあ、開発が進んでいるの邊りだけなのだけれどね」

「どうで吹雪ちゃんは？」

おれおれおれ詫いてみると、

「あれでも一応、艦長だからね、あの娘。艦長にしかできない仕事をしてるわ」

「艦長にしかできない仕事?」

なんかかっこいい響きかも。

「そう、はんこ押し」

え?

「吹雪」

すまじきものは富仕え…

毎度、佐久夜に帰るたびに事務手続きの決裁をしなくてはなりません。軍艦だからと例外で無く…いえ、軍故にいろいろと手続きが面倒なのです。できるだけ副長である香織理さんに権限を委譲してやつてもらっていますがそれでも艦長でなくては決裁できないものがあります。

香織理さんは大型艦の艦長を任されても不思議のないほど優秀な方たですので書類はすでに完成して、艦長である私が認め印を押すだけです。しかし、それでもメクラ印を押すことはできません。現状の確認をする意味でも一枚、一枚しつかり読んで処理していきますが…

「争い云々はともかく事務処理だけでも人類は克服できないものでしょつか?」

「ワーカホーリックの吹雪でも事務処理は嫌いかい？」

「私は別にワーカホーリックではありません。仕事をすればするほど幸福になると云う信仰がちょっとあるだけです」

射撃管制官であるケイリ・グランセリウス嬢は序列で云えれば艦のナンバー3です。能力的には香織理さんに匹敵するケイリさんですがやや奇矯な行動のせいか香織理さんほどの評価を得ていません。もつとも上を目指すことに固着しない方ですが。

「そんなくだらない信仰なんて犬にでも食べさせておしまいなさい

香織理さんがそう云いながら現れました。

そう云われましても生まれ育った時代がそんな感じだから仕方がないのです。

「だいたい、書類の決裁と演習を同時にやっているんだからまったくもって説得力がないよ」

ケイリさんの云う通り現在、佐久夜は射撃演習の真っ最中です。軍の規定によつて決められた回数の訓練や演習をこなさなければなりません。もちろんシミュレーションでは何度も行つてはいますが実船での演習は伸び伸びになつていました。現在のクルーは四月に配属された者たちですので早急に演習を行う必要があつたのは確かなのですが。

「艦長が乗艦していないと満足に動かせないのは皇家の船の少ない欠点のひとつだね」

逆に皇家の船はマスター一人だけでも操船は可能です。艦長の私が

「次は太陽近辺にワープアウト、そのまま恒星表面彩層近辺まで降下しスピキュールを間をスラロームしながらプロミネンスを目標に追走…」

「なんですか、この無茶な訓練計画は？」

「そんなの聞いていませんよー」

操舵席から次席航海士の面藤日向けやんが悲鳴のよくな抗議の声をあげていますが。

「当たり前じゃない。ビリの海賊が予定航路を提出しながら逃げてくれるといふの?..」

主席航海士は香織理さんが兼任していますが今回は次席の日向けやんの操艦です。

今回の麻帆良の世界樹の調査においては艦隊戦が発生することはないとして全てのクルーをベテランで固めると云うわけにはいかなかつた様です。無論、信用調査や能力調査はパスされていますが。簡潔に云えば将来有望の新人が多いのです。

通信や索敵などは普段から仕事はありますが、ほぼ停泊状態だった佐久夜では日向けやんは今回初めて本来の仕事らしい仕事をまかされたみたいですね。

「でも、ビリの海賊が恒星表面まで逃げ込むんですかー、普通の船なら融けちゃいますよー」

「私たちは現場屋よ。起きたことが想定外でもその場で答えを出すのがお仕事なの。理屈にあわないなんて云いたければさつと後ろに下がりなさいな。ああ、あと時間制限があるから気をつけてね」

「うわー、そんなこと黙つていてくださいよー。プレッシャーになるだけじゃないですかー」

確かに時間制限があるとは云つてますが正確な時間は云つていません。訊いても教えてくれませんよね、香織理さんは。

「はい、はい、みんなもあきれているから私語は慎みなさいな」

云つてる間にワープアウトしました。とたん全天モニターが真っ白になり、自動で光量がおさえられます。水星軌道よりも内側にワープアウトした佐久夜はそのまま太陽へ降下します。

「ワープアウト、各々確認いそげ」

「座標確認、誤差なし」

「船体、自動検出異常なし。引き続き目視確認開始」

「敵影4、恒星表面を縦列で光速の10%で移動中」

「敵を追尾、恒星表面に降下せよ」

「！」、「降下開始！」

「合戦用意」

プログラムで仮想標的をレーダーやモニターに表示させての追跡戦を今回の演習にしています。

私が書類の決裁をしている間にもどんどんと演習は進行していくま

す。佐久夜は荒れ狂う太陽の彩層をスピキュールを躊躇しながらすんでいきますが…

「シミュレーションより加速も棍の利きも敏感すぎますよー」

「じゃんなさい、今日の佐久夜は機嫌が悪いみたいなの」

佐久夜は気分屋なのでその日その日で運動特性が違うのです。特に今日はかなり過敏に反応しています。いつも云つときは佐久夜のご機嫌がななめの場合が多いのですが…最近構つてあげていなければと思いましたがよくよく考えてみればそんな兆候はまつたくなく今日になつて急に不機嫌になつた様です、はて、原因はなんでしょう？

「ペーキーすぎて扱いづらいですー」

たしかに高速機動中のほうが思つたところには行つてくれるのだけれど長時間それを続けるのは操縦者にとってつらいものがあります。

「はいはい、泣き言なんて云わないの。投げ出したいなら操舵替わるわよ？でも、そうしたら一度と棍をとらせてもらえないかも？皇家の船、それも樹雷でも有数の高速船よ。もつたいないわよねー」

「えー、香織理お姉様のオーネ、アクマー、ダヒ、ダヒー」

「あら、そんなに誉めたらサービスしたくなつちやうじやない。さすがにフレアにぶつかれば光鷹翼でも危ないそよ。乗員の命は貴女の操縦しだい。それと今回の演習計画は樹雷本星にも送つてあるから貴重な第二世代艦の喪失者として宮藤田向の名前は樹雷が続く限り残るわよ」

あつ…日向ちゃんが固まりました。

太陽表面から立ち上るスピキュールの間を光速の10%でスラロームは結構難易度が高いです。香織理さんの云う通り佐久夜でも太陽とのガチン「勝負は分が悪いのですが…日向ちゃんの技量に期待しましょう。

口からは弱音を吐いていますが操舵自体はさほど乱れはありません。癖のありすぎる佐久夜を上手に操つていると云つて良いでしょう。

「しかし、云いたい放題でしたね、香織理さん。過去までばらされるとはおもつていませんでした」

「あら、盗み聞きなんてはしたない。とにかくで間違ったところはあつたかしら。云つてくれればあとで修正しておくれ」

盗み聞きもなにもプライベートルーム以外で佐久夜の中の情報は今まで上がってくるのは貴女も知っているでしょうに。

まあ、確かにあの時点で柱木の村に戻る選択もなかつたわけではないのですが、魍魎と同時に魍魎鬼まで復活した場合に備えての選択でしたが…まるつきり無駄でしたね。思えば軍に奉職したのも子供の頃から魍魎復活に備えて武術をしこまれたせいで抵抗が少なかつたからかもしれません。もうひとつ、誰にも云えない真の理由もありますがね。

「それで？」

香織理さんはそれだけ云つてモニターを見つめます。

そうですね。どうしましょう。

演習 자체는 항성 표면과 같은 장소さえ 무시해야 하는 일반적인 것과는 차이가 없습니다. 예컨대, 실제 훈련에서 사용하는 기동 폭탄은 함선을 보호하는 필드를 빠져나온 순간에 폭발하는 경우에만 사용할 수 있습니다. 그리고 광선계열은 실제로 항성 표면을 항행할 수 있는 배에도 효과적인가요? 그렇습니까? 출력을 더 높여야 하는가요? 아마, 소꿉에는 그 외에도 공격 수단은 있지만, 실제로 태양에서 싸울 수도 있는가요? …… 태양? 해, 왜 그걸 끌어들였습니까? …… 그게 뭐였습니까?

「明日菜」

해수욕장으로 돌아온 후에 관찰실에서 볼 수 있는 경치는 화려한 불의 바다였다. 香織理로부터 태양에 대한 이야기를 듣고 온 것 같았지만, 그녀는 오렌지색의 불의 세계였다. 불의 열기로 가득한 공간을 빠져나온 듯, 고로나에 걸터 올라螺旋처럼 급상승하면서 점차 더 높아지는 듯한 기분이었다.

「……」

「……」

し、晴れた日の体育の授業もさぼりがちだったけど、1月まで太陽に「コンプレックスをもっていたんだ。

…なんか妙なテンションのエヴァ キャラさんのせいでもうじつじつとやるのがばからしくなったわ。

そして一度決めたらもう迷ひつゝではなくった。

わたしは吹雪ちゃんのともだちだから。なにもできないけどせばにして吹雪ちゃんが地球に来る度『おかえりなさい』とおう。それしかできないうけど、それだけでもしてあげたい。

夕食の頃には船は地球に戻つてきていた。

夕食の時にあとで話がしたいと云つと吹雪ちゃんは展望室で待つていてくれと云われた。

云われた通りに展望室に行くと展望室一面に青い地球が広がっている。朝に来たときよりも近い位置を飛んでいるのか見慣れた地形が目の前をゆっくりと移動している。

「今はギリシャ、エーゲ海上空です。あの特徴的な半島がイタリアです。膝のあたりがローマですよ」

後ろから吹雪ちゃんの声がある。

「飛んでみますか?」

え？

返事をする間もなく室内の重力がなくなつた。それと同時に今まで透明だつた展望室に一筋の線が現れた。え？開いているの？

「一応、佐久夜の周辺には無理矢理氣密を保持しています。真空中では作業がしづらいので。普段は不活性ガスで満たしていますが今は地球の大気に準じています」

静かに吹雪ちゃんに背中を押され私は地球に向かつて飛んでいく。展望室内と違つて壁を蹴つて方向転換などできないから流されるままだ。手足を使って回転は止めたけどゆっくり地球に落ちていく。

「香織理さんとのお話は聞かせてもらいました」

あ、香織理さん云つちゃつたんだ。

「おおかたは間違つていません。やはり香織理さんですね。私を理解してくれています。

強いて云えば銀河の民が間違つた進化をしたとは思つてはいません。まあ、期待とは違つた進化であったことは認めますが。そしてそれと同じ道を地球が進むとは思つていません。それ故に私は地球には干渉しないように心がけてきました。

私は弱い人間ですからもし友人が病を患つて死に瀕していたら銀河の薬など与えてしまうでしょう。だから一度と会わないと決めました。目の前に、そんな友人が現れたら容易く心を曲げてしまうから。いつか地球が銀河よりも高みに登れると祈つているから私は何もしません。

私が決めた自分ルールですが学生の正木吹雪は学友に対してはお節介を焼いていいのです。しかし、いつにまにかそれを踏み越えていました。銀河人の正木吹雪樹雷がいつにまにかまぎれこんでいたのです。

私は任務が完了次第ここを去ります。一度と念つともないでしょ。ならばここで終わりにしてもいいのではありますか?」

「やうだね、いつかはみんな離ればなれになる。でも、だから仲良くしないのは違うでしょ。せめてそのときも一緒にいていいんじゃない?」

「私どいると余計な危険に近づくことになりますよ」

「そうかもね。でもネギ先生が来たとき吹雪ちゃんが一緒にいてくれなかつたら私は多分考える間もなく魔法に浸かちやつてた気がする。私自身の過去が追いかけてくる気がするから。それが運命なら私は立ち向かうよ。それに吹雪ちゃんが手を貸してくれたらうれしいかな?」

私がそう云ふと吹雪ちゃんは一瞬きょとんとした顔をうつむかせ伏し目がちにちらりちらりとこちらを見つめようと、もーれつに可愛いくなっていますけど…

「その、私を甘やかさないでください。そんなことを云われると甘えたくなるじゃないですか」

「ん?」この程度で甘やかすことになるの?吹雪ちゃん基準では。なんか自分に厳しく、他人には甘くないの?多分女の子限定で。

「いや、別に甘やかしていないわ。吹雪ちゃんが私が自分で自分を守れる様に吹雪ちゃんにお願いしているんだから」

私の言葉にきょりきょりと拳銃不審な感じ辺りを見回してから小さな声で吹雪ちゃんは呟つた。

「本当にですか？ 私がそばにいても」

「いいに決まってるじゃない」

吹雪ちゃんはしづかしく黙っていたが一回深呼吸して口を開くふつむいた。

「明日菜さんに見せたいものがあります

吹雪ちゃんが私の手をとると船の反対側へと移動した。

「あ、天の河」

「ええ、銀河です。但し、ここからしか見ないことができない銀河をお見せします。夏休みに見にこきましょつ」

.....

「やうね、楽しみにしてるわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1385s/>

麻帆良の皇家の樹

2011年10月11日20時04分発行